

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財発掘調査報告書(14)

夕田遺跡群

1999

大分県教育委員会

夕 田 遺 跡 群

夕 田 遺 跡

夕 田 横 穴 墓 群

夕 田 古 墳 群



夕田横穴墓群第1支群1号墓出土素文鏡



夕田横穴墓群第1支群1号墓出土有蓋高坏・把手付碗

序

大分県教育委員会では、昭和58年度以来、日本道路公団の委託を受け、九州横断自動車道（大分自動車道）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施してまいりました。当事業に係る発掘調査は平成7年度に完了しましたが、発掘調査の成果につきましては資料等の整理を継続して実施しており、逐次その調査報告を刊行しているところで、本書はその第14集にあたります。

本書に記載された日田市所在の夕田遺跡群は、平成4・5年度に発掘調査を実施いたしました。この調査で得られた成果は当地方の原始・古代の人たちの営みの一端を示すものであり、この地域の歴史を考察する上でも重要な資料となるものと思われます。今後、本書が文化財の保護・啓発並びに学術研究に役立てば幸いです。

最後に、調査の御指導をいただきました諸先生方をはじめ御協力いただきました関係各位及び地元の方々に対し、深く感謝の意を表しますとともに厚くお礼を申し上げます。

平成11年3月

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

1. 本書は九州横断自動車道建設（日田～玖珠間）に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、平成4年度から平成5年度に調査した、日田市の夕田遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 調査は日本道路公団の委託事業として大分県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆者は次の通りである。
 - I. 友岡 信彦
 - II. 友岡 信彦
 - III. 友岡 信彦
 - IV. 村上 久和 友岡 信彦
 - V. 田中 良之（九州大学大学院教授） 金 宰賢（同助手） 船橋 京子（同院生）
 - VI. 村上 久和 友岡 信彦
4. 発掘調査にあたっては、日田市教育委員会、並びに地元の方々のご助力を得た。
5. 本書に使用した座標系は、昭和43年建設省告示3059号の規定による第Ⅱ座標系である。図郭に表示してある座標値はキロメートル単位である。
6. 出土遺物及び関係資料は大分県教育庁文化課文化財資料室で保管・管理している。
7. 本書の編集・構成は友岡が行った。

本文目次

序

例言

I. はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	2
II. 遺跡の立地と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III. 調査の概要	7
1. 調査地区の設定	7
2. 調査の概要	7
IV. 夕田遺跡群の調査	9
1. 夕田遺跡	9
1) 遺跡の概要	9
2) 調査の成果	10
3) 小結	22
2. 夕田横穴墓群	23
1) 遺跡の概要	23
2) 横穴墓番号の変更	23
3) 調査の成果	27
4) 小結	153
3. 夕田古墳群	154
1) 遺跡の概要	154
2) 調査の成果	154
3) 小結	170
V. 夕田古墳出土の人骨について	171
VI. まとめ	182

挿 図 目 次

第 1 図	調査遺跡位置図	1
第 2 図	日田市主要遺跡分布図及び遺跡名	5～6
第 3 図	夕田遺跡群路線内位置図	7
第 4 図	夕田遺跡群周辺地形図	8
第 5 図	夕田遺跡遺構配置図	9
第 6 図	土坑 1 実測図	10
第 7 図	土坑 1 出土遺物実測図	10
第 8 図	土坑 2 実測図	11
第 9 図	土坑 2 出土遺物実測図	12
第 10 図	建物 1 実測図	13
第 11 図	建物 2 実測図	13
第 12 図	落込み遺構出土遺物実測図 1	14
第 13 図	落込み遺構出土遺物実測図 2	15
第 14 図	包含層土層図	16
第 15 図	包含層出土遺物実測図 1	17
第 16 図	包含層出土遺物実測図 2	18
第 17 図	包含層出土遺物実測図 3	19
第 18 図	包含層出土遺物実測図 4	20
第 19 図	夕田横穴墓群周辺地形図	24
第 20 図	夕田横穴墓群遺構配置図及び立面図	25～26
第 21 図	第 1・2 支群遺構配置図及び立面図	27
第 22 図	第 1 支群 1 号墓実測図	28
第 23 図	第 1 支群 1 号墓遺物出土状況実測図	29
第 24 図	第 1 支群 1 号墓出土遺物実測図	30
第 25 図	第 2 支群 1 号墓実測図	32
第 26 図	第 3 支群遺構配置図及び立面図	33
第 27 図	第 3 支群 1 号墓実測図	34
第 28 図	第 3 支群 1 号墓出土遺物実測図	35
第 29 図	第 4 支群遺構配置図及び立面図	36
第 30 図	第 4 支群 1 号墓実測図	37
第 31 図	第 5 支群遺構配置図及び立面図	39～40
第 32 図	第 5 支群 1 号墓実測図	42
第 33 図	第 5 支群 2 号墓実測図	44
第 34 図	第 5 支群 2 号墓出土遺物実測図	45
第 35 図	第 5 支群 3 号墓実測図	46
第 36 図	第 5 支群 3 号墓遺物出土状況実測図	47
第 37 図	第 5 支群 3 号墓出土遺物実測図 1	48
第 38 図	第 5 支群 3 号墓出土遺物実測図 2	49
第 39 図	第 5 支群 3 号墓出土遺物実測図 3	50
第 40 図	第 5 支群 3 号墓出土遺物実測図 4	51
第 41 図	第 5 支群 4 号墓実測図	56
第 42 図	第 5 支群 4 号墓出土遺物実測図	57
第 43 図	第 5 支群 5 号墓実測図	60
第 44 図	第 5 支群 6 号墓実測図	62

第 45 図	第 5 支群 6 号墓遺物出土状況実測図	63
第 46 図	第 5 支群 6 号墓出土遺物実測図	64
第 47 図	第 5 支群 7 号墓実測図	67~68
第 48 図	第 5 支群 7 号墓遺物出土状況実測図	69
第 49 図	第 5 支群 7 号墓出土遺物実測図 1	70
第 50 図	第 5 支群 7 号墓出土遺物実測図 2	71
第 51 図	第 6 支群遺構配置図及び立面図	73
第 52 図	第 6 支群 1 号墓実測図	74
第 53 図	第 6 支群 2 号墓実測図	75
第 54 図	第 6 支群 3 号墓実測図	77
第 55 図	第 6 支群 4・5 号墓実測図	79~80
第 56 図	第 6 支群 4・5 号墓出土遺物実測図	81
第 57 図	第 7 支群遺構配置図及び立面図	84
第 58 図	第 7 支群 1 号墓実測図	86
第 59 図	第 8 支群遺構配置図及び立面図	87
第 60 図	第 8 支群 1 号墓出土遺物実測図	88
第 61 図	第 8 支群 1 号墓実測図	89
第 62 図	第 8 支群 2 号墓実測図	90
第 63 図	第 8 支群 2 号墓出土遺物実測図	91
第 64 図	第 8 支群 3 号墓実測図	93
第 65 図	第 8 支群 4 号墓実測図	94
第 66 図	第 8 支群 4 号墓遺物出土状況実測図	95
第 67 図	第 8 支群 4 号墓出土遺物実測図	96
第 68 図	第 8 支群 5 号墓実測図	98
第 69 図	第 8 支群 5 号墓遺物出土状況実測図	99
第 70 図	第 8 支群 5 号墓出土遺物実測図	100
第 71 図	第 8 支群 6 号墓実測図	103
第 72 図	第 9 支群遺構配置図及び立面図	104
第 73 図	第 9 支群 1 号墓出土遺物実測図	105
第 74 図	第 9 支群 1 号墓実測図	106
第 75 図	第 10 支群遺構配置図及び立面図	107~108
第 76 図	第 10 支群 1 号墓出土遺物実測図	109
第 77 図	第 10 支群 1 号墓実測図	110
第 78 図	第 10 支群 2 号墓実測図	113
第 79 図	第 10 支群 3 号墓実測図	115
第 80 図	第 10 支群 3 号墓出土遺物実測図	116
第 81 図	第 10 支群 4 号墓実測図	118
第 82 図	第 10 支群 5 号墓実測図	119
第 83 図	第 10 支群 6 号墓出土遺物実測図	120
第 84 図	第 10 支群 6 号墓実測図	121
第 85 図	第 10 支群 7 号墓実測図	122
第 86 図	第 10 支群 7 号墓遺物出土状況実測図	123
第 87 図	第 10 支群 7 号墓出土遺物実測図	124
第 88 図	第 11 支群遺構配置図及び立面図	126
第 89 図	第 11 支群 1 号墓実測図	128
第 90 図	第 11 支群 2 号墓実測図	129

第 91 図	第11支群 3 号墓実測図	131
第 92 図	第11支群 4 号墓実測図	132
第 93 図	第12支群遺構配置図及び立面図	133
第 94 図	第12支群 1 号墓実測図	135
第 95 図	第12支群 2 号墓実測図	136
第 96 図	第13支群遺構配置図及び立面図	137
第 97 図	第13支群 1 号墓実測図	139
第 98 図	第13支群 2 号墓実測図	140
第 99 図	第14支群遺構配置図及び立面図	141
第100図	第14支群 1 号墓実測図	142
第101図	第14支群 2 号墓実測図	143
第102図	第15支群遺構配置図及び立面図	144
第103図	第15支群 1 号墓実測図	145
第104図	第15支群 2 号墓実測図	146
第105図	ヘラ記号集成 1	148
第106図	ヘラ記号集成 2	149
第107図	ヘラ記号集成 3	150
第108図	ヘラ記号別出土土器一覧 1	151
第109図	ヘラ記号別出土土器一覧 2	152
第110図	夕田古墳群遺構配置図	155～156
第111図	1・2号墓及び1・2号溝位置図	157
第112図	1号墓実測図	158
第113図	2号墓実測図	158
第114図	1・2号溝実測図	159
第115図	3号墓位置図及び周溝土層図	160
第116図	3号墓実測図	161
第117図	3号墓出土鉄器実測図	162
第118図	夕田古墳位置図	164
第119図	夕田古墳 1号主体部実測図	165
第120図	夕田古墳 1号主体部出土鉄器実測図	166
第121図	夕田古墳 2号主体部実測図	167
第122図	夕田古墳墳丘土層図	168
第123図	夕田古墳周溝内出土遺物実測図	169
第124図	夕田古墳周溝実測図	169

表 目 次

表 1	新・旧横穴墓対照表	23
表 2	第 1 支群 1 号墓出土土器観察表	31
表 3	第 1 支群 1 号墓出土鉄器計測表	31
表 4	第 1 支群 1 号墓出土玉類計測表	31
表 5	第 3 支群 1 号墓出土土器観察表	35
表 6	第 3 支群 1 号墓出土鉄器計測表	35
表 7	第 5 支群 2 号墓出土土器観察表	45
表 8	第 5 支群 3 号墓出土土器観察表	52～54

表 9	第 5 支群 4 号墓出土土器觀察表	58
表 10	第 5 支群 6 号墓出土土器觀察表	64~65
表 11	第 5 支群 7 号墓出土土器觀察表	71~72
表 12	第 5 支群 7 号墓出土耳環計測表	72
表 13	第 6 支群 4・5 号墓出土土器觀察表	82~83
表 14	第 8 支群 1 号墓出土土器觀察表	88
表 15	第 8 支群 2 号墓出土土器觀察表	91
表 16	第 8 支群 4 号墓出土土器觀察表	97
表 17	第 8 支群 5 号墓出土土器觀察表	101
表 18	第 8 支群 5 号墓出土耳環計測表	101
表 19	第 9 支群 1 号墓出土土器觀察表	105
表 20	第 10 支群 1 号墓出土耳環計測表	111
表 21	第 10 支群 1 号墓出土玉類計測表	111
表 22	第 10 支群 3 号墓出土土器觀察表	116
表 23	第 10 支群 3 号墓出土耳環計測表	116
表 24	第 10 支群 6 号墓出土土器觀察表	120
表 25	第 10 支群 7 号墓出土土器觀察表	125
表 26	夕田横穴墓群遺構計測表	147
表 27	へラ記号分類表	152
表 28	夕田古墳群 3 号墓出土鉄器計測表	161
表 29	夕田古墳 1 号主体部出土鉄器計測表	165
表 30	夕田横穴墓群形態一覽表	183

写真図版目次

図版 1	夕田遺跡	全景 土坑 1 土坑 2
図版 2	夕田遺跡	建物 1 建物 2 遺物出土状況
図版 3	夕田遺跡	1・2 号土坑 落込み遺構 包含層出土遺物
図版 4	夕田遺跡	包含層出土遺物
図版 5	夕田横穴墓群	第 1 支群 1 号墓
図版 6	夕田横穴墓群	第 2・3・4 支群 1 号墓
図版 7	夕田横穴墓群	第 5 支群全景・1 号墓
図版 8	夕田横穴墓群	第 5 支群 2 号墓
図版 9	夕田横穴墓群	第 5 支群 3 号墓
図版 10	夕田横穴墓群	第 5 支群 4・5 号墓
図版 11	夕田横穴墓群	第 5 支群 6・7 号墓
図版 12	夕田横穴墓群	第 6 支群全景・1 号墓
図版 13	夕田横穴墓群	第 6 支群 2・3 号墓
図版 14	夕田横穴墓群	第 6 支群 4・5 号墓
図版 15	夕田横穴墓群	第 7 支群 1 号墓
図版 16	夕田横穴墓群	第 8 支群全景・1 号墓
図版 17	夕田横穴墓群	第 8 支群 2・3 号墓
図版 18	夕田横穴墓群	第 8 支群 4 号墓
図版 19	夕田横穴墓群	第 8 支群 5 号墓

図版 20	夕田横穴墓群	第 8 支群 6 号墓
図版 21	夕田横穴墓群	第 8 支群 6 号墓
図版 22	夕田横穴墓群	第 9 支群 1 号墓
図版 23	夕田横穴墓群	第 10 支群 全景・1・2 号墓
図版 24	夕田横穴墓群	第 10 支群 3・4・5 号墓
図版 25	夕田横穴墓群	第 10 支群 6・7 号墓
図版 26	夕田横穴墓群	第 11 支群 全景・1 号墓
図版 27	夕田横穴墓群	第 11 支群 2・3 号墓
図版 28	夕田横穴墓群	第 11 支群 4 号墓
図版 29	夕田横穴墓群	第 12 支群 全景・1・2 号墓
図版 30	夕田横穴墓群	第 13 支群 全景・1 号
図版 31	夕田横穴墓群	第 13 支群 2 号墓
図版 32	夕田横穴墓群	第 14 支群 1・2 号墓
図版 33	夕田横穴墓群	第 15 支群 全景・1・2 号墓
図版 34	夕田横穴墓群	第 1 支群 1 号墓出土遺物
図版 35	夕田横穴墓群	第 3 支群 1 号墓 第 5 支群 2・3 号墓出土遺物
図版 36	夕田横穴墓群	第 5 支群 3 号墓出土遺物
図版 37	夕田横穴墓群	第 5 支群 3 号墓出土遺物
図版 38	夕田横穴墓群	第 5 支群 3・4 号墓出土遺物
図版 39	夕田横穴墓群	第 5 支群 6 号墓出土遺物
図版 40	夕田横穴墓群	第 5 支群 7 号墓出土遺物
図版 41	夕田横穴墓群	第 5 支群 7 号墓 第 6 支群 4・5 号墓出土遺物
図版 42	夕田横穴墓群	第 6 支群 4・5 号墓 第 8 支群 1 号墓出土遺物
図版 43	夕田横穴墓群	第 8 支群 2・4 号墓出土遺物
図版 44	夕田横穴墓群	第 8 支群 5 号墓 第 9 支群 1 号墓 第 10 支群 1・3・6 号墓出土遺物
図版 45	夕田横穴墓群	第 10 支群 7 号墓出土遺物
図版 46	夕田横穴墓群	ヘラ記号 I - a・b 類
図版 47	夕田横穴墓群	ヘラ記号 I - b・II・III - a 類
図版 48	夕田横穴墓群	ヘラ記号 III - a・b 類
図版 49	夕田横穴墓群	ヘラ記号 III - b・IV・V・VI・VII 類
図版 50	夕田横穴墓群	ヘラ記号 VII・VIII 類
図版 51	夕田横穴墓群	ヘラ記号 VIII・IX・X・XI - a・b・XIV 類
図版 52	夕田横穴墓群	ヘラ記号 XII・XIII 類
図版 53	夕田古墳群	全景
図版 54	夕田古墳群	1・2 号墓
図版 55	夕田古墳群	3 号墓
図版 56	夕田古墳群	夕田古墳主体部全景・1 号主体部
図版 57	夕田古墳群	夕田古墳 2 号主体部・周溝・周溝遺物出土状況
図版 58	夕田古墳群	夕田古墳周溝出土遺物・1 号主体部出土鉄器・3 号墓出土鉄器

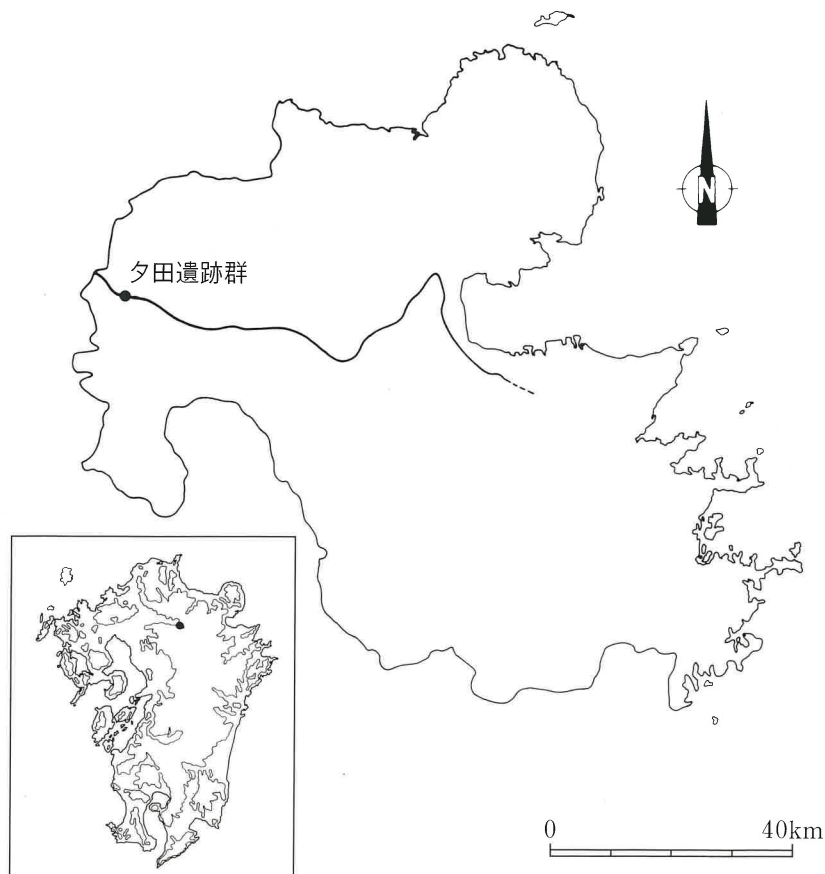
I. はじめに

1. 調査に至る経過

九州横断自動車道は長崎市を起点とし、大分市に至る約 252km（大分県内約 103km）の高速自動車道である。途中、鳥栖ジャンクションで九州縦貫自動車道と直交する。大分県関係では、県境～日田間が昭和 44 年 1 月 22 日に、日田～大分間が昭和 47 年 6 月 30 日に基本計画決定され、県境～日田間の整備計画決定及び施工命令は昭和 53 年 11 月 21 日に、日田～玖珠間の整備計画決定及び施工命令は昭和 53 年 11 月 21 日に出された。大分県教育委員会では日本道路公団の委託を受け、昭和 58 年から日田～玖珠間の道路建設予定地の分布調査を開始し、昭和 61 年度で終了した。その結果、遺跡及び遺跡推定地は 28ヶ所にのぼった。

日田～玖珠間の発掘調査は、昭和 63 年度より用地買収の終了した地域から順に実施し、平成 5 年度末で路線内 24.1km の全調査を終えた。この間新たに発見された遺跡もあり、調査した遺跡数は試掘・立会調査も含めると都合 34 遺跡で、本調査に至った遺跡数は 17 遺跡（日田市内 8ヶ所、玖珠町内 9ヶ所）であった。

今回報告する夕田遺跡群は、夕田遺跡・夕田横穴墓群・夕田古墳群からなる遺跡群であり、平成 4・5 年度に本調査を行った遺跡である。夕田遺跡は平成 4 年 11 月に試掘調査を行った結果、柱穴等の遺構が確認されたため、急遽本調査を実施した。夕田横穴墓群は周知の遺跡として認知されており、当初の分布調査の結果、すでに十数基の横穴墓が開口しているのが判明している。本調査は平成 5 年度に行った。夕田古墳群は平成 2 年度に立木伐開中、重機による石棺石蓋の発見があり、急遽試掘調査を行い、古墳の存在を確認した。本調査は一部保安林の解除を待って、平成 5 年度に全面発掘調査を行った。



第 1 図 調査遺跡位置図

2. 調査の組織

調査の組織は次の通りである。

平成4年度

調査委員 賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議委員）
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議委員）
都出比呂志（大阪大学教授）
後藤 宗俊（別府大学教授）
櫻木 晋一（九州帝京短期大学助教授）
秋葉 正嗣（大分県教育庁文化課長）
調査事務 今井 義人（県文化課課長補佐兼管理係長）
山口 淳史（県文化課主任）
原 浩一（県文化課主事）
調査主任 渋谷 忠章（県文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）
調査員 村上 久和（県文化課主査）、西 哲弘（同主査）、江田 豊（同主任）
友岡 信彦（同主任）、染矢 和徳（同主事）、橋本 一彦（同嘱託）
須原 緑（同嘱託）、神崎 哲也（同嘱託）、岩尾 和佳（同嘱託）

平成5年度

調査委員 賀川 光夫（別府大学教授、県文化財保護審議委員）
小田富士雄（福岡大学教授、県文化財保護審議委員）
後藤 宗俊（別府大学教授）
田中 良之（九州大学助教授）
能城 修一（農林省森林総合研究所技官）
末広 利人（大分県教育庁文化課長）
調査事務 姫野 守正（県文化課課長補佐兼管理係長）
竹中 啓司（県文化課主査）
原 浩一（県文化課主事）
調査主任 渋谷 忠章（県文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）
調査員 西 哲弘（同主査）、佐脇 義敏（同主任）、江田 豊（同主任）
五十川孝正（同主任）、友岡 信彦（同主任）、染矢 和徳（同主事）
橋本 一彦（同嘱託）、須原 緑（同嘱託）、神崎 哲也（同嘱託）
岩尾 和佳（同嘱託）、志満 紀郎（同嘱託）

II. 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

日田市は、大分県の北西部に位置し、福岡県と県境を接する。周囲を一尺八寸山や五条殿等の標高 700m 前後の山岳に囲まれた盆地を形成している。この山岳は、新第 3 紀層を基盤とする筑紫溶岩により形成され、標高 200 ～ 300m の高地は耶馬溪溶岩、盆地に面した 150m 前後の台地は阿蘇溶結凝灰岩で形成されている。盆地中心部を東から西に流れる三隈川（筑後川）は、玖珠川や大山川（筑後川本流）、花月川などと市内で合流し、福岡県へと入り、九州最大の河川である筑後川となる。日田市はこの三隈川の周囲に開けた平野部を中心としており、水系的には北部九州との関係が深い地域である。

夕田遺跡群は、日田盆地東部に位置する佐寺原台地の北西斜面一帯に位置する。この佐寺原台地は西を花月川に、北を花月川支流の有田川によって画される標高 160m 前後の台地で、日田盆地を一望できる。夕田遺跡は花月川右岸の河岸段丘上に位置し、夕田横穴墓群は夕田遺跡の東側の斜面上に位置する。この横穴墓群はさらに斜面に沿って南側に展開しており、今回調査した地区は夕田横穴墓群の北端にあたる。夕田古墳群は台地先端の尾根上に位置する。台地上には弥生時代前期末～終末にかけての集落跡が展開する佐寺原遺跡^{註1}が、北側斜面には佐寺横穴墓群^{註2}が存在する。

2. 歴史的環境

日田市は、県下でも有数の遺跡密集地として知られているが、遺跡の大多数は盆地を囲む丘陵やその周辺の台地上に集中している。

歴史的には旧石器・縄文時代と遺跡は台地上に点々と存在している。弥生時代になると盆地周辺の台地や河川段丘に沿って多くの遺跡が形成されはじめる。なかでも吹上遺跡や小迫辻原遺跡、後迫遺跡等の大集落遺跡が台地上に出現するようになる。当遺跡群の位置する佐寺原台地も、大規模な弥生集落跡が確認されている。古墳時代も引き続き台地や微高地上に集落跡や古墳等の墓地群、丘陵斜面や崖面には大規模な横穴墓群が群集する。夕田遺跡群もその一つであり、段丘尾根上から斜面にかけては横穴墓や古墳等の墓地群、花月川が形成する微高地上には集落跡が形成されている。

日田市は筑後川流域に位置していることから、筑後地域・北部九州との関係も色濃く反映されている。弥生時代においては、前期後半頃から北部九州的な土器・石器が出土し、中期～後期には、後漢時代の方格規矩鏡片等の出土や、大型成人用甕棺墓等が検出されるが、これらは明らかに筑後地方や豊前南部地域の影響を受けたものである。古墳時代においては、円文や同心円文の装飾を施した横穴石室墳が築かれるなど、弥生時代同様、筑後地方を介して北部九州の文化圏に含まれた地域であった証であろう。また、夕田遺跡群においても古式須恵器にみられるように土器の搬入が認められている。

古代・中世になると、律令国家によって一括して日田郡に編成されている。郡内には『豊後国風土記』・『倭名類聚抄』から在田・夜開・日理・又連・石井の 5 郷の存在が記載されており、当遺跡群周辺は在田郷の地域にあたる。また、この時期に整備したと思われる条里跡の遺構も当遺跡群の対岸一帯に展開していたと考えられ、現在でもおおよその様相は残しているが、花月川・有田川の氾濫原にあたり、当時代の遺構は確認出来ていない^{註3}。

註 1. 松本康弘 友岡信彦『佐寺原遺跡 尾漕遺跡群 有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(9) 大分県教育委員会 1998

註2. 渋谷忠章 村上久和他『日田条里遺跡群 佐寺横穴墓群 大迫遺跡 白岩遺跡 下稜垣遺跡』九州横断
自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 大分県教育委員会 1997

註3. 註2と同じ

参考文献

『日田市史』 日田市 1990

『大分県の地名』日本歴史地名体系45 平凡社 1995

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	君迫遺跡	55	京田遺跡	109	亀ノ甲遺跡
2	萩尾遺跡	56	夕田遺跡	110	町野原遺跡
3	二串西原遺跡	57	夕田横穴墓群	111	奥ノ迫遺跡
4	穴原遺跡	58	佐寺原遺跡	112	柳ノ本遺跡
5	大見取遺跡	59	堂園遺跡	113	鬼塚古墳
6	中ノ前遺跡	60	大迫遺跡	114	法恩寺1号墳
7	朝日宮ノ原遺跡	61	宮ノ下遺跡	115	法恩寺2号墳
8	天満1号墳	62	中尾1号墳	116	法恩寺3号墳
9	天満2号墳	63	中尾2号墳	117	法恩寺4号墳
10	天神山横穴群	64	ゴス園遺跡	118	法恩寺5号墳
11	尾部田遺跡	65	須ノ原遺跡	119	法恩寺6号墳
12	山ノ神(二串)遺跡	66	世尊寺遺跡	120	法恩寺7号墳
13	小迫古墳	67	城山遺跡	121	上井手遺跡
14	小迫横穴群	68	城山古墳	122	平松遺跡
15	森本遺跡	69	ハル遺跡	123	東寺横穴群
16	岩崎遺跡	70	平島古墳	124	日高遺跡
17	山田原遺跡	71	平島遺跡	125	千人塚1号墳
18	谷ノ久保遺跡	72	クエト1号古墳	126	千人塚2号墳
19	用松原遺跡	73	クエト2号古墳	127	大部遺跡
20	用松中村古墳	74	尾漕遺跡	128	小ヶ瀬遺跡
21	草場第1遺跡	75	尾漕古墳	129	徳瀬遺跡
22	草場第2遺跡	76	狐迫遺跡	130	日隈古墳
23	小迫辻原遺跡	77	有田塚ヶ原1号墳	131	日隈城跡
24	本村古墳	78	有田塚ヶ原2号墳	132	落久保遺跡
25	後迫遺跡	79	平島横穴群	133	津辻1号墳
26	羽野横穴墓群	80	片山原遺跡	134	津辻2号墳
27	日田条里跡	81	慈眼山瀬戸口遺跡	135	隈山遺跡
28	友田坂本遺跡	82	大蔵古城跡	136	ガランドヤ1号墳
29	三郎丸遺跡	83	丸山古墳	137	ガランドヤ2号墳
30	三郎丸古墳	84	水目横穴群	138	ガランドヤ3号墳
31	大内田遺跡	85	中尾原遺跡	139	尾園遺跡
32	鳥越古墳	86	塚原遺跡	140	穴観音古墳
33	片山石棺	87	湯尻遺跡	141	倉園古墳
34	向原遺跡	88	赤迫遺跡	142	長者原遺跡
35	萩鶴遺跡	89	大波羅遺跡	143	平野遺跡
36	今泉遺跡	90	薬師堂山古墳	144	尾坪遺跡
37	岳林寺遺跡	91	丸尾神社古墳	145	上野赤塚遺跡
38	北友田横穴群	92	丸尾古墳	146	護願寺1号墳
39	吹上遺跡	93	会所宮遺跡	147	護願寺2号墳
40	鍛冶屋廻り遺跡	94	田島(後山)古墳	148	護願寺3号墳
41	月隈城跡	95	元宮遺跡	149	寺内(護願寺)遺跡
42	月隈横穴群	96	鳥羽塚古墳	150	上野姥塚古墳
43	柴尾遺跡	97	会所山遺跡	151	上野カグネ塚古墳
44	縫ノ迫1号墳	98	会所山古墳	152	上野遺跡
45	縫ノ迫2号墳	99	馬形遺跡	153	上野横穴群
46	葛原古墳	100	倉迫遺跡	154	姫塚古墳
47	有田葛原遺跡	101	ガニタ1号墳	155	銭測遺跡
48	寺坂古墳	102	ガニタ2号墳	156	陣ヶ原辻原遺跡
49	峰崎遺跡	103	ガニタ3号墳	157	条里跡
50	大行寺遺跡	104	東寺原遺跡	158	高瀬遺跡
51	西有田赤ハゲ遺跡	105	古金遺跡	159	惣田塚古墳
52	有田1号墳	106	秣手遺跡	160	惣田遺跡
53	有田古墳	107	着来遺跡	161	大宮遺跡
54	上柳遺跡	108	求来里平島遺跡	162	手崎遺跡



第2図 日田市主要遺跡分布図及び遺跡名 (1/25,000)

平成7年3月 日田市役所発行『日田市全図 1:25,000』より転載

Ⅲ. 調査の概要

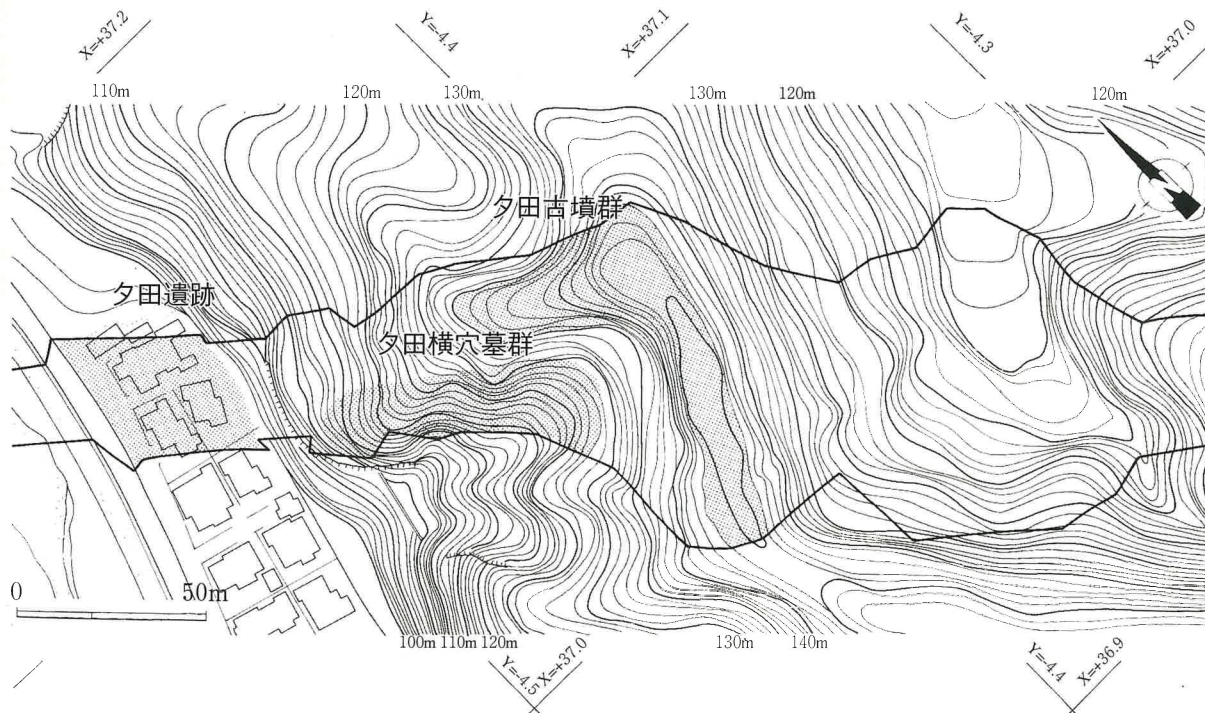
1. 調査地区の設定

夕田遺跡群は、日田市大字西有田字夕田に所在する。調査遺跡は、花月川右岸の河岸段丘上と、東側に位置する佐寺原台地から北西へ延びる尾根状の低丘陵頂部、さらには斜面中腹に至る広範囲に亘る。確認された遺構も各々性格を異にする。このため、河岸段丘上に位置する遺跡を夕田遺跡、斜面中腹に位置する横穴墓群を夕田横穴墓群、斜面上部平坦地から尾根上部先端に位置する墳墓群を夕田古墳群とし、全体で夕田遺跡群とした。このうち夕田遺跡と夕田横穴墓群は周知遺跡内のごく一部の調査であり、これまで発掘調査は行われていない地域である。今後、注意を要する地域であり、また、遺跡の展開が期待できる地区でもある。

2. 調査の概要

夕田遺跡は、花月川右岸の南北約500m、東西40～100m程の河岸段丘全域に展開する。今回調査を実施した地区は段丘の北端にあたる。当地区は橋脚建設地であるが、花月川に係る湧水期工事のため、平成4年11月に急遽遺構確認調査依頼を受けた。このため重機による試掘調査を実施した結果、旧宅地の基礎等による攪乱が一部でみられたものの、遺構面の残りは比較的良好であり、柱穴痕・遺物包含層等を確認した。このことをふまえ、日本道路公団との打ち合わせの結果、早急に削平部分の本調査を実施した地区である。本調査の期間はおよそ2週間を要した。調査の結果、西側では花月川への落込みラインを確認できた。また、遺跡は南側へ展開していることから、調査区外には今回確認できなかった住居跡等の存在の可能性も十分に考えられる。

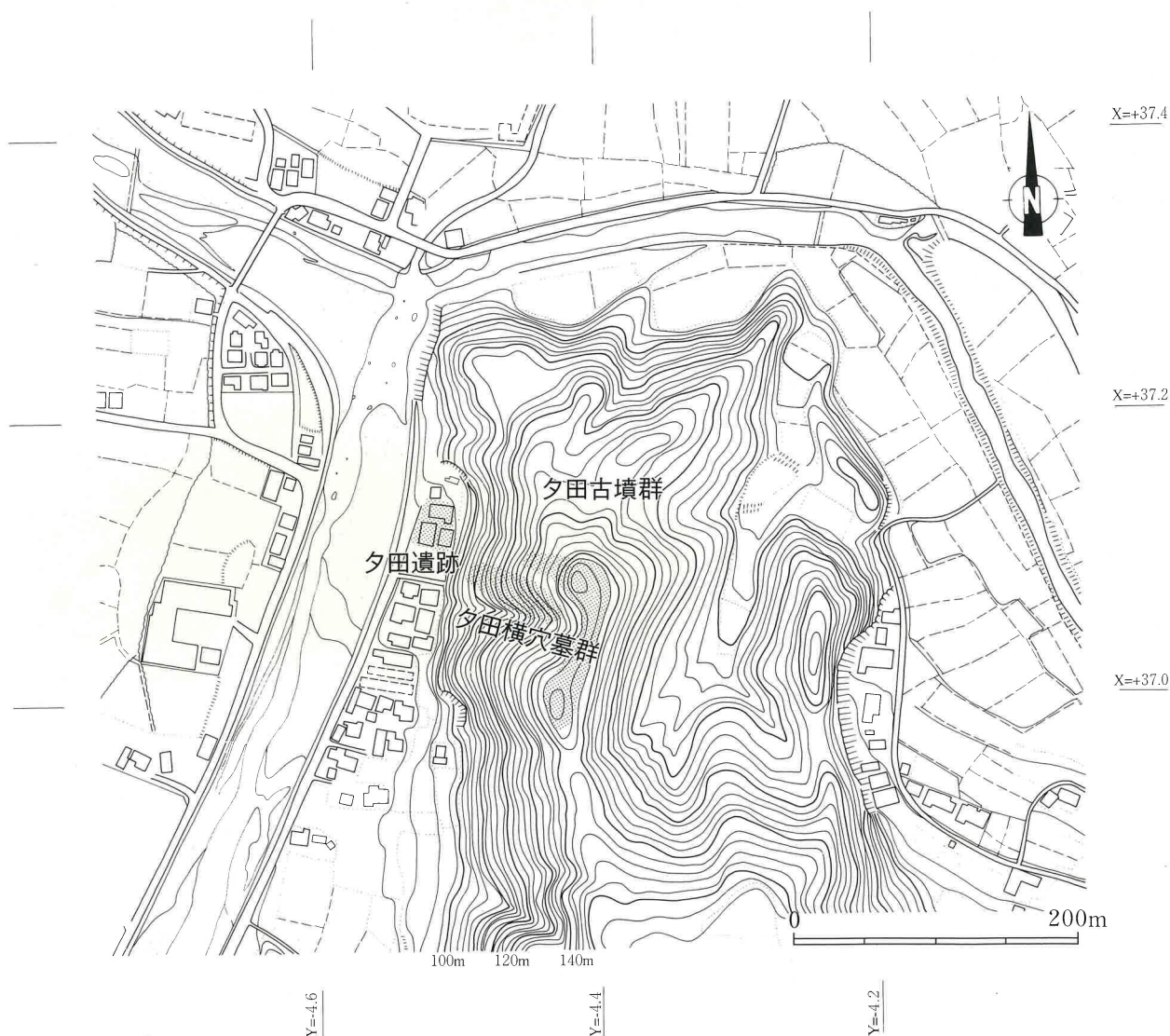
夕田横穴墓群は、佐寺原台地西側斜面中腹に位置する。西側下方は花月川と夕田遺跡、北～東側上方は夕田古墳群が位置する。標高は106～130mで、その間にそれぞれ数基ずつ群を成して展開する。今回の調査区は横穴墓群の北端にあたり、南側へと延びる斜面には早くから横穴墓の存在が知られており、斜面全体ではおそらく数百に及ぶ横穴墓が存在するであろう。また、調査区の北側は、花月川と有田川の合流地点であり、有田川に沿ってほぼ直角に斜面が東側へ折れ、佐寺横穴墓



第3図 夕田遺跡群路線内位置図 (1/2000)

群へと展開していく。調査は保安林の解除・樹木の伐開を待って、平成5年4月から夕田古墳群と並行して行った。横穴墓は一部開口してテラス状遺構が伺えるもの以外は表土・埋土に覆われ、視認は不可能であった。このため頂上付近は古墳群の調査に合わせ、一部重機による表土剥ぎを行ったものの、横穴墓の確認はできなかった。このためほとんどの横穴墓は頂上部から順に人力による表土剥ぎを行って検出した。調査の結果、横穴墓は斜面からやや突出した尾根先端中腹から南向きの斜面にかけて検出した。調査はおよそ10ヶ月を費やし、調査した横穴墓は43基であった。

夕田古墳群は佐寺原台地から北西へ延びる尾根状の低丘陵頂部から先端部に位置する。同古墳は、平成2年度に立木伐開後の搬出中、重機による墳丘の削平を受け、石棺蓋石が検出されたことが発見の契機となった。本調査は平成5年4月から夕田横穴墓群の調査と並行して行った。本調査では丘陵全体の確認調査を行い、夕田古墳以外に石棺2基、土坑墓1基を検出、調査した。石棺や土坑墓は後世の植林等による攪乱・削平が激しく残りは良くなかったが、遺構周辺の地山の高まりや溝状遺構の検出などからみて、墳丘の消滅した古墳であった可能性が高い。夕田古墳は径8m前後の円墳で、2基の主体部を持つ。2基とも組合せ式の箱式石棺である。1号主体部からは人骨が出土したため、九州大学文学部九州文化史研究施設の田中良之助教授（当時）の調査指導・協力を得て主体部の調査を行った。



第4図 夕田遺跡群周辺地形図 (1/5000)

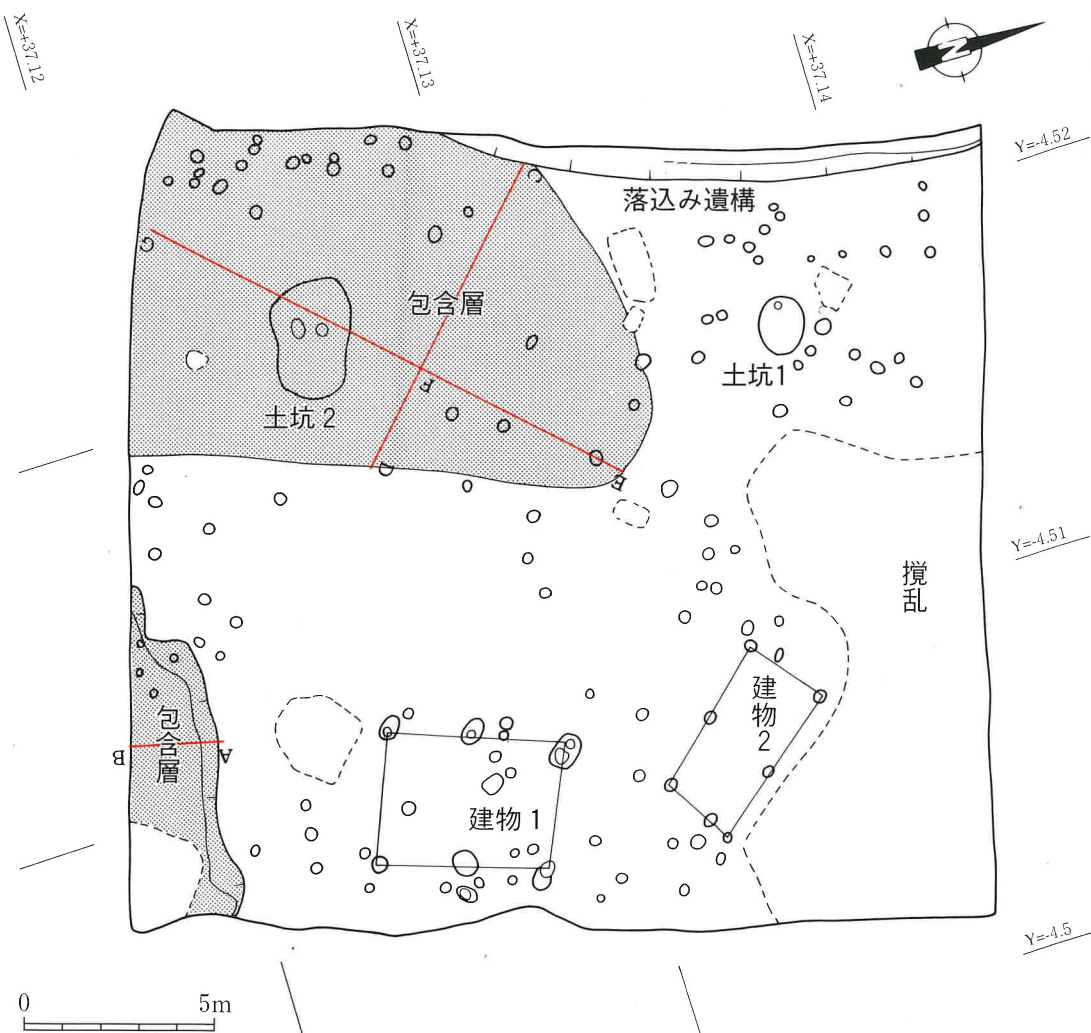
IV. 夕田遺跡群の調査

1. 夕田遺跡

1) 遺跡の概要

夕田遺跡は日田市大字西有田字夕田に所在する。標高は遺構検出面で93m前後である。東を佐寺原台地、西を花月川に挟まれた河岸段丘上に位置し、花月川左岸には日田条里遺跡群が展開する。

調査地点は夕田遺跡の北端で、花月川と有田川の合流域に位置するため、当初は河川の氾濫域の可能性も考えられたが、試掘調査の結果、柱穴や土坑等の遺構が検出され、氾濫の形跡はみられなかった。このため、急遽本調査に切替え、削平部分の表土剥ぎ・遺構検出作業を行った。調査面積は約500m²である。この結果、土坑2基、掘立柱建物跡2棟、遺物包含層、多数の柱穴を検出した。さらに、調査区西端では長さ10m前後に亘って川に沿うように落ち込みラインが確認された。この落ち込みは、現在約4m西に位置する花月川の当時の右岸にあたると思われる。出土遺物はそのほとんどが弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器であり、年代的に東側斜面上に位置する夕田横穴墓群や夕田古墳群からの流入とは考えられない。当地区は墳墓群形成以前の古墳時代初頭前後の一時期に居住地区として使用されていたとみられる。その後、墳墓群の形成時には当地区は破棄されており、11世紀前後に再び何らかの施設が造られたと思われる。



第5図 夕田遺跡遺構配置図 (1/200)

2) 調査の成果

土坑1 (第6図)

土坑1は調査区の北西に位置する不定形の土坑である。主軸方位はN-72°-Wを示す。検出面での標高は93.1m、規模は東西1.73m、南北1.2mで、深さ15cm前後である。南北をそれぞれ柱穴によって切られている。土坑内埋土は2層確認できた。2層ともやや粘質で焼土を含んでいるが、遺物は上層のほぼ中央付近から出土した。出土遺物から時期は古墳時代初頭と考える。

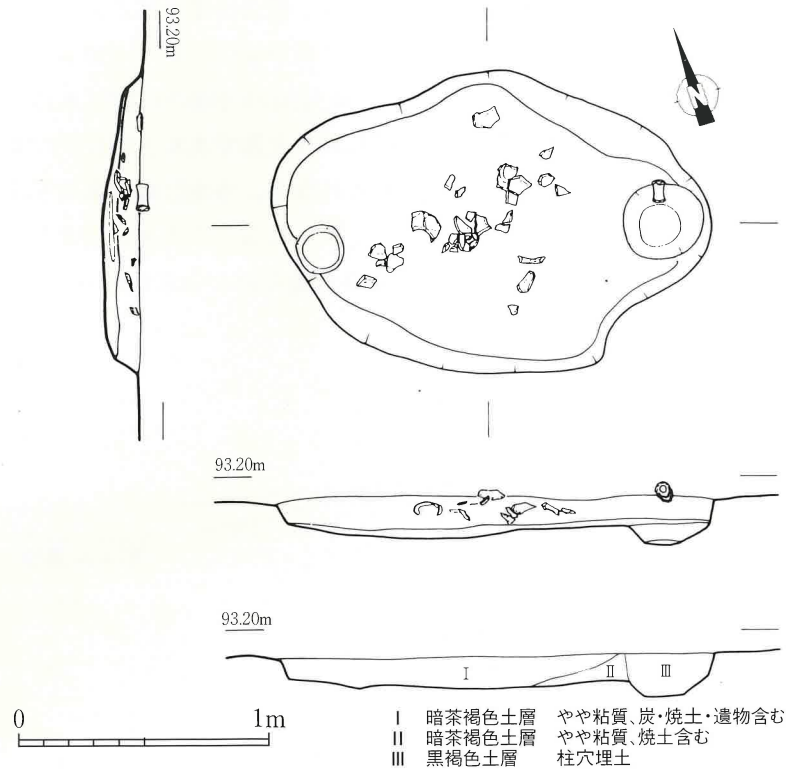
出土遺物 (第7図)

土坑内からは数点の遺物が出土したがいずれも破片であり、図示できるのは次の4点である。

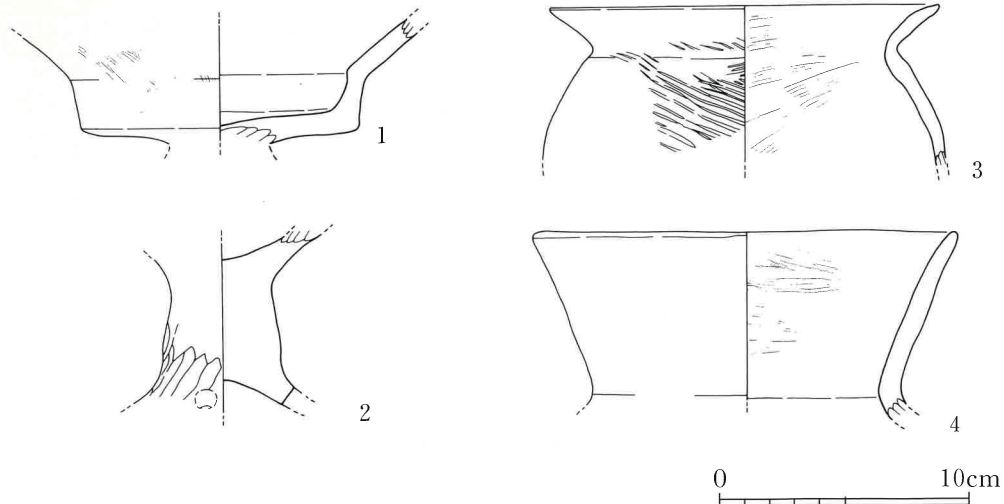
1は高坏の坏部破片で、底部はほぼ水平にのび、体部で直角に立ち上がり、口縁部でさらに外反しながらのびる。調整は内外面ともナデ調整を行っているが、外面の一部にハケ目痕が残る。胎土に角閃石・雲母を含み色調は黄白色、焼成は良好である。

2は高坏の脚部片である。短く中実で柱状をなし、4個の穿孔をもつ。外面上部はナデ調整、下部はヘラケズリで仕上げている。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は黄橙色、焼成は良好である。

3は甕の口縁から体部の一部で、口縁は外反しながらのびる。器面調整は内面口縁部がナデ仕上げ、胴部がハケ調整の後ナデ仕上げ、外面は口



第6図 土坑1実測図 (1/30)



第7図 土坑1出土遺物実測図 (1/3)

縁部がナデ仕上げ、頸部から胴部は左上りのタタキ痕が残る。色調は暗褐色で焼成は良好である。

4は壺の口縁部でわずかに外反しながら立ち上がる。内面はハケ調整の後ナデ仕上げ、外面はナデ仕上げである。胎土に角閃石を多量に含む。色調は淡い黄橙色で焼成は良好である。

土坑2 (第8図)

土坑2は調査区の南西に位置し、包含層下から検出された。主軸方位はN-70°-Wを示す。検出面での標高は91.8m、規模は東西3.45m、南北2.1mで、深さ35cm前後の隅丸長方形の土坑である。遺物は床面直上から甕や器台などかなりの遺物が出土した。当土坑の時期は出土遺物からみて土坑1とほぼ同時期の古墳時代初頭と考える。

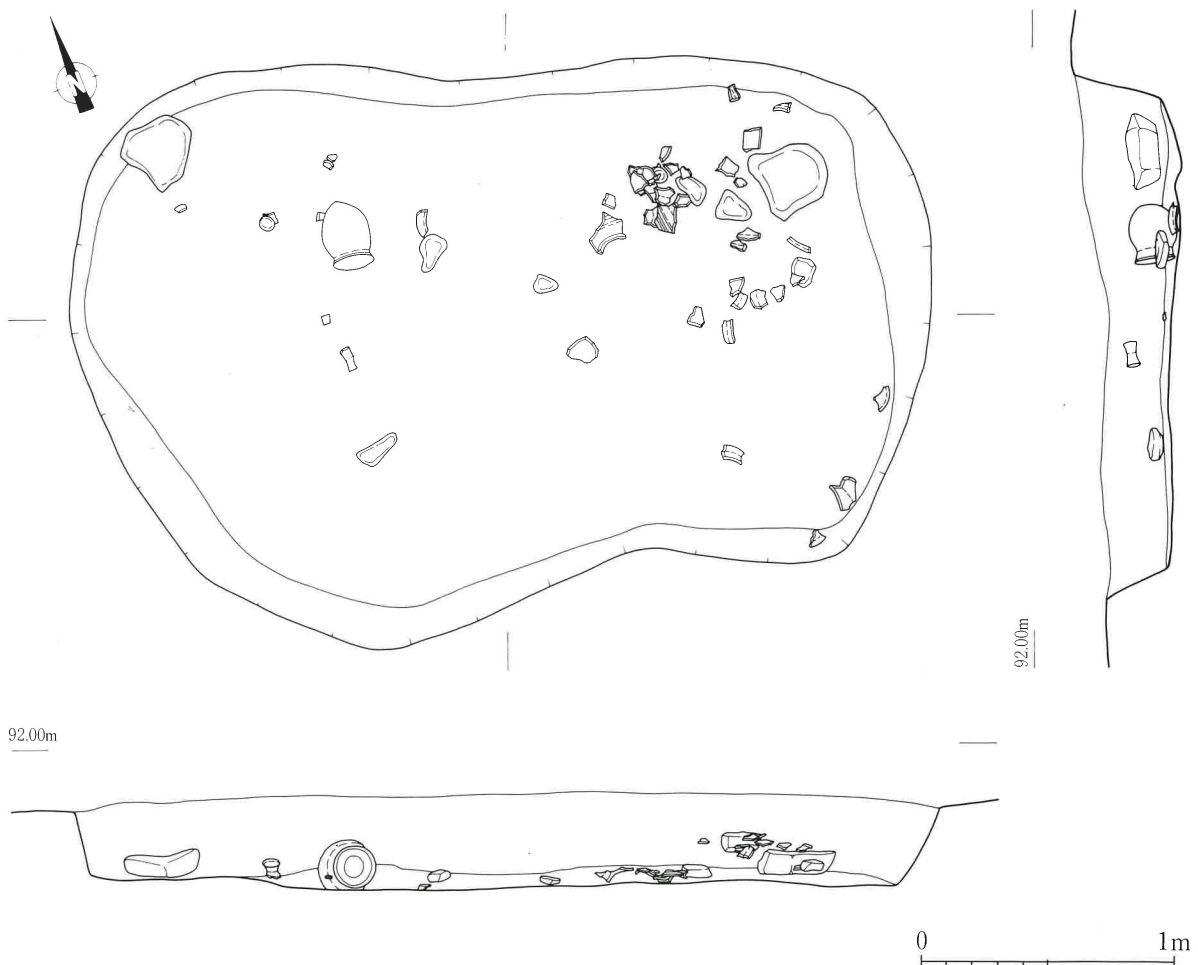
出土遺物 (第9図)

5は手捏ねの耳皿である。口縁の一部が破損している。口径5.4~6.8cm、器高2.4cmである。

6・7は器台で、6は台部内面がナデ或いはミガキで仕上げ、脚部外面はナデ成形を行い、その後ハケ調整で仕上げている。さらに部分的にミガキを施している。7は脚の一部で、外面上部はハケ調整、端部付近はナデ仕上げ、端部には刻み目を施している。

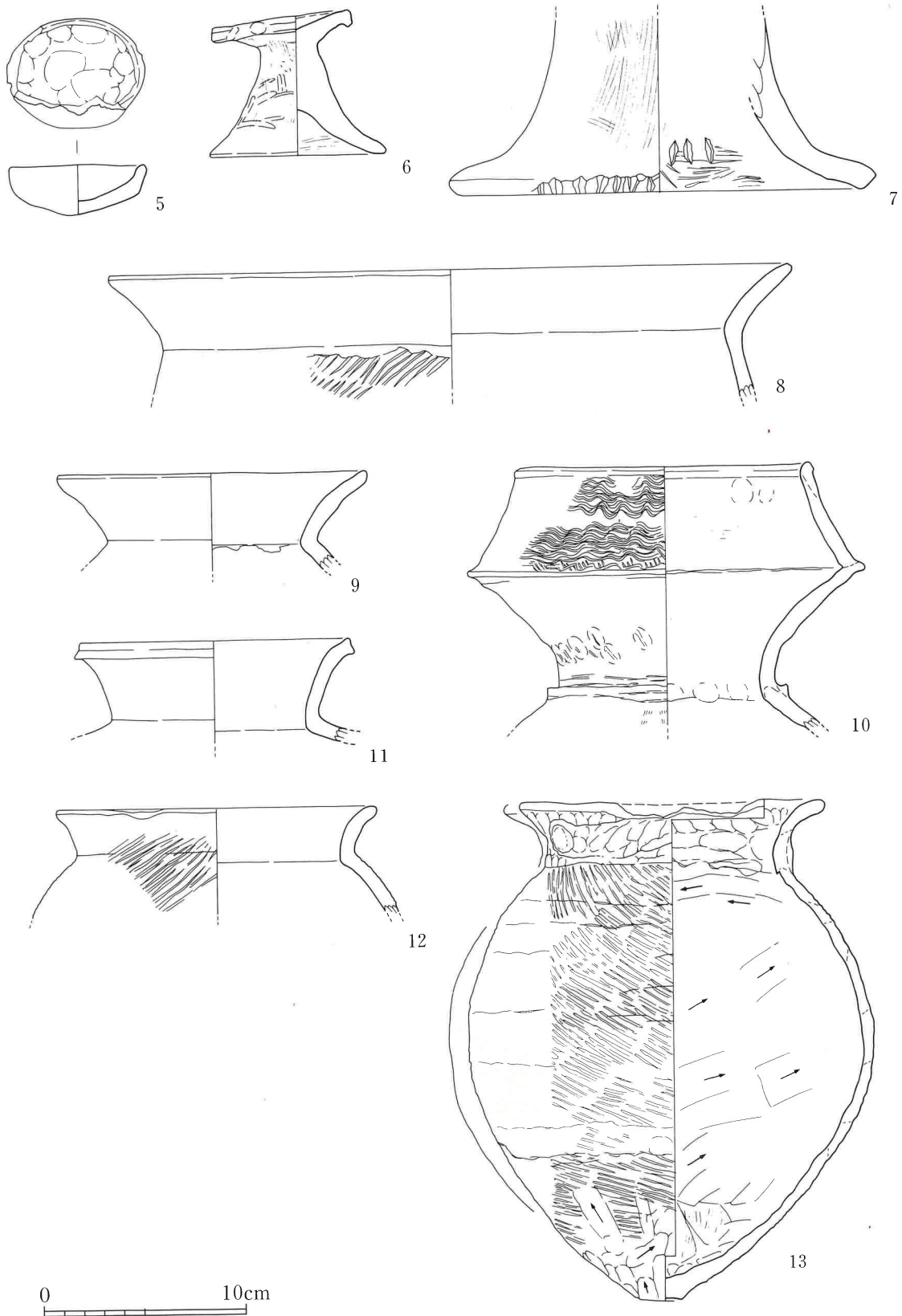
8は鉢で口縁から胴部の一部を残し、口径は推定で34cmである。調整は口縁内外面ともナデ仕上げ、胴部外面は右上りのタタキを施し、その後ナデ仕上げを行っている。

9・12・13は甕である。9は口縁の一部で口径は推定で15.2cm、調整は内外面ともナデ仕上げである。12は口縁から胴部の一部で、口径は推定で15.9cm、調整は内面ナデ仕上げ、外面は口縁の一部がナデ仕上げで、口縁の下端から胴部にかけては右上りのタタキを施している。13は完形の甕で床面直上から出土した。口径15.2cm、器高24.1cm、胴部は歪みを持ち最大径は20.5cmである。調整は



第8図 土坑2実測図 (1/30)

内面底部がナデないしは指押さえ、胴部下半はナデ仕上げ、上半は板ナデ後ナデ仕上げ、口縁は内外面とも指押さえ痕が残る。頸部には粘土紐をさらに張り付けている。胴部外面は左上りのタタキを施し、底部は平底でケズリによって底を小さくしている。畿内V様式系の甕である。



第9図 土坑2出土遺物実測図 (1/3)

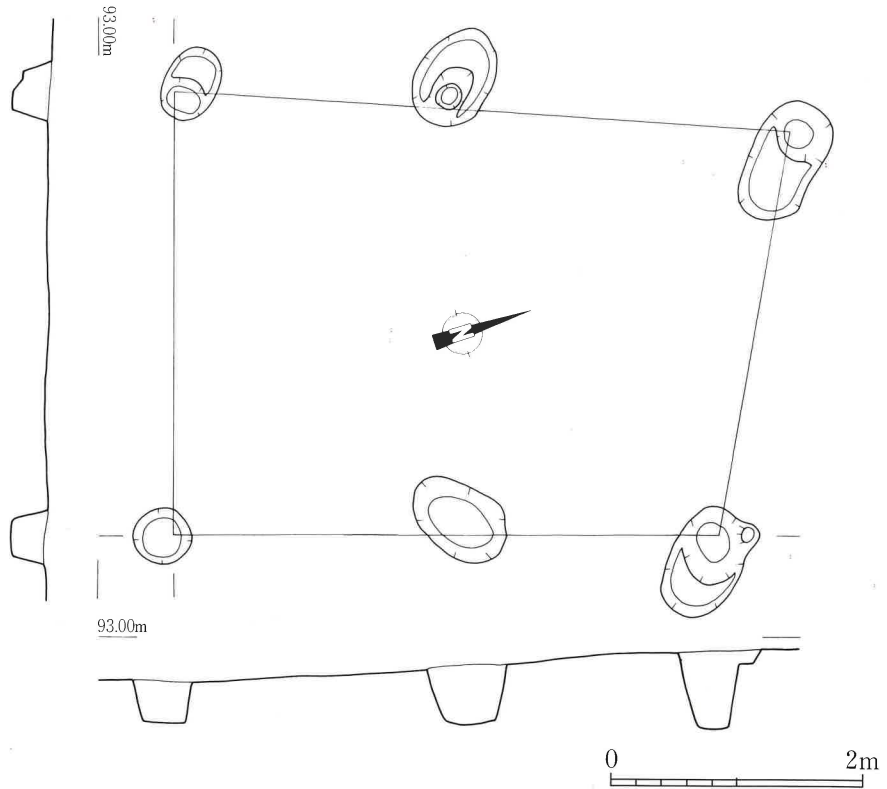
10・11は壺である。11は二重口縁壺の口縁部で、口径は推定で14.3cmである。内外面ともナデ仕上げで、櫛描波状文を施している。11は口縁部の破片で口径は推定で13.3cmである。内外面ともナデ調整を施した在地系の壺である。

掘立柱建物跡

調査区内からは、掘立柱建物跡と思われる遺構が2棟確認された。調査区内では多くの柱穴が検出されているため、他にも建物跡は存在すると思われるが、確認できたのは2棟であった。柱穴内からは遺物等出土していないため時期は不明である。

建物1 (第10図)

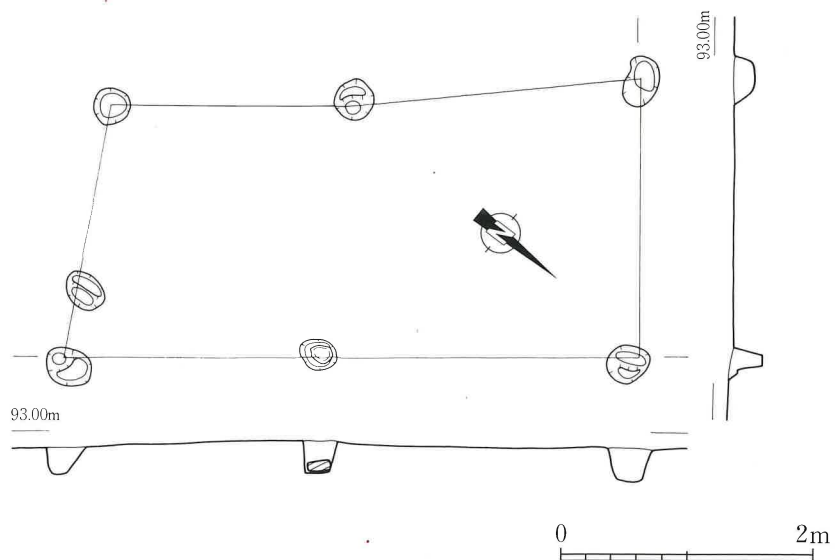
建物1は調査区の東端に位置する。主軸をN-17°-Eにとる南北棟で、桁行2間、梁行1間の建物跡である。規模は桁間5m、梁間3.5mである。柱の掘り方はほぼ円形で、径40~60cm、確認面からの深さは30~50cmである。柱穴内からは遺物や根石は出土していない。構築時期は不明である。



第10図 建物1実測図 (1/60)

建物2 (第11図)

建物2は調査区の北東に位置する。主軸をN-40°-Wにとる南北棟で、桁行2間、梁行1間の建物跡である。規模は桁間4.2~4.6m、梁間2.2mである。柱の掘り方はほぼ円形で径30~40cm、確認面からの深さは30cm前後である。東桁行の中央柱穴は根石を持つ。遺物は出土していないため構築時期は不明である。



第11図 建物2実測図 (1/60)

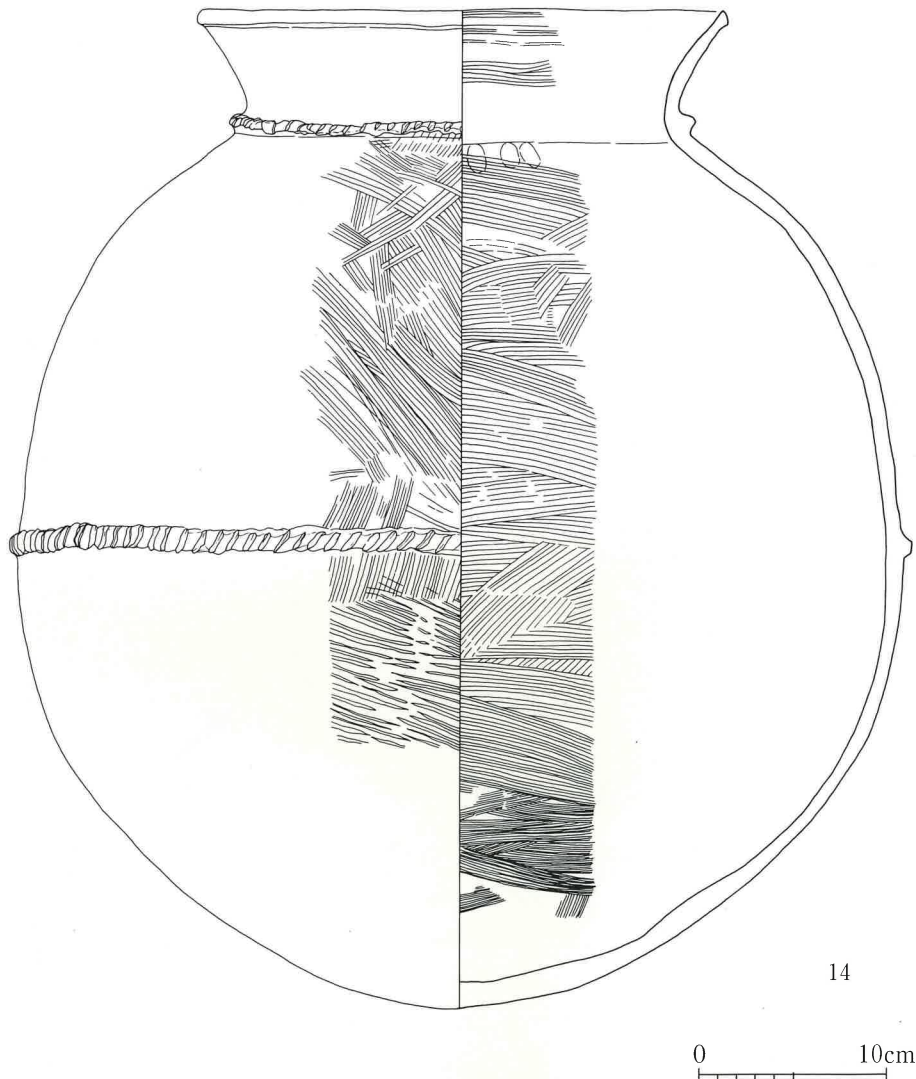
落込み遺構

落込み遺構は、調査区の北西隅から調査区西壁に沿って南方向へ長さ約14mに渡って確認された。遺構の上端部は確認されたが、下端部は調査区の制約等もあり確認できなかった。おそらく4m程西に位置する花月川の旧右岸にあたると考える。検出面の標高は92.5mで、約1m掘り下げたが、下方は検出できなかった。遺物は遺構の南端付近で大型の壺(14)や甕・高坏が土圧により押し潰された状態で出土した。壺は落込みの上端から斜面にかけて貼り付いた状態で出土した。

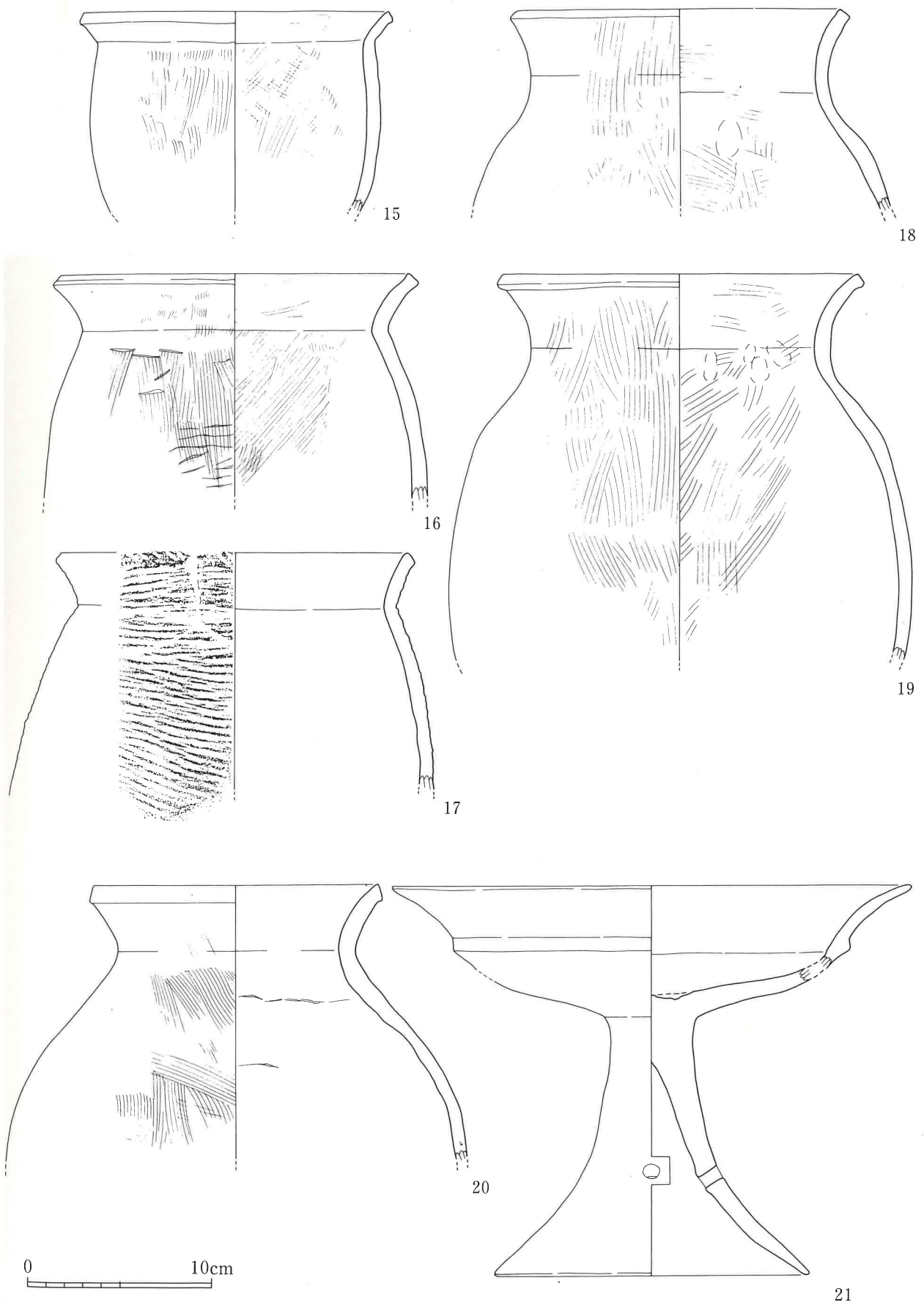
出土遺物(第12・13図)

14は大型の壺でほぼ完形である。口径は28cm、器高52.6cm、胴部最大径はほぼ中央に持ち、58.2cmで丸底で球形の体部を有する。頸部と胴部中央にそれぞれ1条のベルト状の突帯を付し、斜めの刻み目が施される。調整は、胴部内面はハケ目調整、頸部はナデ仕上げで一部指押さえ痕が残る。口縁部は内面がハケ調整、外面がナデ仕上げである。胴部外面はハケ調整で、突帯の下部に一部タタキがみられる。胴部はタタキの後、ハケ調整を施したものであると思われる。底部はナデで仕上げている。胎土に角閃石・斜長石等を多量に含み色調は黄橙色、焼成は良好である。時期は土坑1・2と同様に古墳時代初頭の在地系の壺である。

15～19は甕の口縁から胴部にかけての破片である。15は推定で口径16.5cm、口縁部は短く立ち上り、胴部はすぼみ気味である。調整は内面ハケ調整を行い、口縁部はその後横ナデを行っている。外



第12図 落込み遺構出土遺物実測図1 (1/4)



第13図 落込み遺構出土遺物実測図2 (1/3)

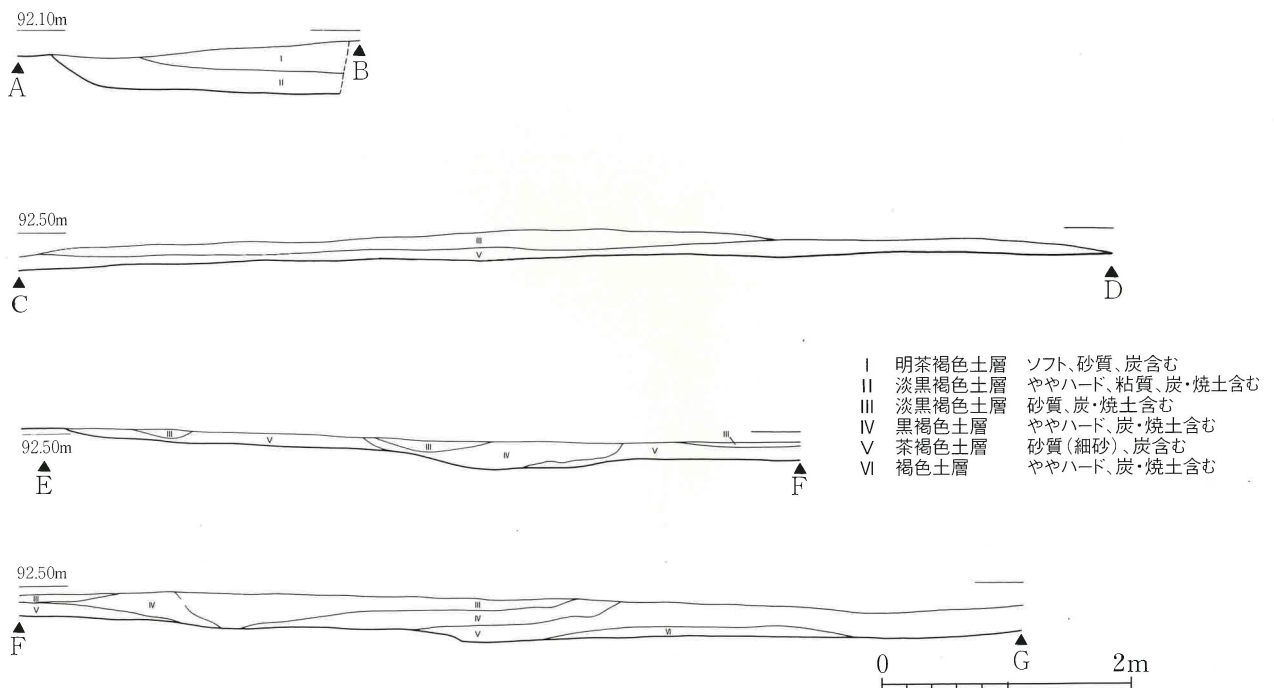
面は口縁部が横ナデ、胴部がハケ調整を施している。胎土に角閃石・金雲母を含み、色調は黄橙色、焼成は良好である。16は口径18.7cm、調整は内外面ともハケ調整を施しており、口縁端部と外面の一部にナデ仕上げが認められる。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は褐色、焼成は良好である。17は口径18.6cm、調整は内面ナデ仕上げ、口縁端部に刻み目を施している。外面は全面左上りのタタキを施している。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は橙色、焼成は良好である。18は口径17.5cm、調整は胴部内外面ともハケ調整を行い、口縁部はその後一部ナデ調整を行っている。頸部内面に指押さえ痕が残る。口縁端部はナデ調整、外面はハケ調整である。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は茶褐色、焼成は良好である。19は推定で口径19.1cm、胴部最大径24.8cm、調整は胴部内外面ともハケ調整、頸部～口縁はハケ調整の後、ナデ仕上げを行っている。頸部には指押さえ痕が残る。口縁端部はナデ仕上げ、外面はハケ調整で仕上げている。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は橙色、焼成は良好である。20は壺の口縁から胴部の一部で、口径は15.3cm、調整は胴部内面がケズリの後ナデ仕上げ、外面がハケ調整の後一部ナデ仕上げ、口縁は内外面ともナデ仕上げである。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は黄橙色、焼成は良好である。

21は高坏で、坏部の一部が分離しているが同一個体のため図上で復元した。坏部は大きく外反しながら曲折部に突帯風の稜を有する。口縁はさらに外反しながらのび、端部は丸い。内面には丹の痕跡が残る。脚部は中空で緩やかに開く長い脚を持ち、端部は丸い。中位に4個の穿孔を穿つ。口径27.8cm、底径17cm、器高は推定で20.9cmである。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は黄橙色、焼成は良好である。在地系の土器である。

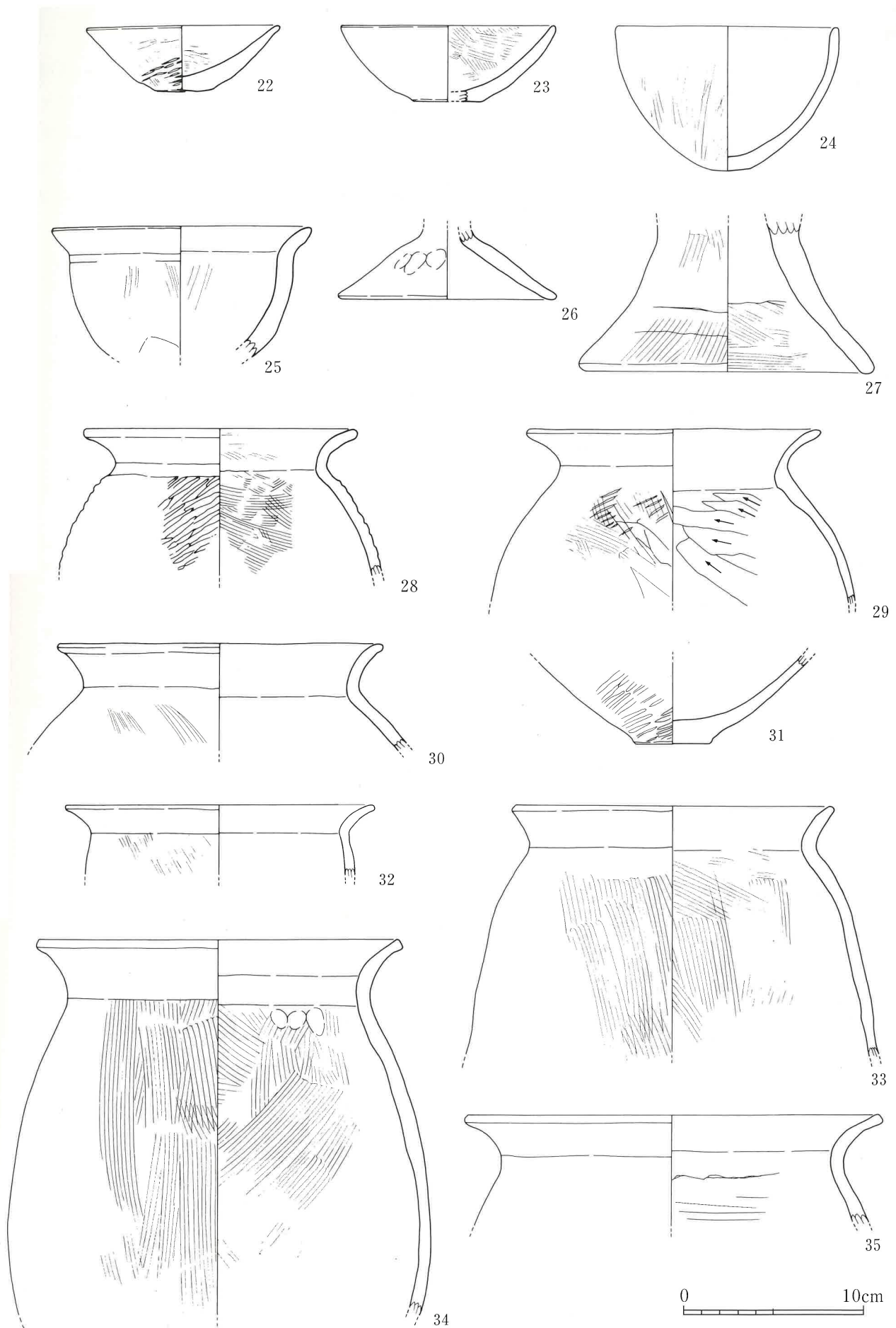
14～21の遺物は一括資料である。時期は弥生時代後期後半から古墳時代初頭にあたると考えられ、土坑1・2とほぼ同時期の年代を示す。

包含層

包含層は調査区の南西と南東で確認された。南西に位置する包含層の層厚は20～30cmで4層確認できた。いずれも黒褐色～茶褐色の砂層に近い成分で炭や焼土を含んでいる。遺物はほぼ万遍無く出土した。南東の包含層からは遺物の出土量は少ない。攪乱の可能性はある。



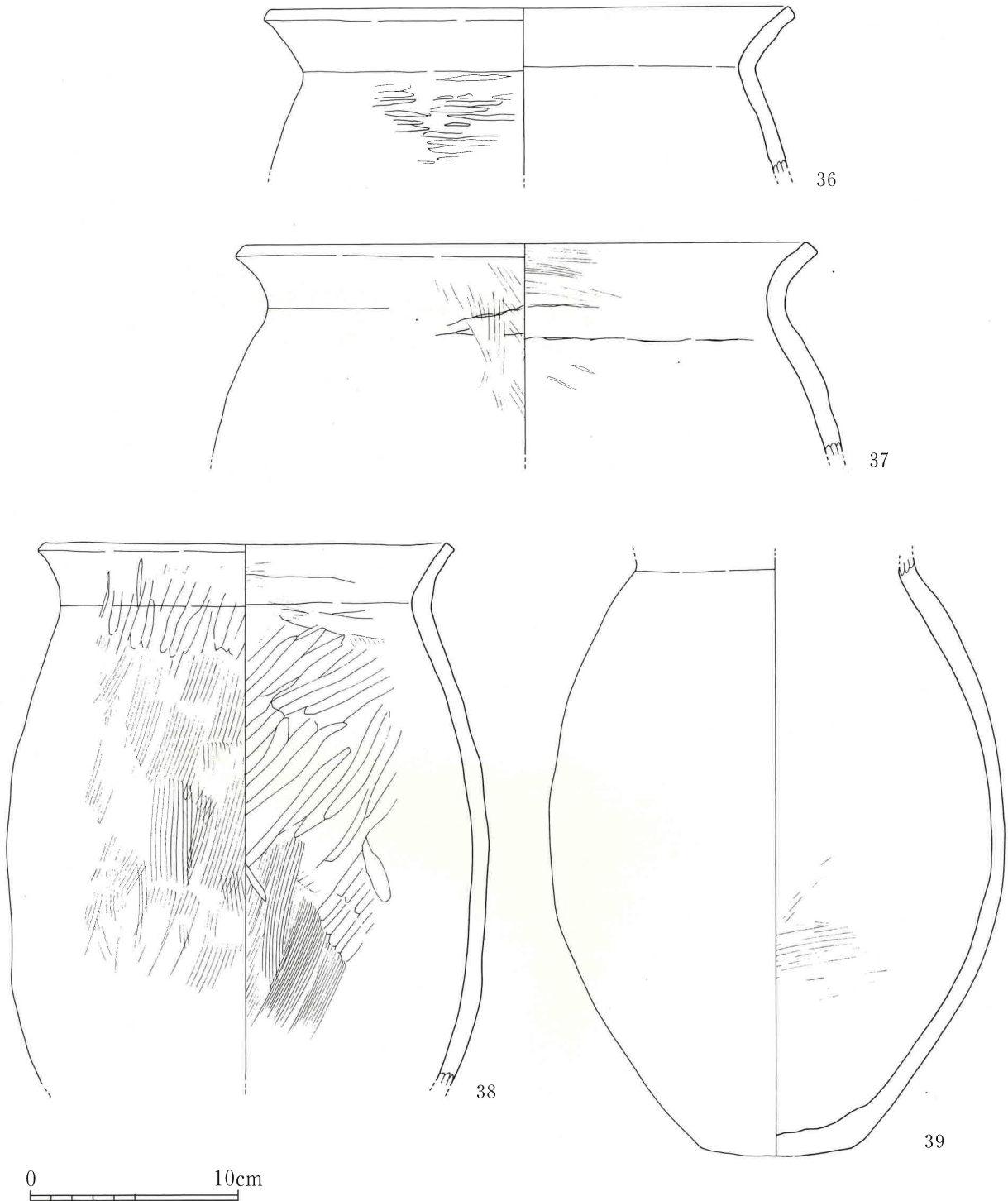
第14図 包含層土層図 (1/60)



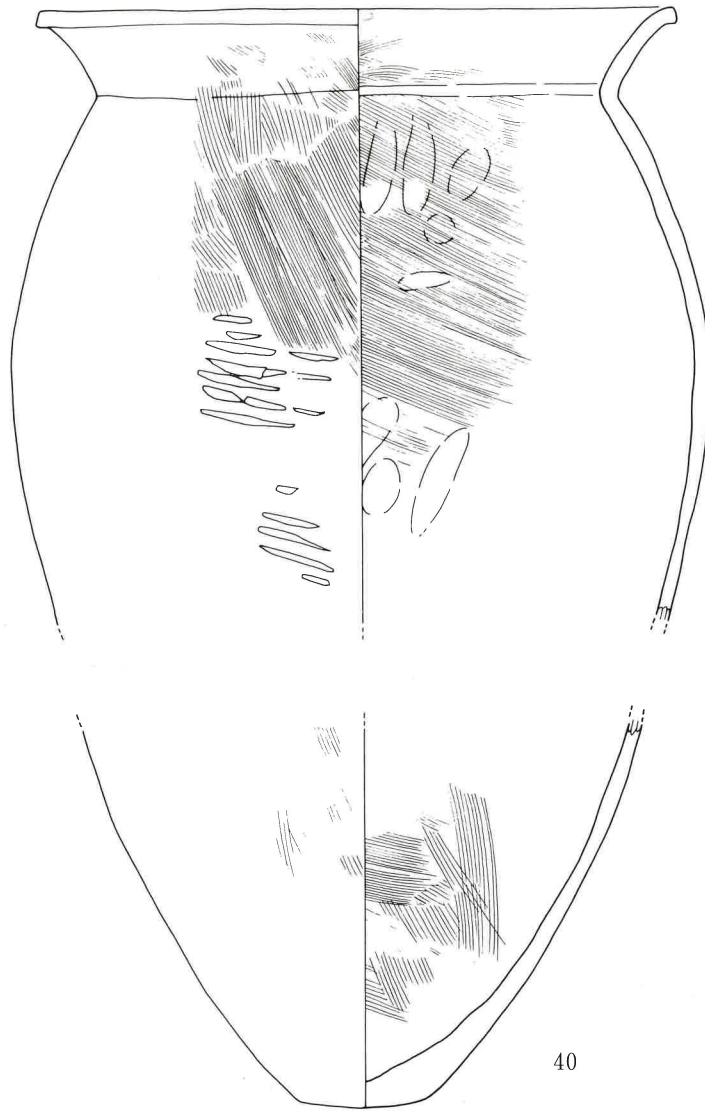
第15图 包含層出土遺物実測図1 (1/3)

出土遺物（第15～18図）

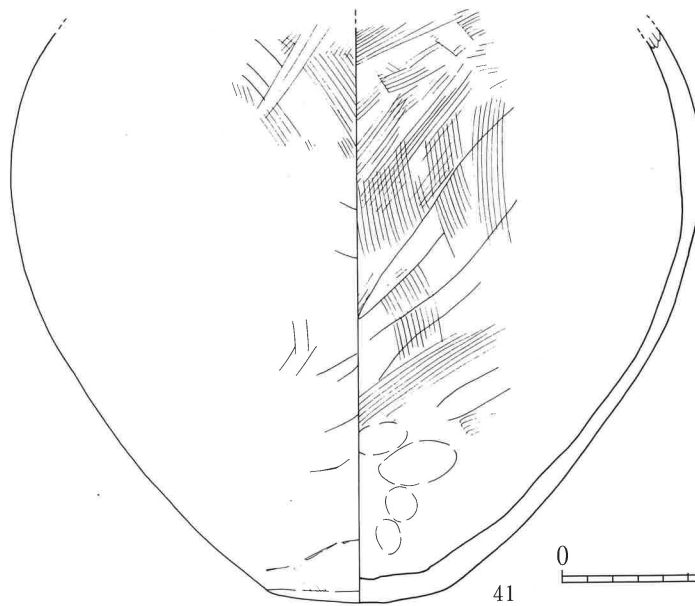
22～25は鉢である。22は畿内V様式系のタタキ技法による鉢で、口径は推定で10.8cm、底径3.1cm、器高3.6cmである。調整は内面ヘラミガキ、外面口縁部は横方向のナデ仕上げ、体部はタタキの後丁寧なヘラミガキで仕上げている。胎土に角閃石・石英を含み、色調は明黄橙色で底部に黒斑がみられる。焼成は良好である。23は平底の鉢で、わずかに内傾しながら口縁部へと伸びる。口径11.9cm、底径3.8cm、器高4.2cmで、調整は内面ハケ調整、外面ヘラケズリの後ナデ仕上げ、色調は黄橙色、焼成は良好である。24は丸底の鉢で、口径12.4cm、器高8.0cmである。調整は内面ナデ仕上げで、底部に一部ヘラ痕が残る。外面は粗いハケ調整で、色調は褐色、焼成は良好である。



第16図 包含層出土遺物実測図2 (1/3)



40



41

0 10cm

第17図 包含層出土遺物実測図3 (1/3)

25は底部を欠く鉢で、体部がわずかに内傾しながらのび、口縁部でくの字状に折れ端部にいたる。口径14.4cm、調整は体部内面はハケ調整、口縁部は内外面とも横方向のナデ仕上げ、体部外面はハケ調整の後ナデ仕上げを行っている。色調は橙色、焼成はやや不良である。

26・27は器台の受部である。26は受部が外下方向に強く開き、受部高は低い。端部はわずかに丸味をおびた面をなし、内端部が接地面となる。底径12.1cmである。調整は内外面ともナデ仕上げで、一部指押さえ痕が残る。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は淡黄橙色、焼成は良好である。27も受部は外下方向へ開くが26ほどではなく、受部高も比較的高い。端部は丸味をおび、内端部が接地面となる。底径16.4cmである。調整は内面上部がヘラケズリ、下部がハケ調整で、外面はハケ調整の後ナデ仕上げである。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は橙色、焼成は良好である。

28～40は甕である。28は畿内V様式系の甕の破片で、口縁から胴部の一部である。口縁は外反しながらのび、端部は丸い。13と同様の球形の胴部をもち、平底気味の小さな底部をもつと考える。口径は推定15.2cmで、器壁は厚い。調整は胴部内面が丁寧な左上りのハケ調整を行い、その後右上りのナデ仕上げを行っている。口縁部は内外面とも横方向のナデ仕上げである。胴部外面は4条の深く粗いタタキを施している。胎土に角閃石・石英を含み、色調は淡黄橙色、焼成は良好である。

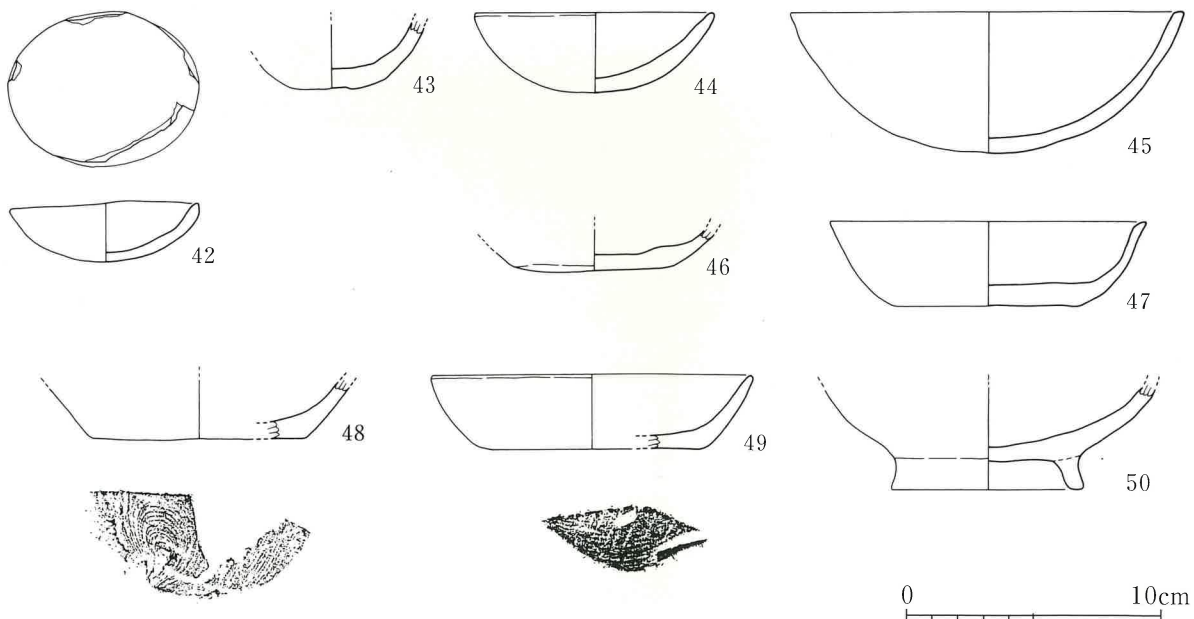
29は口縁が外反しながらのび、端部は丸く、器壁は薄い。口径は16.4cmである。調整は胴部内面がケズリで、外面はタタキの後ハケ調整を行い、口縁部は内外面とも横方向のナデ仕上げである。

胎土に角閃石・白色粒・赤色粒を含み、色調は褐色、焼成は良好である。30は口径18.2cmで口縁は外反しながらのび、端部付近で浅い段をもつ。調整は内外面ともナデ仕上げで、胴部外面に一部ハケ調整が残る。胎土に角閃石・白色粒・赤色粒を含み、色調は黄白色、焼成は良好である。

31は底部と胴部の一部である。平底の甕で底径は4.3cmである。底部はケズリにより、径を小さくしている。28と同一個体の可能性をもつ。調整は底部内面がハケ調整の後ナデ仕上げ、外面はナデ仕上げで、胴部内面はナデ仕上げ、外面はタタキを施している。胎土に角閃石・石英を含み、色調は淡黄橙色、焼成は良好である。

32は器壁の薄い甕の口縁から胴部にかけての破片である。口径は推定で17.2cmである。口縁は外反しながらのび、端部は丸味を持った面をなす。調整は胴部内面がヘラケズリ、外面がハケ調整で、口縁は内外面とも横方向のナデ仕上げである。胎土に角閃石・斜長石を含み、色調は橙色、焼成は良好である。

33は口径17.5cmで、口縁はわずかに外反しながらのび、端部は面をなす。調整は胴部が内外面ともハケ調整、口縁は内外面とも横方向のナデ仕上げである。



第18図 包含層出土遺物実測図4 (1/3)

胎土に角閃石・赤褐色粒を含み、色調は黄橙色、焼成は良好である。34は口径20.1cmで、口縁は外反しながらのび、端部は面をなす。調整は胴部が内外面ともハケ調整で、内面下方はその後ナデ仕上げを行っている。頸部付近には指押さえ痕が残る。口縁は内面ハケ調整の後ナデ仕上げで、外面は横方向のナデ仕上げである。胎土に角閃石・斜長石・金雲母・赤褐色粒を含み、色調は灰褐色、焼成は良好である。35は口径23.3cmで、口縁は外反しながらのび、端部は面をなす。調整は内外面ともナデ仕上げで、胴部はハケ調整の後ナデ仕上げである。胎土に角閃石・斜長石・赤褐色粒を含み、色調は灰黄褐色、焼成は良好である。36は口径24.8cmで、口縁はわずかに外反しながらのび、端部は面をなす。調整は胴部内面はナデ仕上げで、外面はタタキを施す。口縁部は内外面とも横方向のナデ仕上げである。胎土に角閃石・斜長石・赤褐色粒を含み、色調は黄灰色、焼成は良好である。内外面とも丹塗りの痕跡が認められる。37は口径26.8cmで、器壁は厚く口縁は外反しながらのび、端部は面をなす。調整は内外面ともハケ調整の後ナデ仕上げである。胎土に角閃石・斜長石・赤褐色粒を含み、色調は明黄褐色、焼成はやや不良である。38は口径19.2cmで、口縁は短く、くの字状に外反しながらのび、端部は面をなす。調整は内外面とも粗いハケ調整で、胴部の一部にハケ調整の後ナデ仕上げを行っている。胎土に角閃石・斜長石・赤褐色粒を含み、色調は黄橙色、焼成は良好である。39は甕の胴部で、底部は丸味をおびた平底で底径は7.1cmである。調整は内外面ともハケ調整の後ナデ仕上げである。胎土に角閃石・石英・金雲母・赤褐色粒を含み、色調は橙色、焼成は良好である。40は胴部と底部の接点はないが、同一個体のため図面上で復元した砲弾型の甕で、底部は丸味をおびた平底である。器壁は薄く、口縁は外反しながらのび口径24.9cm、器高40～45cm、底径5.0cmである。胴部下半は被熱のため赤褐色に変色している。調整は内面ハケ調整の後ナデ仕上げで、一部指押さえ痕が残る。外面は胴部下半は横方向のタタキを施し、その後ハケ調整の後ナデ仕上げを行っている。胎土に角閃石・斜長石・赤褐色粒を含み、色調は橙色、焼成は良好である。

41は壺で頸部より上を欠く。胴部は大きく張り、最大径は27.5cmで上方にある。底部は丸味をおびた平底で底径7.2cmである。調整は底部内面周辺がナデ仕上げで指押さえ痕が残る。胴部は内外面ともハケ調整の後ナデ仕上げである。胎土に角閃石・斜長石・赤褐色粒を含み、色調は橙色、焼成は良好である。

42・43は耳皿である。42は楕円形で、底部は丸底である。口縁の一部が欠けているがほぼ完形である。口径は長軸で7.5cm、短軸で6.0cm、器高2.3cmである。口縁は内湾しながら立ち上がり、端部はややとがり気味である。調整は内面ハケ調整の後ナデ仕上げ、外面はヘラケズリの後ナデ仕上げである。胎土に角閃石・赤褐色粒・白色粒を含み、色調は橙色、焼成は良好である。43は平底の耳皿と思われ、口縁部を欠く。調整は内外面ともナデ仕上げで、内面底部にヘラの痕跡が残る。胎土に角閃石・斜長石・白色粒を含み、色調は黄橙色で底部に黒斑、焼成は良好である。

44・45は鉢である。44は丸底でほぼ完形である。口径9.4cm、器高3.1cmで、口縁はわずかに内湾しながら立ち上がり、先端はとがり気味である。内外面ともナデ仕上げである。胎土に角閃石・斜長石・赤褐色粒を含み、色調は黄橙色、焼成は良好である。45は丸底で口径15.6cm、器高5.5cmで、内外面ともナデ仕上げである。胎土に角閃石・斜長石・赤褐色粒を含み、色調は黄橙色、焼成は良好である。

46～49は土師器皿・碗で、口径は47が12.3cm、49が12.7cm、器高は47が3.3cm、49が2.9cmである。内外面ともナデ仕上げで底部は46・47が回転ヘラ切り、48・49が回転糸切りである。色調は黄橙色から黄白色である。

50は黒色土器B類の碗で口縁部を欠くが、口縁はわずかに内湾しながら立ち上がる。高台は坏部形成後の貼り付けで外下方向にのび、端部は面をなす。内面は丁寧なミガキを施す。

3) 小結

夕田遺跡は緊急に調査を行った遺跡である。工事の関係上、調査期間・面積等に制約があり、橋脚建設部分だけの調査であった。また、以前は宅地化されていたため建物の基礎による攪乱も激しく、残りはあまり良くなかった。

当調査区は花月川が造り出した河岸段丘の北端に位置し、北と東は佐寺原台地から派生する尾根の斜面、西は花月川に挟まれ、南方向へ細長く展開する段丘となっている。この段丘東側斜面は夕田横穴墓群が連なる。このため、当初、当地は横穴墓群に関連する何らかの施設の存在を考え調査を開始したが、横穴墓群に関連する遺構・遺物は確認されなかった。

今回の調査で検出した遺構は、土坑・掘立柱建物跡・包含層・旧花月川の東岸等であった。

掘立柱建物跡は2棟検出したが、出土遺物もなく時期不明である。

土坑は2基検出された。出土遺物は弥生時代後期後半～古墳時代初頭の所謂古式土師器が中心である。土坑の年代は1号土坑が古墳時代初頭で、2号土坑は1号土坑とほぼ同時期かやや新しい時期が与えられる。

包含層は調査区の南西と南東で検出された。層厚はさほど厚くないが、まとまった量の遺物が出土した。上層からは一部11世紀前後の土器が出土したが、遺物のほとんどが1・2号土坑と同様、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器であり、土坑とほぼ同時期であった。この包含層は2号土坑を覆って検出されている。このことから当地区は、土坑の使用時期以後は11世紀前後まで使用されなかったと考える。

旧花月川の東岸は、報告書では落込み遺構としている遺構で、岸の一部が検出された。調査区の西隅で確認されたため明確ではないが、溝として考えた場合、西側縁や下縁は確認できるはずであるが、今回の調査では確認できなかった。このことから旧花月川の東岸と考える。花月川西岸段丘上には日田条里遺跡群が展開するが、この地区は花月川・有田川の氾濫原にあたり、堆積土中に礫を多量に含み、遺跡の残りも非常に悪い。しかし、夕田遺跡の立地する東岸段丘は氾濫をほとんど受けておらず、近世・近代の住居等の攪乱以外堆積土の残りは非常に良好であり、このため遺跡の残りも当然良いと思われる。

次に夕田遺跡出土の土器であるが、形態・時期的にも当遺跡から西へ2km程離れている小迫辻原遺跡出土の土器と類似しており、当時代の土器の分布や形態、人の移動等を考えるうえで貴重な遺跡といえるだろう。

夕田遺跡は現在、新興住宅地となり住宅建設が進んでいるが、今回の調査が最初であり、わずか500m²の調査面積で、弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土坑の確認や遺物の出土をみた。今回は土坑を除く住居跡等の生活関連遺構の検出はなかったが、当調査区の南側では住居跡等検出の可能性は高い。今後注意を要する重要な地域である。

2. 夕田横穴墓群

1) 遺跡の概要

夕田横穴墓群は日田市大字西有田字夕田に所在する。夕田横穴墓群の立地する丘陵は阿蘇溶結凝灰岩によって形成された標高150m前後の台地である。この台地からは幾筋もの尾根状にのびた低丘陵が派生している。台地平坦部は佐寺原遺跡が、北側斜面には佐寺横穴墓群、東側斜面には水目横穴群、西側には夕田古墳群や夕田横穴墓群が所在する。横穴墓は花月川を望む斜面上の標高105～130mの間で50数基を確認、このうち工事の支障となる路線内の横穴墓43基の調査を行った。

夕田横穴墓群の位置する地形は、西方向に尾根状に突出した低丘陵が続いている。調査地区は最北端の低丘陵であり、この西から南側へ奥まっっていく斜面を中心に構築されている。調査区南側の低丘陵北側斜面にも調査を行った横穴墓と対峙する様に数基の横穴墓が開口している。

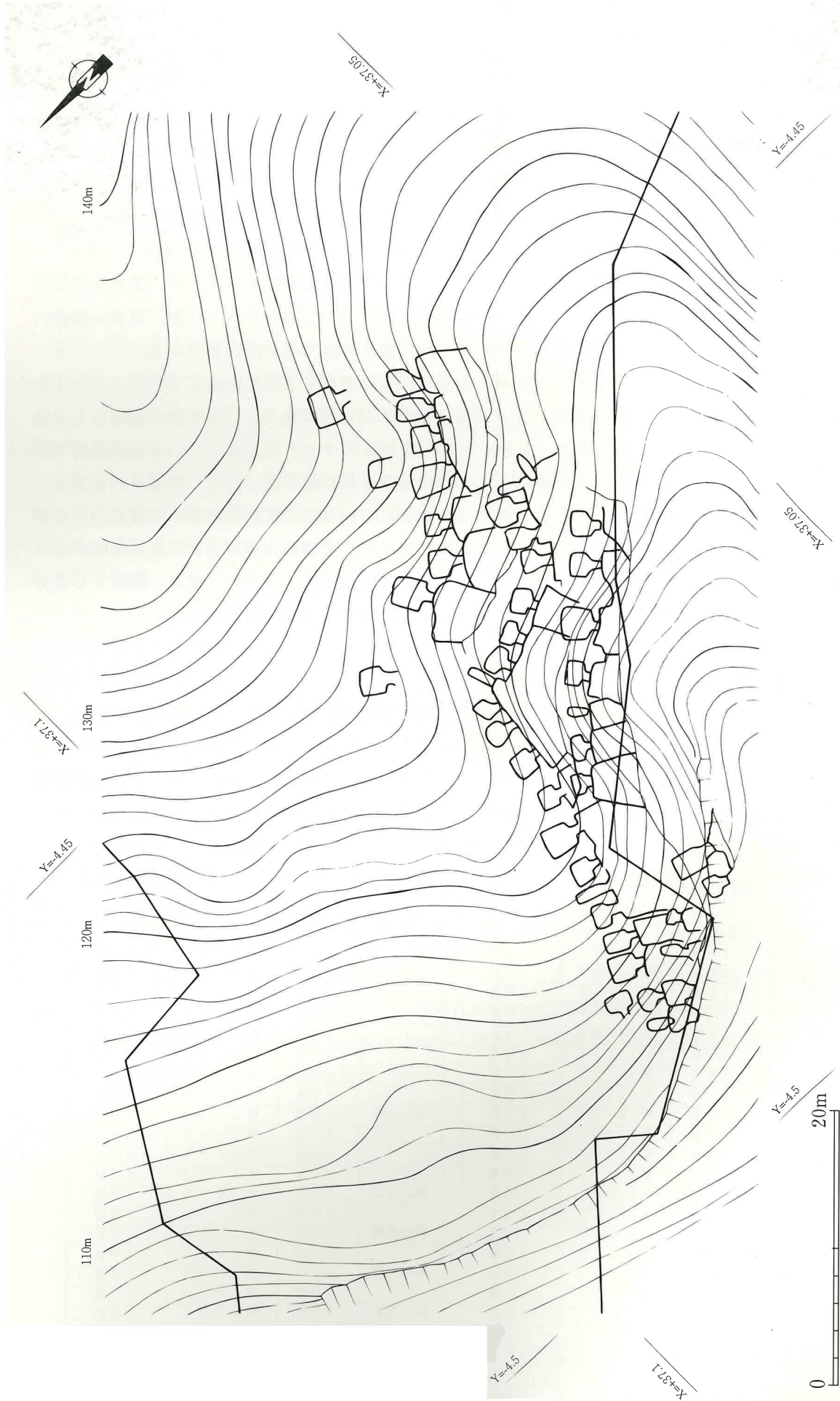
横穴墓は斜面に沿って1～7基を1グループとして、それぞれの支群を構成している。この支群は比高差25m前後の間に十数群確認された。支群の構成には2種類あり、1基単独で墓域をもち独立している支群と、数基が一群をなし、長さ1～3m、幅数mのテラスを共有している家族墓的な性格の支群に大別される。単独で墓域を構成している横穴墓は低丘陵の稜に沿って構築されており、出土遺物からみて初現期の横穴墓である。前庭部を共有している横穴墓群は斜面の中腹を削って平坦面を造りだして墓域を構成している。これらの横穴墓は出土遺物からみて7世紀代の構築がほとんどで、当横穴墓群においては6世紀代の横穴墓はほとんど見受けられない。なお、隣接する佐寺横穴墓群は同時期に6基の調査を行い、構築時期は6世紀後半代の横穴墓であった。

2) 横穴墓番号の変更

夕田横穴墓群の調査は地形の構造上斜面中腹の平坦地から調査を行った。その時点で支群毎・調査順毎に第1テラス・第2テラスとし、横穴墓番号も1号・2号とした。その後、頂上部からも調査の手を広げたため、上から順に第11テラス・第12テラスとした。このため、ランダムな遺構番号となっていた。今回報告にあたり横穴墓群の支群構成・全体像を掴めたため、上位東方向から支群番号・横穴墓番号をつけた。旧横穴墓番号との対照は表1のとおりである。

表1 新・旧横穴墓番号対照表

新横穴墓番号		旧横穴墓番号		新横穴墓番号		旧横穴墓番号	
第1支群	1号墓	第11テラス	2号墓	第9支群	1号墓	第11テラス	1号墓
第2支群	1号墓	第11テラス	1号墓	第10支群	1号墓	第6テラス	7号墓
第3支群	1号墓	第12テラス	1号墓			第6テラス	6号墓
第4支群	1号墓	第3テラス	3号墓		3号墓	第6テラス	5号墓
第5支群	1号墓	第13テラス	7号墓		4号墓	第6テラス	4号墓
	2号墓	第13テラス	6号墓		5号墓	第6テラス	3号墓
	3号墓	第13テラス	5号墓		6号墓	第6テラス	2号墓
	4号墓	第13テラス	4号墓		7号墓	第6テラス	1号墓
	5号墓	第13テラス	3号墓	第11支群	1号墓	第2テラス	1号墓
	6号墓	第13テラス	2号墓		2号墓	第2テラス	2号墓
	7号墓	第13テラス	1号墓		3号墓	第2テラス	3号墓
第6支群	1号墓	第5テラス	6号墓		4号墓	第2テラス	4号墓
	2号墓	第5テラス	5号墓	第12支群	1号墓	第3テラス	1号墓
	3号墓	第5テラス	4号墓		2号墓	第3テラス	2号墓
	4号墓	第5テラス	3号墓	第13支群	1号墓	第4テラス	1号墓
	5号墓	第5テラス	2号墓		2号墓	第4テラス	2号墓
第7支群	1号墓	第5テラス	1号墓	第14支群	1号墓	第7テラス	1号墓
第8支群	1号墓	第1テラス	7号墓		2号墓	第7テラス	2号墓
	2号墓	第1テラス	6号墓	第15支群	1号墓	第8テラス	2号墓
	3号墓	第1テラス	5号墓		2号墓	第8テラス	1号墓
	4号墓	第1テラス	4号墓				
	5号墓	第1テラス	3号墓				
	6号墓	第1テラス	2号墓				



第 19 图 夕田横穴墓群周辺地形図 (1 / 400)



第20図 夕田横穴墓群遺構配置図及び立面図 (1/200)

3) 調査の成果

第1支群

第1支群は1基の横穴墓からなる。調査区内で最も北東にあたり、夕田古墳群の立地する平坦部の南側斜面落ち際に位置する。夕田古墳は約5m程北に位置する。

第1支群1号墓

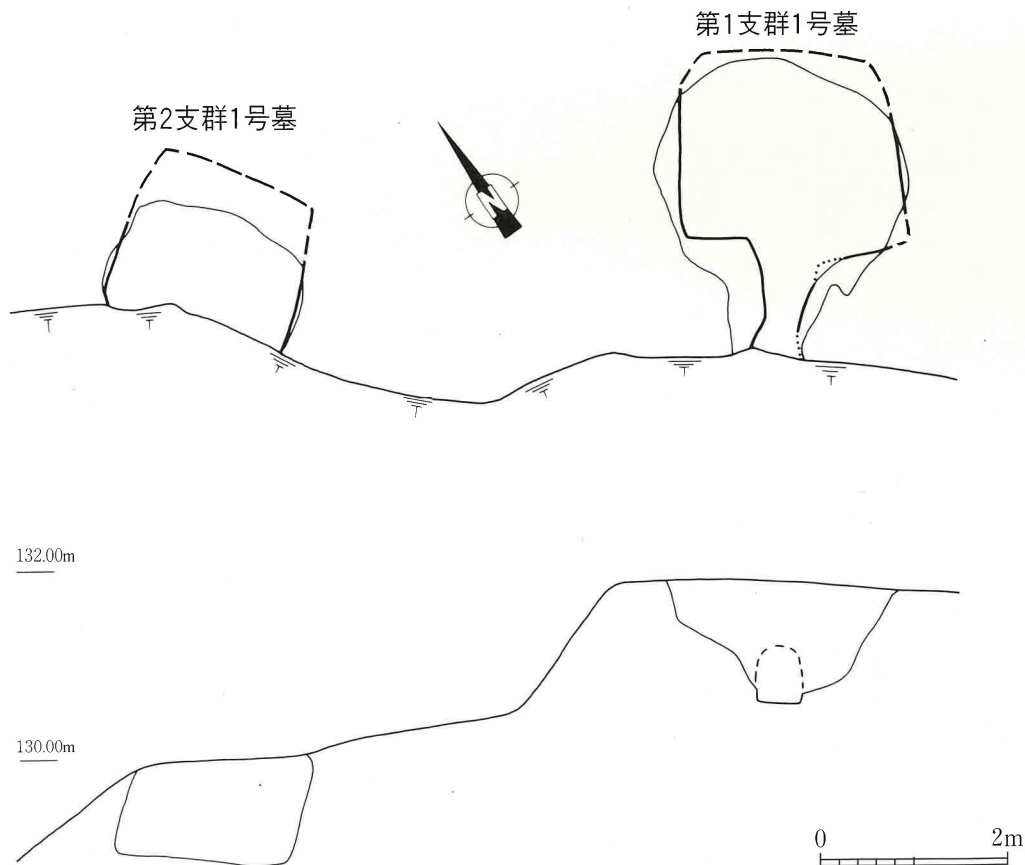
概要

1号墓は横穴墓群中最上部に位置し、南方向に開口する。羨道の一部と前庭部・天井部分は斜面崩落陥没のため現存しない。標高は玄室床面で130.5m、玄室主軸方位はN-32°-Eをさす。本横穴墓の存在は調査以前は確認できなかったが、立木伐開中、斜面中腹で閉塞石が落下した状況で出土したため、上方に横穴墓の存在を推定した。このため上方平坦地にトレンチ数本を設定し、掘り下げを行った。この結果、地山（凝灰岩）の検出されなかったトレンチをさらに掘り下げたところ、赤色顔料の塗布された崩落壁の一部が出土した。その後、このトレンチから横穴墓の床面を検出した。これが当横穴墓の発見の契機である。また、この発見が契機となって、第2支群1号墓・第3支群1号墓の斜面稜部に沿って構築されている横穴墓の検出があった。当横穴墓の保存状態は崩落・落盤等がみられ、あまり良くなかった。調査は玄室・羨道部の崩落土除去作業を行い、副葬品・床面・壁面の検出を行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部・羨門部ともに崩落のため不明。閉塞石は存在したが下方に落下。石材は凝灰岩である。



第21図 第1・2支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

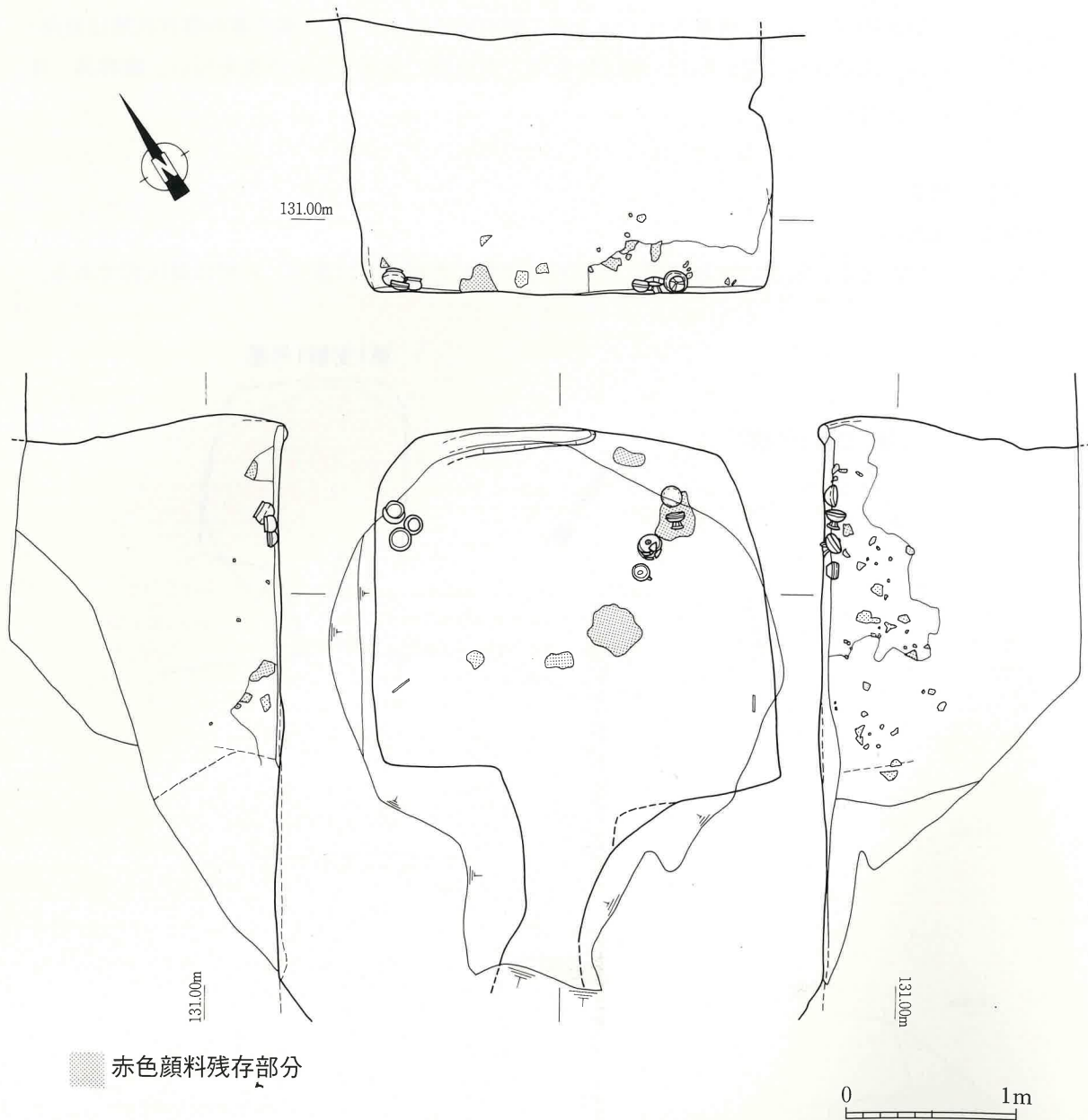
羨道・玄室

羨道の一部は崩落のため全体は不明であるが、長さ $0.90 + \alpha$ m、幅 0.70m、玄門幅 70cm、高さは不明で、やや左肩寄りに掘り込まれている。

玄室は陥没のため高さ・天井形態は不明である。長さ 2.07m、幅は裾部 2.35m、中央 2.31m、奥壁 1.81m で、平面形態は平入りの不整形を呈す。奥壁沿いの床面には幅 10cm、長さ 80cm、深さ 5cm 前後の排水溝と思われる溝の一部が検出された。床面は平坦で敷石等の施設は持たないが、床面及び壁面の一部に赤色顔料が残存していることから、玄室内は全面に赤色顔料を塗布していたと思われる。左右両側壁は床面から 50cm 付近まで部分的に壁面が残っており、ほぼ垂直に立ち上がる。奥壁は床面から 50cm 付近まで部分的に壁面が残っており、内傾しながら立ち上がる。

遺物の出土状況（第 23 図）

前庭部は消滅しているため、遺物はすべて玄室内の出土であるが、古式須恵器の流れをくむ有蓋

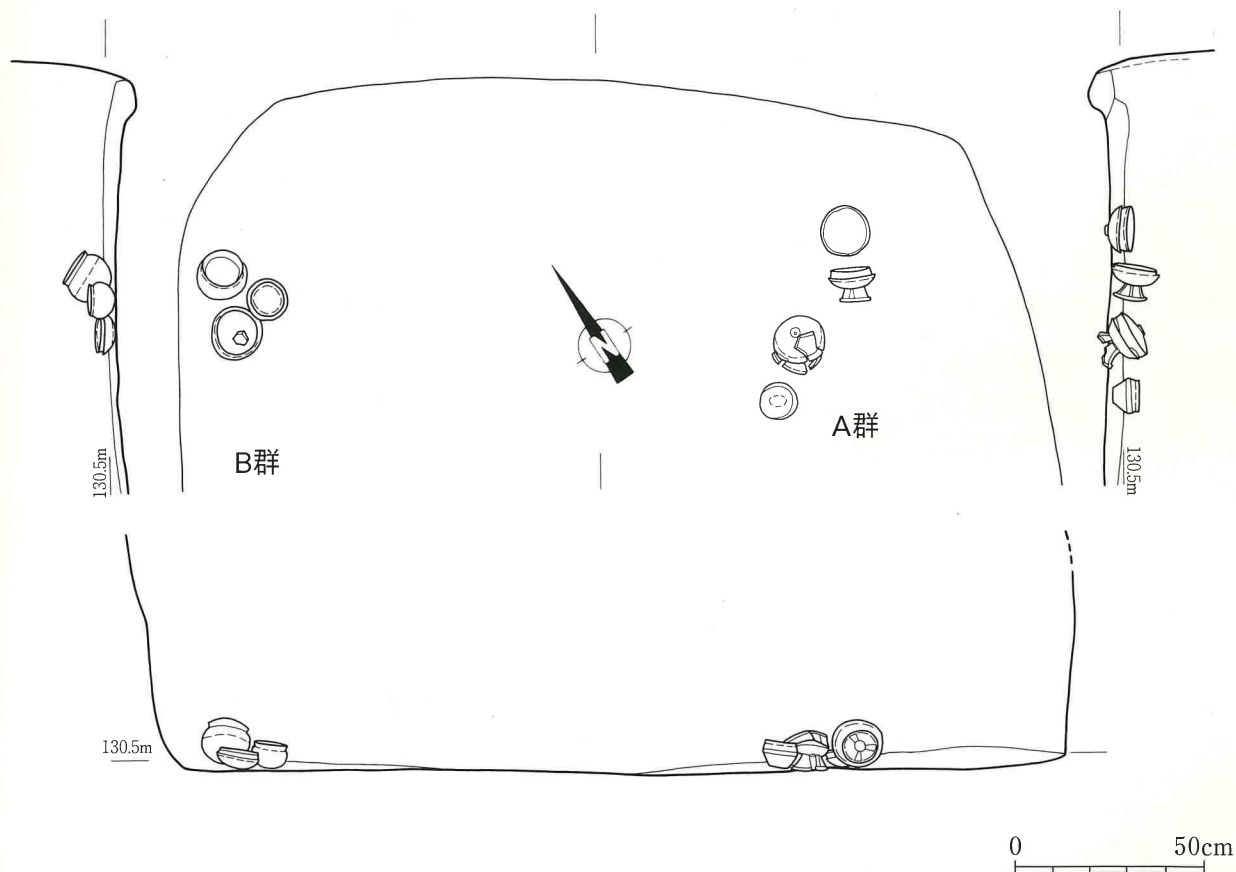


第 22 図 第 1 支群 1 号墓実測図 (1/40)

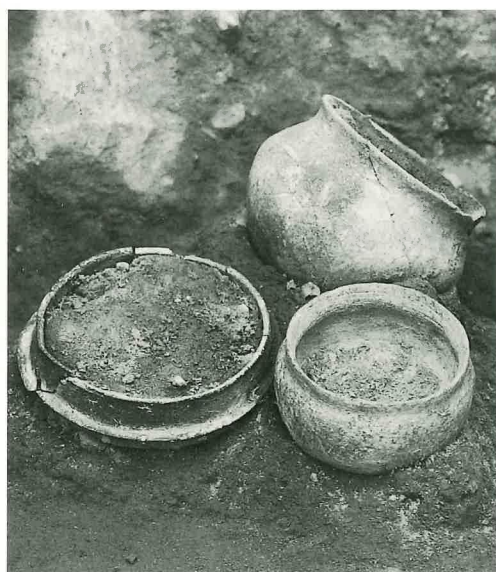
高坏や碗がセットで出土している。

a) 埋葬人骨 人骨は出土しなかったが、奥壁やや右寄りから成人の歯が数個出土した。

b) 副葬品 (第24図) 玄室中央やや右上付近で有蓋高坏2・把手付碗1の一群 (A群) と、玄室奥壁左コーナー付近から土師器埴2・須恵器坏身の一群 (B群) が出土した。坏身の中にはハマグリと思われる貝を供献していた。左側壁裾付近では蕨手刀子2本が重なって、右側壁裾付近では刀子1本が出土した。また、調査中の埋土内から径5.5cmの完形素文鏡が出土した。前庭部が存在しないため、土層による追葬等の痕跡は追えないが、2群の土器にわずかな時期差が認められることから、あるいは追葬が行われた可能性をもつ。



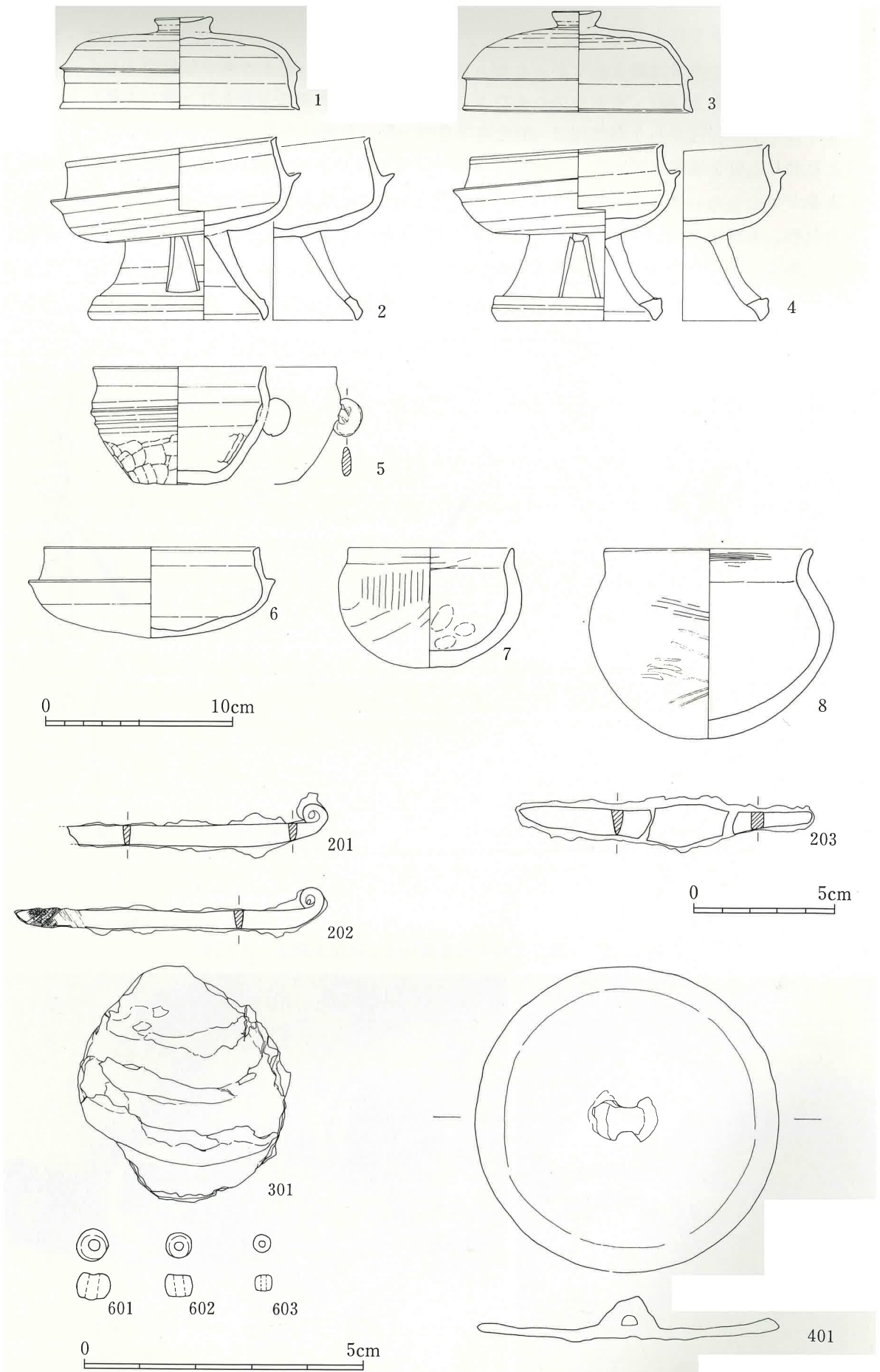
第23図 第1支群1号墓遺物出土状況実測図 (1/20)



B群遺物出土状況



A群遺物出土状況



第24图 第1支群1号墓出土遺物実測図 (1/3·1/2·実大)

表2 第1支群1号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径(受部)径 底器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
1	高坏蓋	12.9 - 5.5	天井部中央に中央の窪んだつまみを有する。天井部と口縁部の境に稜が見られる。口縁は外反し、端部は細く、面を成している。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	黒灰褐色	長石粒微量 白色細粒若干	良好		2とセット 重ね焼痕有
2	高坏	11.3 9.3 9.9	坏部底は比較的丸く、受部は上方向にのびる。口縁部は直線的にのび、端部は面を成している。脚部は八の字形に緩やかに外反する。脚体部には三方の長方形スキャン窓が見られる。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ・ナデ	黒灰褐色	長石粒微量 白色細粒若干	良好		1とセット
3	高坏蓋	12.4 - 5.7	天井部中央に中央の窪んだつまみを有する。天井部と口縁部の境に稜が見られる。口縁は外反し、端部は細く、面を成している。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・ナデ	黒灰褐色	長石粒・細砂若干	良好		4とセット 重ね焼痕有
4	高坏	10.3 8.5 9.6	坏部底は比較的丸みを持ち、受部は上方向にのびる。口縁部は直線的にのび、端部は面を成している。脚部は八の字形に緩やかに外反する。脚体部には三方の長方形スキャン窓が見られる。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ・ナデ	暗灰褐色	白色細粒・長石粒若干	良好		3とセット
5	把手付碗	9.3 5.0 6.3	底部は平らでやや丸い。体部は内傾し立ち上がり口縁部は外反する。端部はやや尖り気味である。口縁と体部との間に2条の稜線を有する。体部に扁平な把手を貼り付けている。	指頭による整形後ナデ 横ナデ	横ナデ・左横方向手持ちヘラ削り ヘラ切り後ナデ	黒灰色	白色細粒若干・長石粒微量	良好		
6	坏身	11.5 13.1 4.9	底部は丸みを持ち、立ち上がりはわずかながら内傾している。端部は内傾する明瞭な段を有する。受部は短く横方向へのびる。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り	灰色	石英粒(2~3mm)多量・白色粒有	良好		ベンガラ?が付いている
7	埴	8.7 - 6.4	底部は丸みを持ち、体部は内傾しながら立ち上がり、上部に胴部最大径を持つ。口縁は短く外反する。端部はやや尖り気味である。	ナデ(一部ハケ目・指押さえ)	ナデ・ハケ目後ナデ・ナデ一部指押さえ	赤褐色(黒斑有)	角閃石粒多量・長石粒有	良好		土師器
8	埴	11.2 - 10.1	底部は丸みを持ち、体部は内傾しながら立ち上がり、中央付近で胴部最大径を持つ。口縁は短く外反し、端部は丸い。	横方向削りナデ・ハケ目	横ナデ・ナデ(一部ハケ目) ナデ(一部タキ?)	橙色	角閃石粒多量・白色細粒若干	良好		土師器

表3 第1支群1号墓出土鉄器計測表

(単位: cm)

番号	器種	全長	頭部長	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
201	蕨手刀子	9.4以上	8.1以上	0.7	0.45	0.25	0.35	
202	蕨手刀子	11.2	9.6	0.65	0.45	0.3	0.4	木綿巻残存
203	刀子	10.5	5.7	1.35	0.9	0.5	0.55	

表4 第1支群1号墓出土玉類計測表

番号	種類	材質	色調	長径(mm)	短径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
601	小玉	ガラス	暗いマリンプルー	5.5	4.8	1.8	0.1	
602	〃	ガラス	藍色	4.5	3.8	1.5	0.1未満	
603	〃	ガラス	藍色	3.2	3.0	1.1	〃	気泡有り

第2支群

第2支群は1基の横穴墓からなる。第1支群と同様、丘陵平坦部の南側斜面落ち際に位置し、第1支群から西方向に4m程離れている。

第2支群1号墓

概要

1号墓は南西方向に開口していたと考える横穴墓である。斜面の崩落により、ほとんど原形を留めていない。玄室の2/3が残るだけである。標高は玄室床面で129.0m、玄室主軸方位はN-53°-Eをさす。本横穴墓の存在は調査以前は確認できなかったが、表土層除去作業中に地山の軟弱な部分を確認されたため、掘り下げを続行した結果、本横穴墓の玄室部分検出となった。当横穴は崩落・落盤のため保存状態は悪かった。

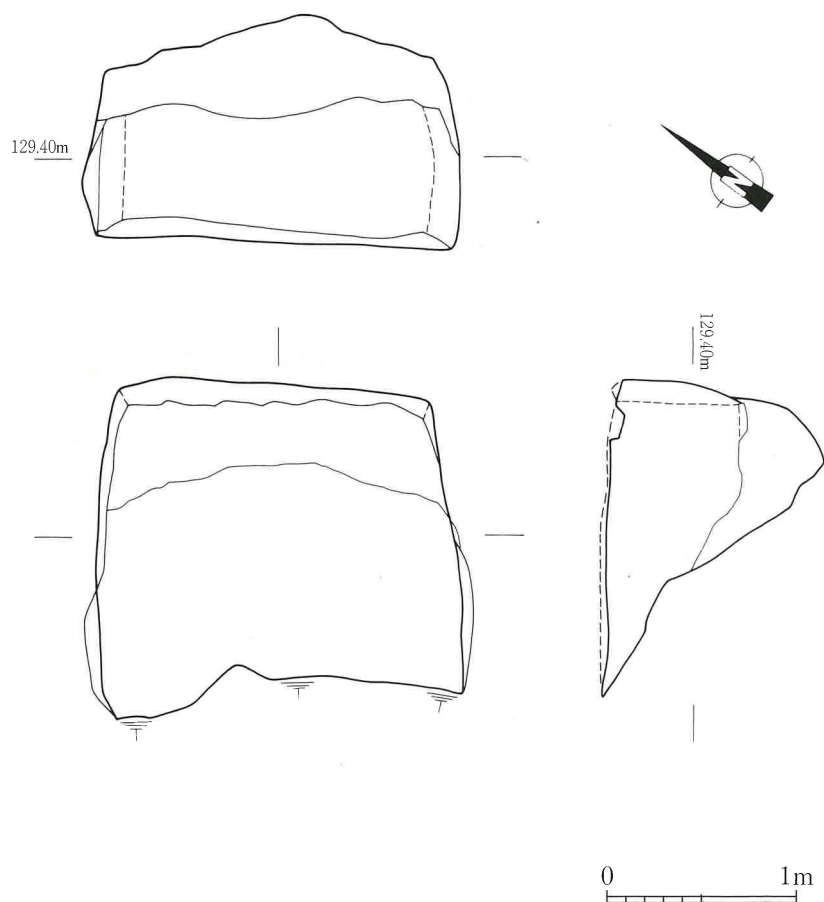
規模、構造

前庭部・羨門部

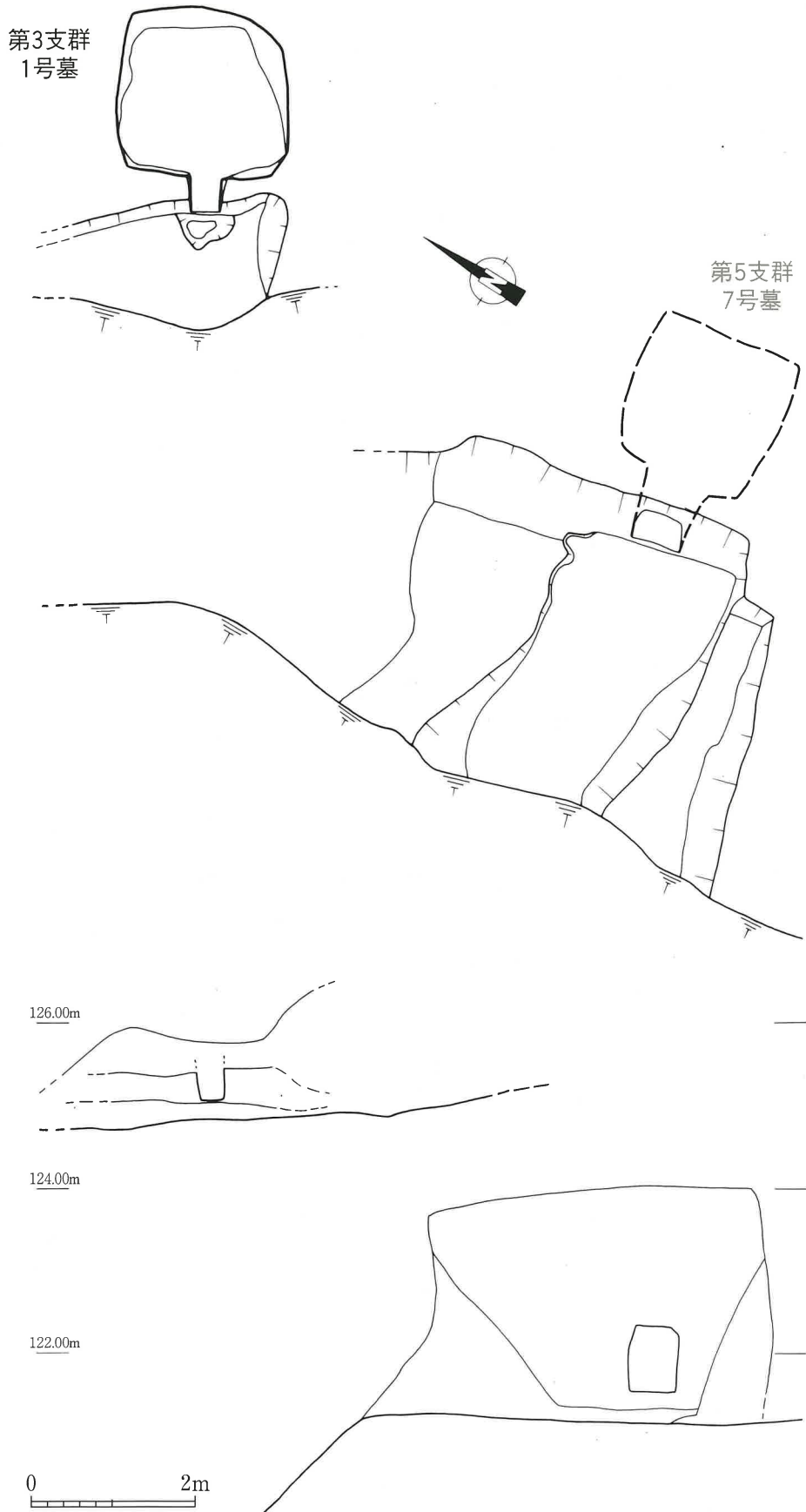
前庭部・羨門部ともに崩落のため現存しない。

羨道・玄室

羨道は崩落のため現存しない。玄室は崩落のため全体の2/3の残存で、天井部は陥没している。このため高さ・天井形態は不明である。玄室の長さは1.55 + α m、幅は中央1.92m、奥壁1.65mで、平面形態は胴張り方形と思われる。床面は平坦で敷石等の施設は持たないが、床面及び壁面の一部に赤色顔料が残存していることから、1支群1号墓と同様、玄室内は全面に赤色顔料を塗布していたと思われる。奥壁・左右側壁とも内傾しながら立ち上がる。



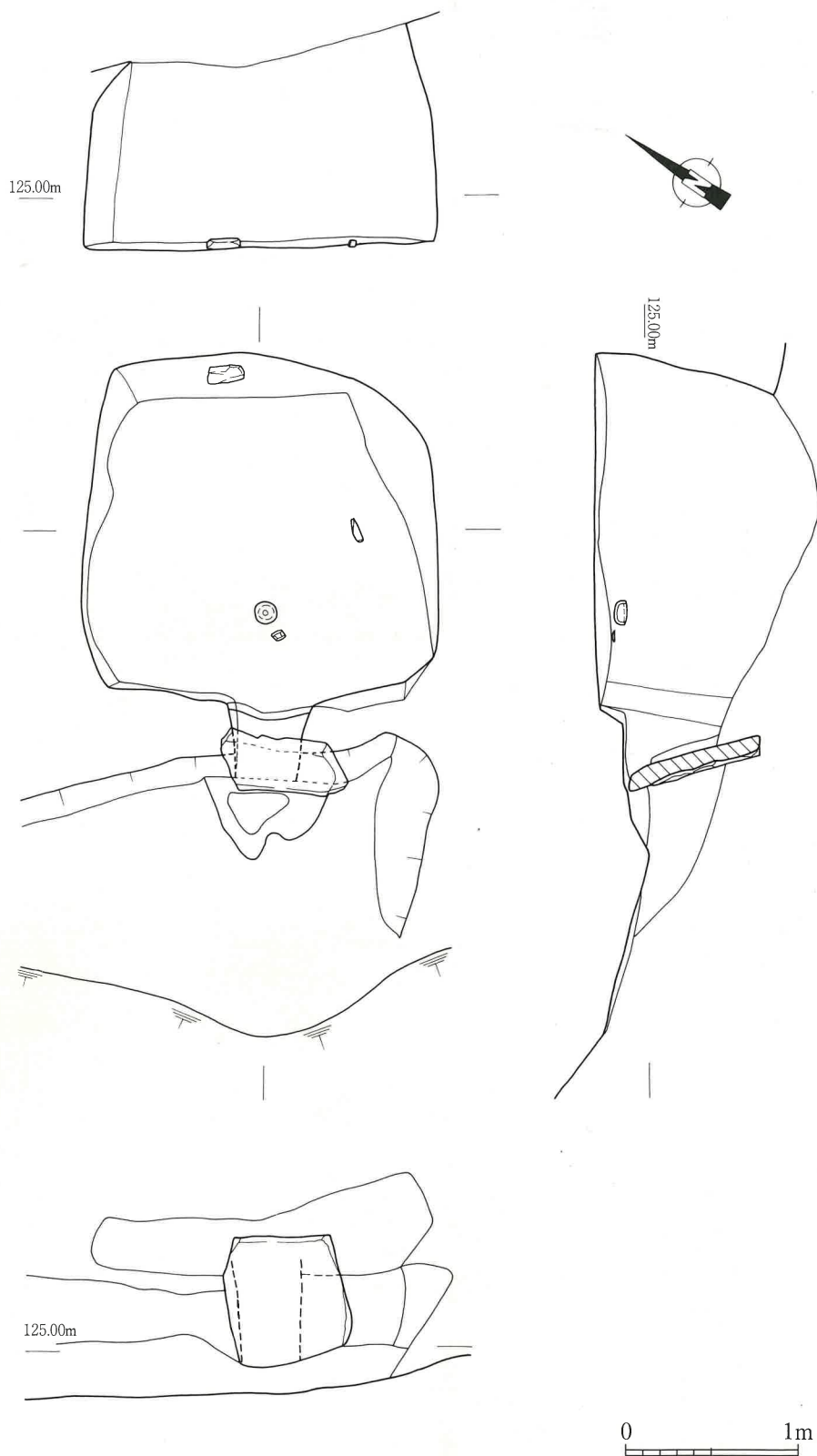
第25図 第2支群1号墓実測図 (1/40)



第 26 図 第 3 支群遺構配置図及び立面図 (1 / 80)

第3支群

第3支群は1基の横穴墓からなる。第1・2支群と同様、丘陵平坦部の南側斜面付近、第2支群から13m程西に位置する。当支群周辺は他の支群に比べ緩斜面が多く、横穴墓の形成には適していると思われたため、複数の横穴墓の存在を考え緻密な確認調査を行ったが、1号墓以外には検出できなかった。



第27図 第3支群1号墓実測図 (1/40)

第3支群1号墓

概要

1号墓は緩斜面平坦地の南側に位置し、南西方向に開口する。羨道から玄室にかけての天井部は陥没のため現存しないが、他は比較的残りは良い。標高は玄室床面で124.7m、全長2.87m、玄室主軸方位はN-56°-Eをさす。本横穴墓の存在は調査以前は確認できなかったが、遺構検出作業中に閉塞石上部を検出したことが、発見の契機となった。その後前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞部、玄室内の調査等を行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は、左壁が斜面傾斜のため削平を受けており、幅は不明である。長さは斜面落ち際までで1.49mである。閉塞石前面に深さ15cm前後の掘り込みがみられる。

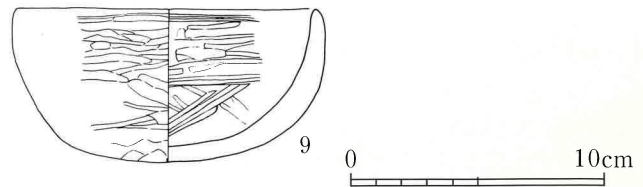
羨門部は前庭部とは約5cmの段差をもち、一段低く構築されている。天井部と壁は崩落のため高さは不明、幅は床面で0.34mである。閉塞施設は高さ80cm、幅50cm、厚さ10cm前後の凝灰岩1枚石を使用し、約70°の傾斜で羨門を塞いでいる。

前庭部埋土は1層だけであり、二次堆積土であった。このため追葬等の祭祀行為は確認できなかった。

羨道・玄室

羨道は長さ0.32m、玄門幅0.49mではほぼ平坦である。玄室と約15cmの段差をもち、1段高い。

玄室は長さ2.06m、幅2.06mの不整形を呈す。床面は平坦で敷石等の施設は持たないが、床面及び壁面に赤色顔料が残存していることから、玄室内は全面に赤色顔料を塗布していたと思われる。奥壁寄り中央付近では枕石と考えられる河原石1個が検出された。周壁は上部が崩落しているが、奥壁・左右側壁ともやや内傾しながら立ち上がる。

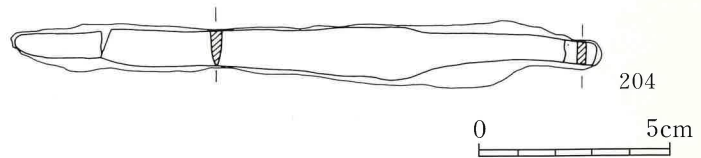


遺物の出土状況

遺物は副葬品が玄室内から出土した。

副葬品 (第28図)

玄室中央やや玄門寄りから土師器碗が1点、玄室中央右寄りから刀子1点が出土した。



第28図 第3支群1号墓出土遺物実測図 (1/3・1/2)

表5 第3支群1号墓出土土器観察表

番号	器種	法口器 量径高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
9	碗	12.0 6.0	底部は丸みを持ち、体部は内傾しながら立ち上がる。端部はやや尖り気味である。	ミガキ	ミガキ	暗赤褐色	角閃石粒・長石粒量・白色細粒有 赤色粒若干	良好		土師器

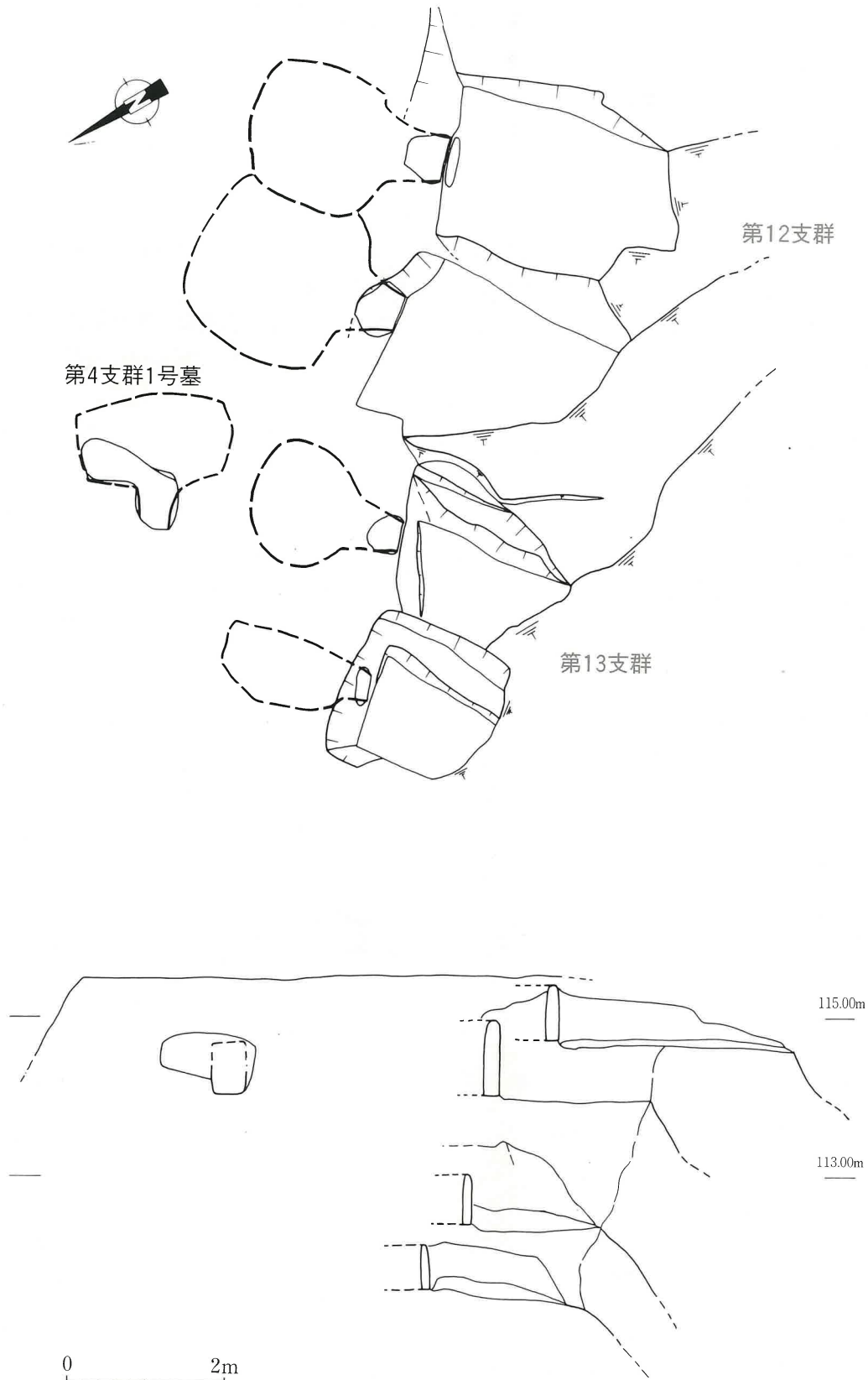
表6 第3支群1号墓出土鉄器計測表

(単位:cm)

番号	器種	全長	頭部長	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
204	刀子	15.6	10.1	0.9	0.6	0.3	0.25	木質残存

第4支群

第4支群は調査区の西端に位置し、1基の横穴墓からなる。第1～3群とは距離をおき、標高差もあるが、やはり斜面の稜線沿いに展開している一支群である。



第29図 第4支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

第4支群1号墓

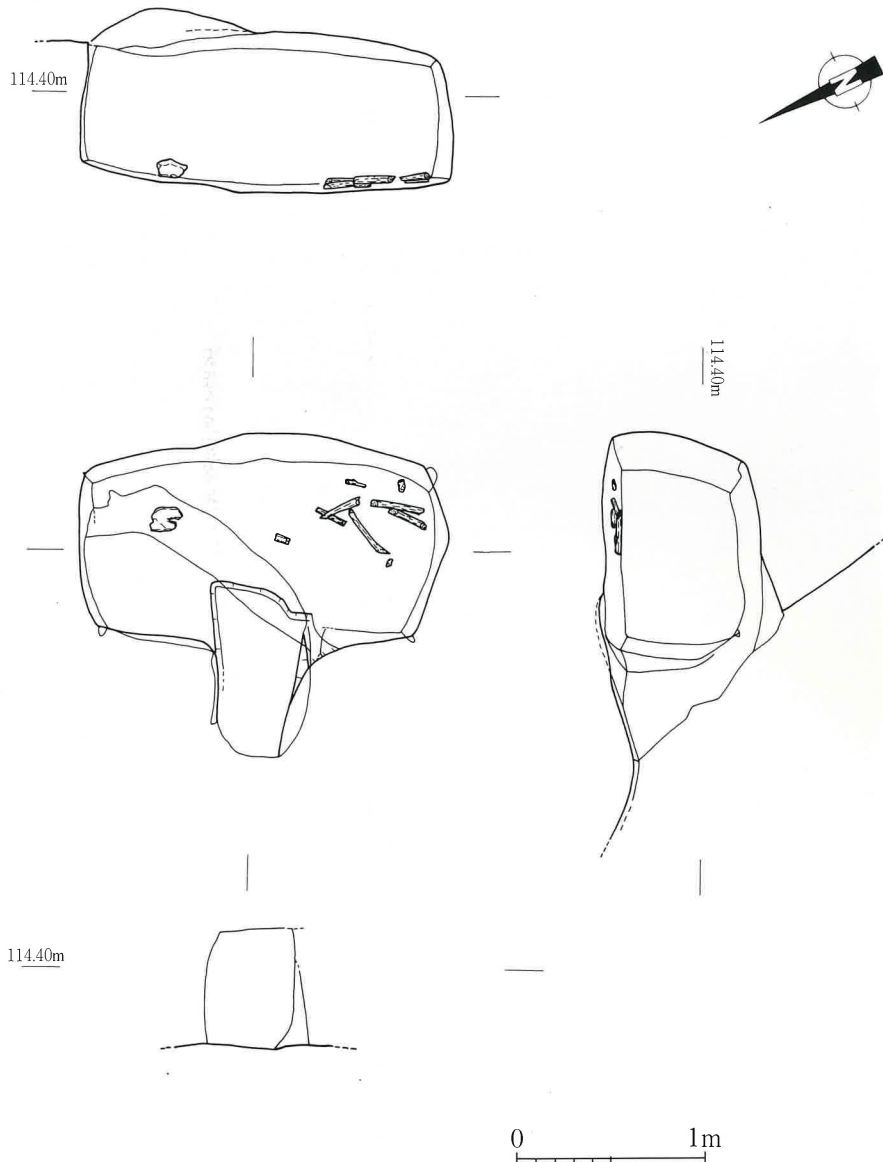
概要

1号墓は西方向に傾斜する斜面に構築され、北西方向に開口する横穴墓である。低丘陵斜面先端部に位置するためか、他の横穴墓とは主軸方向の違いがみられる。玄室の一部から羨道部にかけての天井は崩落のため現存しないが、玄室の残りは比較的良い横穴墓である。羨門から前庭部にかけては斜面崩落のため確認できなかった。標高は玄室床面で113.9m、玄室主軸方位はE-26°-Sをさす。本横穴墓の存在は調査以前は確認できなかったが、遺構検出作業中に羨道天井部の崩落部分を検出したことが、発見の契機となった。その後前庭・閉塞部の確認、埋土の検討、羨道部・玄室内の調査を行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部・羨門部ともに崩落のため現存しない。



第30図 第4支群1号墓実測図 (1/40)

羨道・玄室

羨道の一部は崩落のため不明であるが、現存での長さは0.58m、幅0.4mである。床面は約17°の傾斜で玄室に向かって下降する特徴をもつ。天井部は崩落のため高さ等不明である。玄門は幅0.49mで、高さは不明である。

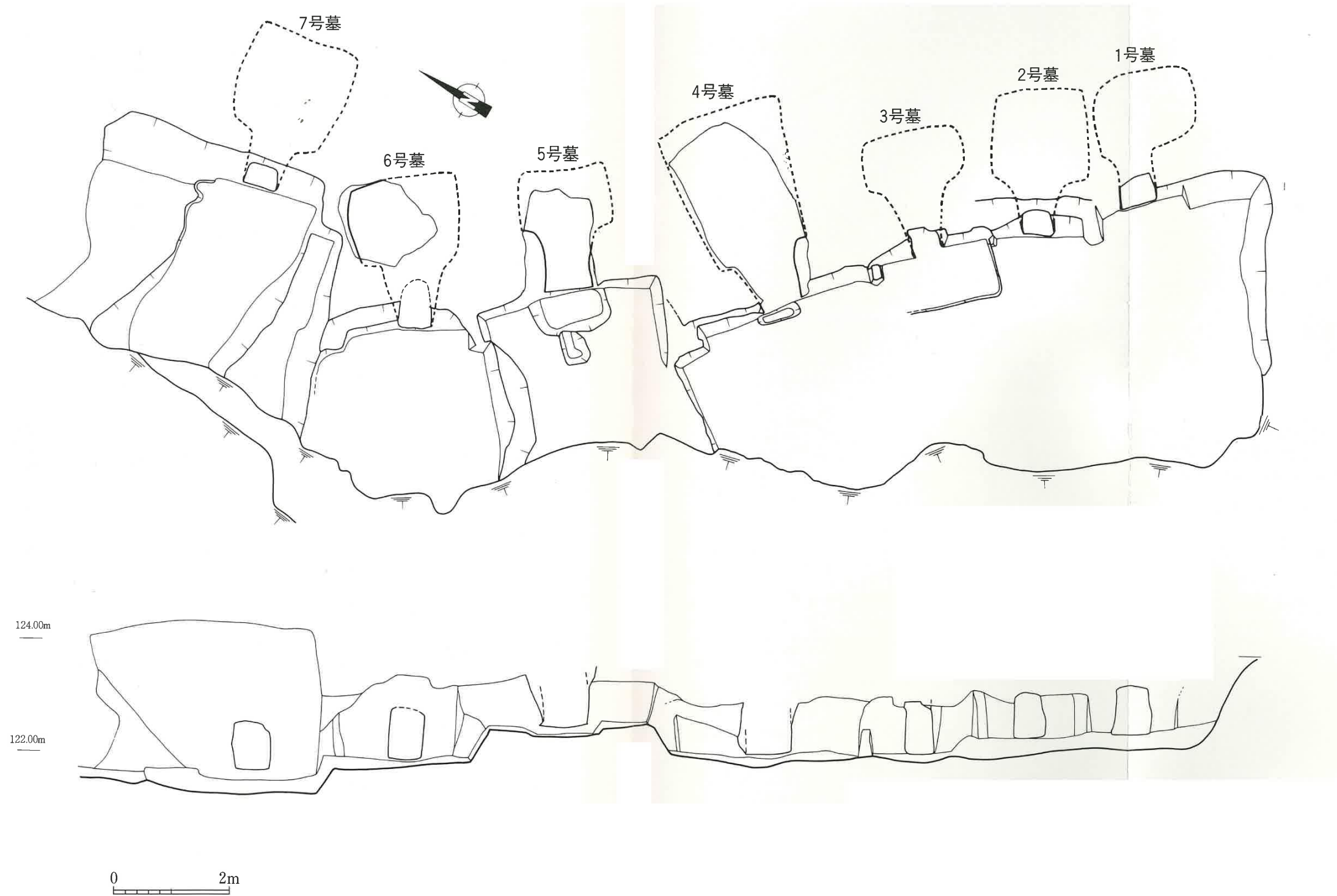
玄室は平入り胴張り長方形を呈し、長さ1.14m、幅1.95m、高さ0.83mである。床面は左側壁付近が僅かに高いもののほぼ平坦であり、敷石等の施設はみられないが、頭位を北東にとる人骨が出土した。天井形態は平天井で、壁には床面から0.6m前後の位置に四周に稜線を巡らせて、「軒」の部分表現している。また4ヶ所の壁コーナー及び玄門からは「軒」に向かって稜線がのびている。奥壁・左右側壁とも緩やかに内傾しながら天井へと立ち上がる。玄室内は全面に赤色顔料を塗布している。羨道・玄室に堆積している埋土は天井部の崩落土或いは二次堆積土であり、追葬等を確認できる埋土ではなかった。

遺物の出土状況

埋葬人骨 天井部の一部が陥没しており土砂の流入等がみられたが、残りは比較的良好で、ほぼ1体分の人骨が出土した。中央左側壁寄りから頭骨が、右側壁付近から大腿骨等が出土している。



人骨出土状況



第 31 図 第 5 支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

第5支群

第5支群は東方向に位置し、7基の横穴墓で構成されている。上段に第1～3支群が位置し、第1支群とは比高差約8mである。当支群は南西向き斜面を東西約20m、南北3～5m範囲に削り出し、テラス状の平地を造り出している。標高は前庭部床で121.5～122.5mである。1～4号墓は前庭部を共有しており、5～7号墓は隣接する横穴墓とは前庭部で数10cmの段差を有し、ほぼ独立した前庭部をもつ。当支群の存在は調査以前は確認できなかったが、6～7号墓付近になだらかな傾斜面がみられたため、上方からの掘り下げを行った。この結果、斜面の人為的な削平が認められ、南方へ遺構検出作業を進めた結果、都合7基の横穴墓の検出となった。

第5支群1号墓

概要

1号墓は第5支群の南東端に位置し、南西方向に開口する。二次堆積土で覆われていたため保存状態は非常に良好である。標高は羨門付近で122.6m、玄室主軸方向はN-44°-Eをさす。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、玄室内の構造確認等を行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は東西約10m、南北3～4.5mの不整長方形を呈した範囲を4基の横穴墓が共有しているが、羨門部付近は地山を削り出して造り出しを設け、独自の領域をもっている。前庭部は長さ4.66m、造り出し部分の長さ0.35m、幅1.44mである。床面はほぼ平坦で羨道部に向かって約3～4°の傾斜で緩く下降している。右側壁の傾斜は約108°である。

羨門部は天井部が一部崩落しているが、比較的保存状態は良い。前庭部と羨門部の境に5cm程の段差をもち、羨門部が1段高い。幅0.69m、高さ0.83mで、側壁の傾斜は70°前後である。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ1.04m、幅0.73m、厚さ0.15m、傾斜角約75°で羨門部を塞いでいる。

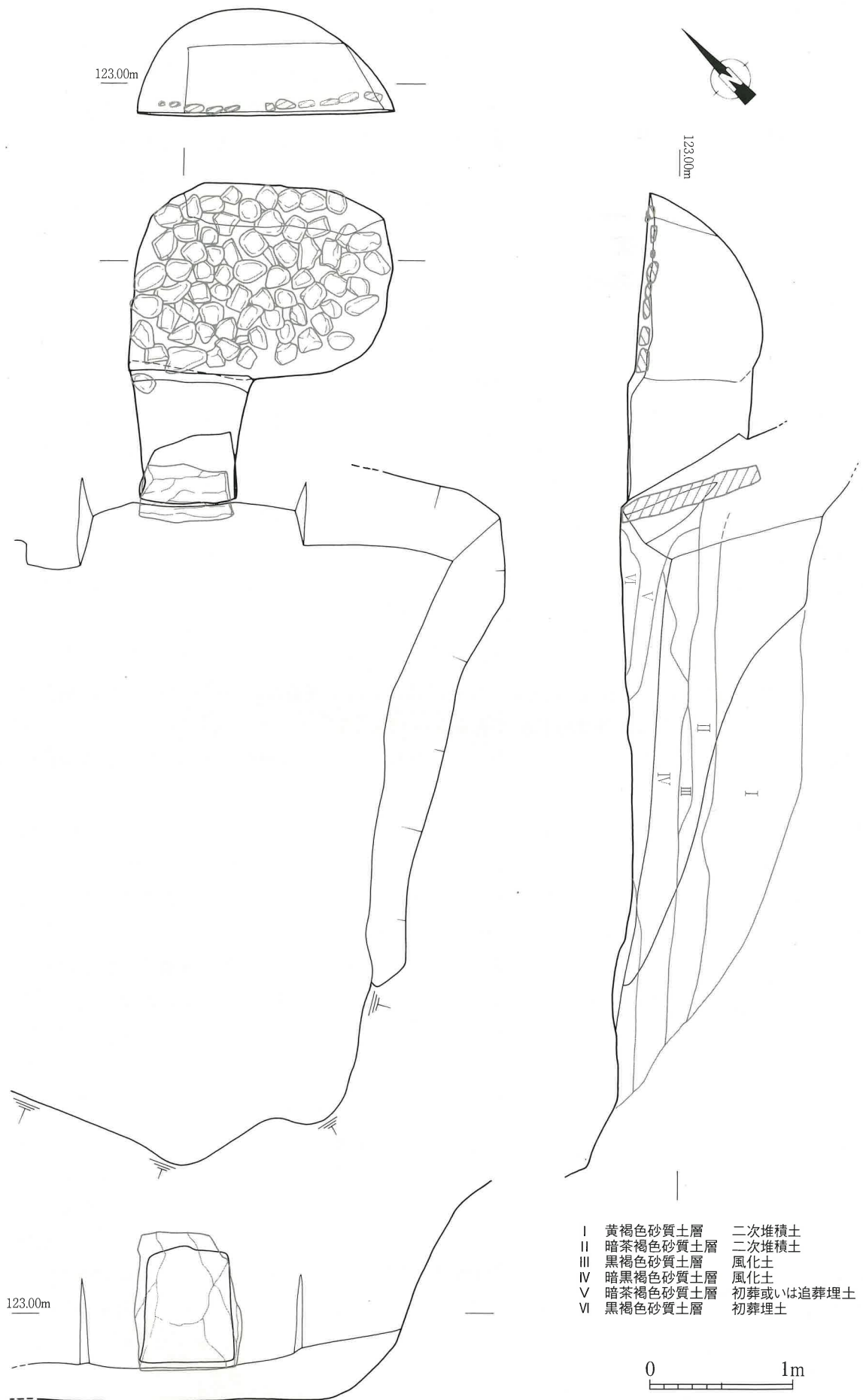
前庭部内の埋土は6層確認された。Ⅵ層は羨門部付近と前庭部後方で確認された埋土であり、初葬埋土と考える。Ⅴ層はほぼ閉塞石を覆っていることから、Ⅵ層が追葬時に除去された後に閉塞石を覆った追葬埋土と考えられるが、Ⅴ・Ⅵ層は初葬埋土の可能性ももつ。Ⅲ・Ⅳ層は風化土層で、最終埋葬時の埋土と考える。Ⅰ・Ⅱ層は二次堆積土である。土層観察の結果、明確な追葬ラインは追えなかった。

羨道・玄室

羨道は長さ0.93m、中央の高さ0.86m、玄門幅0.89m、高さ0.82mである。床面はほぼ平坦で羨門から玄門に向かって徐々に広がっている。羨道には敷石等は施していない。

玄室は平入り隅丸長方形の様相を呈し、天井形態はアーチ(稜有)形である。標高は床面で122.8m、長さ1.34m、幅1.81m、中央の高さ0.87mである。玄室と玄門の間には高低差約10cmの段をもち、玄室が1段高く構築されている。さらに玄門は玄室の左端に位置することから、隣接する2号墓の玄室を避け右方向に展開したことが窺える。玄室床面には径20cm前後の扁平河原石を敷き詰めている。枕石等の施設はない。床面はほぼ平坦であり、排水溝等の施設はもたない。奥壁には床面から0.5mの位置に水平に稜線をもち、「軒」を表現している。また、奥壁の両コーナーからは「軒」に向かって稜線がのびている。

遺物の出土状況 前庭部、玄室内とも遺物は出土していない。



第 32 図 第 5 支群 1 号墓実測図 (1/40)

第5支群2号墓

概要

2号墓は1号墓の西に隣接し、南西方向に開口する。玄室の一部は接している。二次堆積土で覆われていたため保存状態は良好である。標高は羨門付近で122.5m、玄室主軸方向はN-59°-Eをさす。調査は前庭部遺物の検出・プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、玄室内流入土の除去・構造確認等を行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は1号墓同様、4基で共有しているが、やはり羨門部付近に独自の領域をもっており、地山を削り出し造り出し部を形成している。前庭部の長さは3.96m、造り出し部分の長さ約0.2m、幅1.58mで、床面はほぼ平坦で羨道部後方に向かって約2~3°の傾斜で緩く下降している。

羨門部は天井部及び右壁の一部が崩落していて、保存状態はあまり良くない。幅は0.56m、高さは推定で0.7m前後である。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ0.92m、幅0.62m、厚さ0.16m前後で、上部は角が欠損してやや丸味をもつ。閉塞石は前庭部方向へ倒れており、床面との間に遺物片を含む土層が一層確認された。羨門部の前面に長さ10cm、幅64cm、深さ5cm程を掘り込み、閉塞石を安定させるための溝としている。

前庭部内の埋土は6層確認された。観察の結果、Ⅳ~Ⅵ層は閉塞石が倒れる前に堆積した埋土であり、Ⅳ・Ⅴ層は風化している。これより、Ⅳ~Ⅵ層は初葬埋土であり、閉塞石は追葬時に前方へ引き倒したものと考えられる。Ⅲ層はⅤ層を切り込み、閉塞石上面を覆って堆積している。これよりⅢ層は追葬埋土と考えられる。Ⅰ・Ⅱ層は二次堆積土である。土層観察の結果、少なくとも1回の追葬が認められる。

羨道・玄室

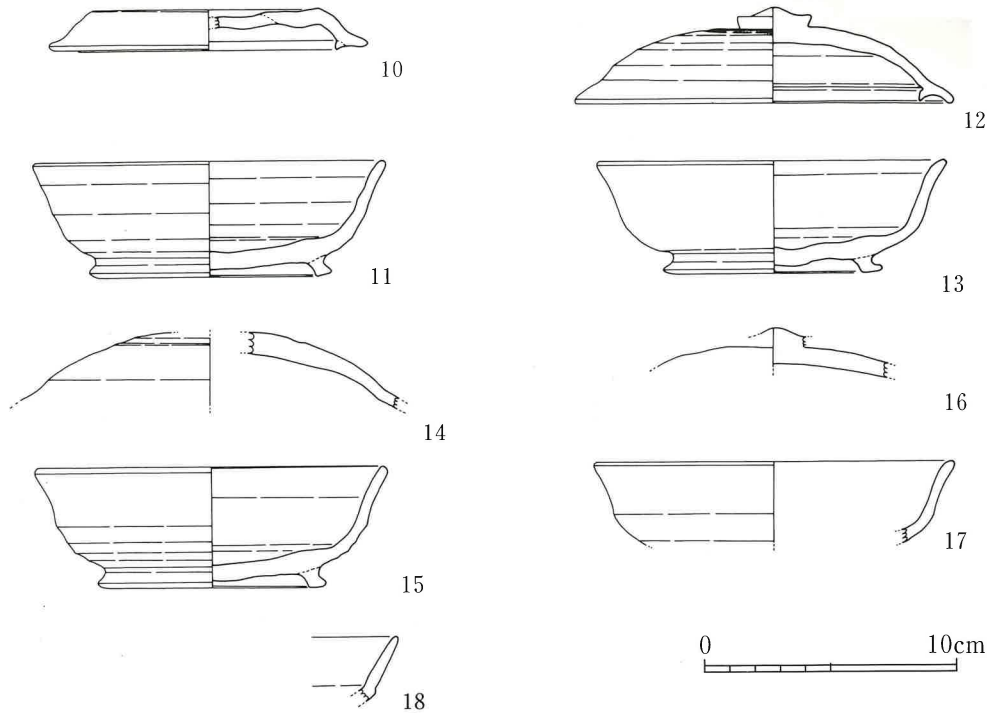
羨道は天井が崩落しており、原形を留めていない。長さは0.95m、高さは推定で0.8m前後、玄門幅0.95m、高さ0.90mで、羨門から玄門に向かって徐々に広がっている。床面には玄室から続く不定形な排水施設を設けており、敷石等の施設はない。

玄室は胴張り方形の様相を呈し、天井形態は鴨居形である。標高は床面で122.6m、長さ1.73m、幅は裾部・中央部が1.67m、奥壁1.47m、中央の高さ1.03mである。玄室床面には径20cm前後の扁平河原石を敷き詰めている。枕石等の施設は認められない。床面には玄室中央から玄門寄りにかけては不定形な排水施設を設けている。壁は内傾しながら立ち上がる。左右両壁には床面から0.6mの位置に水平に2本の稜線をもち、「軒」を表現している。また、4ヶ所の壁コーナーからは「軒」に向かって稜線がのびている。

遺物の出土状況

前庭部

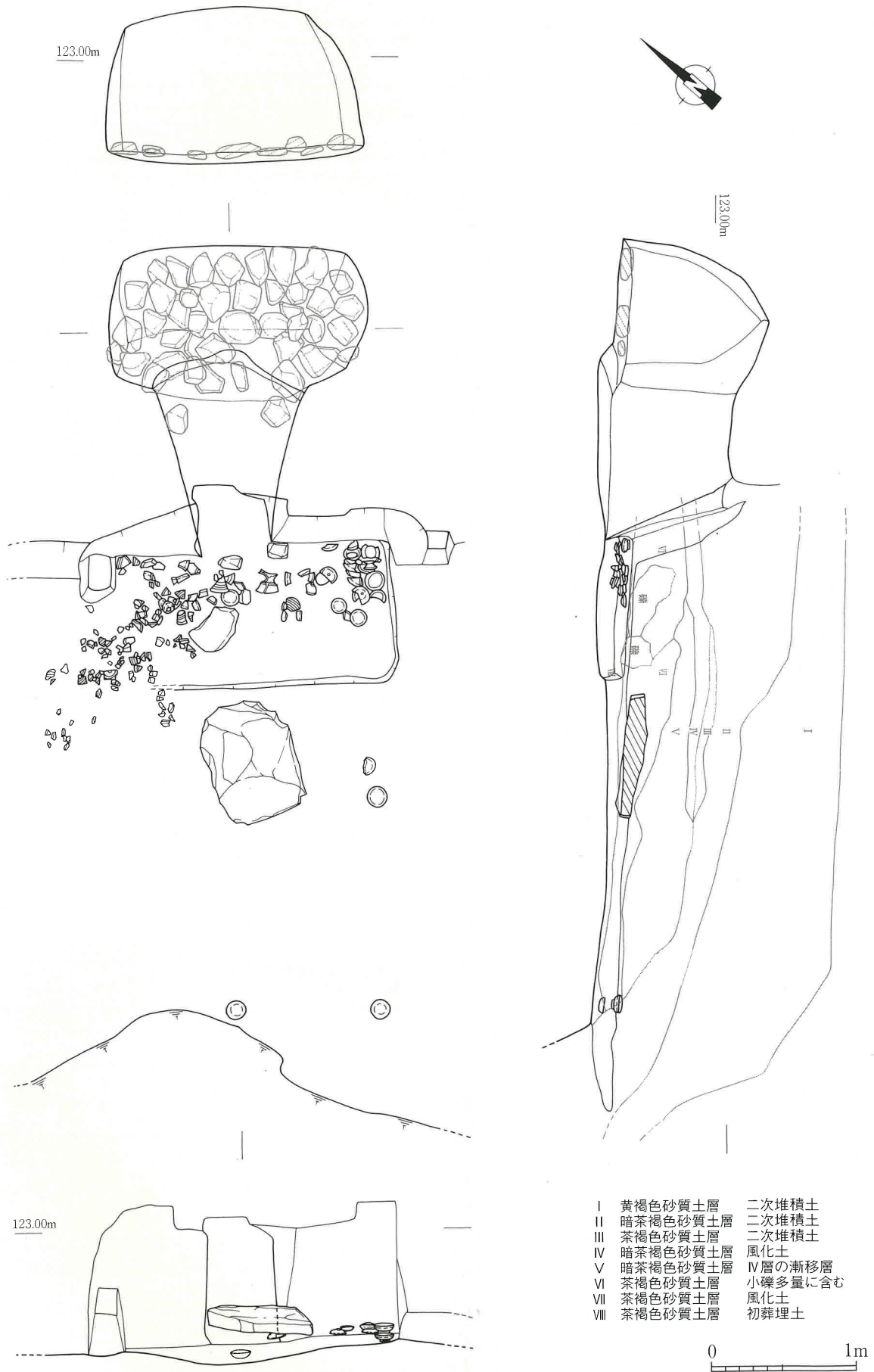
前庭部前面の右コーナーから坏のセット2個体分が一括埋置した状態で出土した。床面直上からの出土であり、初葬時の遺物と考える。また閉塞石下層の第Ⅴ層からも破片で数個体分の坏の破片が出土した。



第34図 第5支群2号墓出土遺物実測図 (1/3)

表7 第5支群2号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
10	坏蓋	10.2 12.6 1.6	天井部は低く平らである。口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。かえりは下内方向にのび尖り気味である。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り離し	淡青灰色	精微	良好		中央部に粘土補填の接合痕有
11	坏身	14.0 9.6 4.5	口縁部は上外方向にのび、端部は丸い。高台は下外方向にのび内端部が接地する。端部は面を成す。高台は坏部成形後貼り付けしたものである。	回転ナデ	回転ナデ・ロクロナデ横ナデ・回転ヘラ切り	淡青灰色	石英粒(1~3mm)・白色粒多量	良好		
12	坏蓋	11.6 14.9 3.8	天井部は丸みを持ち、中央に宝珠つまみを有する。口縁端部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下内方向にのび端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り	暗茶褐色 赤茶色	石英粒(1~5mm)・長石粒・白色粒多量	良好		13とセット八女窯? 重ね焼き痕有
13	坏身	13.9 8.7 4.4	口縁部は外反しながらのび、端部はさらに外反し丸い。高台は下外方向にのび、内端部が接地する。端部は面を成す。高台は貼り付けしたものである。	回転ナデ	回転ナデ・横ナデ・回転ヘラ削り	暗茶褐色	石英粒(1~4mm)・長石粒・白色粒多量	良好		12とセット八女窯? 重ね焼き痕有
14	坏蓋	- - -	天井部は丸みを持ち、中央につまみを有すると思われる。	ナデ	回転ヘラ削り	にぶい赤褐色	石英粒(2~3mm)・白色細粒有	良好		15とセット八女窯?
15	坏身	14.0 9.0 4.7	口縁部は外反しながらのび、端部はやや丸い面を成す。高台は下外方向にのび、端部は面を成す。接地面はほぼ平らである。高台は貼り付けしたものである。	回転ナデ	回転ナデ・ロクロナデ横ナデ・ヘラ切り未調整	淡褐色 暗茶褐色	石英粒(1~4mm)・白色細粒有	良好		14とセット八女窯?
16	坏蓋	- - -	天井部は丸みを持ち、中央に宝珠つまみを有する。	ナデ	回転ナデ・ナデ	にぶい赤褐色	石英粒(1~3mm)多量・白色細粒有	良好		17とセット八女窯?
17	坏身	14.2 - -	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	白色細粒多量・石英粒(1mm)有	良好		16とセット八女窯?
18	高坏	- - -	口縁部は上外方向にのび、端部はやや尖る。	回転ナデ	回転ナデ	橙色	角閃石粒有	良好		

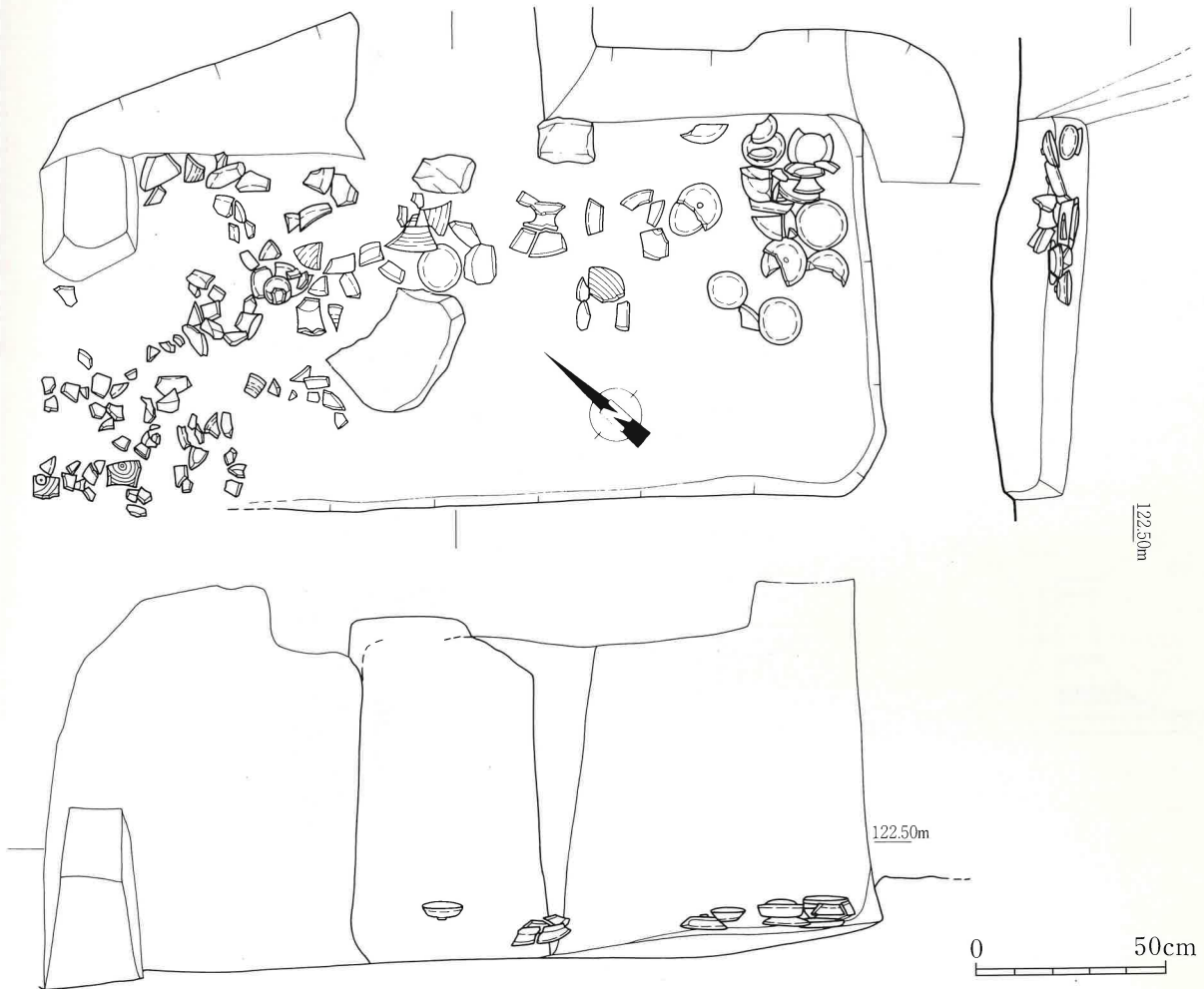


第35図 第5支群3号墓実測図 (1/40)

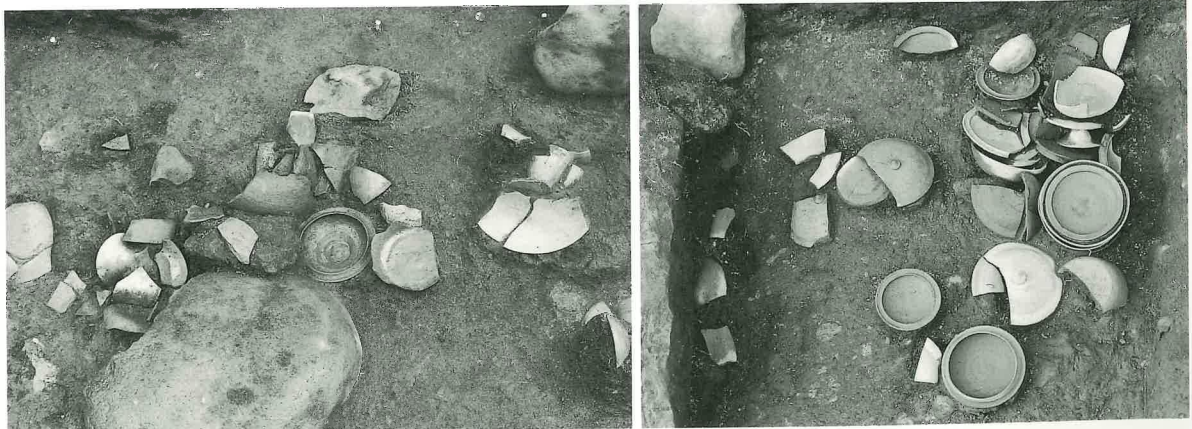
第5支群3号墓

概要

3号墓は2号墓の西2mに位置し、南西方向に開口する。二次堆積土で覆われていたため保存状態は良好である。標高は羨門付近で122.2m、玄室主軸方向はN-48°-Eをさす。調査は前庭部遺物の検出・プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、玄室内流入土の除去・構造確認等を行った。



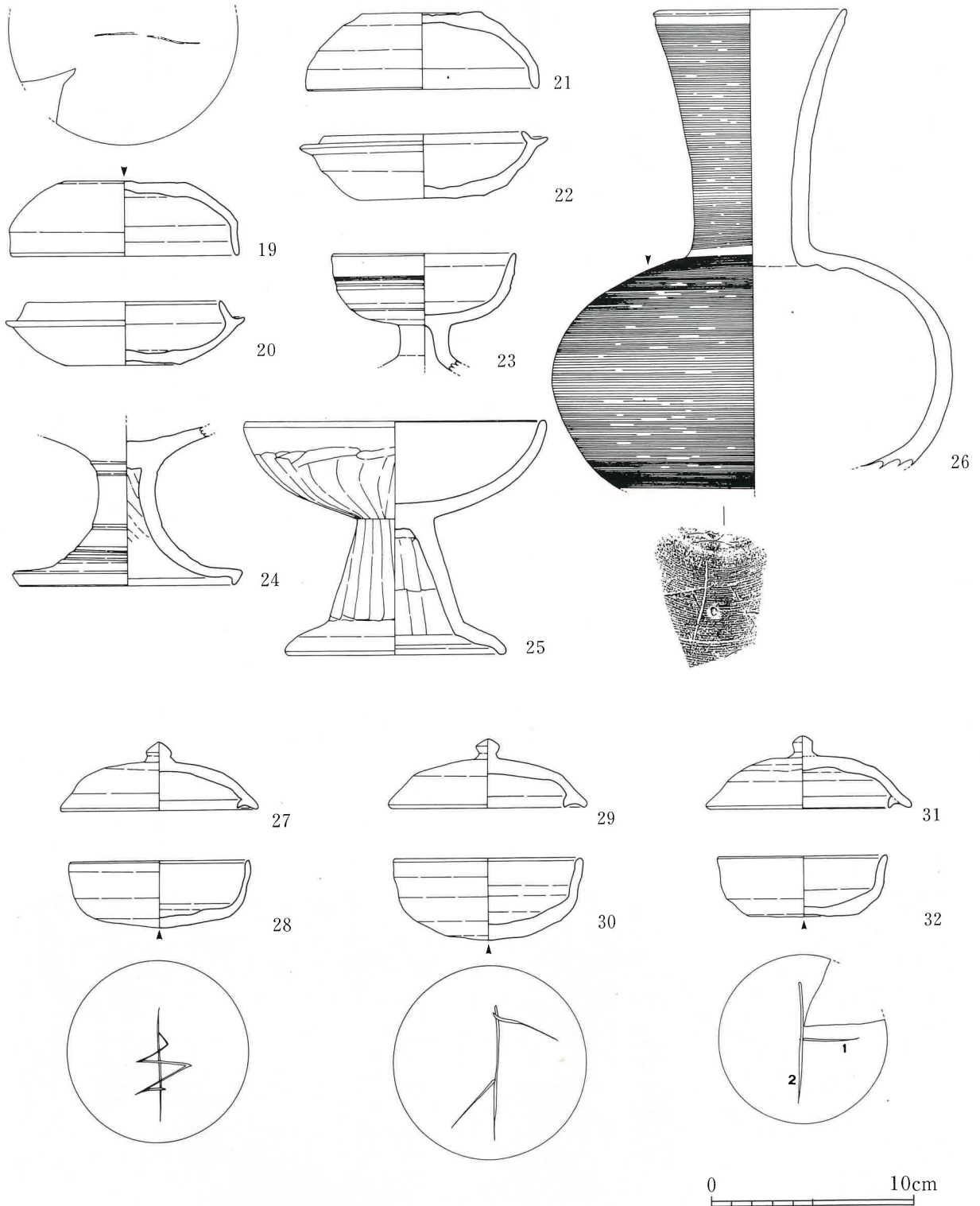
第36図 第5支群3号墓遺物出土状況実測図 (1/20)



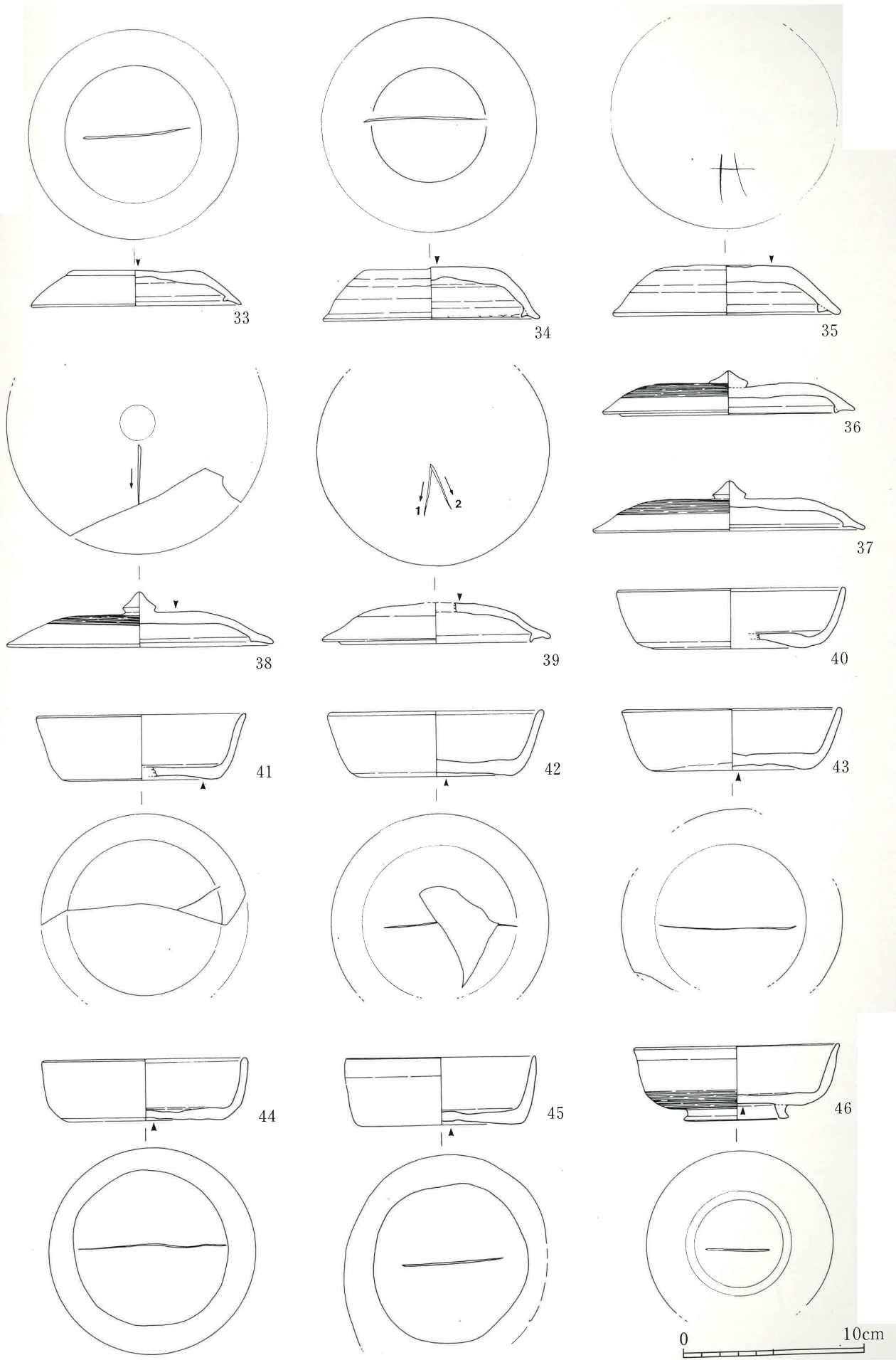
規模、構造

前庭部・羨門部

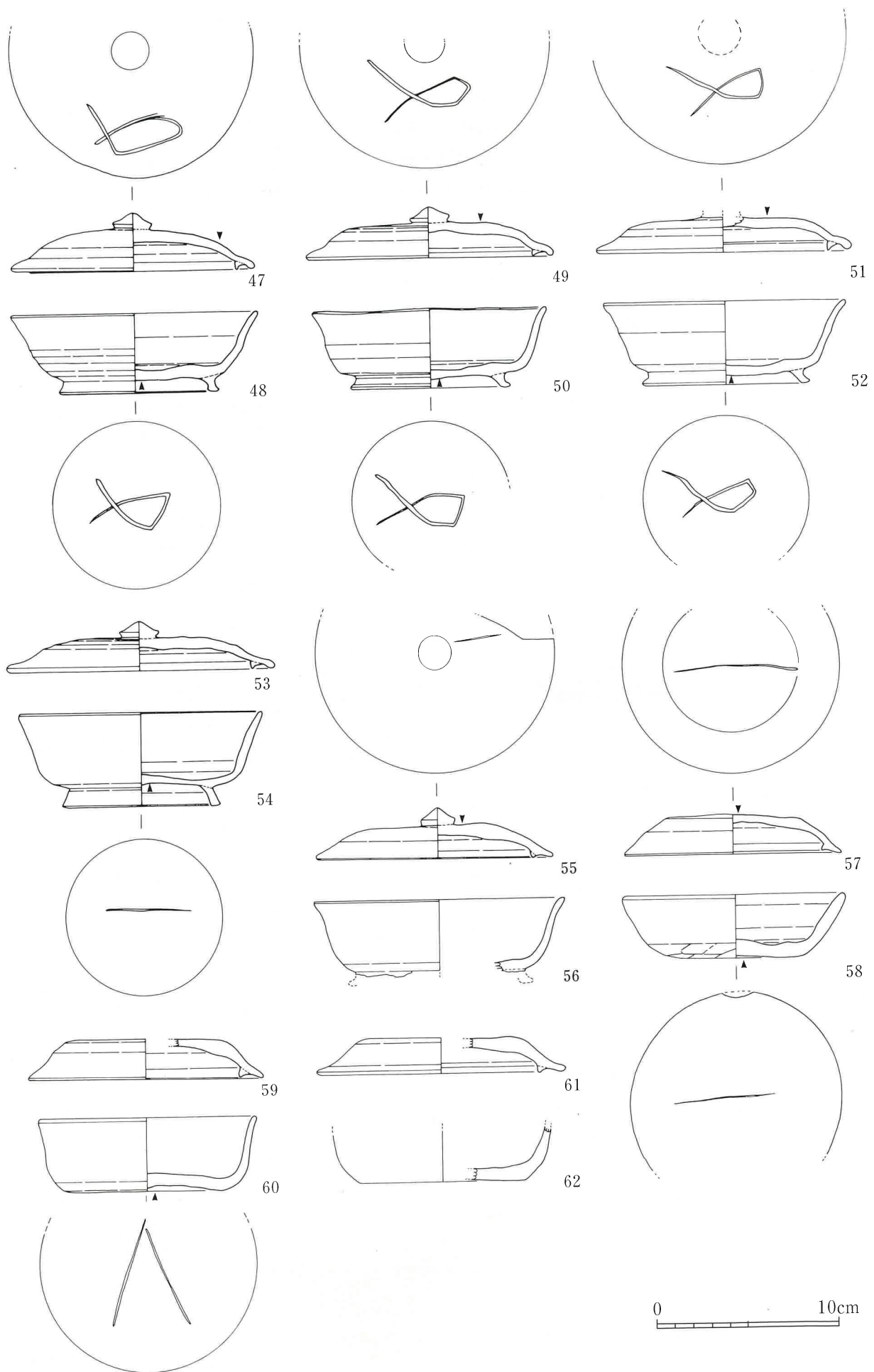
前庭部は1～2号墓同様、4基で共有しているが、やはり羨門部付近に独自の領域をもち、地山を削り出して造り出し部を形成している。前庭部前面は1～2号墓とやや異なり、床面を5cm程度方形状に掘り下げ、墓前祭祀用の領域を設けている。ここからは多量の遺物が出土した。前庭部の長さは3.35m、造り出し部分の長さ約1m、幅1.96m、床面はほぼ平坦である。



第37図 第5支群3号墓出土遺物実測図1 (1/3)



第 38 图 第 5 支群 3 号墓出土遺物実測図 2 (1/3)



第39図 第5支群3号墓出土遺物実測図3 (1/3)

羨門部は天井部及び側壁の一部が崩落しているが、保存状態は比較的良い。幅 0.47m、高さは推定で 0.85m 前後である。側壁の傾斜は約 70°である。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の 1 枚石を閉塞石として使用している。長さ 0.82m、幅 0.6m、厚さ 0.14m 前後で、表面に工具痕が明瞭に残る。閉塞石は前庭部後方へ引き倒されている。

前庭部内の埋土は 8 層確認された。観察の結果、Ⅷ層は前庭部全面に 10cm 程度の厚さで堆積しており、初葬埋土と考える。Ⅵ～Ⅶ層はⅧ層中に閉塞石が位置することから、追葬時に閉塞石を前方へ引き倒した後の埋土と考えられる。Ⅳ～Ⅴ層は観察の結果、Ⅵ・Ⅶ層埋土以降追葬ラインがないことから追葬埋土ではないと考える。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層は二次堆積土である。土層観察の結果、追葬ラインは確認できなかったが、閉塞石の状況からみて少なくとも 1 回の追葬が認められる。

羨道・玄室

羨道は長さ 1.08m、中央の高さ 0.91m、玄門幅 1.09m、高さ 0.95m である。床面はほぼ平坦で羨道から玄門に向かって徐々に広がっている。羨道には敷石・排水溝等の施設はない。

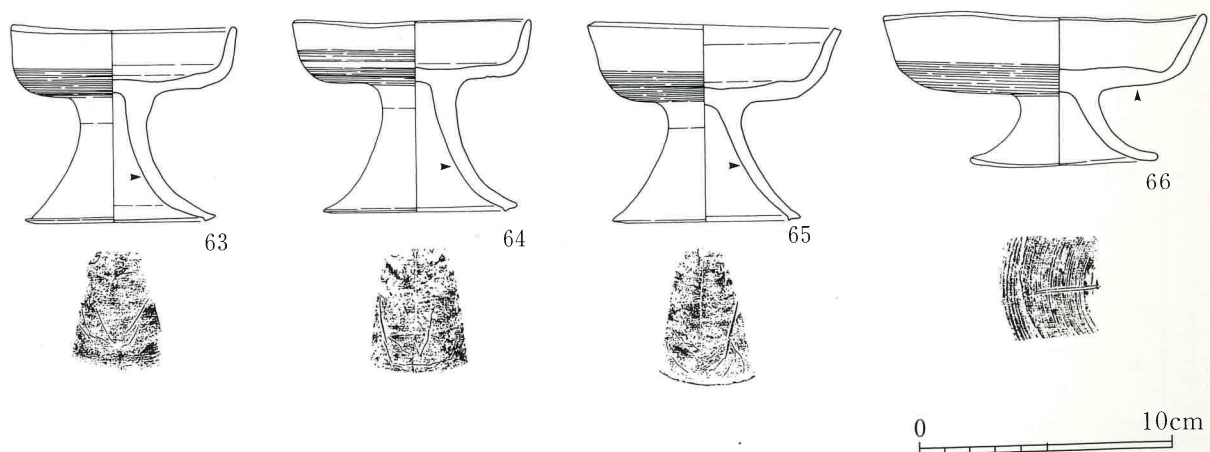
玄室は平入り胴張り長方形の様相を呈している。標高は床面で 122.3m、長さ 0.99m、幅は裾部 1.6m・中央部が 1.8m・奥壁 1.55m、中央の高さ 1.1m である。玄室と玄門の間には高低差約 10cm の段をもち、玄室が 1 段高く構築されている。玄室床面には径 20cm 前後の扁平河原石を敷き詰めている。枕石等の施設は認められない。床面はほぼ平坦で、奥壁に向かって約 7°の傾斜で緩やかに上昇する。天井形態は切妻形を呈しており、壁は内傾しながら立ち上がり、四隅からそれぞれ稜線が天井に向ってのびる。

遺物の出土状況

前庭部（第 36 図）

前庭部前面の 1 段掘り下げた区域内から墓前祭祀行為時に使用した多量の土器が出土した。右コーナーでは坏蓋 7・坏身 3・高坏 2 個体を一括して破棄した様相が窺える。中央付近では坏蓋 4・坏身 5・高坏 2・土師器高坏 1 個体が完形品を含む大型破片で出土した。左側では破碎散布を行ったような状態で土器破片が出土した。これらの遺物は床面直上の遺物もみられるが、そのほとんどが幾分浮いた状態で出土した。追葬時に破棄・集散等の何らかの行為を行ったものとする。

遺物の時期は 6 世紀後半～7 世紀初頭・7 世紀中頃・7 世紀後半代と大きく 3 時代に区分できるため、遺物からみて初葬・追葬 2 回の都合 3 回の埋葬が行われた可能性もある。



第 40 図 第 5 支群 3 号墓出土遺物実測図 4 (1/3)

表8 第5支群3号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径(受部) 底径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
19	坏蓋	11.4 - 3.7	天井部はやや高く平らである。口縁部はやや外反しながら直立気味にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り離し	暗茶褐色	石英粒・長石粒多量	良好	有	20とセット 八女窯?
20	坏身	9.6 11.8 5.7 3.1	立ち上がりは内傾してのび、端部はやや尖り気味である。受部はやや上外方向にのび、端部は尖り気味である。底部は深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り未調整	暗青灰色 / 褐色	砂粒多量・石英粒(1~2mm)有	良好		19とセット 八女窯?
21	坏蓋	11.6 - 3.8	天井部はやや高く平らである。口縁部はやや外反しながら直立気味にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・回転ヘラ切り離し	青灰色 / 褐色	石英粒(1~2mm)・雲母有・砂粒若干	良好		22とセット 八女窯?
22	坏身	9.9 12.3 6.2 3.3	立ち上がりは内傾してのび、端部はやや尖り気味である。受部はやや上外方向にのび、端部は尖り気味である。底部は深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り未調整	灰色 / 褐色	石英(1mm以下)有	良好		21とセット 八女窯?
23	高坏	9.2 - -	坏部口縁は上外方向にのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	黒灰色	石英粒(1~2mm)多量	良好		
24	高坏	- 11.4 -	脚部は下外方向にのび、端部は面を成す。外面中央に2本の沈線が見られる。	回転ナデ	回転ナデ・未調整(しほり痕有)	濃青灰色	長石粒・溶性黒色粒多量	良好		
25	高坏	14.9 11.0 11.5	口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。脚部は下外方向にのび、端部付近でさらに外側に屈曲し丸い。	横ナデ	横ナデ	淡橙色	石英粒(1~2mm)・長石粒角閃石粒赤色粒多量	良好		土師器
26	長頸壺	9.7 19.8 -	頸部から口縁部にかけて外反しながらのび、端部は尖り気味である。体部は楕円形を呈している。(19.8は胴部最大径)	回転ナデ	カキ目	灰色	白色粒・角閃石粒有	良好	有	
27	坏蓋	7.8 9.8 3.4	天井部は低く丸みを持ち中央に宝珠つまみを有する。口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは、下内方向にのび尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・ナデ	明青灰色 / 青灰色	石英粒(1~2mm)有	良好		28とセット 重ね焼き痕有
28	坏身	8.8 - 3.3	口縁部は上外方向にのび、端部は尖り気味である。底部はやや深く丸みを帯びる。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り	淡青灰色	石英粒(1~3mm)・溶性黒色粒多量	良好	有	27とセット 外面自然釉
29	坏蓋	7.6 9.8 3.5	天井部は低く丸みを持ち中央に宝珠つまみを有する。口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下内方向にのび尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・ナデ	青灰色 / 灰白色	石英粒(1~3mm)多量	良好		30とセット 重ね焼き痕有
30	坏身	15.4 - 4.0	口縁部は上外方向にのび、端部は丸い。底部は深く、丸みを帯びる。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り	黒灰色	石英粒(1~3mm)多量	良好	有	29とセット
31	坏蓋	8.6 10.2 3.6	天井部は低く丸みを持ち中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。かえりは下内方向にのび尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	淡青灰色	白色粒・角閃石粒・長石粒多量	良好		32とセット 重ね焼き痕有
32	坏身	8.4 - 3.0	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は尖り気味である。底部はやや深く平らである。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り	濃青灰色	石英粒(1~3mm)・溶性黒色粒多量	良好	有	31とセット
33	坏蓋	9.8 11.7 1.9	天井部は低く平らである。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り離し	淡青灰色	石英粒(1~2mm)・長石粒多量	良好	有	
34	坏蓋	10.0 12.0 2.9	天井部は平らである。口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸みを帯びる。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・手持ちヘラ削りヘラ切り離し	濃灰色 / 薄茶色	石英粒(1~3mm)・長石粒角閃石粒多量	良好	有	口縁部に人為的打ち欠き有
35	坏蓋	10.0 12.6 2.7	天井部は平らである。口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸みを帯びる。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・カキ目・横ナデ	淡青灰色	石英粒(1~3mm)・白色粒多量	良好	有	

番号	器種	法量 口径(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
36	坏蓋	11.9 14.0 2.4	天井部は低く平らでカキ目を施す。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部はやや尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ カキ目・横 ナデ	淡青灰色	石英粒(1~ 2mm)多量	良好		
37	坏蓋	12.4 15.0 2.9	天井部は低く平らでカキ目を施す。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部付近で外反する。端部は丸い。	一定方向ナ デ・回転ナ デ	回転ナデ・ カキ目・横 ナデ	灰色	石英粒 (1mm)有	良好		
38	坏蓋	12.2 14.7 3.0	天井部は低く平らでカキ目を施す。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部付近で外反する。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ・ カキ目・横 ナデ	オリーブ 灰色	石英粒(1~ 2mm)・粗砂 有	良好	有	
39	坏蓋	10.5 12.6 -	天井部は低く丸みを持つ。口縁部は内傾しながらのび、端部付近で外反する。端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削 り	濃青灰色 、 黒灰色	石英粒(1~ 2mm)多量	良好	有	
40	坏身	12.6 9.0 3.3	口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ切 り	黒灰色	溶性黒色粒 多量	良好		
41	坏身	11.6 8.6 3.5	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ切 り	淡黄茶色	石英粒(1~ 3mm)多量	良好	有	
42	坏身	12.0 8.4 3.6	口縁部は上外方向にのび、端部は丸い。底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ・ ヘラ切り未 調整	淡黄茶色	角閃石粒・長 石粒多量石 英(7mm大) 有	良好	有	
43	坏身	12.2 9.1 3.4	口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削 り・回転ヘ ラ切り離し	白灰色	長石粒・角閃 石粒・赤色粒 白色粒多量	良好	有	
44	坏身	(11.4) 8.6 3.4	口縁部はほぼ直立気味に立ち上がり、端部は丸い。底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ切 り	黒灰色	石英粒(1~ 5mm)多量	良好	有	
45	坏身	10.5~ 12.7 8.6~ 9.1 3.1~ 3.7	口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。底部は平らである。	一定方向ナ デ・回転ナ デ	回転ナデ・ ナデ	黒灰色	石英粒(1~ 3mm)多量	良好	有	ゆがみ大
46	坏身	11.4 5.8 4.1	口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。底部と体部の一部にカキ目を施す。高台は中央寄りて下外方向にのび、端部は面を成す。接地面はほぼ平らで貼り付け高台である。	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色 、 赤茶色	石英粒(1~ 4mm)多量	良好	有	八女窯?
47	坏蓋	11.4 13.5 3.2	天井部は低くわずかに丸みを持つ。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ切 り後ヘラナ デ・横ナデ	黒灰色	石英粒(1~ 2mm)・溶性 黒色粒多量	良好	有	48とセット
48	坏身	13.6 8.8 4.4	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台は外寄りて下外方向にのび、端部は面を成す。接地面はほぼ平らで貼り付け高台である。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ ロクロナデ 横ナデ・回 転ヘラ切り	淡青灰色	石英粒 (1mm)・長石 粒多量	良好	有	47とセット
49	坏蓋	11.4 13.7 2.8	天井部は低くわずかに丸みを持つ。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削 り・横ナデ	淡青灰色 、 黒灰色	石英粒(1~ 2mm)多量	良好	有	50とセット
50	坏身	13.0 9.0 4.4	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台は外寄りて下外方向にのび、端部は面を成す。接地面はほぼ平らで貼り付け高台である。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ 横ナデ・ヘ ラ切り	淡青灰色	石英粒 (1mm)多量	良好	有	49とセット

番号	器種	法量 口径 底(受部) 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
51	坏蓋	11.6 14.1 -	天井部は低くわずかに丸みを持つ。つまみは剥離している。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削りに似たヘラナデ・ナデ	淡黒灰色	石英粒(1~2mm)多量	良好	有	52とセット
52	坏身	13.4 9.2 4.6	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台は外寄り下方向へのび、端部は面を成す。接地面はほぼ平らで貼り付け高台である。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り	オリーブ灰色	石英粒(1~2mm)・粗砂多量	良好	有	51とセット
53	坏蓋	12.4 14.8 2.7	天井部は低くわずかに丸みを持つ。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	黒灰色	石英粒(1~mm)・溶性黒色粒多量	良好		54とセット
54	坏身	13.4 8.6 5.2	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台は外寄り下方向へのび、端部は面を成す。接地面はほぼ平らで貼り付け高台である。	回転ナデ	回転ナデ	淡黒灰色	石英粒(1~3mm)・長石粒多量	良好	有	53とセット
55	坏蓋	10.4 13.1 2.8	天井部は低くわずかに丸みを持つ。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・カキ目?・横ナデ	淡青灰色	石英粒(1~5mm)・長石多量	良好	有	56とセット
56	坏身	14.0 - -	口縁は外反しながらのび、端部は丸い。高台を有するが、剥離している。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り?	灰色	石英粒(1mm以下)有	良好		55とセット
57	坏蓋	9.8 12.0 2.2	天井部は低く平らである。口縁部はわずかに外反しながらのび、端部はやや尖り気味である。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り・一部手持ちヘラ削り	淡青灰色	石英粒(1~3mm)・長石粒多量	良好	有	58とセット
58	坏身	12.3 6.1 3.5	口縁部は上外方向へのび、端部は丸い。底部は平らである。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ切り後不十分な手持ちヘラ削り	淡青灰色	石英粒(1~3mm)・長石粒多量	良好	有	57とセット
59	坏蓋	10.4 13.0 -	天井部は低く平らである。口縁部はわずかに外反しながらのび、端部はやや尖り気味である。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り	淡青灰色	石英粒(1~3mm)・長石粒・角閃石粒多量	良好		60とセット
60	坏身	12.0 8.0 4.1	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り	淡青灰色	角閃石粒(1mm)多量・角閃石粒多量	良好	有	59とセット
61	坏蓋	10.8 13.8 -	天井部は低く平らである。口縁部はわずかに外反しながらのび、端部はやや尖り気味である。受部は下方向へのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り	淡褐色 黒灰色	石英粒(1mm)・長石粒(1mm)有	良好		62とセット
62	坏身	- 9.1 -	口縁部欠失。底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り	浅黄橙色	角閃石粒・赤褐色粒若干・白色細粒微量	良好		61とセット
63	高坏	8.9~ 9.8 7.4 7.6	坏部口縁は上外方向へのび、端部は丸い。底部はほぼ平らでカキ目を施す。脚部は下外方向へのび、端部は面を成す。	回転ナデ	回転ナデ・カキ目・横ナデ	淡青灰色	石英粒(1~2mm)多量	良好	有	ゆがみ有
64	高坏	9.4~ 10.0 7.8 7.6	坏部口縁は上外方向へのび、端部は丸い。底部はほぼ平らでカキ目を施す。脚部は下外方向へのび、端部は面を成す。	回転ナデ	回転ナデ・カキ目回転ナデ	黒灰色	石英粒(1~2mm)多量	良好	有	ゆがみ有
65	高坏	10.0 7.8 7.4~ 8.0	坏部口縁は外反しながらのび、端部は面を成す。底部はほぼ平らでカキ目を施す。脚部は下外方向へのび、端部は面を成す。	回転ナデ	回転ナデ・カキ目・横ナデ	黒灰色	石英粒(1~2mm)多量	良好	有	ゆがみ有
66	高坏	12.7 7.4 5.9	坏部口縁は上外方向へのび、端部は丸い。底部はほぼ平らでカキ目を施す。脚部は下外方向へのび、端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ・カキ目・回転ナデ	黒灰色	石英粒(1mm)多量	良好	有	ゆがみ有

第5支群4号墓

概要

4号墓は4基で共有している前庭部の西端に位置し、南西方向に開口する。二次堆積土で覆われていたが玄室・羨道の天井部が陥没しており、保存状態はあまり良くない。標高は羨門付近で122.1m、玄室主軸方向はN-39°-Eをさす。調査は前庭部遺物の検出・プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は共有している前庭部以外に、やはり羨門部付近に独自の領域をもっており、地山を削り出して、造り出し部を形成している。前庭部の長さは3.33m、造り出し部分の長さ約0.3m、幅2.82mで、床面はほぼ平坦で前庭部後方に向かって約2~3°の傾斜で緩く下降している。

羨門部は天井部及び左右両壁が陥没・崩落していて、保存状態は悪い。幅は0.66m、高さは計測不能である。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ1.32m、幅は上部で0.7m、下部で0.93m、厚さ0.2m前後で、各面とも工具痕が残るが、丁寧な成形を施している。閉塞石は前庭部方向へ倒れており、床面とほぼ接している。羨門部の前面に長さ20cm、幅74cm、深さ5cm程の掘り込みを穿ち、閉塞石を安定させるための溝としている。

前庭部内の埋土は7層確認された。観察の結果、閉塞石下には埋土がみられないため、初葬埋土は追葬時に除去されたものとする。このためⅥ~Ⅶ層を閉塞石を引き倒した後の追葬埋土とする。Ⅰ~Ⅴ層はその後の堆積土とする。土層観察の結果、少なくとも1回の追葬が認められる。

羨道・玄室

羨道は天井が崩落しており、原形を留めていない。長さは0.92m、玄門幅0.95m、高さ1.26mで、羨門から玄門に向かって徐々に広がっている。床面は平坦で、玄室に向かって約5°の傾斜で緩やかに上昇する。敷石・排水溝等の施設は設けていない。

玄室は妻入り逆台形の様相を呈している。玄室床面には径15~30cm前後の扁平河原石を乱雑に敷いて礫床としている。枕石等の施設は認められない。標高は中央床面で122.4m、長さ2.59m、幅は裾部1.61m・中央部1.95m・奥壁2.18mで高さは計測不能である。玄室と玄門の間には高低差約5cmの段をもち、玄室が1段高く構築されている。床面はほぼ平坦で奥壁に向かって約5cmの傾斜で上昇する。奥壁は僅かに内傾しながら立ち上がり、左右両壁はほぼ垂直に立ち上がる。四隅からはそれぞれ稜線が天井に向ってのびる。

遺物の出土状況

前庭部

前庭部左コーナーから完形の坏身2点(69・80)、破片で坏蓋7・坏身3点が出土した。祭祀行為を行った後に一括して集められたものとする。67・68・70~72は埋土中の出土であり、上部に位置する第1~3支群等のやや古めの横穴墓からの落下遺物とする。

玄室

玄室右裾コーナー付近で坏蓋1点(77)が出土した。

出土遺物の時期からみた当横穴墓の埋葬行為は、7世紀初頭にまず埋葬行為を行い、その後7世紀後半~末頃に追葬行為を行ったのではないかと考える。

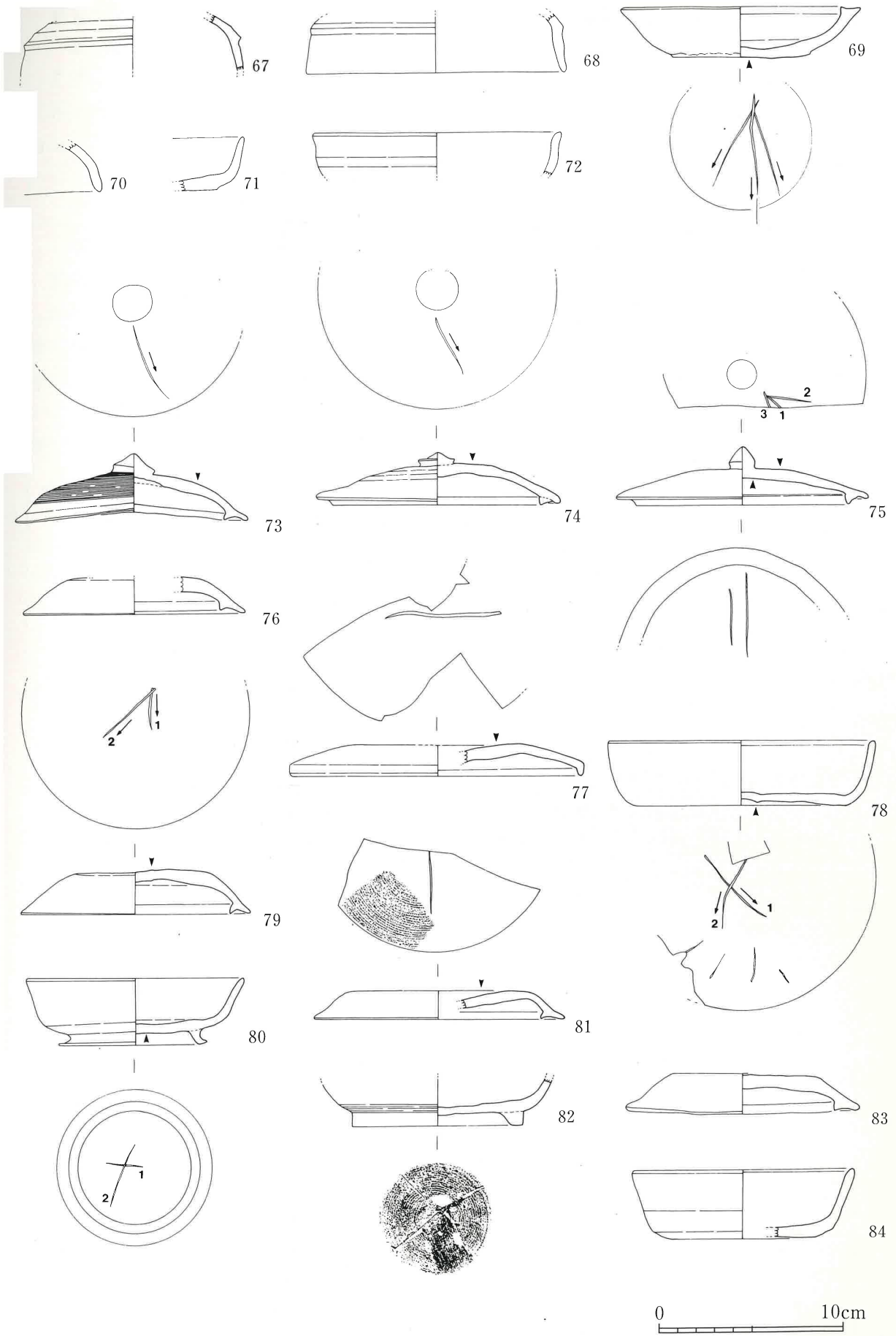


- 黄褐色砂質土層
- 暗茶褐色砂質土層
- 暗黒褐色砂質土層
- 無褐色砂質土層
- 灰褐色ブロック質土層
- 暗黒褐色砂質土層
- 暗茶褐色砂質土層
- 二次堆積土
- 二次堆積土
- 地山礫片
- 追葬時の風化土か?
- 追葬埋土

I
II
III
IV
V
VI
VII

0 1m

第 41 図 第 5 支群 4 号墓実測図 (1/40)



第 42 图 第 5 支群 4 号墓出土遺物実測図 (1/3)

表9 第5支群4号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径(受部) 底器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
67	坏蓋	- - -	天井部は高く丸い。口縁部と天井部との境に稜を有する。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り	灰色	精微	良好		
68	坏蓋	14.0 - -	天井部は高く丸い。口縁部は外へひらき、端部はやや尖り気味である。天井との境に稜を有する。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り	灰色	精微	良好		
69	坏身	10.8 13.0 7.4 2.7	立ち上がりは小さく上内方向へのび、端部は尖り気味である。受部は上外方向へのび端部は尖り気味である。底部は浅く平らである。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・回転ヘラ切り後ナデ	青灰色	石英粒(1mm)・微量	良好	有	
70	坏蓋	- - -	口縁部は外反気味へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	精微	良好		
71	坏身	- - -	口縁部は上外方向へのび、端部は尖り気味である。底部は平らである。	ナデ・回転ナデ	ナデ・回転ヘラ切り後ナデ	灰色	石英粒有	良好		
72	塊	13.4 - -	口縁部は外反し、端部はやや尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色	石英(1mm以下)有	良好		土師器
73	坏蓋	9.8 12.6 3.3	天井部は低くわずかに丸みを持つ。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・カキ目・ナデ	明オリブ色	石英粒(1mm)・雲母有	良好	有	自然釉
74	坏蓋	11.1 13.1 2.8	天井部は低くわずかに丸みを持つ。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	転ナデ・回転ヘラ削り 横ナデ	暗青灰色	石英粒(1~3mm)・粗砂多量	良好	有	
75	坏蓋	11.4 13.6 3.2	天井部は低くわずかに丸みを持つ。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・ナデ	灰色	石英粒(1~2mm)・粗砂多量	良好	有	
76	坏蓋	9.2 12.0 -	天井部は低く平らである。口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り?	緑灰色 にぶい黄 橙色	石英粒(1mm)微量	良好		重ね焼き痕有
77	坏蓋	15.9 -	天井部は浅く平らである。口縁部は直下へのび、端部は丸い。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り	青灰色	石英粒(1~3mm)・粗砂多量	良好	有	
78	坏身	14.4 11.2 3.5	口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。底部は浅く平らである。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り	灰色	石英粒(1mm)微量	良好	有	
79	坏蓋	10.2 12.4 2.2	天井部は平らである。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下内方向へのび、端部は尖り気味である。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り	青灰色	石英粒(1~2mm)・粗砂微量	良好	有	80とセット
80	坏身	11.8 8.0 3.6	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台は下外方向に外反しながらのび、端部は面を成す。接地面は内端部であり、貼り付け高台である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・底部器面荒れの為調整不明	青灰色	石英粒・雲母多量	良好	有	79とセット
81	坏蓋	11.0 13.5 -	天井部は浅く平らである。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下内方向へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・カキ目	灰白色 / 黒色	石英粒(1mm)有	良好	有	82とセット 内面自然釉
82	坏身	- 9.2 -	高台は外寄り下外方向へのび、端部は面を成す。接地面は平らで貼り付け高台である。	回転ナデ	回転ナデ・カキ目・ナデ・カキ目	灰色	石英粒(1mm)・雲母砂粒多量	良好		81とセット
83	坏蓋	10.0 12.6 2.2	天井部は平らである。口縁部は下外方向へのび、端部は丸い。受部は下方向へのび端部は尖り気味である。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・回転ヘラ切り	灰オリブ色 / にぶい黄 橙色	石英粒(1~3mm)・粗砂微量	不良		84とセット
84	坏身	12.0 8.0 3.7	口縁部は上外方向へのび、端部は丸い。底部は平らである。	回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り	にぶい黄 橙色	石英粒(1~3mm)・粗砂微量	不良		83とセット

第5支群5号墓

概要

5号墓は独立した前庭部をもち、隣接する4・6号墓より50cm程度高い位置に構築されている。二次堆積土で覆われていたが玄室・羨道の天井部が陥没しており、保存状態はあまり良くない。標高は羨門付近で122.5m、玄室主軸方向はN-55°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は前述したように、単独の領域をもつ。長さ2.63m、幅2.9mで、中央でやや狭まる不定方形の形態をとる。羨門部前の床面に長さ0.72m、幅1.2m前後、深さ0.1m程度の掘り込みが認められるほかは、ほぼ平坦である。

羨門部は天井部及び左右両壁が陥没・崩落していて、保存状態は悪い。幅0.90m、高さは計測不能である。前庭部との境に掘り込みがあるため、約10cmの高低差をもつ。

閉塞施設は残っていない。

前庭部内の埋土は4層確認された。Ⅳ層は初葬埋土と考えるが、追葬時に閉塞石と共に初葬埋土が除去されていた場合は、追葬埋土の可能性もある。Ⅲ層はⅣ層を切り込んで堆積していることから、追葬埋土と考える。Ⅰ～Ⅱ層は二次堆積土である。この結果、少なくとも1回、或いは2回の追葬が認められる。

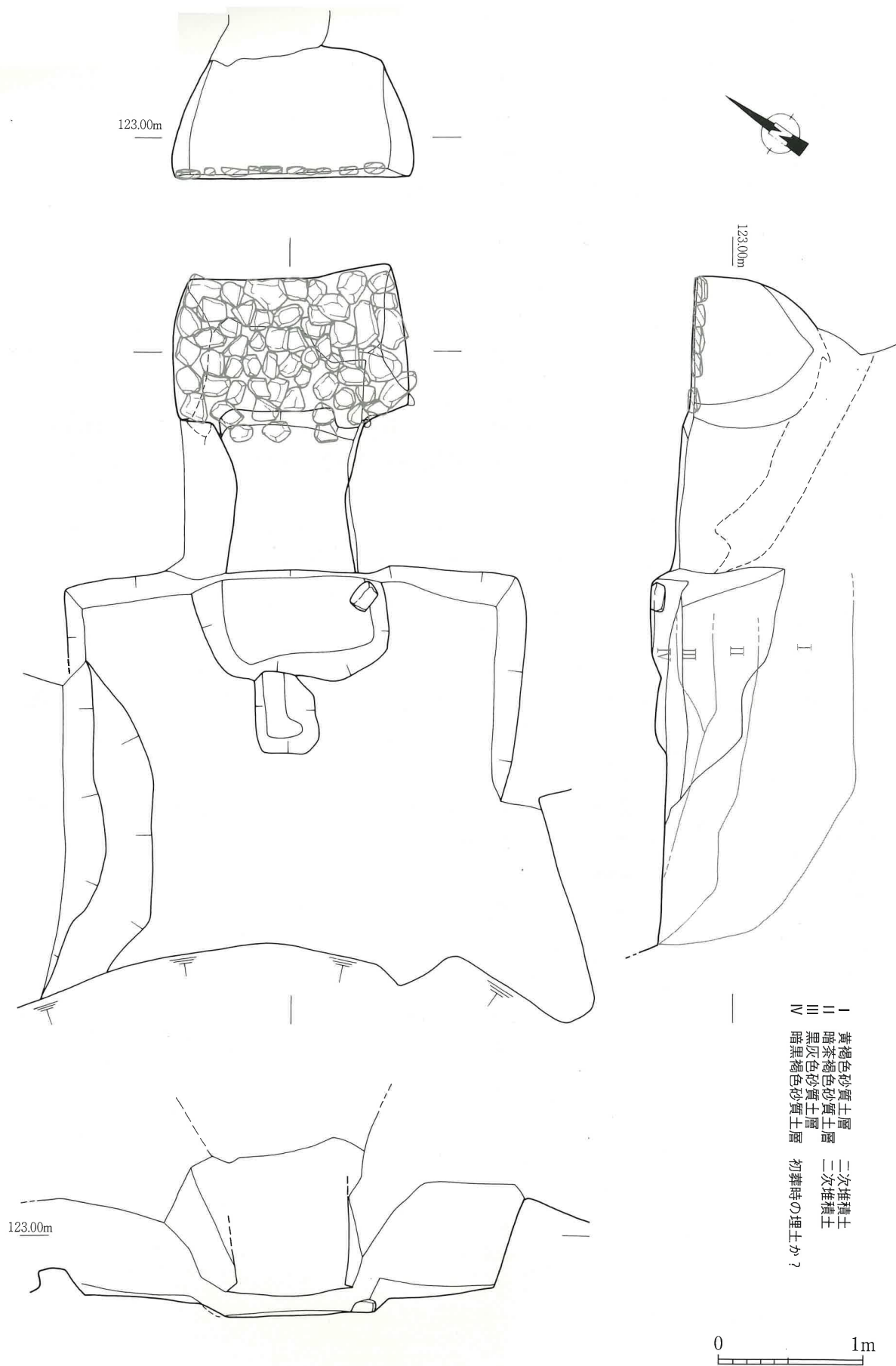
羨道・玄室

羨道は天井が崩落しており、原形を留めていない。長さは1.09m、中央で幅0.74m、玄門幅1.08mで、羨門から中央部に向かって狭まり、再び玄門に向かって徐々に広がっている。床面は平坦で、玄室に向かって約5°の傾斜で緩やかに上昇する。敷石・排水溝等の施設はない。

玄室の平面形態は平入り胴張り長方形の様相を呈している。玄室床面には径15～30cm前後の扁平河原石を敷き詰めている。枕石等の施設は認められない。標高は中央床面で122.7m、長さ0.97m、幅は裾部1.61m・中央部1.63m・奥壁1.38mで高さは計測不能である。玄室と玄門の間には高低差約5cmの段をもち、玄室が1段高く構築されている。床面はほぼ平坦で奥壁に向かって約5°の傾斜で上昇する。天井の一部は落盤しているが、残存部分からみて形態は切妻形を呈していると推測される。奥壁・側壁は内傾しながら立ち上がり、四隅からはそれぞれ稜線が天井に向ってのびる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。



第43図 第5支群5号墓実測図 (1/40)

第5支群6号墓

概要

6号墓は5号墓と同様に独立した前庭部をもち、隣接する5号墓より50cm程度低く、7号墓より60cm程度高い。二次堆積土で覆われていたが玄室・羨道の天井部の一部が陥没しており、保存状態はあまり良くない。標高は羨門付近で121.9m、玄室主軸方向はN-52°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は前庭部遺物の検出・同プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は単独の領域をもち、長さ3.12m、前面での幅2.08m、中央部で3.4mの最大幅をもち、床面はほぼ平坦で、前庭部中央から後方に向けて緩やかに下降する。また、前庭部左前方付近には、玄室内から掻き出した敷石が検出された。

羨門部は、羨道部の天井が陥没しており、保存状態は良くない。幅0.58m、高さは計測不能である。前庭部と羨門部の境には高低差約5cmの段をもち、羨門部が1段高く構築されている。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ1.16m、幅は上部で0.67m、下部で0.87m、厚さ0.2m前後で、各面とも工具痕が残るが、丁寧な成形を施している。閉塞石は前庭部方向へ倒れており、床面との間には、掻き出された敷石を含む埋土が1層堆積している。閉塞石は人為的或いは自然に倒れたかの判断はできない。

前庭部内の埋土は4層確認された。Ⅳ層は埋土中に敷石を含むことから追葬埋土と考えられ、初葬埋土は除去されたものと思われる。Ⅲ層はⅣ層の風化土層と思われる。Ⅰ～Ⅱ層は二次堆積土である。堆積埋土でみた結果、当横穴墓は少なくとも1回の追葬が認められる。

羨道・玄室

羨道は天井が陥没・崩落しており、原形を留めていない。長さ1.08m、玄門幅1.08mで、羨門から玄門に向かって徐々に広がっている。床面は平坦で、玄室に向かって約8°の傾斜で上昇する。敷石・排水溝等の施設はない。

玄室の平面形態は平入り胴張り長方形の様相を呈している。玄室床面には初葬時に径15～30cm前後の扁平河原石を敷いていたと考えるが、追葬時に全て前庭部に掻き出し、新たな屍床を設けたと考える。標高は中央床面で122.1m、長さ1.52m、幅は裾部1.63m・中央部1.90m・奥壁1.78mで、床面はほぼ平坦である。高さは天井部が陥没・落盤しているため計測不能である。奥壁は僅かに内傾しながら立ち上がり、両側壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁には床面から0.6m程度の位置に水平に稜線をもち、「軒」を表現している。四隅からは稜線が「軒」に向ってのびる。

遺物の出土状況（第45図）

前庭部

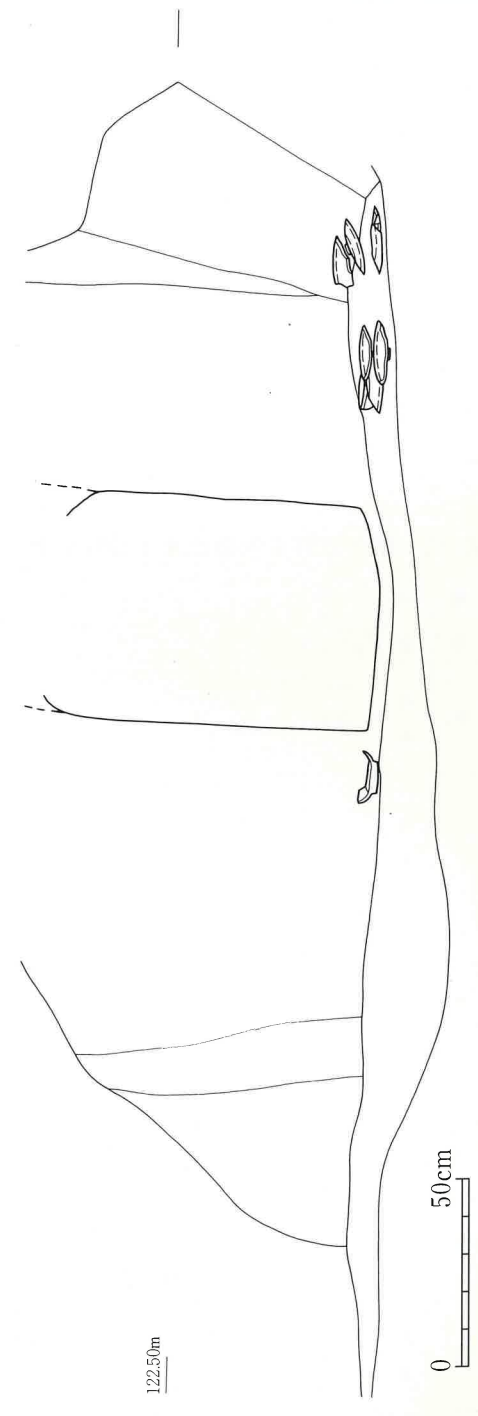
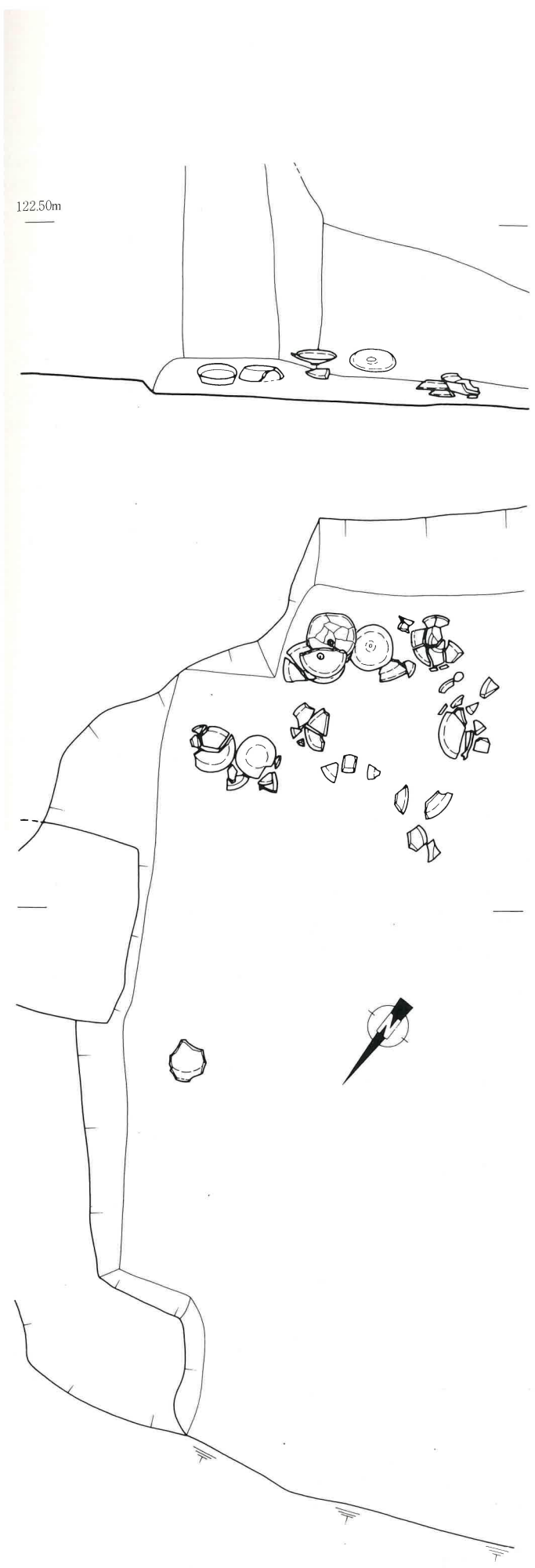
前庭部右コーナー付近から須恵器の坏身蓋(85～97)が一括して出土した。出土状況から祭祀行為を行った後に一括して破棄されたものとする。遺物は床面から僅かに浮いた状況で出土しているため、追葬時の遺物とする。土器の時期は大半が7世紀後半代の製品である。他に土師器小皿1点(98)が、閉塞石の上から出土した。時期的には8世紀後半代の遺物で、当時代にも墓前祭祀を行った可能性をもち、

玄室

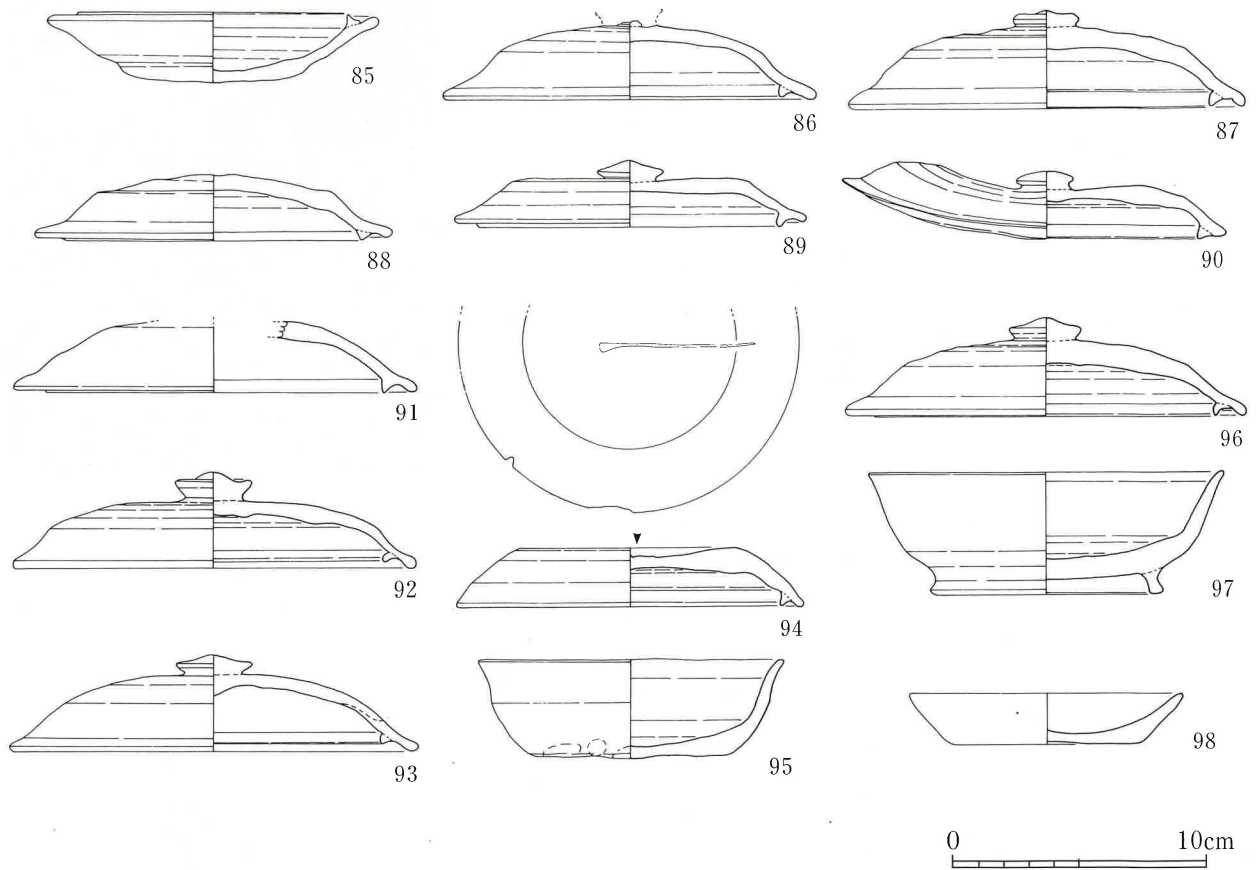
玄室内からは人骨、副葬品は出土していない。



第44図 第5支群6号墓実測図 (1/40)



第45图 第5支群6号墓遺物出土状況実測図 (1/20)



第46図 第5支群6号墓出土遺物実測図 (1/3)

表10 第5支群6号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
85	坏身	10.6 13.0 2.7	立ち上がりはわずかに外反しながらのび、端部は丸い。受部は上方向へのび端部は尖り気味である。底部は平らである。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り未調整	淡青灰色	石英粒(1~3mm)多量	良好		
86	坏蓋	12.5 14.6 -	天井部は丸く、中央につまみを有するが剥離している。口縁部は下外方向へのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は丸い。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ・回転ヘラ切り未調整	淡青白色	石英粒(1~3mm)多量	やや不良		
87	坏蓋	12.8~13.2 15.6~16.1 3.8	天井部は丸く、中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は外方向へのび、端部は尖り気味である。	二方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	淡青灰色	石英粒(1~4mm)・粗砂多量	良好		ゆがみ大故意に割っている可能性有
88	坏蓋	11.6 14.0 -	天井部は低く丸い。口縁部はわずかに内傾しながらのび端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切り未調整	暗茶褐色	石英粒(1~3mm)多量	良好		
89	坏蓋	11.8 13.8 2.6	天井部は低く平らである。中央に宝珠つまみを有する。口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は丸い。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	濃青灰色	石英粒(1~3mm)多量	良好		ゆがみ有
90	坏蓋	13.0 15.1 2.6	天井部は低く平らである。中央に宝珠つまみを有する。口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は丸い。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・回転ナデ	濃青灰色	石英粒(1~2mm)多量	良好		ゆがみ大一部自然釉

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
91	坏蓋	13.3 15.8 -	天井部は高く丸い。口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下方向へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削り	灰色 / 褐灰色	石英粒(1~ 2mm)・白色 細粒多量	良好		
92	坏蓋	13.2 15.8 3.8	天井部は丸く、中央に宝珠つまみを有する。口縁端部は内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下内方向へのび、端部は丸い。	一定方向ナ デ・回転ナ デ	回転ナデ・ 回転ヘラ削り・横ナ デ	淡青灰色	石英粒(1~ 3mm)・粗砂 多量	良好		
93	坏蓋	12.9 16.0 3.8	天井部は丸く、中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下内方向へのび、端部は丸い。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削り・回転ナ デ	淡青白色	石英粒(1~ 4mm)・長石 粒角閃石粒 多量	良好		
94	坏蓋	11.6 13.6 2.3	天井部は平らである。口縁端部は下外方向へのび、端部は丸い。受部下方向へのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ切り未調整	淡茶色	石英粒(1~ 4mm)・粗砂 微細雲母多 量	良好	有	95とセット 故意に打ち欠 いた可能性有 八女窯?
95	坏身	12.0 8.0 3.9	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。底部は深く平らである。	指圧痕・一 定方向ナデ 丁寧な横ナ デ	丁寧な横ナ デ・横ナデ ナデ・指圧 痕	淡赤茶色	石英粒(1~ 2mm)・多量	良好		94とセット 故意に割った 可能性有 八女窯?
96	坏蓋	13.4 15.8 3.9	天井部は丸く、中央に宝珠つまみを有する。口縁端部は内傾しながらのび、端部は丸い。受部は下内方向へのび、端部は丸い。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削り・回転ナ デ	淡青灰色	石英粒(1~ 2mm)多量	良好		97とセット
97	坏身	14.0 9.2 4.8	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。底部は高く平らである。高台は外寄りで下外方向へのび、端部は面を成す。接地面は平らで貼り付け高台である。	一定方向ナ デ・回転ナ デ	回転ナデ・ 回転ヘラ削り	淡青灰色	石英粒(1~ 3mm)・粗砂 多量	良好		96とセット
98	皿	10.7 7.3 2.0	口縁部は上外方向へのび、端部は尖り気味である。底部は浅く平らである。	一定方向ナ デ・回転ナ デ	回転ナデ・ 回転ヘラ切り後ナ デ	黄橙色	角閃石粒・ 赤褐色粒多 量・長石粒 若干	良好		土師器

第5支群7号墓

概要

7号墓は5・6号墓と同様に独立した前庭部をもち、第5支群中、最も西に位置する。6号墓より60cm程度低い。二次堆積土で覆われていたため残りは比較的良好である。標高は羨門付近で121.35m、玄室主軸方向はN-80°-Eをさし、南方向に開口する。調査は前庭部遺物の検出・同プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は同支群中では最大の大きさであり、左右に造り出しを設けていることから、当横穴墓群中では唯一の墓道状の前庭部をもつ横穴墓である。長さ3.19m、前面での幅2.06m、造り出し部を含めると幅4.23mである。床面はほぼ平坦で、前庭部後方に向けて約4°の傾斜で緩やかに下降する。左の造り出し部は0.2m程度高く構築されており、幅1.5m前後である。造り出し前方部には坏のセットが一括して出土した。右の造り出し部は0.2m程度高く構築されており、幅0.4m前後で内側へ向って緩く下降している。造り出し前方部には完形の平瓶1個が出土した。

羨門部は、一部崩落がみられるものの比較的良好である。幅は0.60m、高さ0.81mである。前庭部と羨門部の境には高低差約20cmの段をもち、羨門部が1段高く構築されている。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ1.14m、幅は上部で0.75m、下部で0.87m、厚さ0.18m前後で、各面とも工具痕が残るが、丁寧な成形を施している。閉塞石は前庭部方向へ倒れており、床面とほぼ接している。閉塞石は人為的に引き倒されたと考えられる。

前庭部内の埋土は6層確認された。Ⅵ層は初葬埋土の残土と考えるが、Ⅳ・Ⅴ層とともに追葬埋土の可能性もある。Ⅳ・Ⅴ層は閉塞石の上面に堆積していることから追葬埋土と考える。Ⅰ～Ⅱ層は二次堆積土である。

羨道・玄室

羨道は、比較的良好で、長さ0.78m、玄門幅0.83m、高さ0.91mで、玄門部分が幾分広がっている。床面は凹凸がみられ、中央が一番高く、羨門・玄門方向に向って緩やかに下降する。玄室の平面形態は胴張り隅丸方形の様相を呈している。玄室床面には初葬時に径20～30cm前後の扁平河原石を敷き詰めている。標高は中央床面で121.7m、長さ1.85m、幅は裾部1.55m・中央部1.92m・奥壁1.55m、高さ1.21mで床面はほぼ平坦である。奥壁・側壁とも80°前後の傾斜でほぼ直線状に立ち上がる。天井形態は寄棟で天井が屋根形をなし、壁には稜線をもち、「軒」を表現している。四隅からは稜線が「軒」に向ってのびる。

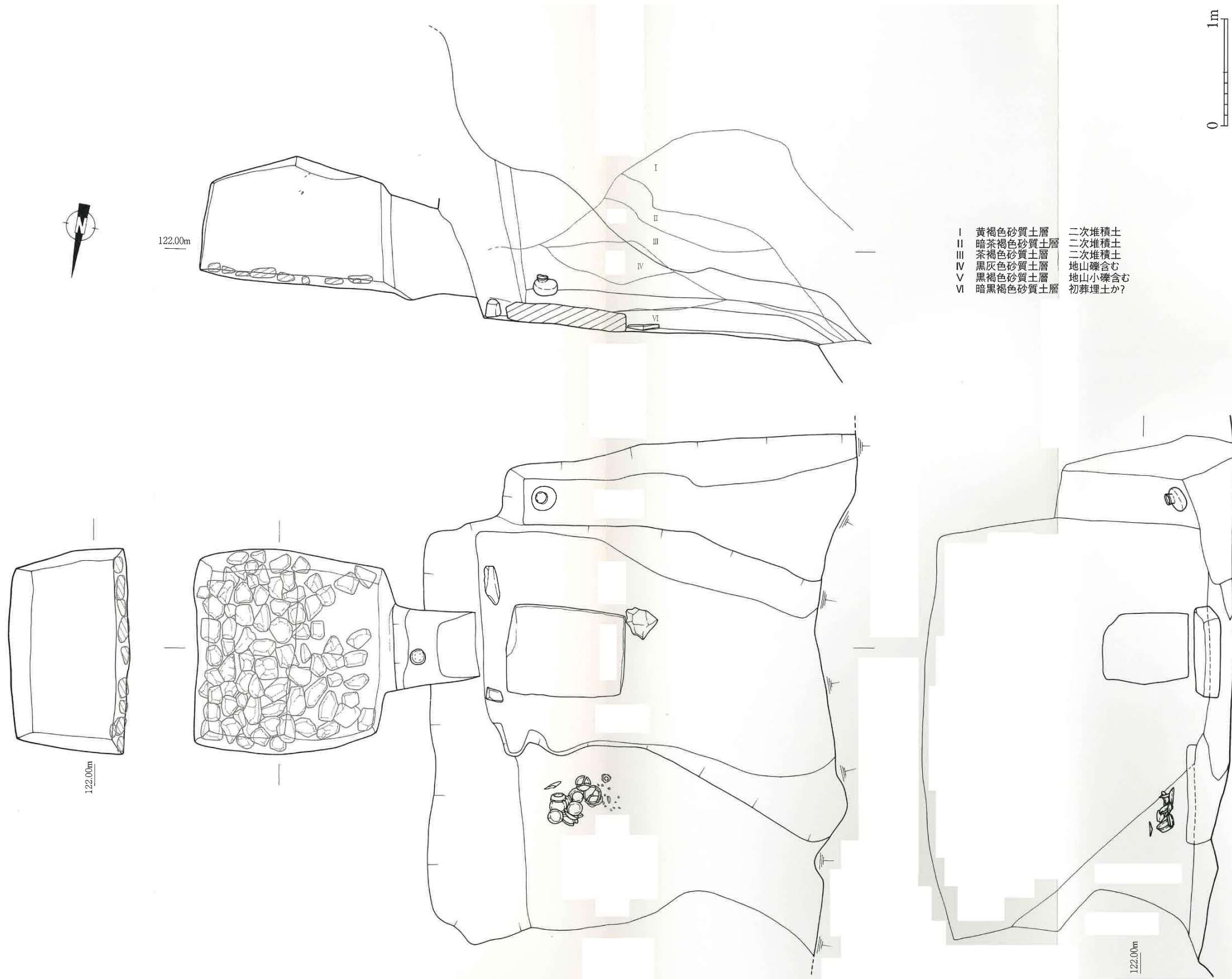
遺物の出土状況（第48図）

前庭部

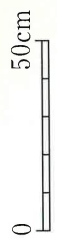
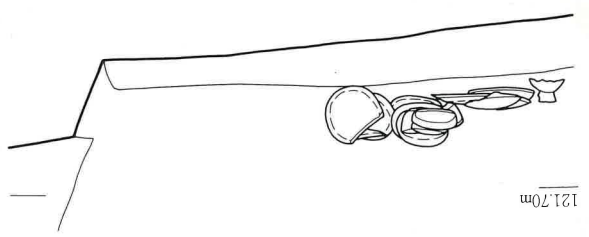
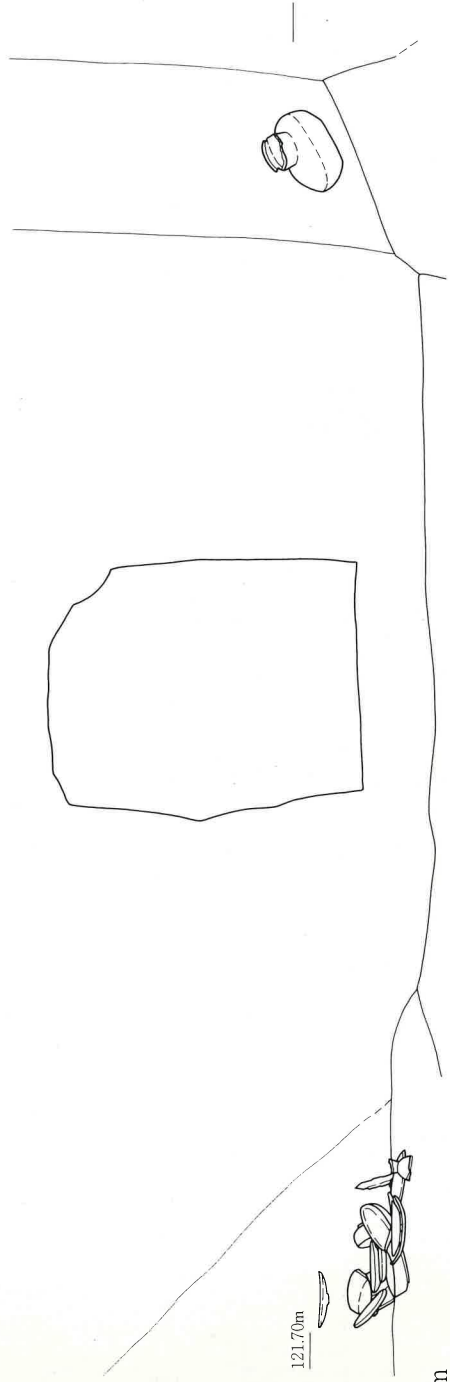
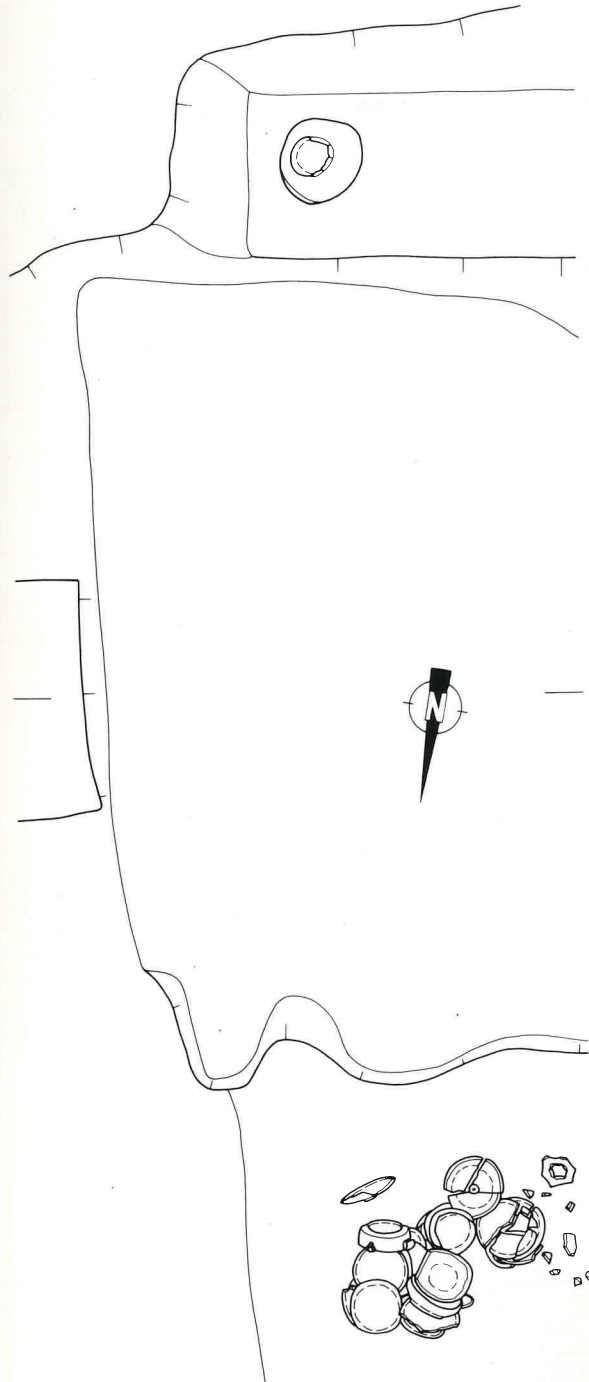
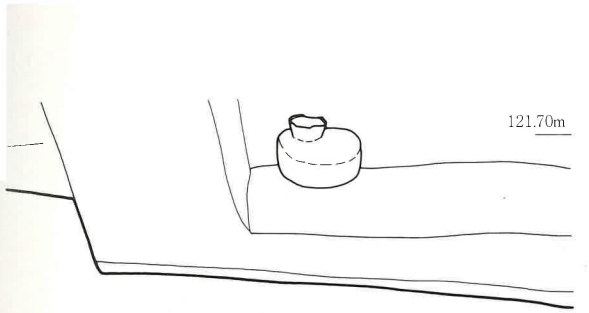
前庭部左造り出し部から須恵器の坏が10セット（99～116）と高坏（118）が一括して出土した。出土状況から祭祀行為を行った後に一括して破棄されたものと考えられる。左造り出し部からは完形の平瓶（119）が1点出土した。土器の時期は大半が7世紀後半代の製品である。

羨道

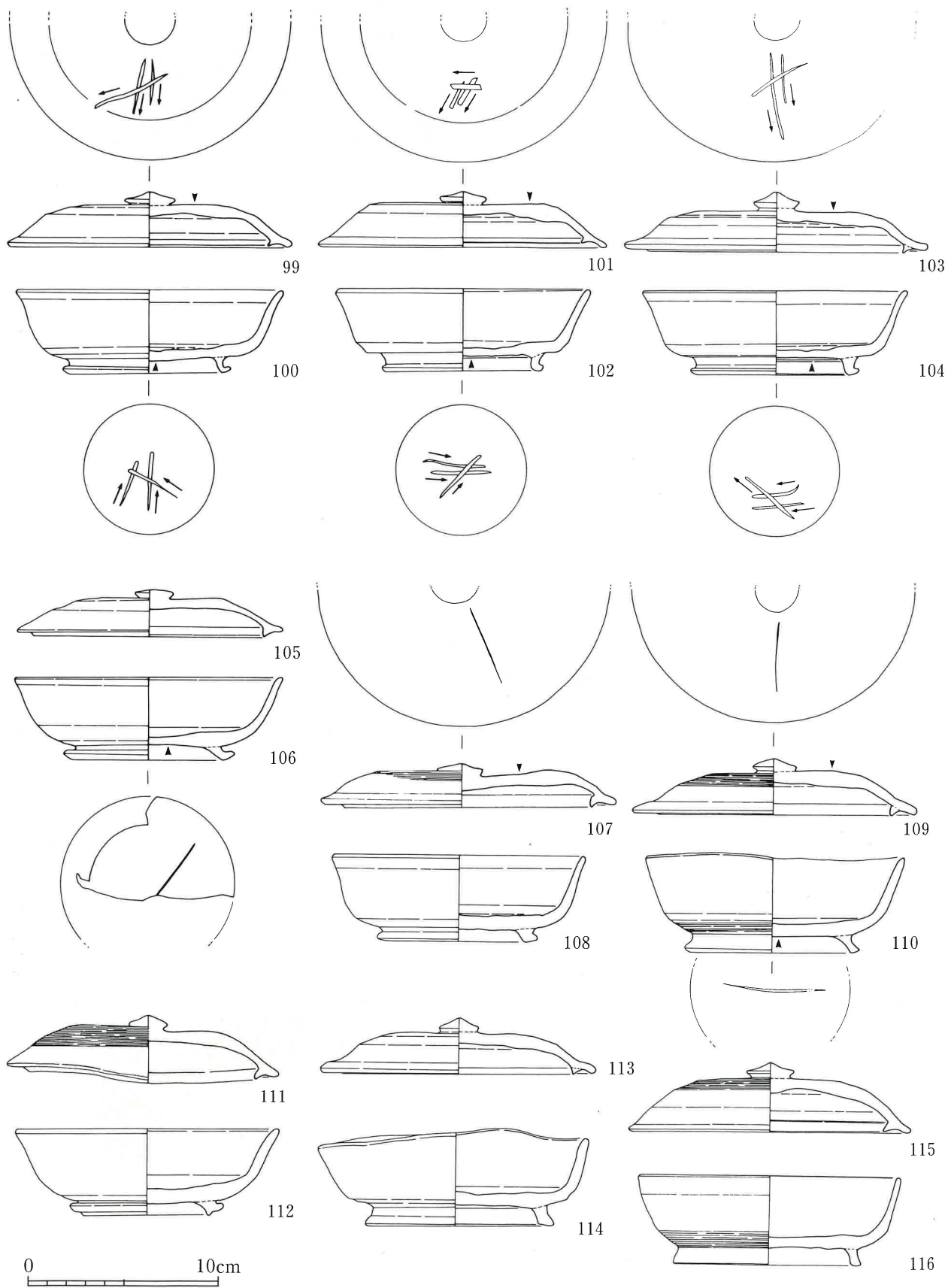
土器器皿（117）1点が、羨道床面から出土した。時期的には8世紀後半代の遺物で、当横穴墓の二次使用と考える。



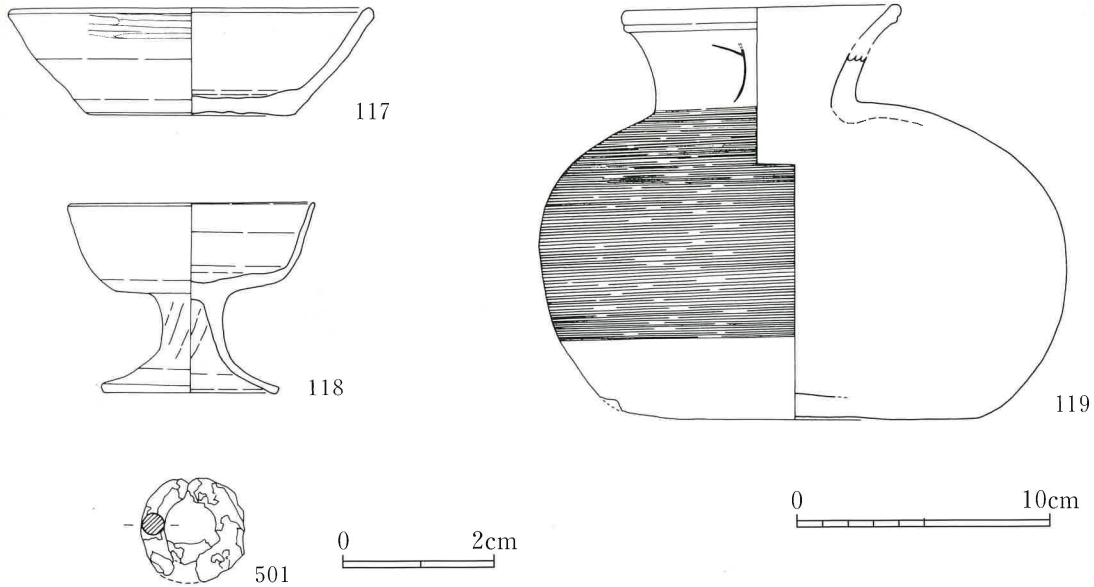
第47図 第5支群7号墓実測図 (1/40)



第48图 第5支群7号墓遺物出土状況実測図 (1/20)



第49图 第5支群7号墓出土遗物实测图1 (1/3)



第50図 第5支群7号墓出土遺物実測図2 (1/3・実大)

表11 第5支群7号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
99	坏蓋	12.4 14.8 2.9	天井部は平らで中央に宝珠つまみを有する。口縁端部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下内方向へのび、端部は尖り気味である。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	茶褐色 濃青灰色	石英粒(1~4mm)・粗砂多量	良好	有	100とセット 八女窯?
100	坏身	13.8 8.7 4.6	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台をやや中央寄りに付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、内端部が接地する。高台は坏部成形後貼り付けたものである。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・回転ヘラ切り	オリーブ 灰色 にぶい褐色	精緻	良好	有	99とセット 八女窯?
101	坏蓋	12.3 15.0 2.9	天井部は平らで中央に宝珠つまみを有する。口縁端部は下外方向へのび、端部は丸い。かえりは下内方向へのび端部は尖り気味である。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	淡茶褐色 黒灰色	石英粒(1~2mm)・微細雲母多量	良好	有	102とセット 八女窯?
102	坏身	13.4 8.0 4.3	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。高台を底部やや外寄りに付し下方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。高台は坏部成形後貼り付けたものである。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・横ナデ・回転ヘラ切り	暗茶褐色	石英粒(1~3mm)多量	良好	有	101とセット 八女窯?
103	坏蓋	13.2 15.8 3.1	天井部は平らで中央に宝珠つまみを有する。口縁端部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。かえりは下内方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	赤茶色	石英粒(1~3mm)多量	やや不良	有	104とセット 八女窯?
104	坏身	13.8 8.8 4.4	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台を底部やや外寄りに付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、内端部が接地する。坏部成形後貼り付けたものである。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・横ナデ・回転ヘラ切り	黒灰色	石英粒(1~3mm)・粗砂多量	良好	有	103とセット 八女窯?
105	坏蓋	12.0 14.0 2.4	天井部は平らで中央に宝珠つまみを有する。口縁端部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下内方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	青灰色	石英粒(1~3mm)・粗砂多量	良好		106とセット 八女窯?
106	坏身	14.0 9.0 4.3	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台を底部やや外寄りに付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、内端部が接地する。坏部成形後貼り付けたものである。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・ナデ	灰色	石英粒(1mm)微量	良好	有	105とセット 八女窯?

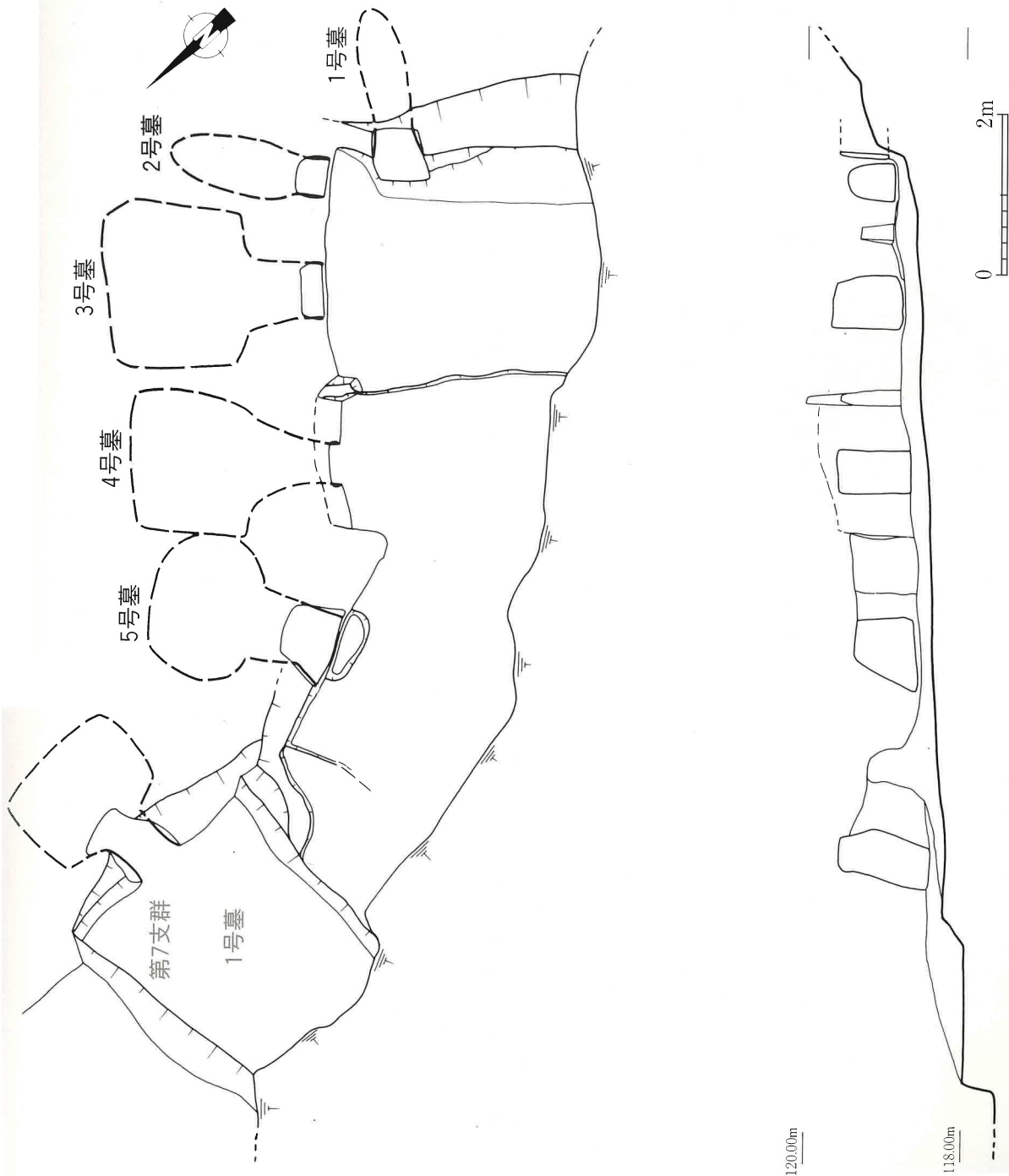
番号	器種	法量 口径(底部) 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
107	坏蓋	12.8 15.4 2.3	天井部はほぼ平らで中央に宝珠つまみを有し、カキ目を施す。口縁端部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ カキ目・横 ナデ	灰赤色 ? 灰色	石英粒(1~ 2mm)・砂粒 多量	良好	有	ゆがみ有 八女窯?
108	坏身	13.2 7.2 4.5	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台を底部やや外寄りに付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、内端部が接地する。坏部成形後貼り付けたものである。	二方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ 横ナデ・回 転ヘラ切り 離し	淡青灰色 ? 暗赤茶色	石英粒(1~ 5mm)・粗砂 多量	良好		八女窯?
109	坏蓋	12.0 14.8 2.9	天井部は平らで中央に宝珠つまみを有し、カキ目を施す。口縁端部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ カキ目・横 ナデ	黒灰色	石英粒(1~ 3mm)多量	良好	有	ゆがみ有
110	坏身	13.6 9.0 5.5	口縁部は上外方向へのび、端部はやや尖り気味である。底部から体部の一部にカキ目を持つ。高台を底部外寄りに付し、下外方向へのびる。端部は面を成し内端部が接地する。坏部成形後貼り付けたものである。	回転ナデ	回転ナデ・ カキ目・横 ナデ・回転 ヘラ切り	青黒色 ? 灰色	石英粒(1~ 2mm)・砂粒 多量	良好	有	ゆがみ有
111	坏蓋	11.3~ 11.8 13.5~ 14.0 3.5	天井部は高くほぼ平らで中央部に宝珠つまみを有し、カキ目を施す。口縁端部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・ カキ目・横 ナデ	明オリー ブ灰色 ? 黄灰色	石英粒(1~ 3mm)・白色 細粒・粗砂 多量	良好		112とセット ゆがみ大
112	坏身	13.8 6.6 4.5	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台を底部外寄りに付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、1条の沈線を持つ。内端が接地する。坏部成形後貼り付けたものである。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ 横ナデ・回 転ヘラ切り	淡青灰色 ? 黒灰色	石英粒(1~ 3mm)多量	良好		111とセット
113	坏蓋	12.0 14.4 2.9	天井部はほぼ平らで中央部に宝珠つまみを有し、カキ目を施す。口縁端部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削 り・横ナデ	淡青灰色	石英粒(1~ 5mm)多量	良好		114とセット
114	坏身	14.1 9.7 4.1~ 4.6	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。高台を底部やや外寄りに付し下方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。高台は坏部成形後貼り付けたものである。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ切 り	濃青灰色	石英粒(1~ 3mm)多量	良好		113とセット ゆがみ大
115	坏蓋	11.8 14.6 3.6	天井部は高くほぼ平らで中央部に宝珠つまみを有し、カキ目を施す。口縁端部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	一定方向ナ デ・回転ナ デ	回転ナデ・ カキ目・横 ナデ	淡青灰色	石英粒(1~ 6mm)・粗砂 多量	良好		116とセット
116	坏身	13.6 10.0 4.7	口縁部は上外方向へのび、端部は面を成す。底部から体部の一部にカキ目を施す。高台を底部外寄りに付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。坏部成形後貼り付けたものである。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ カキ目・横 ナデ・回転 ヘラ切り	青灰色	石英粒(1~ 5mm)・粗砂 多量	良好		115とセット
117	坏身	14.4 8.2 4.2	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。底部は平らである。	回転ナデ	ミガキ・回 転ナデ・回 転ヘラ切り	明橙褐色	角閃石粒(1 ~3mm)・白 色粒多量	良好		土師器外面に スス附着?
118	高坏	10.6 7.4 7.0	坏部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。底部は平らである。脚部は下外方向へのび、端部は面を成す。	ロクロナデ 回転ナデ	回転ナデ・ 粗いカキ目 後ナデ・回 転ナデ	濃黒灰色	石英粒(1~ 3mm)・砂粒 多量	良好		外面自然釉
119	平瓶	11.1 14.0 16.2 20.9	口縁部は外反しながらのび、端部は肥厚し丸い。1条の沈線を持つ。胴部は楕円形を呈し、底部は平らである。(20.9は胴部最大径)	回転ナデ	回転ナデ・ カキ目・回 転ヘラ削り 後ナデ	にぶい赤 灰褐色	白色細粒・ 赤褐色粒多 量・石英粒 若干	良好	有	

表 12 第 5 支群 7 号墓出土耳環計測表 (単位:mm・g)

番号	作り	外径	断面径	重量	備考
501	銅地金張	13.5 × 14	2.5 × 2.5	1.0	緑青・金張一部残存

第6支群

第6支群は南東方向、第5支群の下段に位置する。第5支群と同様、斜面を削り出して平坦部を造り出している。当支群は5基の横穴墓で構成されており、ほぼ同じ斜面上に7～9支群が存在する。当支群は南西向き斜面を東西約10m、南北2～3m範囲に削り出し、テラス状の平地を造り出している。標高は前庭部床面で119.5～119.8mである。1～3号墓・4・5号墓は前庭部を共有している。当支群の存在は調査以前は確認できなかったが、第8支群・第7支群と調査を進めていった結果、第6支群の存在が判明した。



第51図 第6支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

第6支群1号墓

概要

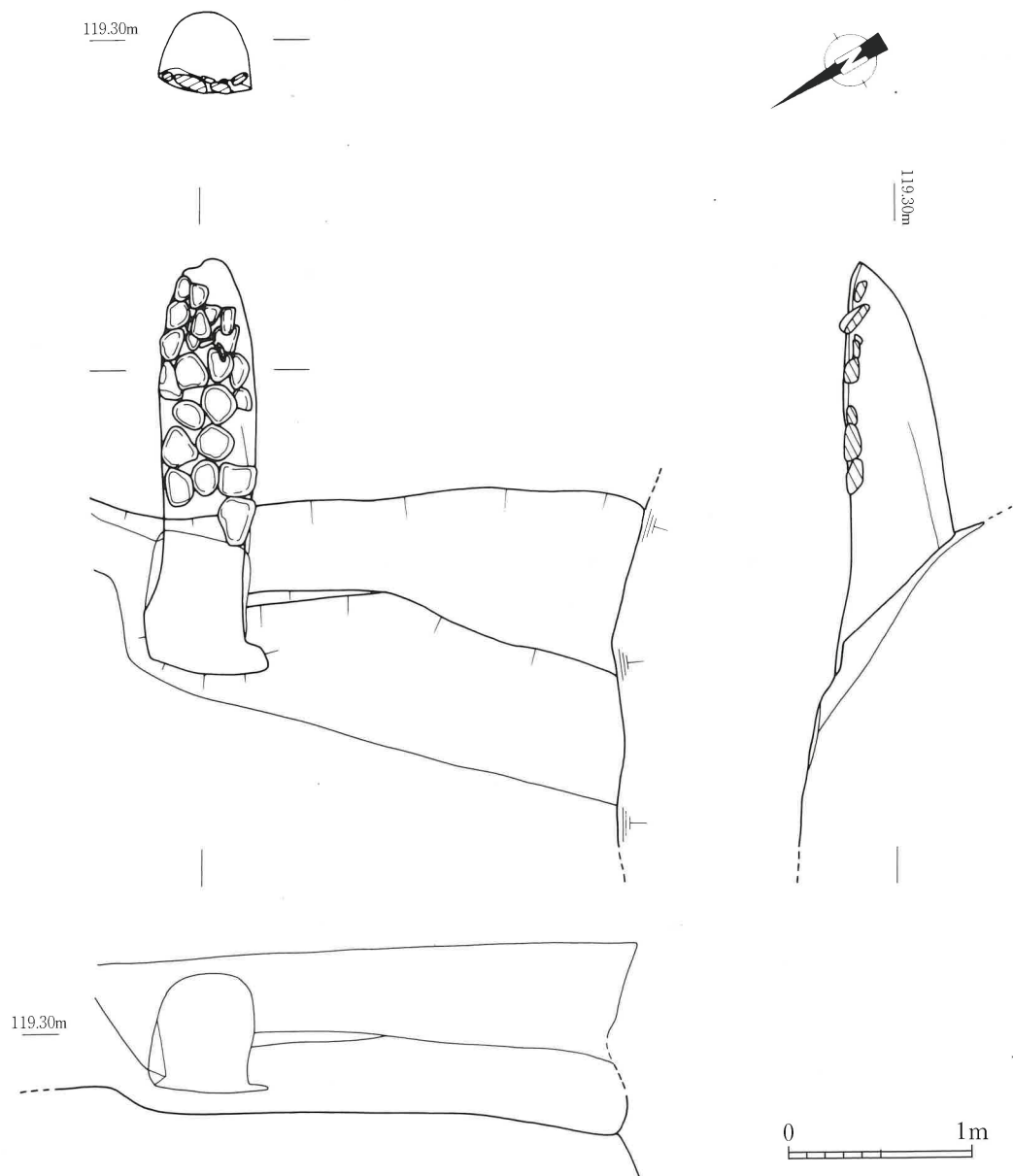
1号墓は第6支群の東端に位置し、西方向に開口する。当横穴墓は2号横穴墓とともに、3号墓構築後に築造された横穴墓である。二次堆積土で覆われていたため保存状態は非常に良好である。標高は羨門付近で119.0m、玄室主軸方向はE-30°-Eをさす。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、玄室内の構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

当横穴墓は3号墓の前庭部右側壁部分に構築されており、独自の前庭部はもたない。

羨門部は側壁の一部が崩落しているが、比較的保存状態は良い。3号前庭部と羨門部の境に10cm程度の段差をもち、羨門部が1段高い。幅0.55m、高さ0.61mで、側壁の傾斜は45°前後である。



第52図 第6支群1号墓実測図 (1/40)

閉塞施設はもたない。

羨道・玄室

当横穴墓は羨道と玄門、玄門と玄室の明瞭な区画のない、いわゆる不定隅丸長方形型の玄室形態をとっているため、羨門から先は玄室としてとらえた。玄室は長方形の様相を呈し、標高は 119.0m、長さ 2.2m、幅 0.51m、中央の高さ 0.52m である。玄室床面には径 20cm 前後の扁平河原石を乱雑に敷いている。

遺物の出土状況

前庭部、玄室内とも遺物は出土していない。

第 6 支群 2 号墓

概要

2 号墓は第 6 支群の東端、3 号墓の脇に位置し、南西方向に開口する。当横穴墓は 1 号横穴墓とともに、3 号墓構築後に築造された横穴墓である。二次堆積土で覆われていたため保存状態は良好である。標高は羨門付近で 118.8m、玄室主軸方向は $N - 52^\circ - E$ をさす。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、玄室内の構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

当横穴墓は 4 号墓の右側に構築されており、独自の前庭部はもたない。

羨門部は側壁の一部が崩落しているが、比較的保存状態は良い。3 号前庭部と羨門部の境に 5cm 程度の段差をもち、羨門部が 1 段高い。幅 0.47m、高さ 0.56m、側壁の傾斜は 60° 前後である。

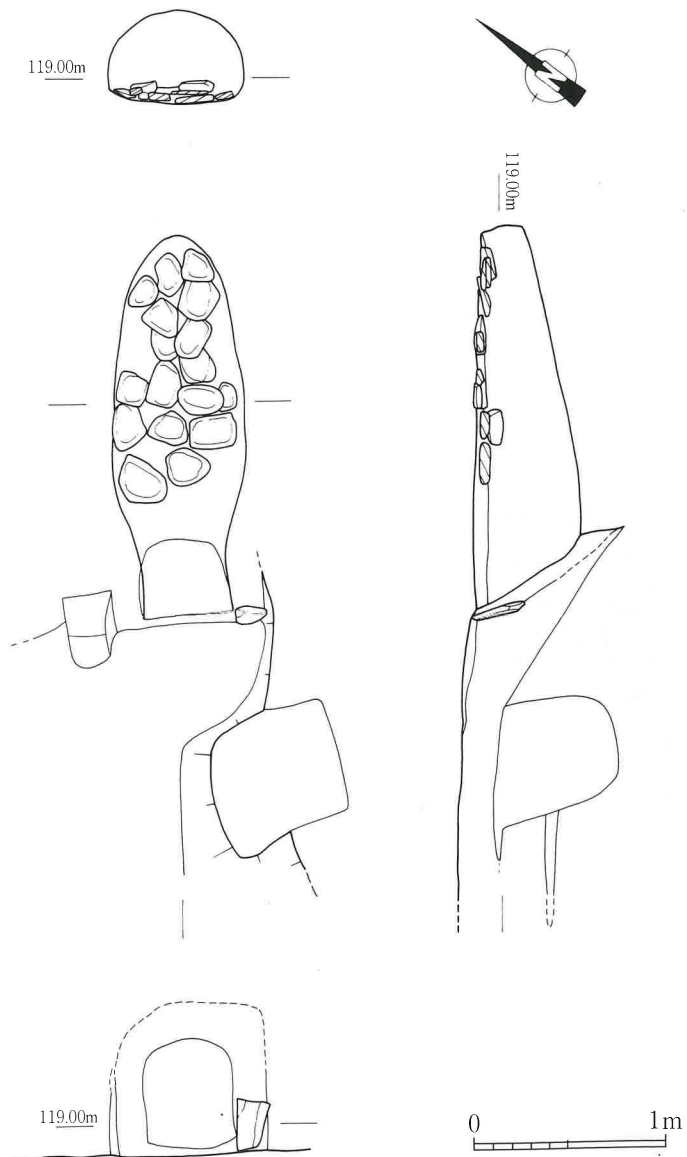
閉塞施設は羨門右横に高さ 0.3m、幅 0.15m 程度の板石 1 枚が残存しているだけである。

羨道・玄室

当横穴墓も 1 号墓と同様に羨道と玄門、玄門と玄室の明瞭な区画のないいわゆる不定隅丸長方形型の玄室形態をとっているため、羨門から先は玄室としてとらえた。玄室は長方形の様相を呈し、標高は 118.9m、長さ 1.98m、中央幅 0.57m、中央での高さ 0.57m である。玄室床面には径 20cm 前後の扁平河原石を乱雑に敷いている。

遺物の出土状況

前庭部、玄室内とも遺物は出土していない。



第 53 図 第 6 支群 2 号墓実測図 (1/40)

第6支群3号墓

概要

3号墓は独立した前庭部をもち、この前庭部を利用して1・2号墓が構築されている。二次堆積土で覆われていたため、羨門壁の一部が剥落していただけで、保存状態は比較的良い。標高は羨門付近で118.8m、玄室主軸方向はN-43°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は前述したように、単独の領域をもち、長さ3.36m、幅2.23mで、ほぼ長方形である。床面は中央付近から後方に向かって約10°の傾斜で緩やかに下降する。

羨門部は右壁の一部が剥落しているものの、比較的保存状態は良い。幅は0.66m、高さは0.87mである。前庭部と羨門の間には高低差約5cmの段をもち、羨門が1段高く構築されている。前庭部との境に掘り込みがあるため、約10cmの高低差をもち、

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ0.98m、幅は0.8m前後、厚さ0.2m前後で、各面とも工具痕が残るが、丁寧な成形を施している。特に上部両角は面取りを行い、丸味を持たせている。閉塞石は前庭部中位の埋土を除去した後に倒されたような様相をみせており、下部には埋土が1層堆積している。このため閉塞石は人為的に倒されたものとする。閉塞石の前面には長さ0.3m前後の礫2点を閉塞石の支え石としている。

前庭部内の埋土は6層確認された。Ⅲ～Ⅵ層は初葬埋土と考える。Ⅱ層は追葬埋土と考える。Ⅰ層は二次堆積土である。この結果、少なくとも1回の追葬が認められる。

次に前庭部を共有する1～3号墓であるが、埋土の堆積状況結果から、最初に3号墓を構築し、その後1号墓を、次に3号墓の追葬を行い、最後に2号墓を構築したと考える。

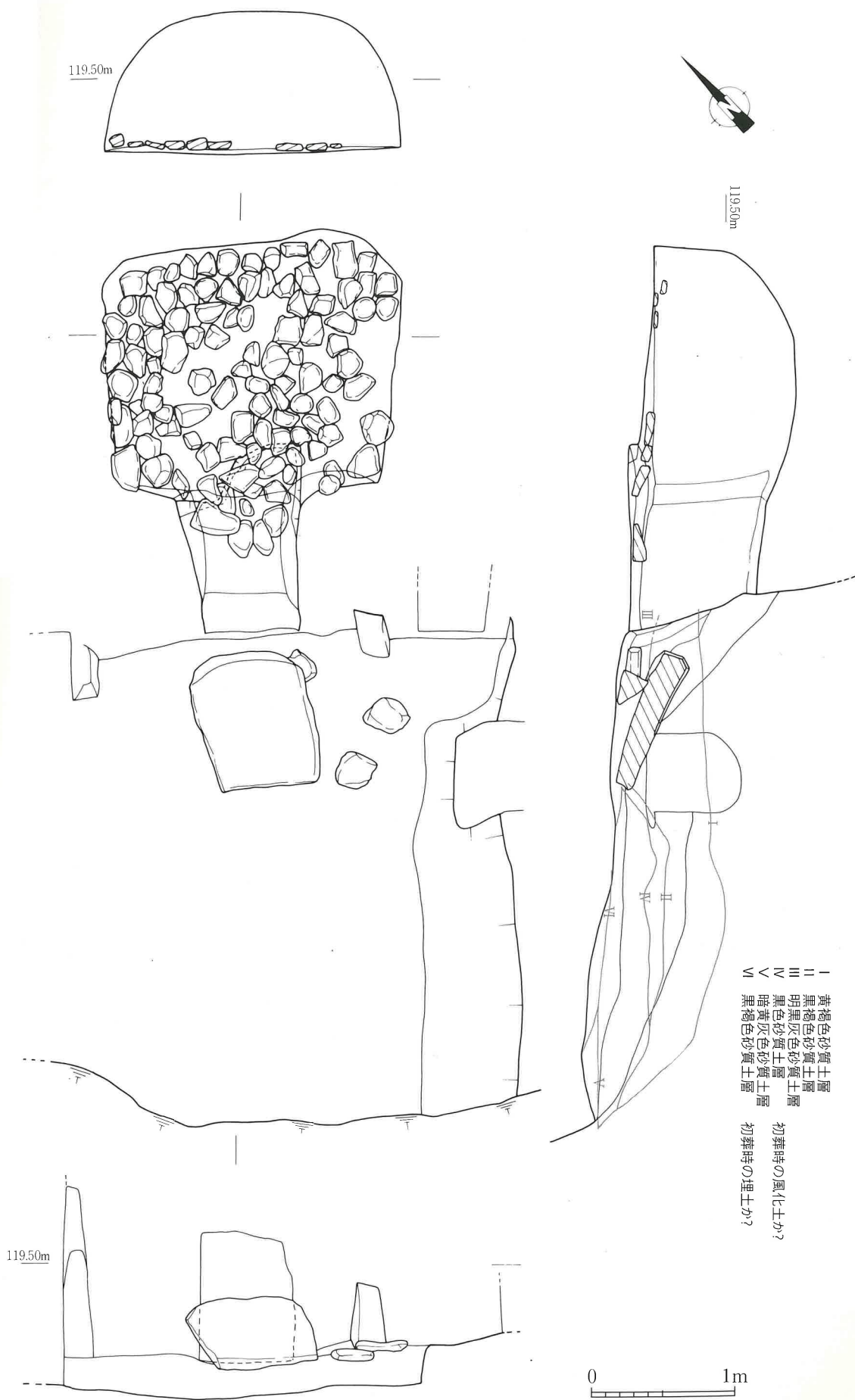
羨道・玄室

羨道は長さは0.95m、高さ0.90m、玄門幅0.88mで、床面は平坦である。敷石・排水溝等の施設はない。

玄室の平面形態は平入り隅丸長方形の様相を呈している。玄室床面には径10～20cm前後のやや小形の扁平河原石を敷いて礫床としている。枕石等の施設は認められない。標高は中央床面で128.95m、長さ1.78m、幅は裾部1.83m・中央部2.0m・奥壁2.1m、高さ1.05mである。玄室と玄門の間には高低差約10cmの段をもち、玄室が1段高く構築されている。床面はほぼ平坦で奥壁に向かって約5°の傾斜で上昇する。天井形態はアーチ形を呈している。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、側壁は内傾しながら立ち上がる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。



第54図 第6支群3号墓実測図 (1/40)

第6支群4・5号墓

概要

4・5号墓は第6支群の西端に位置し、第7支群1号墓と隣接する。羨門部付近の前庭部は独自の領域をもつものの、前庭部の大半は共有していて明確な区別はできない。4・5号墓とも南西方向に開口し、玄室の一部は接している。二次堆積土で覆われていたため保存状態は良好である。標高は羨門付近で118.5m、玄室主軸方向は4号墓がN-42°-E、5号墓がN-57°-Eをさす。調査は前庭部遺物の検出・プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

4号墓 前庭部は、羨門部付近に独自の領域をもっており、地山を削り出し、造り出し部を形成している。前庭部の長さは2.54m、造り出し部分の長さ約0.25～0.45m、幅1.69mで、床面はほぼ平坦で羨道部後方に向って約5°の傾斜で緩く下降している。前庭部左コーナー一帯に玄室より掻き出したと思われる敷石と、遺物が検出された。

羨門部はほぼ原形を留めている。幅は0.5m、高さは0.9mである。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ1.08m、幅0.64m、厚さ0.16m前後である。閉塞石は前庭部方向へ倒れており、床面とほぼ接している。

前庭部内の埋土は4層確認された。Ⅸ層は閉塞石が倒れる前に堆積した埋土で初葬埋土と考える。Ⅵ・Ⅷ層は閉塞石上面を覆って堆積していることから、追葬埋土と考えられる。Ⅰ層は二次堆積土である。土層観察の結果、少なくとも1回の追葬が認められる。

5号墓 前庭部は長さ2.34m、幅2.48mで、床面はほぼ平坦で羨道部後方に向って約5°の傾斜で緩く下降している。前庭部左側から玄室より掻き出したと思われる敷石が検出された。

羨門部は天井部及び左右壁の一部が崩落していて、保存状態はあまり良くない。幅は0.94m、高さは推定で0.8m前後である。

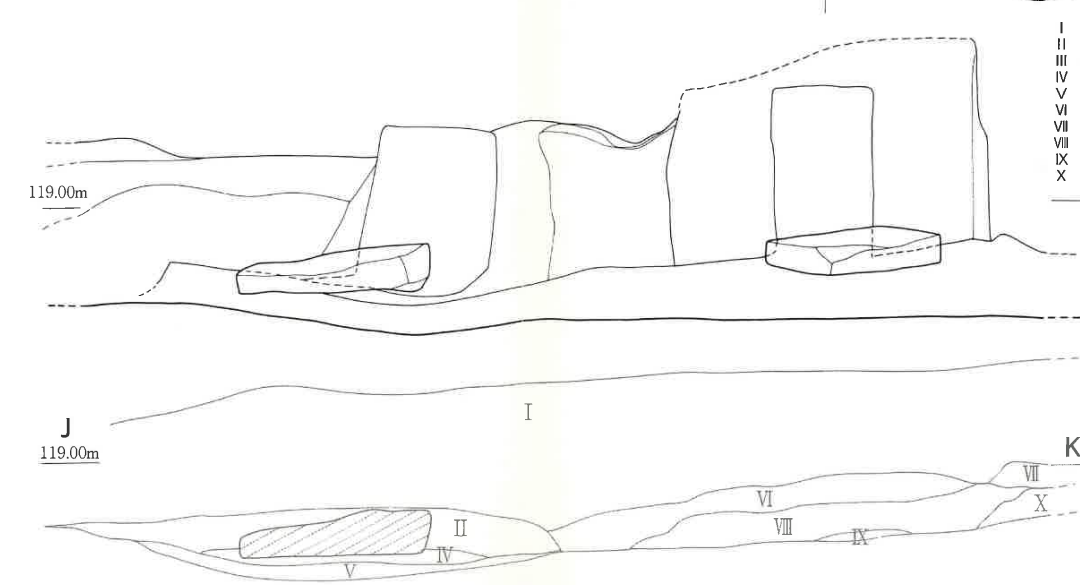
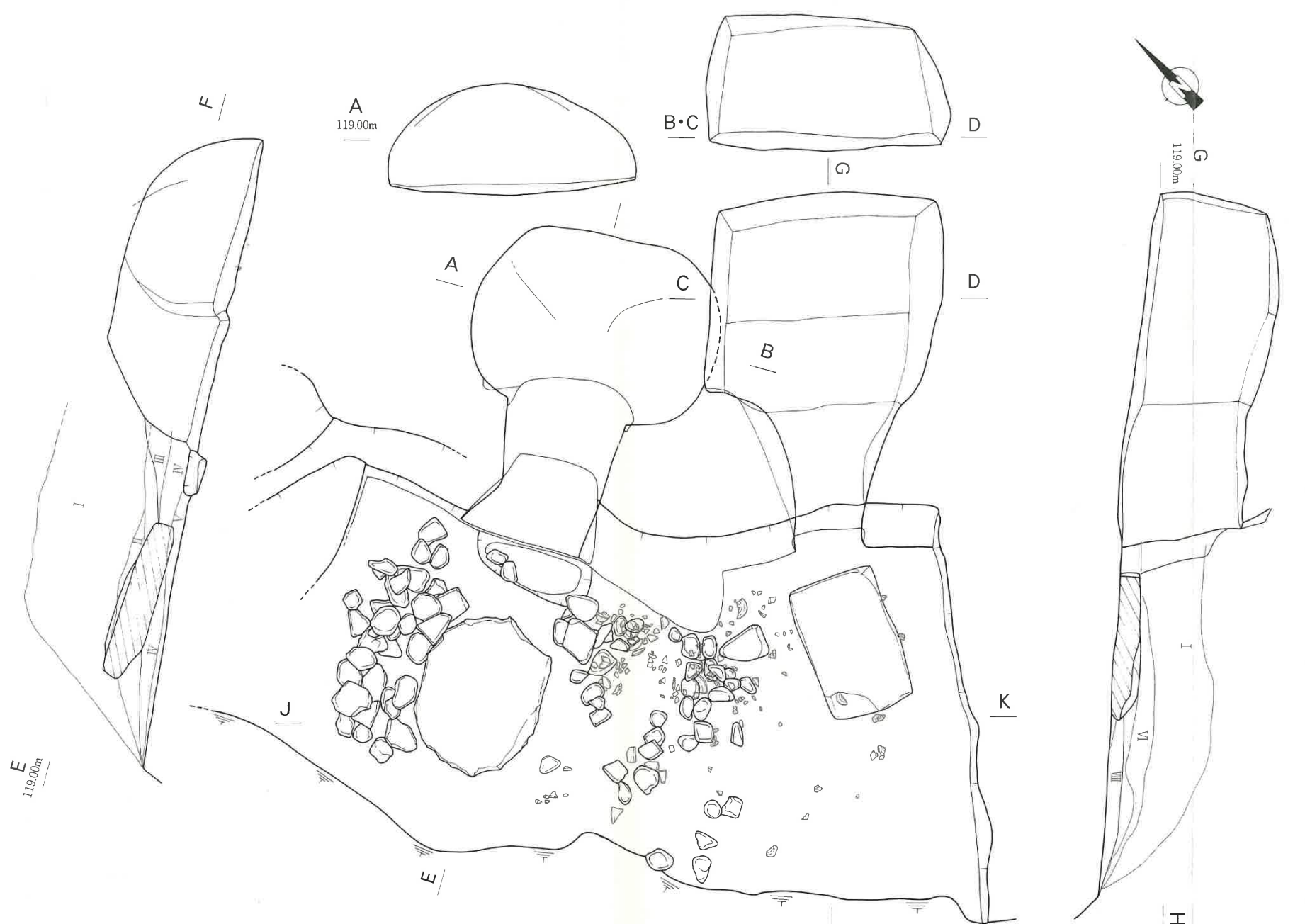
閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ1.18m、幅0.9m、厚さ0.14m前後で、四隅が欠損してやや丸味をもつ。閉塞石は前庭部方向へ倒れており、床面との間にⅣ・Ⅴ層が確認された。羨門部の前面を長さ30cm、幅90cm、深さ10cm程度に掘り込み、閉塞石を安定させるための溝としている。

前庭部内の埋土は5層確認された。土層観察の結果、Ⅳ～Ⅴ層は閉塞石が倒れる前に堆積した埋土で、初葬埋土と考える。閉塞石は追葬時に前方へ引き倒したものと考えられる。Ⅱ・Ⅲ層は閉塞石上面を覆って堆積していることから、追葬埋土と考えられる。Ⅰ層は二次堆積土である。この結果、少なくとも1回の追葬が認められる。

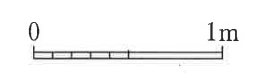
羨道・玄室

4号墓 羨道は長さは1.07m、高さ0.94m、玄門幅1.17m、高さ0.89mで、羨門から玄門に向って徐々に広がっている。床面はほぼ平坦で玄室方向へ向って約7°の傾斜で上昇する。敷石・排水溝等の施設はない。

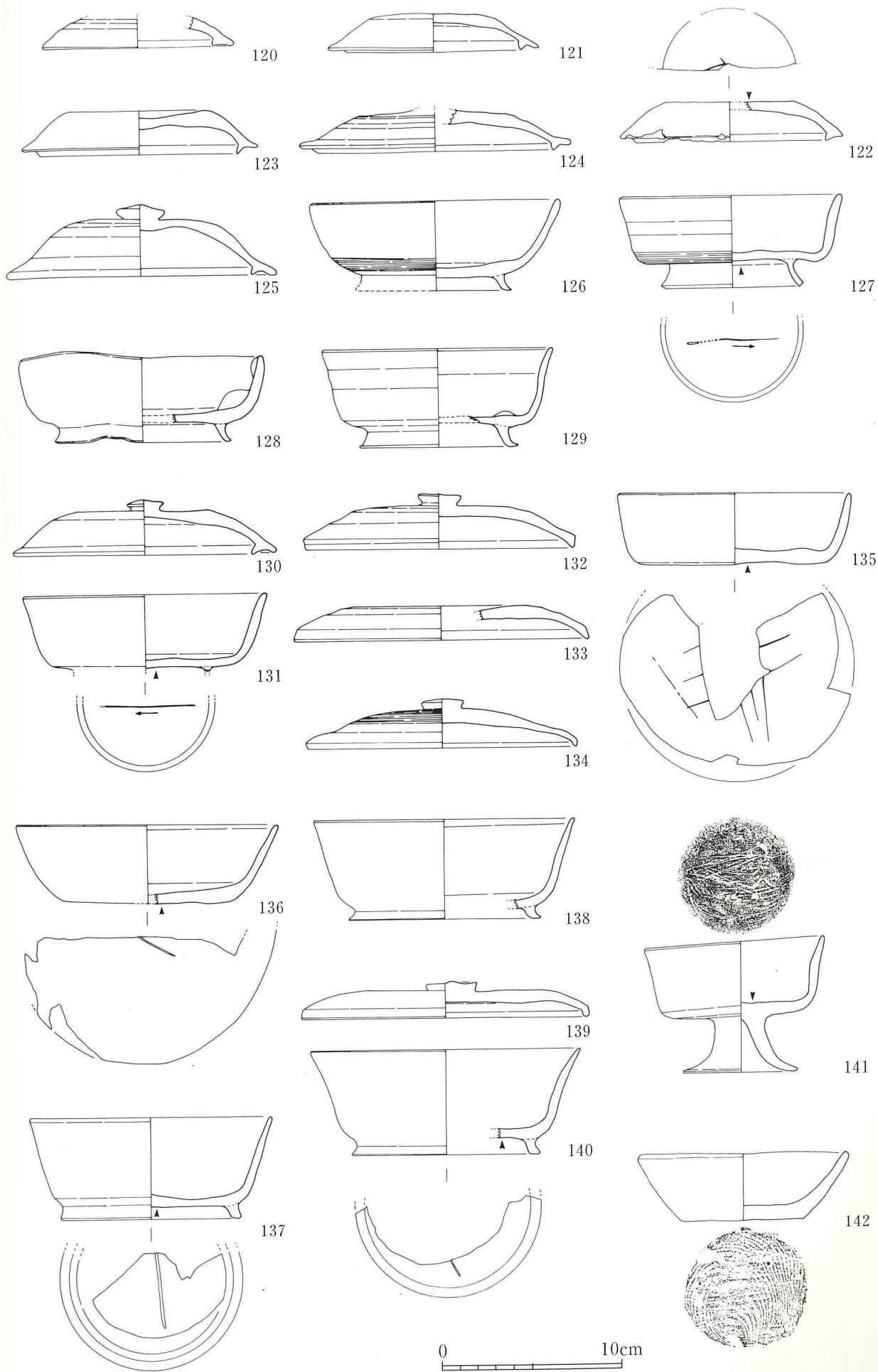
玄室は不整形の様相を呈している。標高は床面中央で118.9m、長さ1.55m、幅は裾部1.46m・中央部が1.74m・奥壁1.67m、中央の高さ0.99mである。玄室床面には当初、径20cm前後の扁平原石を敷いていたが、追葬時に前庭部へ掻き出したと考える。この敷石は前庭部の閉塞石横に集められている。床面はほぼ平坦で、奥壁へ向って約7°の傾斜で上昇する。奥壁は直線状に立ち上がり、両側壁は内傾しながら立ち上がる。天井形態は寄棟で天井が屋根形をなし、壁には稜線をもち、「軒



- I 茶褐色砂質土層 二次堆積土
- II 黒褐色砂質土層 2号墓追葬時の風化土か
- III 暗灰色砂質土層 ソフト、2号墓追葬時の埋土か
- IV 黄灰色砂質土層 2号墓初葬時の埋土か
- V 黒褐色土層 やや粘質、2号墓初葬時の埋土
- VI 黒褐色砂質土層 II層よりやや明るい、3号墓追葬時の埋土か
- VII 黒褐色砂質土層 IV層より暗い、II層に類似
- VIII 黒色砂質土層 3号墓追葬時の埋土か
- IX 茶褐色砂質土層 3号墓初葬時の埋土か
- X 黒色砂質土層 VII層と類似



第55図 第6支群4・5号墓実測図 (1/40)



第56图 第6支群4·5号墓出土遺物実測図 (1/3)

を表現している。

5号墓 羨道は長さは1.08m、高さ0.85m、玄門幅0.92m、高さ0.85mで、羨門中央で一端狭まり、再び玄門に向って徐々に広がっている。床面はほぼ平坦である。敷石・排水溝等の施設は施していない。

玄室は平入り楕円形の様相を呈している。標高は床面中央で118.6m、長さ1.28m、幅は裾部1.4m・中央部1.85m・奥壁1.1m、中央の高さ0.82mである。玄室床面には当初、径20～30cm前後の扁平河原石を敷いていたが、追葬時に前庭部へ掻き出したと考える。玄室と玄門の間には高低差約5cmの段差をもち、玄室が1段高く構築されている。床面はほぼ平坦で奥壁へ向って約5°の傾斜で上昇する。奥壁・両側壁とも内傾しながら立ち上がる。天井形態はアーチ形で、天井部に稜をもつ。

遺物の出土状況

遺物は4・5号墓前庭部の中間地点から出土したことから、明確な区別はつけにくい。このため4・5号墓出土遺物として扱った。

前庭部 4号墓と5号墓の中間の位置から坏・高坏が破砕された状態で出土した。副葬品は4号墓玄室内から掻き出された敷石と混じって出土した。出土土器の年代は7世紀後半代、8世紀前半～中頃、8世紀後半代のおおまかに3区分されるが、出土地点はほぼ1カ所で、出土位置・埋土の堆積状況からみても時期別のまとまりはない。このため、追葬時に一括して被棄したか、同位置に埋置していた上に、敷石を投げ捨てたと考える。

142は底部糸切りの皿で上部埋土中の一括遺物である。

玄室 人骨・副葬品とも出土していない。

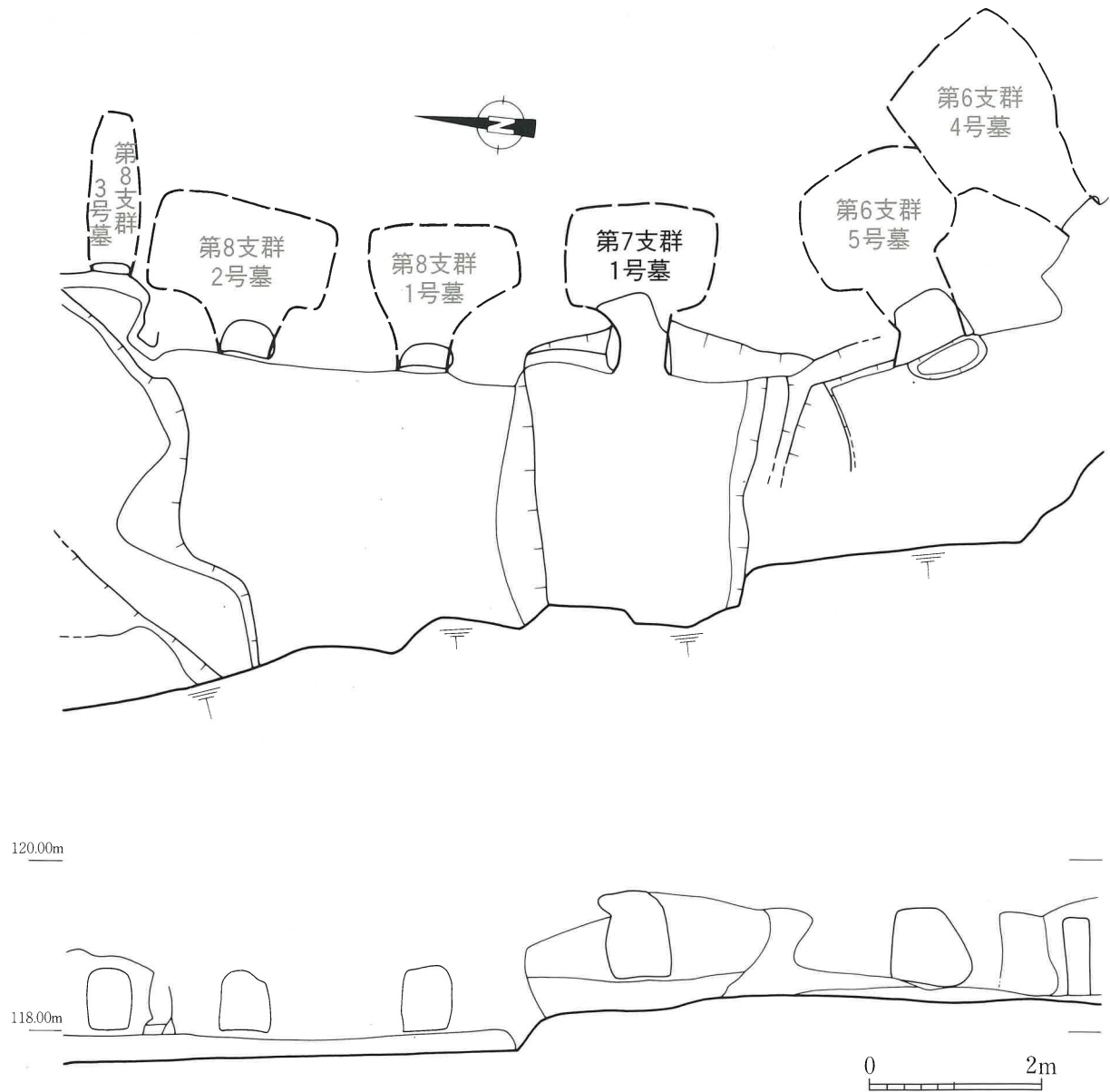
表13 第6支群4・5号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
120	坏蓋	8.4 10.6	口縁はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 茶褐色	角閃石粒・長石粒有	やや不良		
121	坏蓋	9.7 11.7 2.1	天井部はほぼ平らで、口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は尖り気味である。かえりは下外方向へのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ切り 後ナデ	灰色	白色細粒・ 角閃石粒若干	良好		
122	坏蓋	10.5 12.3 2.2	天井部は低く平らである。口縁部は内傾しながらのび、端部は尖り気味である。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味であるが、故意に打ち欠いている。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ 多方向ナデ	灰褐色	角閃石粒有 石英粒(1～ 2mm)微量	良好	有	口縁部に人為的 打ち欠き有
123	坏蓋	11.0 13.1 2.4	天井部は平らで口縁部は下外方向へのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ ナデ	灰褐色	白色細粒・ 角閃石粒若干	良好		
124	坏蓋	13.0 15.0	天井部はほぼ平らで、つまみを有すと思われる。口縁部は下外方向へのび、端部は丸い。かえりは下外方向へのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ ヘラ削り	灰色	角閃石粒多量・ 石英粒(1～ 3mm)有	良好		
125	坏蓋	12.4 15.0 4.0	天井部は高くほぼ平らで、中央に宝珠つまみを有す。口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削り・ 横ナデ	青灰色	微細粒有	良好		
126	坏身	13.8 (8.6) 5.0	口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。底部から体部の一部にカキ目を施す。高台を底部外寄りに付し、下方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。坏部成形後の貼り付けである。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ カキ目・横 ナデ・カキ 目	灰色	白色粒(1mm) 有	良好		

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
127	坏身	12.2 8.0 5.1	口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。底部から体部の一部にカキ目を施す。高台を底部中央寄りに付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。坏部成形後の貼り付けである。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ カキ目・回 転ナデ	灰色	白色粒(0.1~ 1mm)微量	良好	有	
128	坏身	13.4 9.8 4.7	口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。底部から体部の一部にカキ目を施す。高台を底部外寄りに付し、下方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。坏部成形後の貼り付けである。	回転ナデ	回転ナデ・ 横ナデ	灰色 と 黒色	微細粒有	良好		ゆがみ大 胎土内に気泡 入る
129	坏身	12.7 8.8 5.4	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。底部から体部の一部にカキ目を施す。高台を底部外寄りに付し、下方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。坏部成形後の貼り付けである。	回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削 り・横ナデ	灰黒色	精緻	良好		胎土内に気泡 入る
130	坏蓋	12.0 14.6 3.0	天井部は平らで中央に擬宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削 り・横ナデ	灰黄色	微細粒微量	良好		131とセット
131	坏身	13.1 - -	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台は剥離している。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ 横ナデ・回 転ナデ	灰白色	精緻	良好	有	130とセット
132	坏蓋	14.8 3.0	天井部はほぼ平らで中央に擬宝珠つまみを有する。口縁部はほぼ垂直に下方へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・ ナデ	灰褐色	白色細粒有 角閃石粒・ 雲母若干	良好		
133	坏蓋	16.3 -	天井部は平らで中央につまみを有する可能性有り。端部はやや下外寄りに直線的にのび、端部は尖り気味である。	一定方向ナ デ・回転ナ デ	回転ナデ	灰色	白色細粒・ 長石粒若干	良好		
134	坏蓋	14.8 2.7	天井部は丸みを持ち、カキ目を施す。中央に擬宝珠つまみを有する。口縁部はほぼ垂直に下方へのび、端部は尖り気味である。	二方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ カキ目状の 調整痕・ナ デ	明赤褐色	石英粒(2~ 4mm)角閃 石粒・赤色 粒若干	良好		
135	坏身	12.9 10.6 3.9	口縁部は上外方向へのび、端部は丸い。底部は平らである。	一定方向ナ デ・回転ナ デ	回転ナデ・ 多方向ナデ	灰色	石英粒(2~ 4mm)・白色 細粒有・角 閃石粒微量	良好	有	
136	坏身	14.6 (8.8) 4.3	口縁部は上外方向へのび、端部は丸い。底部は平らである。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ・ ナデ	橙色	精緻	良好	有	土師器
137	坏身	13.4 9.9 5.6	口縁部はやや外反しながらのび、端部は丸い。底部は深く平らである。高台を底部外方向に付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。坏部成形後の貼り付けである。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ ナデ	灰色	石英粒(1~ 2mm)有・角 閃石粒若干	良好	有	
138	坏身	14.4 10.6 5.5	口縁部はやや外反しながらのび、端部は丸い。底部は深く平らである。高台を底部外方向に付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。坏部成形後の貼り付けである。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石英粒(2~ 4mm)・角閃 石粒若干	良好		
139	坏蓋	16.0 2.1	天井部は低く平らである。中央に擬宝珠つまみを有する。口縁部はほぼ垂直に下方へのび、端部は尖り気味である。	ナデ	回転ナデ	灰色	白色粒(0.1 ~2mm)有	良好		140とセット
140	坏身	14.9 10.3 5.8	口縁部はやや外反しながらのび、端部は丸い。底部は深く平らである。高台を底部外方向に付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。坏部成形後の貼り付けである。	回転ナデ	回転ナデ	灰色	石英粒(2~ 3mm)多量・ 角閃石粒・ 白色細粒有	良好	有	139とセット
141	高坏	10.0 6.4 7.2	口縁部は外反しながらのび、端部付近でさらに外反する。端部は丸い。底部は平らである。脚部は下外方向へのび、端部は丸い。	ナデ・回転 ナデ	回転ナデ	灰色	石英粒(1~ 4mm)・白色 細粒若干・角 閃石粒微量	良好		
142	坏身	(12.0) 6.8 2.5~ 3.7	口縁部は外方向へのび、端部は丸い。底部は平らで糸切りである。	一定方向ナ デ・回転ナ デ	回転ナデ・ 回転糸切り	橙色	角閃石粒多 量・雲母有 赤色粒若干	良好		ゆがみ有

第7支群

第7支群は第6支群と第8支群の間に位置し、1基の横穴墓からなる。第6～8支群は僅かに標高が違っただけで、ほぼ同じ高さの斜面を切り開いて構築されている横穴墓群である。第7支群はそのほぼ中央、斜面のコーナー部分に位置する。左右支群とは前庭部で高低差をもち、独立した形態をとっている。



第57図 第7支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

第7支群1号墓

概要

1号墓は単独の前庭部をもち、西方向に開口する。二次堆積土で覆われていたが、羨道部が落盤しており、残りはあまり良くなかった。標高は羨門付近で118.6m、玄室主軸方向はN-84°-Eをさす。調査は前庭部遺物の検出・プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は前述したように、単独の領域をもち、長さ2.88m、幅2.61mで、長方形の様相を呈している。隣接する第6支群5号墓とは0.2mの段差をもち一段低く、8支群1号墓とは約0.4mの段差をもち一段高く構築されている。後方に向かって約8°の傾斜で緩やかに下降する。

羨門部から玄室に至る天井部は落盤のため、現存しない。羨門部両壁も途中から崩落している。幅は0.6m、高さは不明である。前庭部から玄室奥壁までほとんど段差を持たず平坦である。

閉塞施設は存在しない。

前庭部内の埋土は3層確認された。Ⅰ～Ⅱ層は二次堆積土である。Ⅲ層も玄室から前庭部まで一括して堆積しており、埋葬に付随する堆積埋土ではない。閉塞施設も存在しないことから、後世の攪乱を受けたものと思われる。

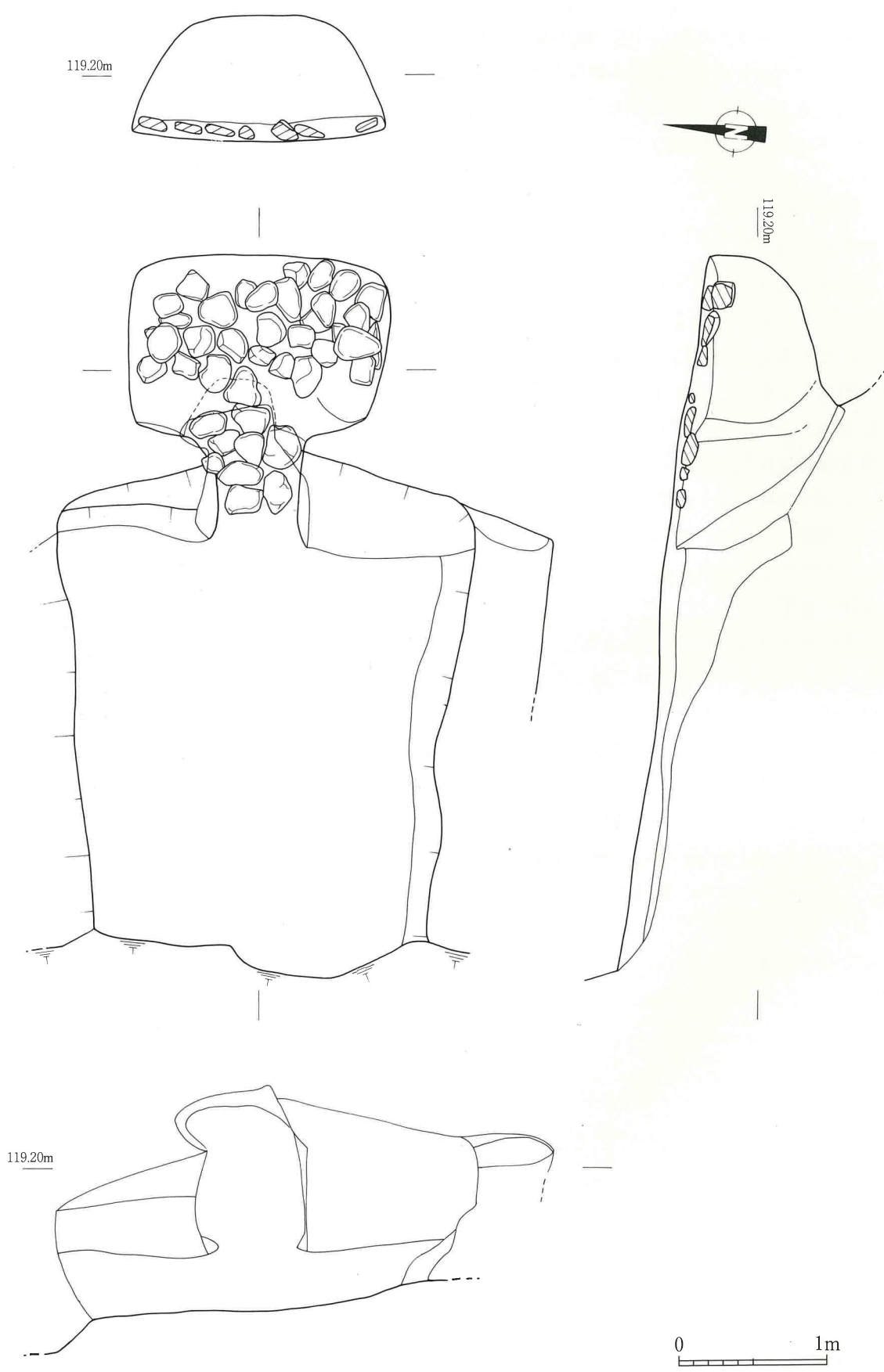
羨道・玄室

羨道は長さは0.67m、玄門幅0.65mで、玄室から続く敷石が羨道部の約半分を占める。排水溝等の施設は施していない。床面は平坦で玄室に向かって約7°の傾斜で上昇する。

玄室は玄門付近の天井が落盤していて、あまり残りは良くない。平面形態は平入り隅丸長方形の様相を呈している。玄室床面には径20～30cm前後の扁平河原石を中央部分から羨道の一部に敷いている。枕石等の施設は認められない。標高は中央床面で118.75m、長さ1.29m、幅1.76m、高さ0.85mである。玄室と玄門の間には段差はないが、奥壁に向かって、傾斜がやや急になり、約11°の角度で上昇する。天井形態はアーチ形を呈している。奥壁は僅かに内傾して立ち上がり、側壁は内傾しながら立ち上がる。裾部コーナーからは天井に向かって稜線がのびている。

遺物の出土状況

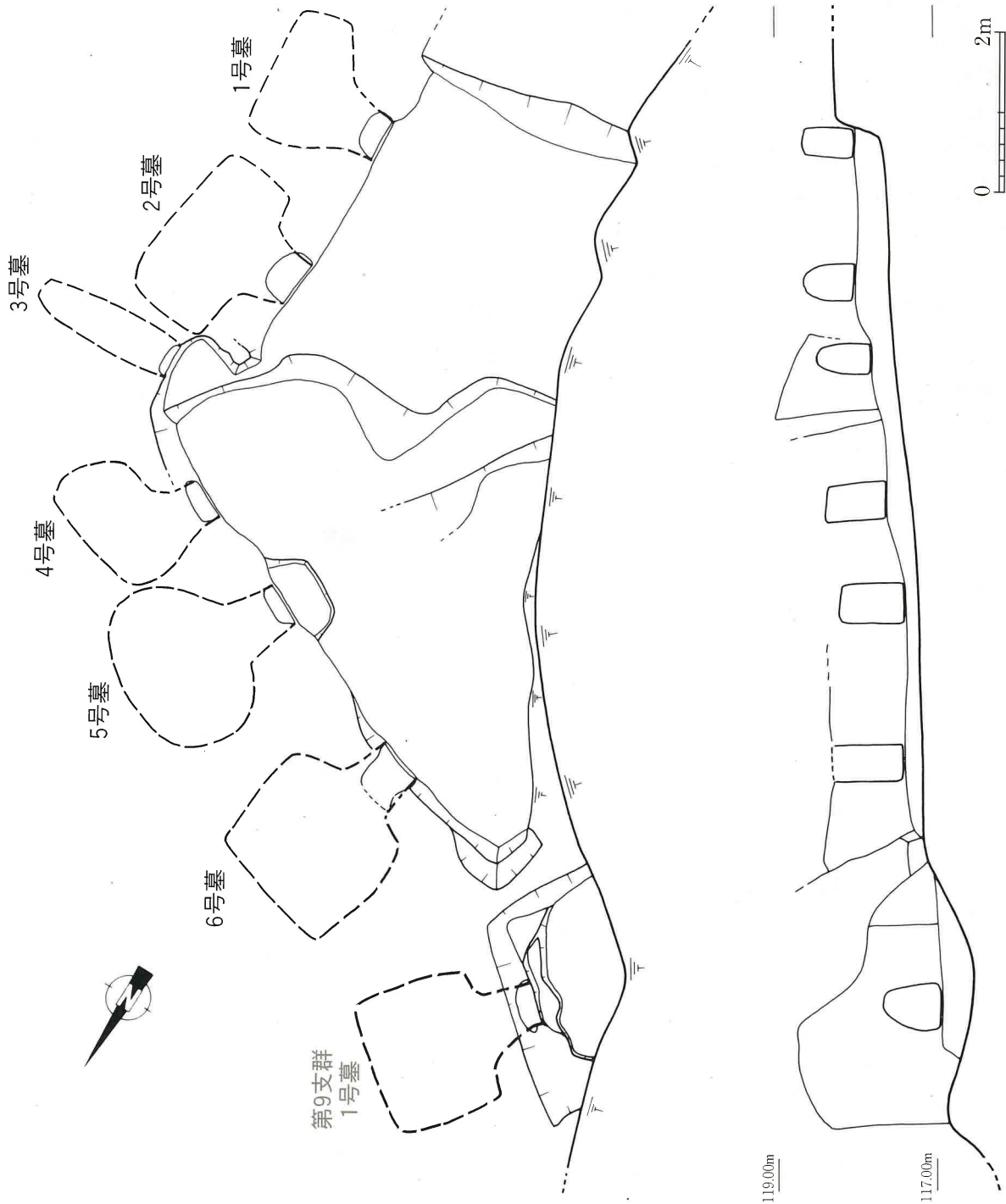
前庭部・玄室とも遺物は出土していない。



第 58 图 第 7 支群 1 号墓实测图 (1/40)

第8支群

第8支群は調査区のほぼ中央に位置し、6基の横穴墓群からなる。上部に第3・5支群が、下位に第10支群が構築されている。当支群は西～南向き斜面を、三角形に削り出して共用する前庭部を構築している。1～3号墓は西向き、4～6号墓は南向きに開口している。当支群の存在は調査以前から隣接する第9支群1号墓が開口していたことと、前庭部部分が比較的平坦で、横穴墓の存在が予想できたことから閉塞石上部までの二次堆積土の除去を行い、おおよその数を把握した後、本格的に遺構検出を行った。



第59図 第8支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

第8支群1号墓

概要

1号墓は2号墓の南に隣接し、西方向に開口する。玄室はほぼ接していることからみて、1号墓は2号墓構築後に隙間を利用して構築したものである。表面は二次堆積土で覆われていたため保存状態は比較的良好である。標高は羨門付近で117.9m、玄室主軸方向はE-1°-Sをさす。調査は前庭部遺物の検出・プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は2号墓と共有している。前庭部の長さ3.23m、幅は1・2号墓共有で約4mである。床面はほぼ平坦で羨道部後方に向かって約5°の傾斜で緩く下降している。

羨門部は幅は0.52m、高さ0.7mで保存状態は比較的良好。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ0.98m、幅0.75m、厚さ0.13m前後で、前庭部方向へ約125°の角度で倒れかけている。

前庭部内の埋土は5層確認された。観察の結果、Ⅲ～Ⅴ層は閉塞石が倒れる前に堆積した埋土であり、Ⅲ層は風化している。これよりみてⅢ～Ⅴ層は初葬埋土であると考えられる。閉塞石は土圧で倒れたものか、追葬時に前方へ引き倒したものかは判断できない。Ⅰ・Ⅱ層は二次堆積土である。

羨道・玄室

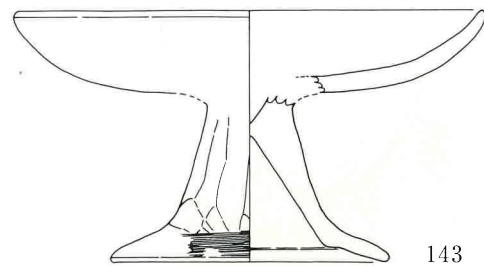
羨道は長さ0.71m、高さ0.69m、玄門幅0.92m、高さ0.68mで、羨門から玄門に向かって徐々に広がっている。玄門付近に玄室から続く敷石がみられる。

玄室は平入り隅丸長方形の様相を呈し、長さ0.97m、幅1.7m、高さ0.82mである。玄室床面には径20cm前後の扁平河原石を敷き詰めている。奥壁・側壁ともほぼ直線状に立ち上がる。天井形態は寄棟で天井が屋根形をなし、壁には稜線をもち、「軒」を表現している。

遺物の出土状況

前庭部 前庭部中央付近から土師器高坏(143)1点が出土した。しかし2号墓と前庭部を共有していることから2号墓の副葬品の可能性もある。また埋土中からフイゴの羽口も出土した。

玄室 人骨・副葬品とも出土していない。

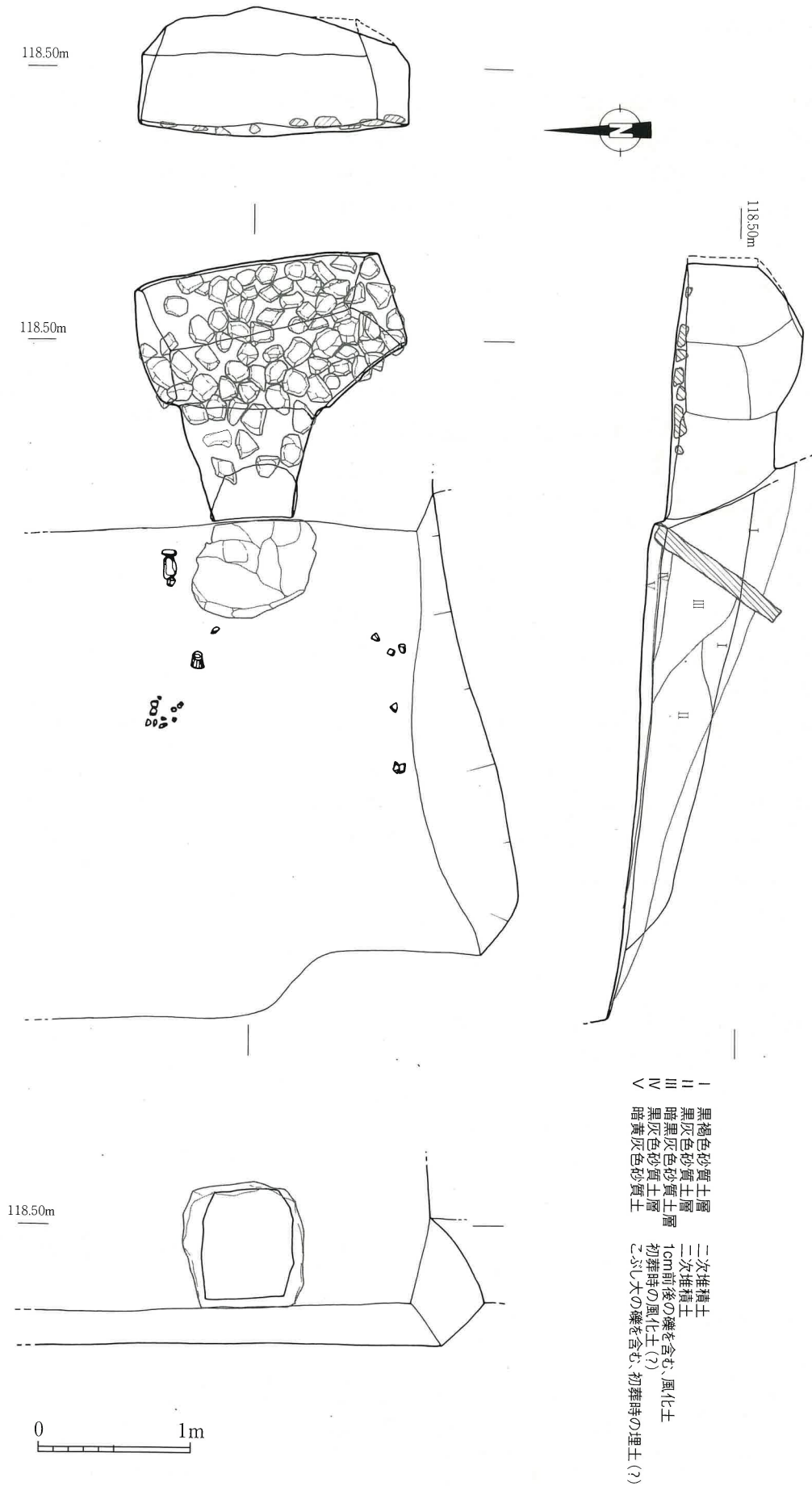


0 10cm

第60図 第8支群1号墓出土遺物実測図 (1/3)

表14 第8支群1号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
143	高坏	(18.5) 11.0	坏部口縁は内傾しながらのび、端部はやや尖り気味である。脚部は下外方向へのび、端部付近でさらに外反する。端部は丸い。内端部が接地する。	ナデ	ナデ・ヘラ 削り・ハケ 目・ナデー 部ハケ目・ ヘラ削り	橙色 赤橙色	石英粒(2~ 3mm)有・角 閃石粒若干 ・雲母微量	良好		坏部と脚部の 接点なし

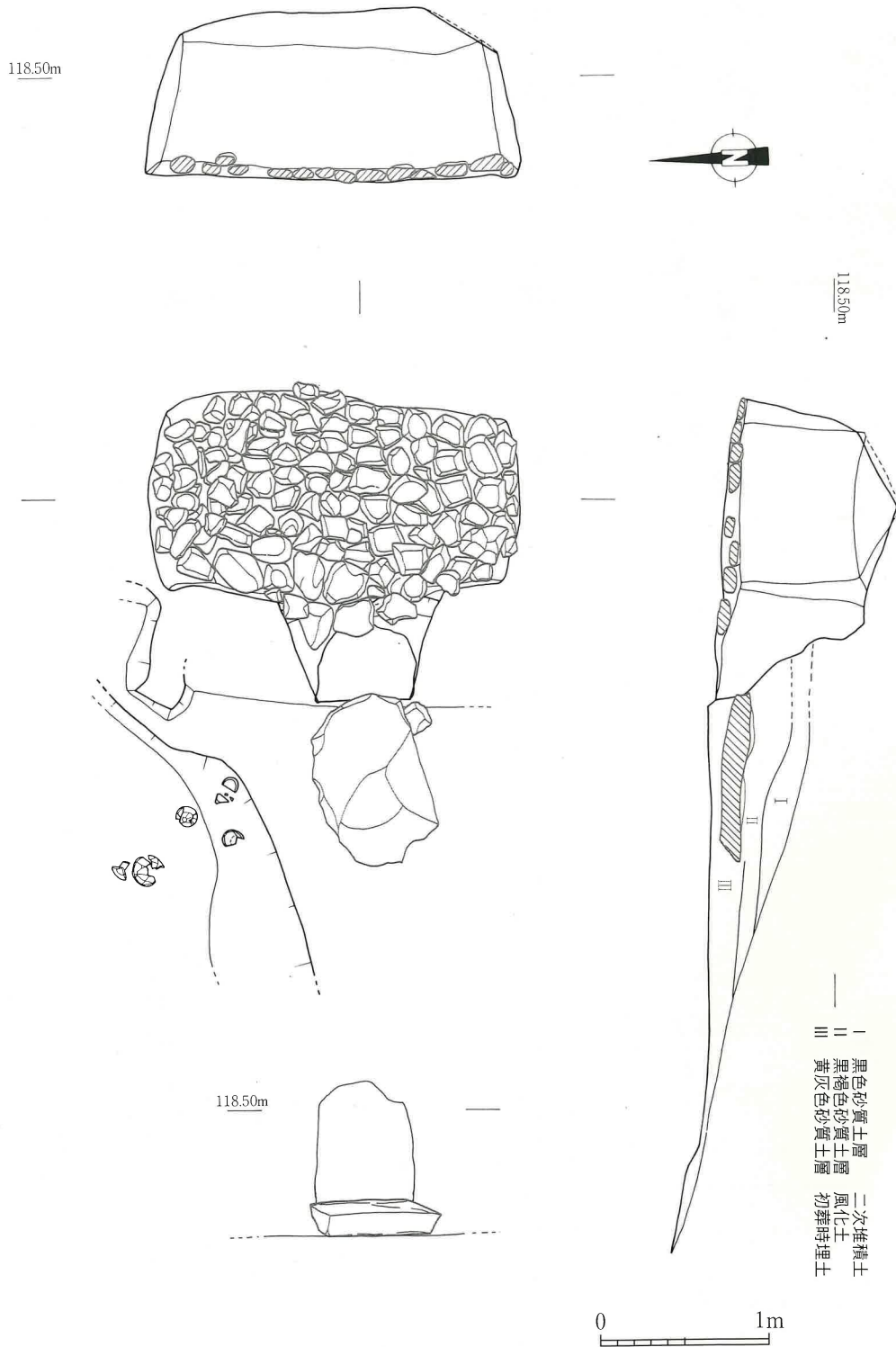


第 61 図 第 8 支群 1 号墓実測図 (1/40)

第8支群2号墓

概要

2号墓は1号墓と隣接し、西方向に開口する。表面は二次堆積土で覆われていたため保存状態は比較的良好である。標高は羨門付近で117.8m、玄室主軸方向はE-3°-Sをさす。調査は前庭部遺物の検出・プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の調査、玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。



第62図 第8支群2号墓実測図 (1/40)

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は1号墓と共有し、後方に向って約5°の傾斜で緩やかに下降する。

羨門部の天井の一部は剥離している。幅は0.54m、高さは推定で0.57mである。前庭部と羨門部の間には約5cmの段差がみられ、羨門部が一段高い。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ0.98m、幅0.64m、厚さ0.15m前後で、雑な造りである。閉塞石は前庭部の第Ⅲ層上面へ倒れている。

前庭部内の埋土は3層確認された。Ⅲ層は閉塞石が倒れる前に堆積した埋土であり、風化している。これよりⅡ層は初葬埋土であると考え、Ⅱ層は風化土層で、閉塞石を覆っているが、追葬時の埋土か閉塞石が倒れた後の自然埋土であるかの判断はできなかった。Ⅰ層は二次堆積土である。

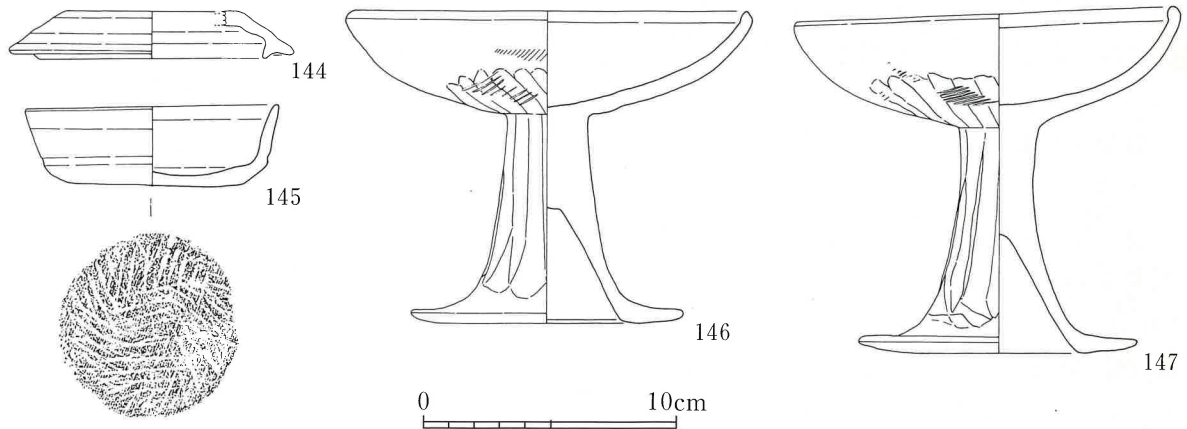
羨道・玄室

羨道は長さは0.58m、玄門幅1.0m、高さ0.82mで玄門に向って広がる。

玄室の平面形態は平入り胴張り長方形の様相を呈している。玄室床面には径20cm前後の扁平河原石を敷き詰めている。長さ1.19m、幅2.18m、高さ1.12mである。玄室と玄門の間に約5cmの段差をもち、玄室が一段高い。奥壁・側壁ともほぼ直線状に立ち上がる。天井形態は寄棟で天井が屋根形をなし、壁には稜線をもち、「軒」を表現している。

遺物の出土状況

前庭部 前庭部中央左側付近から須恵器坏1セットと、土師器高坏2点が出土した。



第63図 第8支群2号墓出土遺物実測図 (1/3)

表15 第8支群2号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
144	坏蓋	(8.9) (11.2) (1.9)	天井部は低く平らである。口縁部は内傾しながらのび、端部はやや尖り気味である。かえりは下方へのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	ヘラ削り後ナデ	にぶい赤褐色	白色粒有・石英粒若干	良好	有	145とセット
145	坏身	10.0 6.9 3.1	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。底部は平らでタタキを施す。	多方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・平行タタキ痕	にぶい赤褐色	白色細粒多量 角閃石粒・長石粒若干	良好		144とセット
146	高坏	16.1 10.8 12.2	坏部口縁は内傾しながらのび、先端部はさらに内傾する。端部は丸い。脚部は下外方向へのび、さらに裾部はほぼ水平へのびる。端部は丸い。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・一部ハケ目ヘラ削り・一部タタキ・ヘラ削り・回転ナデヘラ削り	橙色	角閃石粒有・石英粒(1~4mm)・赤色粒若干	良好		
147	高坏	15.2 11.0 13.3	坏部口縁は内傾しながらのび、先端部はさらに内傾する。端部は丸い。脚部は下外方向へのび、さらに裾部はほぼ水平へのびる。端部は丸い。	ナデ	ナデ一部タタキ後ヘラ削りヘラ削り・ナデ・ヘラ削り	橙色	角閃石粒・赤色粒若干	良好		ゆがみ有

第8支群3号墓

概要

3号墓は1・2号墓が掘り込まれている西向きの壁の北端コーナーに位置し、西方向に開口する。当横穴墓は2・4号横穴墓の構築後に、壁面の僅かな隙間を利用して構築されている。表面は二次堆積土で覆われていたため、保存状態は非常に良好である。標高は羨門付近で117.7m、玄室主軸方向はN-80°-Eをさす。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、玄室内の構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

当横穴墓は2号墓の前庭部右側壁部分に構築されており、地山を削り、造り出し部を設け、独自の前庭部を構築している。幅0.97m、長さ0.62mでほぼ平坦である。

羨門部はほとんど崩落もなく保存状態は良い。幅0.46m、高さ0.71mで、ほぼ長方形に仕上げている。側壁の傾斜は75°前後である。前庭部と羨門部の境に5cm程度の段差をもち、羨門部が1段高い構造となっている。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ0.86m、幅0.76m、厚さ0.15m前後で、上部は面取りを行い、丸く仕上げ、丁寧な造りである。閉塞石は羨門部を隙間なく覆う。前面には径15cm前後の角礫1個を使用し、閉塞石が前庭部方向へ倒れるのを防ぐ根締石の役をさせている。

前庭部内の埋土は8層確認された。Ⅷ層は3号墓の前庭部にだけ堆積する埋土で、当横穴墓群の初葬埋土と考える。Ⅰ～Ⅶ層は左隣の4号墓埋土と対応する。当横穴墓の埋土はⅧ層だけで、追葬は行われていないと考える。

羨道・玄室

当横穴墓は羨道と玄門、玄門と玄室の明瞭な区画のない、いわゆる不定隅丸長方形型の玄室形態をとっているため、羨門から先は玄室としてとらえた。玄室は長方形の様相を呈し、標高は117.95m、長さ1.99m、幅0.58m、中央の高さ0.56mである。玄室床面には径20cm前後の扁平河原石を比較的規則正しく敷き詰めている。床面は側壁周辺が高く、中央が窪み、奥壁に向かって、約5°の傾斜で上昇する。壁面全面に粗い工具痕が残る。

遺物の出土状況

前庭部、玄室内とも遺物は出土していない。

第8支群4号墓

概要

4号墓は南向き斜面に構築されており、5・6号墓と前庭部を共有している。表面は二次堆積土で覆われていたため残りは良好である。標高は羨門付近で117.55m、玄室主軸方向はN-22°-Eをさし、南方向に開口する。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去、副葬品、構造確認等を順次行った。

規模、構造

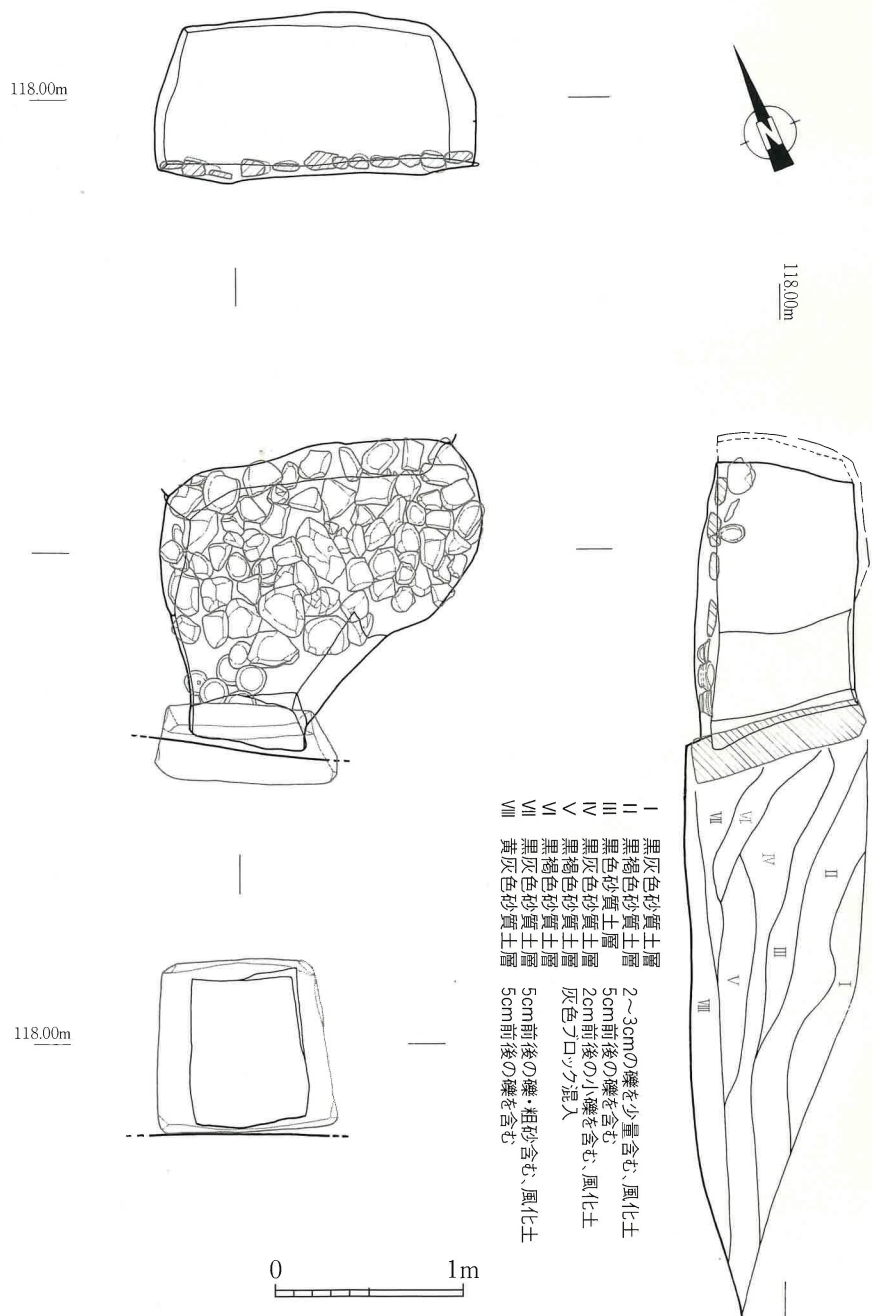
前庭部・羨門部

当横穴墓は5号墓の東に構築されており、玄室側壁が接する。前庭部は共有しており、単独の前庭部はもたない。

羨門部は、一部で崩落がみられるものの比較的残りは良い。幅0.6m、高さ0.77mである。前庭部と羨門部の境には高低差約5cmの段をもち、羨門部が1段高く構築されている。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ0.94m、幅は上部で0.82m、下部で0.95mで、台形を呈している。厚さは0.22mで、各面とも工具痕が残るが、丁寧な整形を施している。閉塞石は羨門部を隙間なく覆う。

前庭部内の埋土は8層確認された。Ⅷ層は閉塞石の下に入り込むことから初葬埋土の残土と考える。Ⅱ～Ⅶ層は隣接する3号墓の上面を覆うことから、3号墓構築後の追葬埋土と考える。Ⅰ層は二次堆積土である。



第65図 第8支群4号墓実測図 (1/40)

羨道・玄室

羨道は、長さ 0.63m、玄門幅 1.17m、高さ 0.85m で、玄門に向って右壁が大きく開く。羨道は玄室の左端に付随することから、5号墓の玄室を避け、右方向に玄室を展開したことが窺える。

玄室の平面形態は平入り不整長方形の様相を呈している。玄室床面は径 30cm 前後の扁平河原石を敷き、隙間に径 10cm 前後の小礫を補填している。標高は中央床面で 117.6m、長さ 0.99m、幅 1.68m、高さ 0.85m で床面は整形を施していない。奥壁・側壁ともほぼ直線状に立ち上がる。天井形態は平天井で奥壁と左壁上部に稜線で「軒」を表現している。四隅からは稜線が「軒」に向ってのびる。

遺物の出土状況 (第 66 図)

前庭部

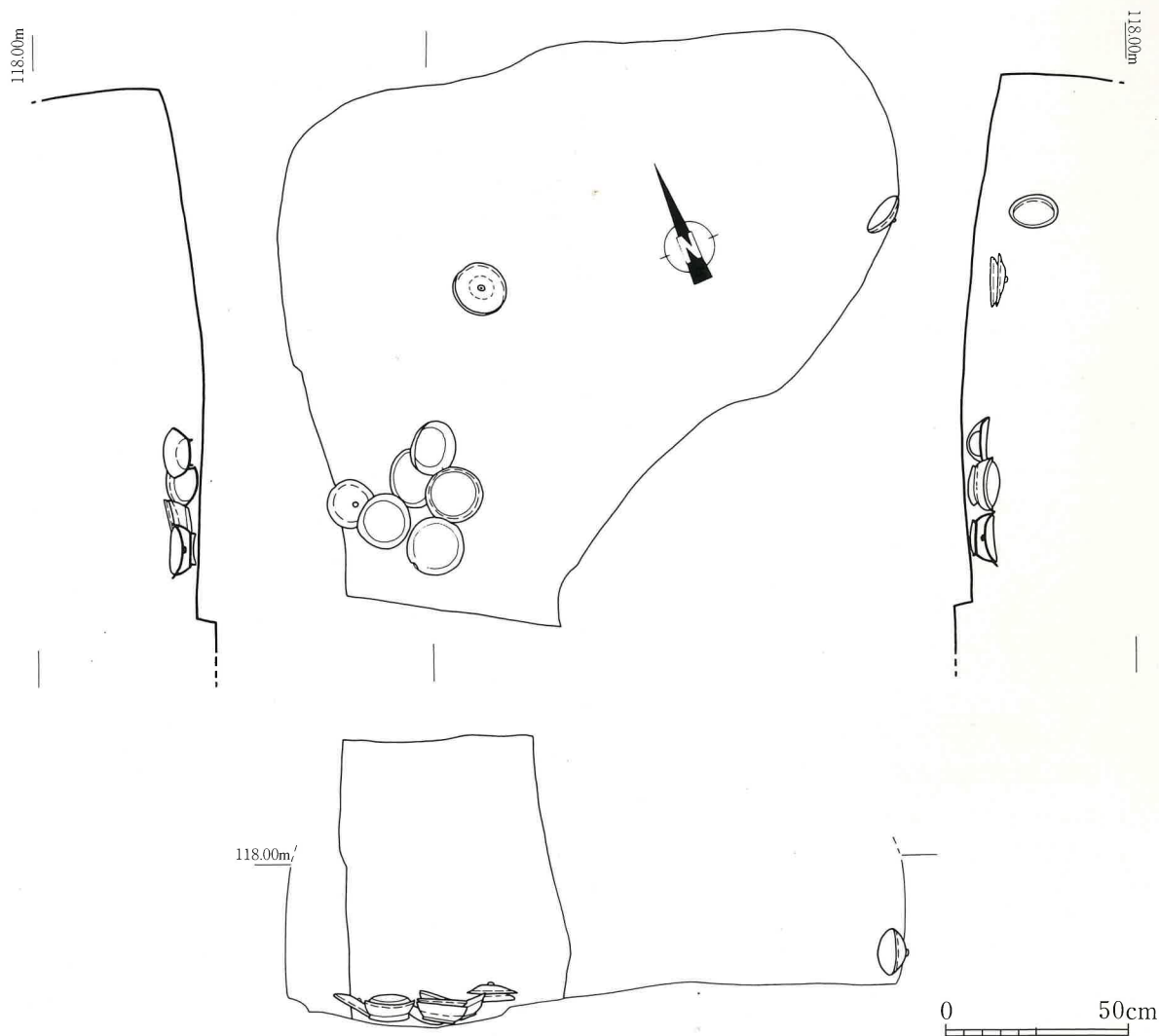
前庭部からは遺物の出土はない。

羨道

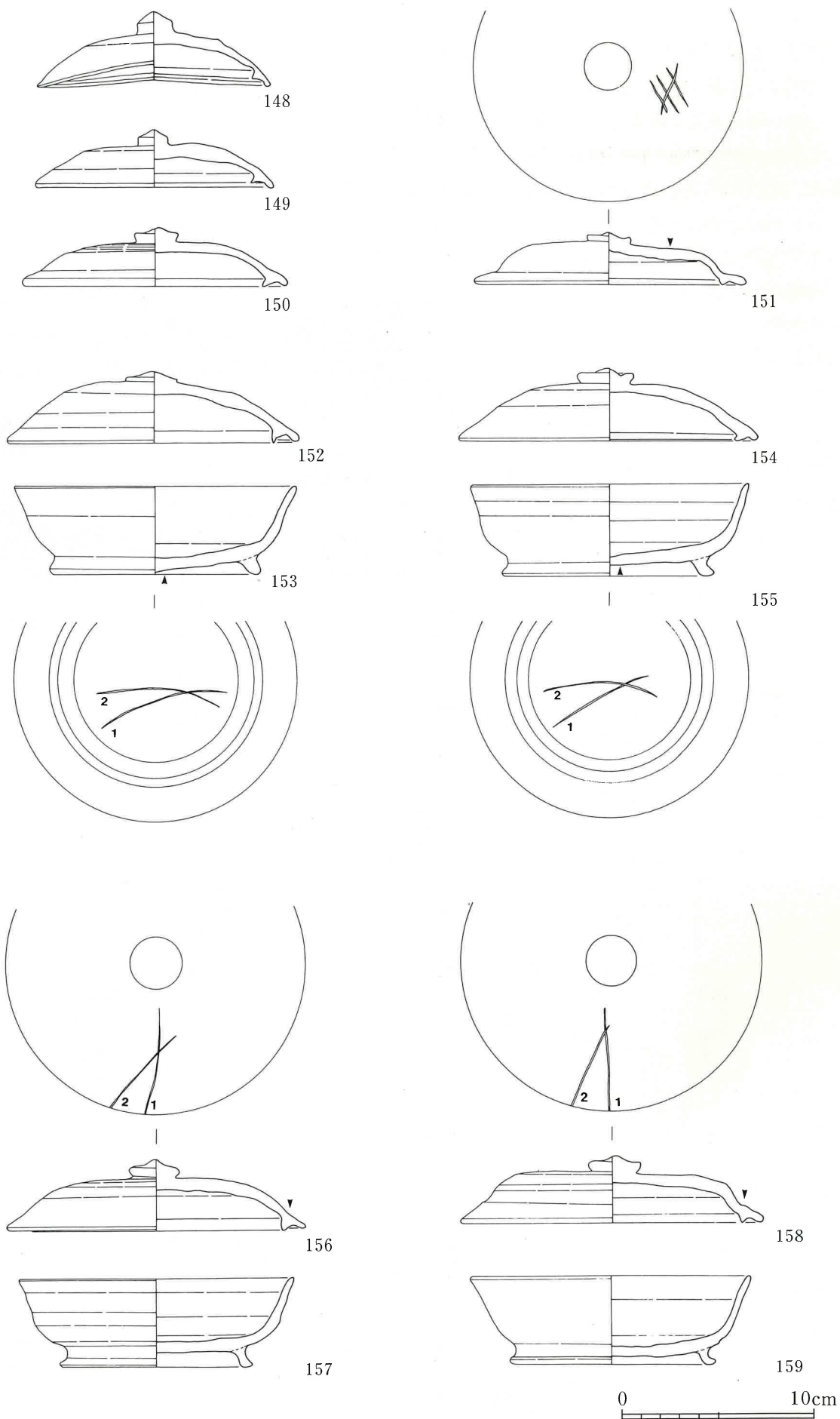
羨道入口から副葬品の坏のセット (152・153、154・155、156・157、158・159) 4 点と、坏蓋 (148) が一括して埋置した状態で出土した。坏のセットは身の上に蓋を逆さにした状態で埋置している。本来は 156 と 153、158 と 155 のセット関係



遺物出土状況



第 66 図 第 8 支群 4 号墓遺物出土状況実測図 (1 / 20)



第 67 图 第 8 支群 4 号墓出土遺物実測図 (1/3)

であるが、埋置時の組合せは前述の通りである。

玄室

玄室内からは奥壁右寄りから人骨頭部が出土した。副葬品は中央付近から坏蓋（150・151）2点が重なった状態で、奥壁寄りの右壁隅でも坏蓋（149）1点が出土した。

出土土器は7世紀後半代の製品で、副葬品による追葬の有無は判断できなかった。

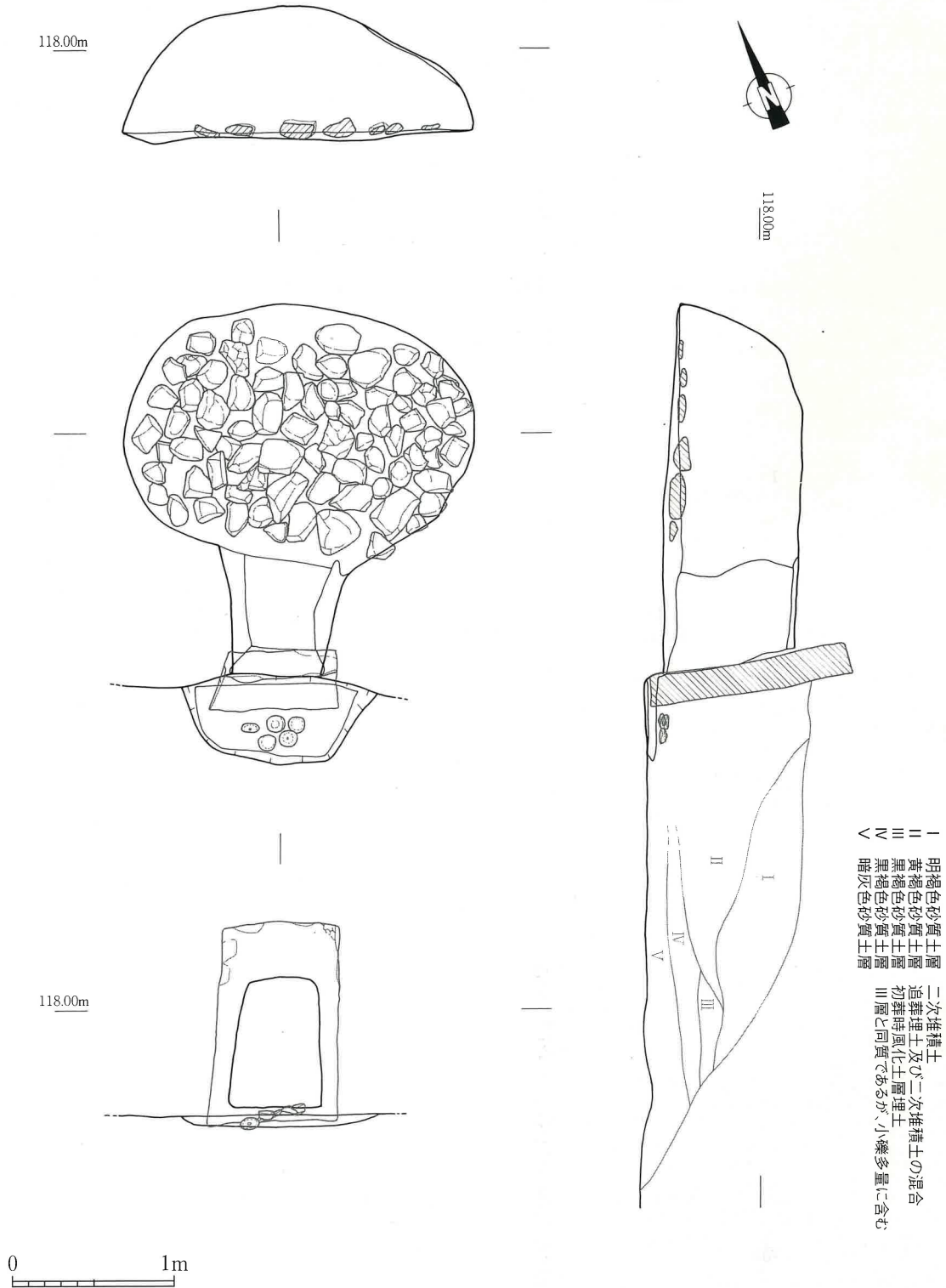
表 16 第8支群4号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
148	坏蓋	10.2 12.2 3.9	天井部は丸く中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方方向にのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り後ナデ・横ナデ	灰黒色	白色砂粒(0.1~2mm)多量	良好		ゆがみ大
149	坏蓋	10.0 12.4 3.0	天井部は丸く中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方方向にのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り後ナデ・横ナデ	黒灰色	白色砂粒(0.1~3mm)多量	良好		ゆがみ有
150	坏蓋	11.2 13.8 3.1	天井部は丸く中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方方向にのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	灰色 青灰色	微細粒有	良好		
151	坏蓋	11.6 14.1 2.8	天井部はわずかに丸みを持ち、中央に宝珠つまみを有する。口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方方向にのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ	灰色	角閃石粒・白色細粒有	良好	有	重ね焼き痕有
152	坏蓋	12.5 15.3 3.7	天井部は高く丸みを持ち、中央に擬宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方方向にのび、先端は丸い。	一定方向ナデ・回転ナデ	ヘラ削り・ナデ	灰色	白色細粒・石英粒有・角閃石粒若干	良好		153とセット
153	坏身	14.8 10.7 4.6	口縁部はわずかに外反し、端部は丸い。高台を底部外方向に付し、下外方向にのびる。端部は丸い。坏部成形後の貼り付けである。	多方向ナデ 回転ナデ	ナデ	灰褐色	長石粒・赤色粒有・角閃石粒若干	良好	有	152とセット
154	坏蓋	13.0 15.4 3.7	天井部は高く丸みを持ち、中央に宝珠つまみを有する。口縁部は内傾しながら丸みを持ち、端部は丸い。かえりは下方方向にのび、先端は丸い。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り・ナデ	灰黄色	白色細粒・長石粒有・石英粒(3~5mm)若干	良好		155とセット
155	坏身	14.4 10.7 4.8	口縁部はわずかに外反し、先端はやや尖り気味である。高台を底部外方向に付し、下外方向にのびる。端部は丸みを持った面を成す。坏部成形後の貼り付けである。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	灰黄色	白色細粒・長石粒・赤色粒有	良好	有	154とセット
156	坏蓋	13.2 15.6 3.7	天井部はやや丸みを持ち、中央に宝珠つまみを有する。口縁部は下外方向へのび、端部は丸い。かえりは下方方向にのび端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り・ナデ	灰褐色	長石粒・赤色粒有・角閃石粒若干	良好	有	157とセット
157	坏身	14.3 10.1 4.6	口縁部はやや外反し、端部は尖り気味である。高台を底部外方向に付し、下外方向にのびる。端部は面を成す。接地面は内端部である。坏部成形後の貼り付けである。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	にぶい赤褐色 灰黄褐色	石英粒(3~5mm)・白色粒・長石粒有	良好		156とセット 八女窯?
158	坏蓋	13.4 15.8 3.5	天井部は平らで中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方方向にのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り・横ナデ	青灰色	白色細粒(0.1~1mm)有	良好	有	159とセット
159	坏身	14.6 10.7 4.6	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。高台を底部外方向に付し、下外方向にのびる。端部は丸く、内端部が接地する。坏部成形後の貼り付けである。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回転ヘラ削り	赤褐色 灰色 黒褐色 褐色	白色粒(0.1~3mm)多量	やや不良		158とセット 八女窯?

第8支群5号墓

概要

5号墓は南向き斜面に構築されている。4・6号墓の中間に位置し、前庭部を共有している。表面は二次堆積土で覆われていたため残りは良好である。標高は羨門付近で117.55m、玄室主軸方向はN-22°-Eをさし、南方向に開口する。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去、副葬品、構造確認等を順次行った。



第68図 第8支群5号墓実測図 (1/40)

規模、構造

前庭部・羨門部

当横穴墓は6号墓とともに同支群中では比較的早くに構築された横穴墓群である。前庭部は共有しており、単独の前庭部はもたない。

羨門部は、幅0.55m、高さ0.8mである。前庭部と羨門部の境には長さ0.5m、幅0.7～1.2m、深さ0.15m程度の不整形の掘り込みをもち、この掘り込み中に副葬品を供献している。

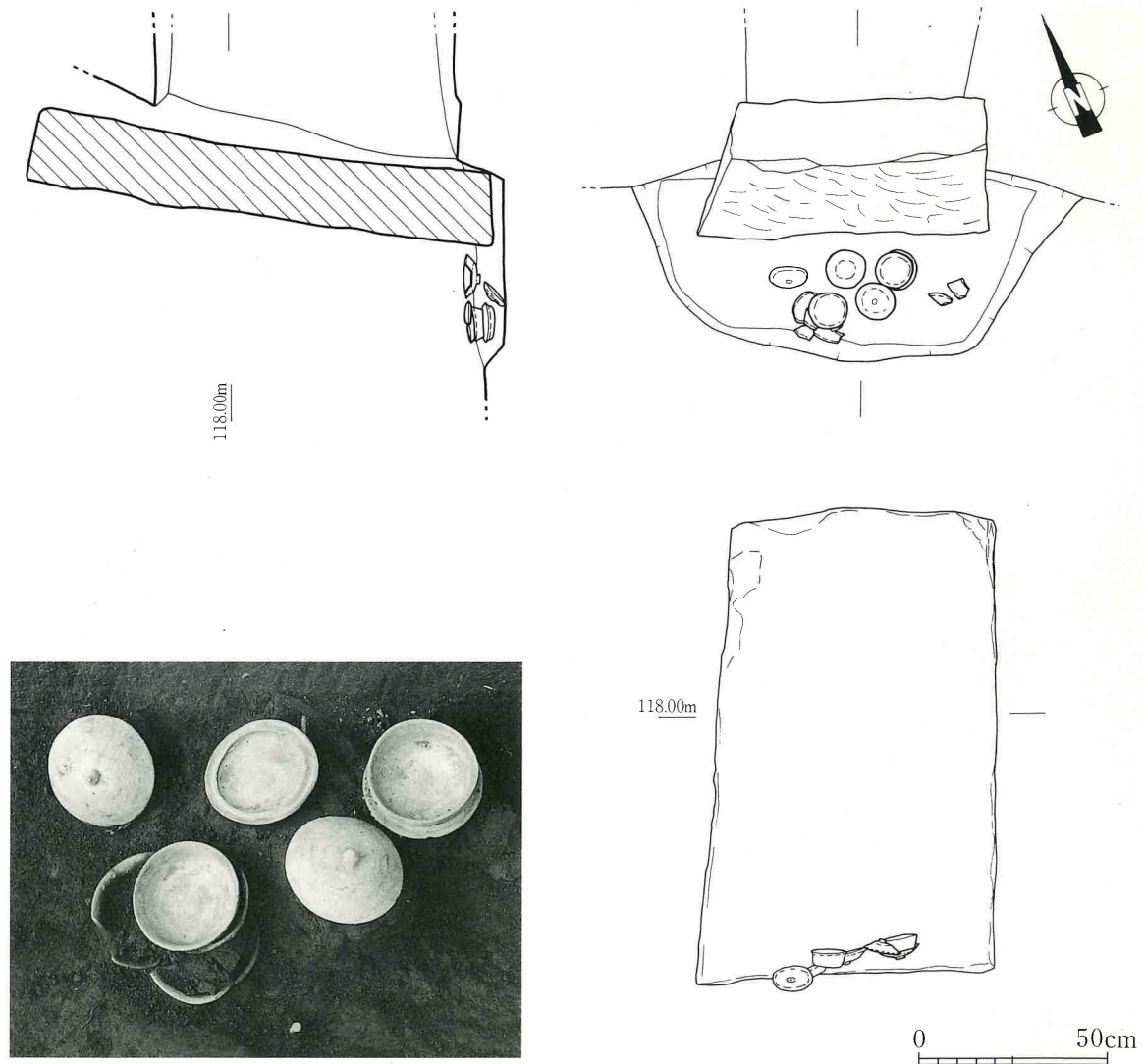
閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ1.27m、幅0.8m前後、厚さ0.18mで、丁寧な整形を施している。閉塞石は羨門部をほぼ隙間なく覆う。

前庭部内の埋土は5層確認された。Ⅲ～Ⅴ層はⅡ層により切られている。これより、Ⅱ層を追葬埋土とし、Ⅲ～Ⅴ層を初葬埋土と考える。Ⅰ層は二次堆積土である。

羨道・玄室

羨道は、長さ0.7m、玄門幅0.78m、高さ0.84mで、玄門に向かって緩やかに開く。

玄室の平面形態は平入り楕円形の様相を呈している。玄室床面は径30cm前後の扁平河原石と径10cm前後の角礫を敷きつめている。標高は中央床面で117.5m、長さ1.58m、幅2.17m、高さ0.85mで、床面は奥壁に向かって緩やかに立ち上がるが、整形は施していない。奥壁は約75°の角度でほぼ直線状に立ち上がり、側壁は内傾しながら立ち上がる。天井形態は変形のアーチ形天井である。

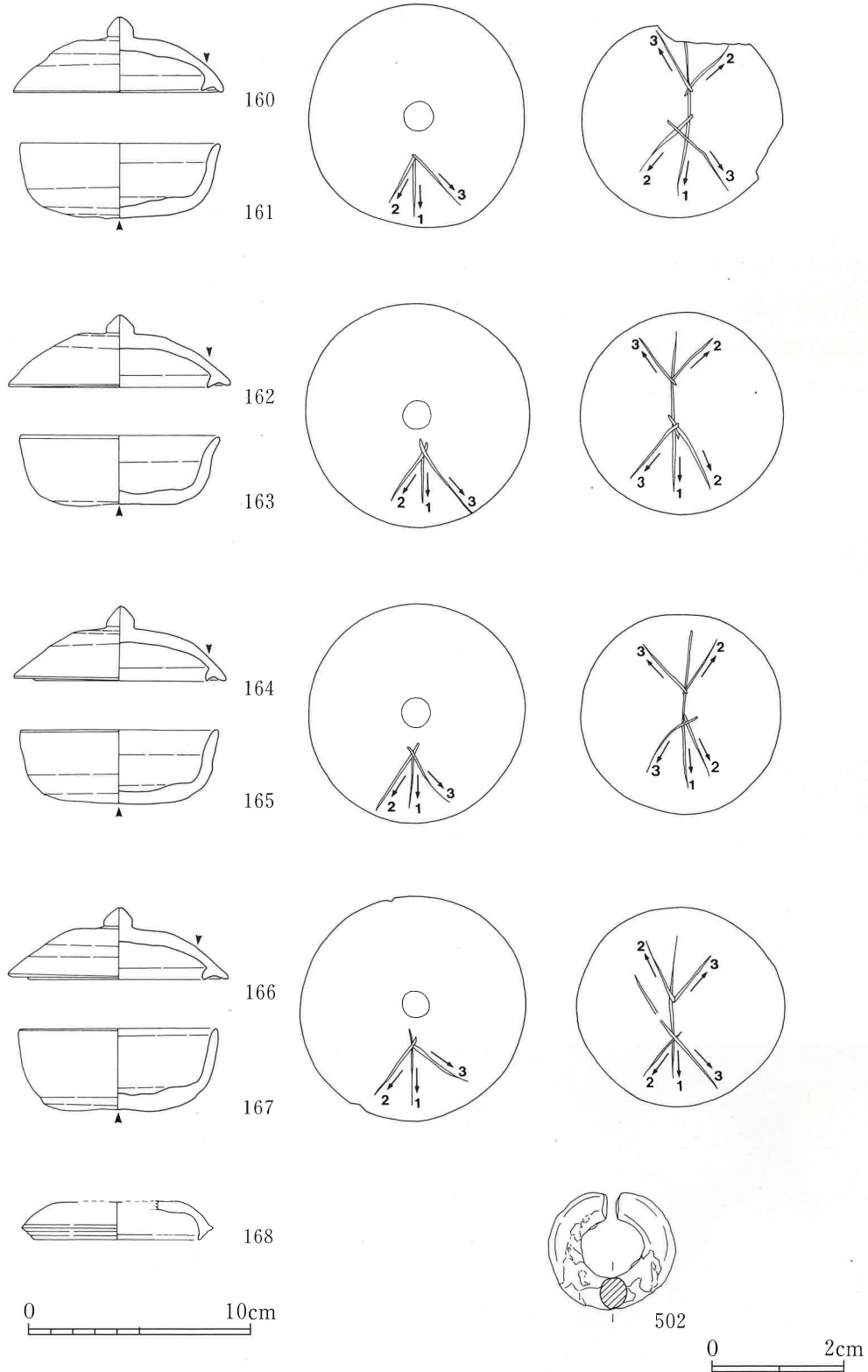


第69図 第8支群5号墓遺物出土状況実測図 (1/20)

遺物の出土状況（第69図）

前庭部

前庭部閉塞石前面から副葬品の坏のセット（160～167）4点と、坏蓋（168）が一括して出土した。167・168は蓋を下にして、160～165は蓋と身は別々で、身は3点重ねて供献していた。いずれも同一工人の手によると思われるヘラ記号が施されている。



第70図 第8支群5号墓出土遺物実測図（1/3・実大）

出土土器はすべて7世紀中頃の製品で、土層観察の結果から、追葬時の副葬品と考える。

玄室

玄室内からは耳環1点が出土した。玄室堆積土内からの出土であり、出土位置は不明である。

表17 第8支群5号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
160	坏蓋	7.4 9.5 3.4	天井部は高く丸い。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部はやや尖り気味である。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り・ナデ	灰色	白色砂多量 石英粒(2~3mm)角閃石粒有	良好	有	161とセット
161	坏身	9.0 - 3.4	口縁部はわずかに外反しながらのび、端部は丸い。底部はわずかに丸みを帯びる平底である。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り後ナデ	灰色	白色細粒多量・石英粒(2~3mm)角閃石粒有	良好	有	160とセット
162	坏蓋	7.9 10.0 3.3	天井部は高く丸い。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部はやや尖り気味である。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り後ナデ・ナデ	灰色	白色細粒多量・角閃石粒・石英粒(2~4mm)有	良好	有	163とセット
163	坏身	9.0 - 3.1	口縁部は外反しながらのび、端部はやや尖り気味である。底部は平らである。	二方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り後ナデ	灰色	白色細粒多量・石英粒(2~4mm)角閃石粒有	良好	有	162とセット
164	坏蓋	7.7 9.6 3.4	天井部は高く丸い。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部はやや尖り気味である。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	一定方向ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り・ナデ	灰色	角閃石粒多量・石英粒(2~3mm)有・白色細粒若干	良好	有	165とセット
165	坏身	9.0 - 3.3	口縁部は外反しながらのび、端部はやや尖り気味である。底部は平らである。	二方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り後ナデ	灰色	石英粒(2~4mm)・白色細粒・角閃石粒有	良好	有	164とセット
166	坏蓋	7.8 10.0 3.2	天井部は高く丸い。中央に宝珠つまみを有する。口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部はやや尖り気味である。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	ナデ	ナデ	灰色	石英粒(2~3mm)多量・角閃石粒有 白色細粒若干	良好	有	167とセット
167	坏身	8.8 - 3.6	口縁部は上外方向へのび、端部は尖り気味である。底部はわずかに丸みを帯びる平底である。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り	灰色	石英粒(3~5mm)多量・角閃石粒有 白色細粒若干	良好	有	166とセット
168	坏蓋	7.4 8.6 1.7	天井部は低く平らである。口縁部との境付近に鋭角な稜を持つ。口縁部は内傾しながら下方へのび、端部は尖る。	ナデ・回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り	灰色	白色細粒有 長石粒微量	良好		

表18 第8支群5号墓出土耳環計測表

(単位:mm・g)

番号	作り	外径	断面径	重量	備考
502	銅地金張	19.0×18	4.0×5.0	4.9	緑青・金張わずかに残存

第8支群6号墓

概要

6号墓は第8支群西端の南向き斜面に構築されている。前庭部は二次堆積土で覆われていたが、羨道天井部は落盤しており、残りはあまり良くない。標高は羨門付近で117.35m、玄室主軸方向はN-13°-Eをさし、南方向に開口する。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去、構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

当横穴墓は第8支群中では比較的早くに構築された横穴墓群である。前庭部は共有しており単独の前庭部はもたない。また、前庭部右後方からは玄室から掻き出した敷石が出土した。

羨門部から羨道にかけての天井は落盤しているため、羨門部の高さは不明である。幅は0.56mで、前庭部と羨門部の間には高低差3cm程度の段差をもち、羨門部を一段高く構築して前庭部との境としている。側壁は比較的残りが良く、約78°の傾斜角である。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ1.14m、幅上端0.58m、下端0.76m、厚さ0.24mで、丁寧な整形を施している。閉塞石は羨門部をほぼ隙間なく覆う。

前庭部内の埋土は3層確認された。Ⅲ層はⅡ層により切られている。これより、Ⅱ層を追葬埋土ととらえ、Ⅲ層を初葬埋土と考える。Ⅰ層は二次堆積土である。

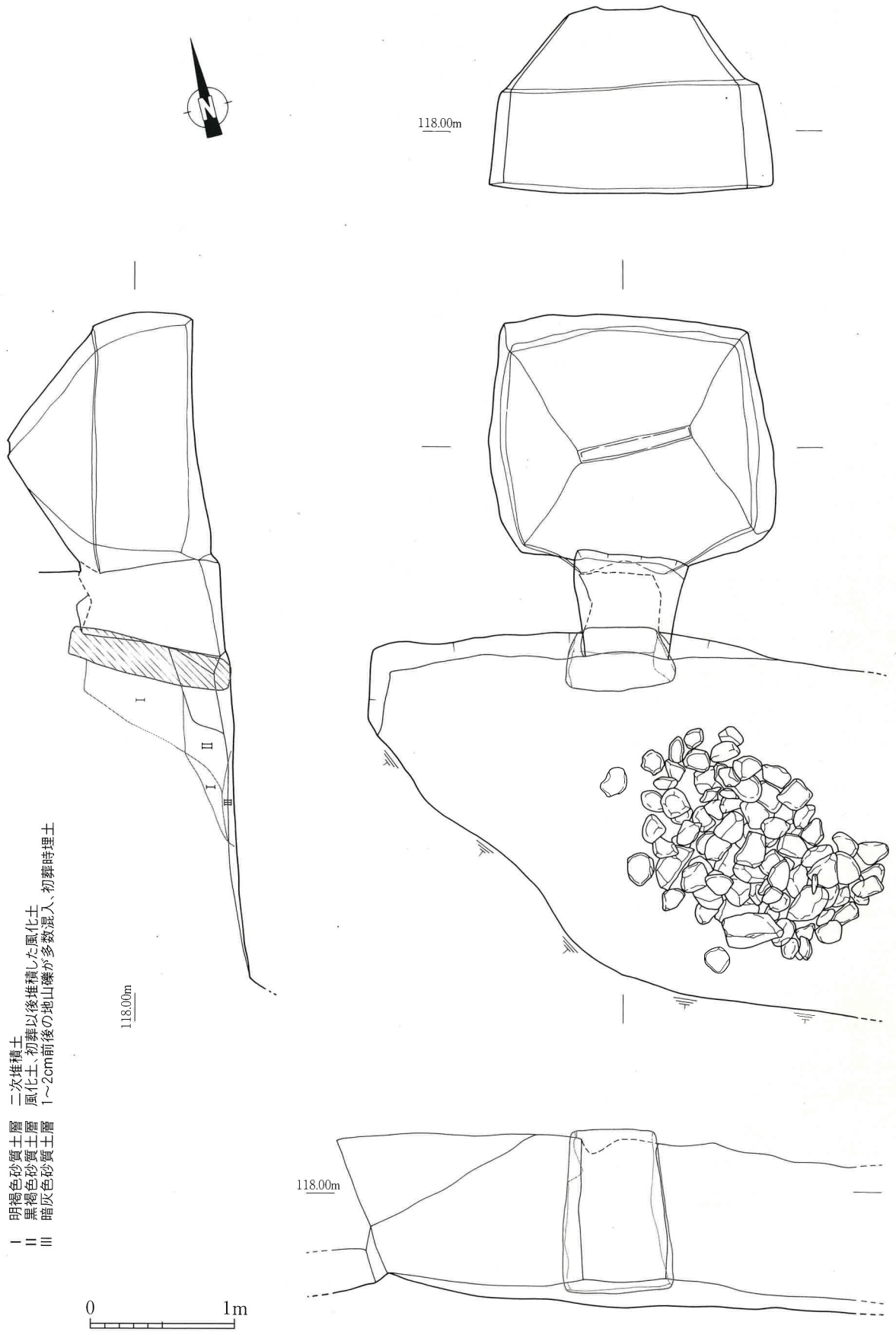
羨道・玄室

羨道は、長さ0.67m、玄門幅0.79m、玄門の高さ0.91mで、玄門に向かって緩やかに開く。床面はほぼ平坦で玄室に向かって約5°の傾斜で上昇する。排水溝等の施設はもたない。

玄室の平面形態は胴張り方形の様相を呈している。床面には初葬時、径20～30cm前後の扁平河原石・角礫を用いた敷石を設けていたが、追葬時に前庭部に掻き出したと考える。標高は中央床面で117.6m、長さ1.64m、幅1.97m、高さ1.27mで、床面は奥壁に向かって約5°の傾斜で緩やかに立ち上がる。玄室と羨道の間には高低差約5cmの段差をもち、玄室が1段高くなるように構築されている。奥壁は湾曲するがほぼ真上に立ち上がり、側壁もほぼ真上に立ち上がる。天井形態は寄棟で天井が屋根形をなし、棟木を造り出している。壁には稜線をもち、「軒」を表現している。四隅からも稜線が「軒」に向ってのびる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。



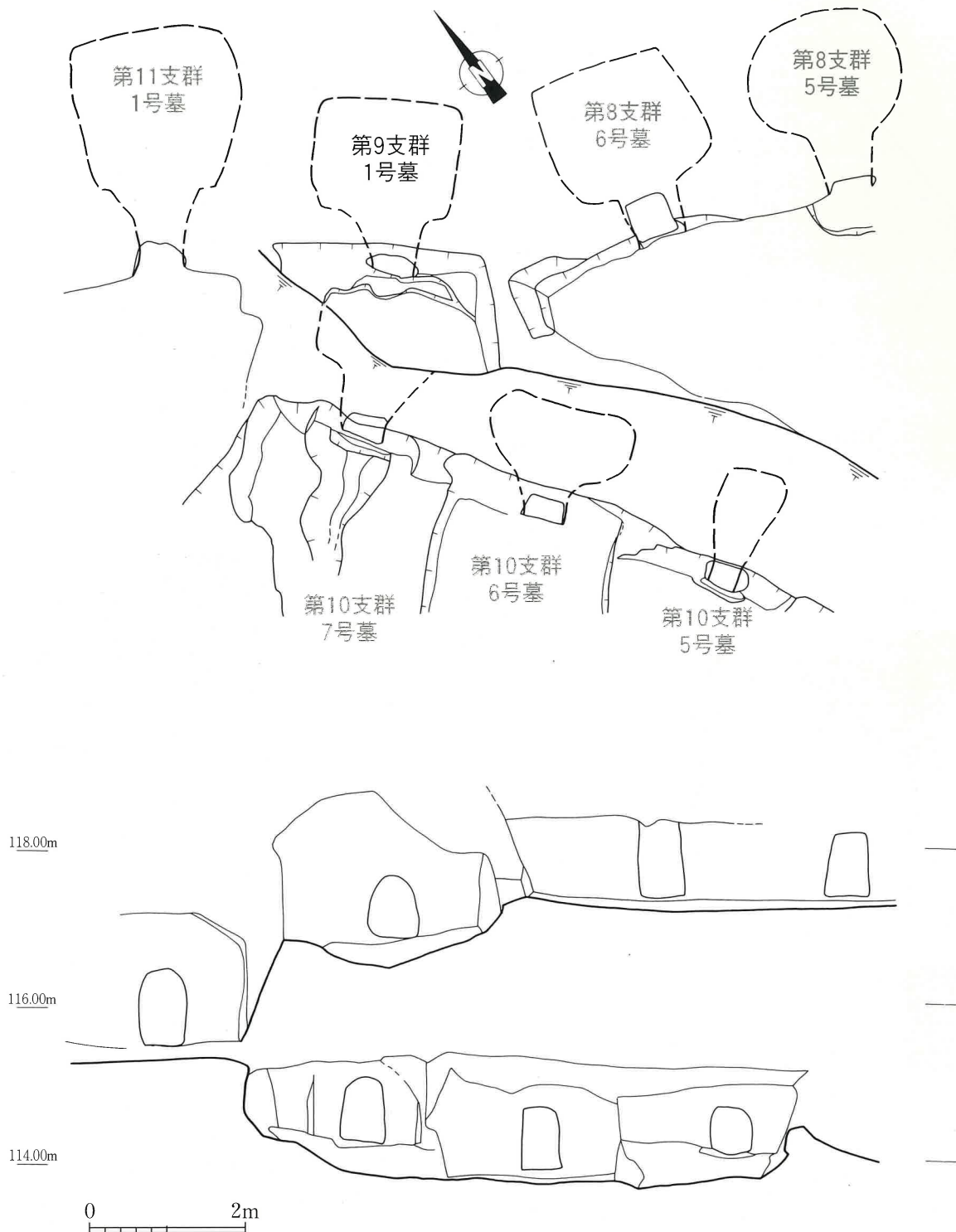
二次堆積土
 風化土、初葬以後堆積した風化土
 1~2cm前後の地山礫が多数混入、初葬時埋土
 I 明褐色砂質土層
 II 黒褐色砂質土層
 III 暗灰色砂質土層

第71図 第8支群6号墓実測図 (1/40)

第9支群

第9支群は調査区のほぼ中央に位置し、1基の横穴墓からなる。当支群は第8支群の構築されている南向き斜面の西端に位置し、西側は約1mの段差をもって第11支群が構築されている。

当支群は調査以前から開口していたため、まず二次堆積土の除去を行い、全体像の把握に努めた。



第72図 第9支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

第9支群1号墓

概要

1号墓は第8支群に隣接するが、単独の前庭部をもち、南西方向に開口する。前庭部は二次堆積土が堆積していたが、玄室は開口しており、閉塞施設は既に消滅していた。標高は羨門付近で116.85m、玄室主軸方向はN-35°-Eをさす。調査は前庭部の検出・プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ1.15m、幅2.14mで、三角形の様相を呈している。床面は段差をもち、中央付近から後方に向かって約15°の傾斜で下降する。

羨門部は両側壁の一部が崩落している。幅0.51m、高さ0.79mで、前庭部との間に高低差5cm前後の段差をもち、境としている。

閉塞施設は存在しない。

前庭部の埋土は二次堆積土であり、埋葬に付随する堆積埋土ではない。

羨道・玄室

羨道は長さは0.67m、玄門幅0.99m、玄門高0.74mで、玄室に向って左壁が大きく開く。床面は平坦で玄室に向って緩やかに上昇する。排水溝の施設はない。

玄室の平面形態は平入り長方形の様相を呈している。玄室床面は径20～30cm前後の扁平河原石が、中央部分から右奥壁寄りと左裾寄りの一部で確認できる。本来は全面に敷いていたと思われるが、後世の二次使用によって、中央部分は除去されたのであろう。標高は中央床面で116.9m、長さ1.53m、幅1.18m、高さ1.13mである。玄室と玄門の間には高低差約5cmの段差をもち、境を明瞭にしている。床面はほぼ平坦である。天井形態は切妻形を呈している。奥壁・両側壁とも内傾して立ち上がり、裾部コーナーからは天井に向って稜線がのびている。床面には工具痕が明瞭に残っている。

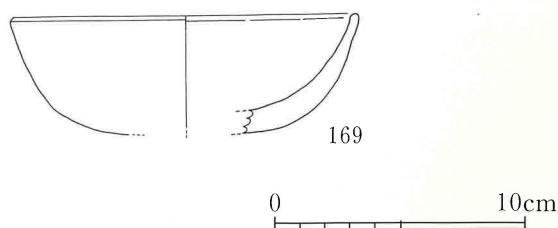
遺物の出土状況

前庭部

前庭部からの遺物の出土はない。

玄室

玄室内からは土師器碗の破片(169)が1点出土したが、敷石の除去された場所からの出土であり、当横穴墓に伴う副葬品かどうかの判断はつかない。

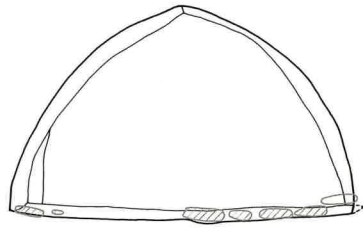


第73図 第9支群1号墓出土遺物実測図 (1/3)

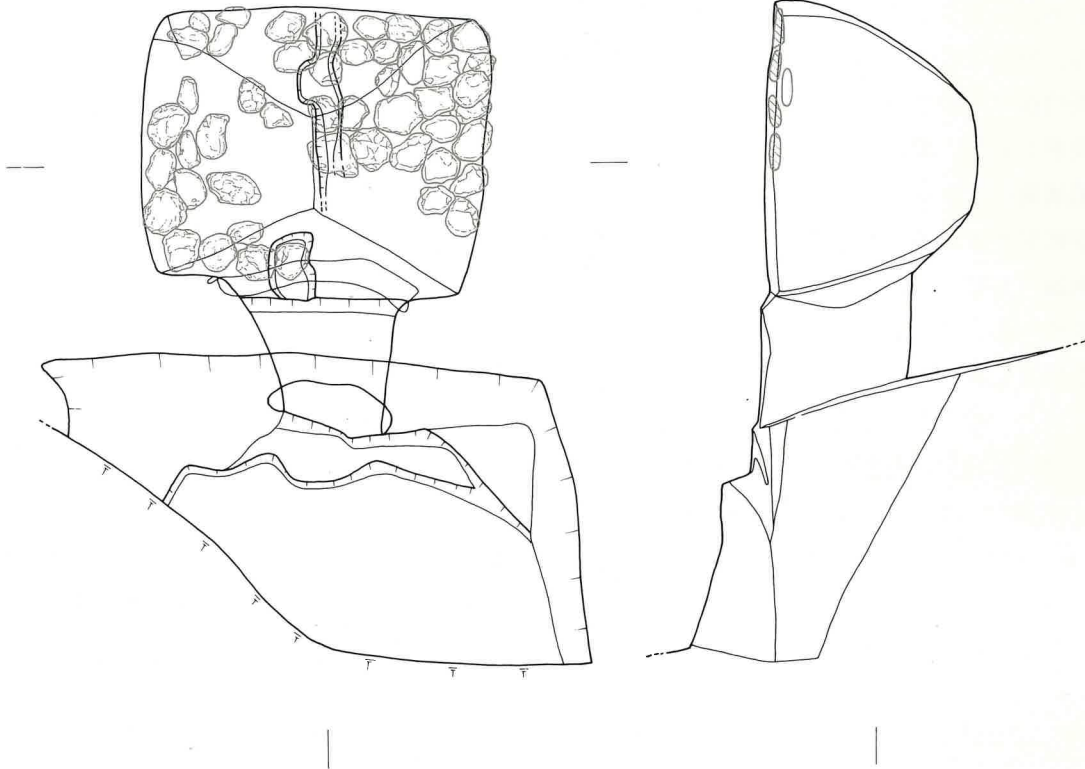
表19 第9支群1号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
169	碗	(13.7)	口縁部はわずかに内傾しながらのび、端部は丸い。	ナデ・ヘラ痕有	ナデ	黄橙色	角閃石粒有・白色細粒若干	良好		土師器

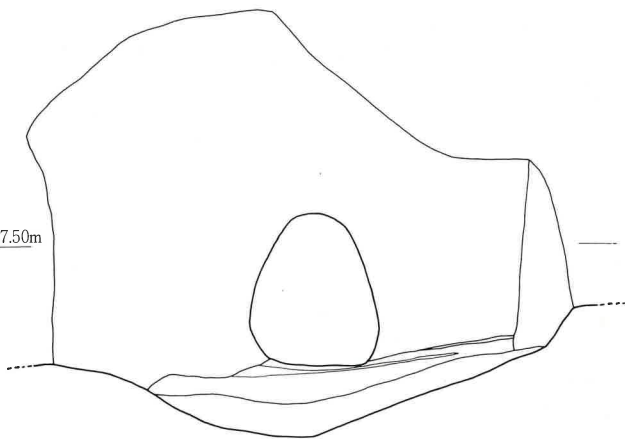
117.50m



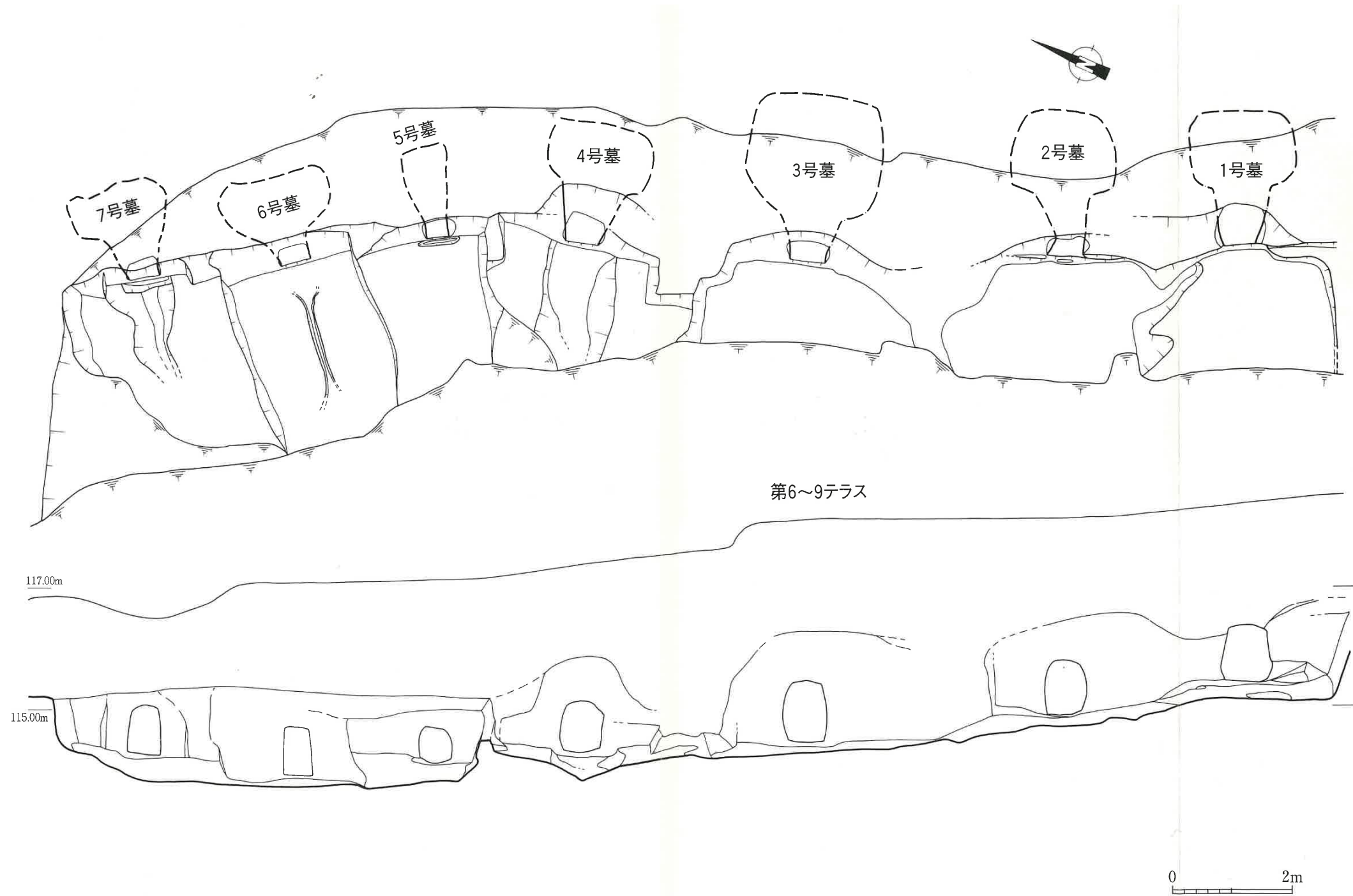
117.50m



117.50m



第74图 第9支群1号墓实测图 (1/40)



第75図 第10支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

第10支群

第10支群は、調査区中央付近の第6～9支群下段に位置し、7基の横穴墓で構成されている。当支群は各支群と同様、南西向き斜面を東西2～3m、南北約22mの範囲に削り出し、テラス状の平地を造り出している。標高は前庭部床面で114～115mである。当支群の存在は調査以前は確認できなかったが、表土層除去・掘り下げ検出作業を行なった結果、斜面の人為的な削平が認められた事が発見の契機となった。

第10支群1号墓

概要

1号墓は第10支群の南端に位置し、西方向に開口する。二次堆積土で覆われていたため保存状態は比較的良好である。標高は羨門付近で115.35m、玄室主軸方向はN-41°-Eをさす。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、玄室内の構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ2.04m、幅1.98mで、右壁は斜面である。床面は凹凸がみられ、前面は低く中央付近で高まり、その後、後方に向かって下降する。

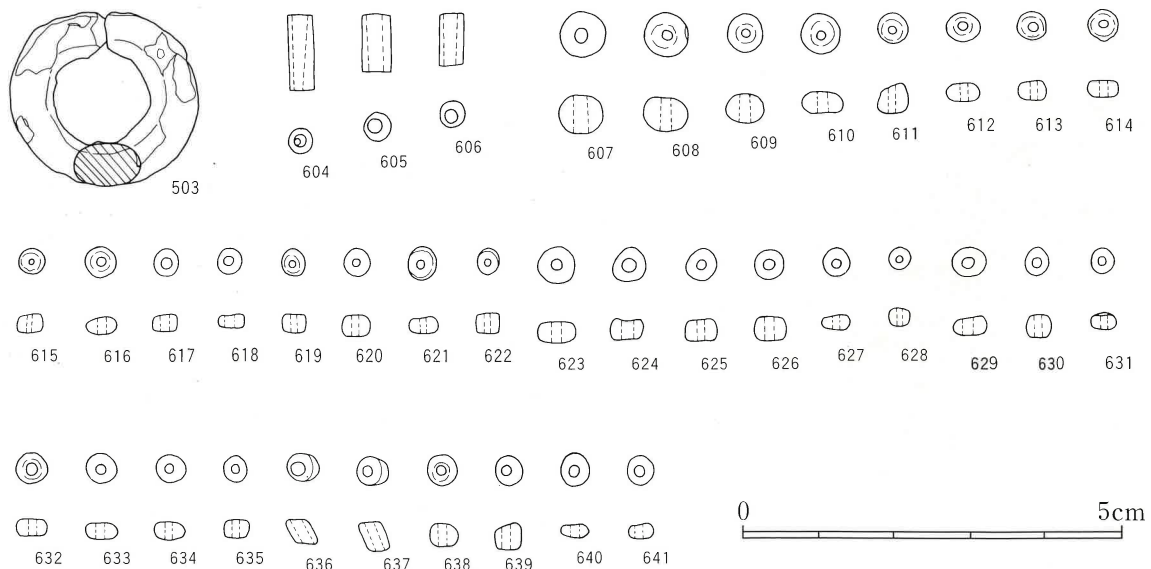
羨門部は天井・左右両壁の一部が剥落している。幅は0.66m、高さは不明である。前庭部と羨門の間には高低差約10cmの段をもち、前庭部との境を明瞭にしている。

閉塞施設は現存しない。

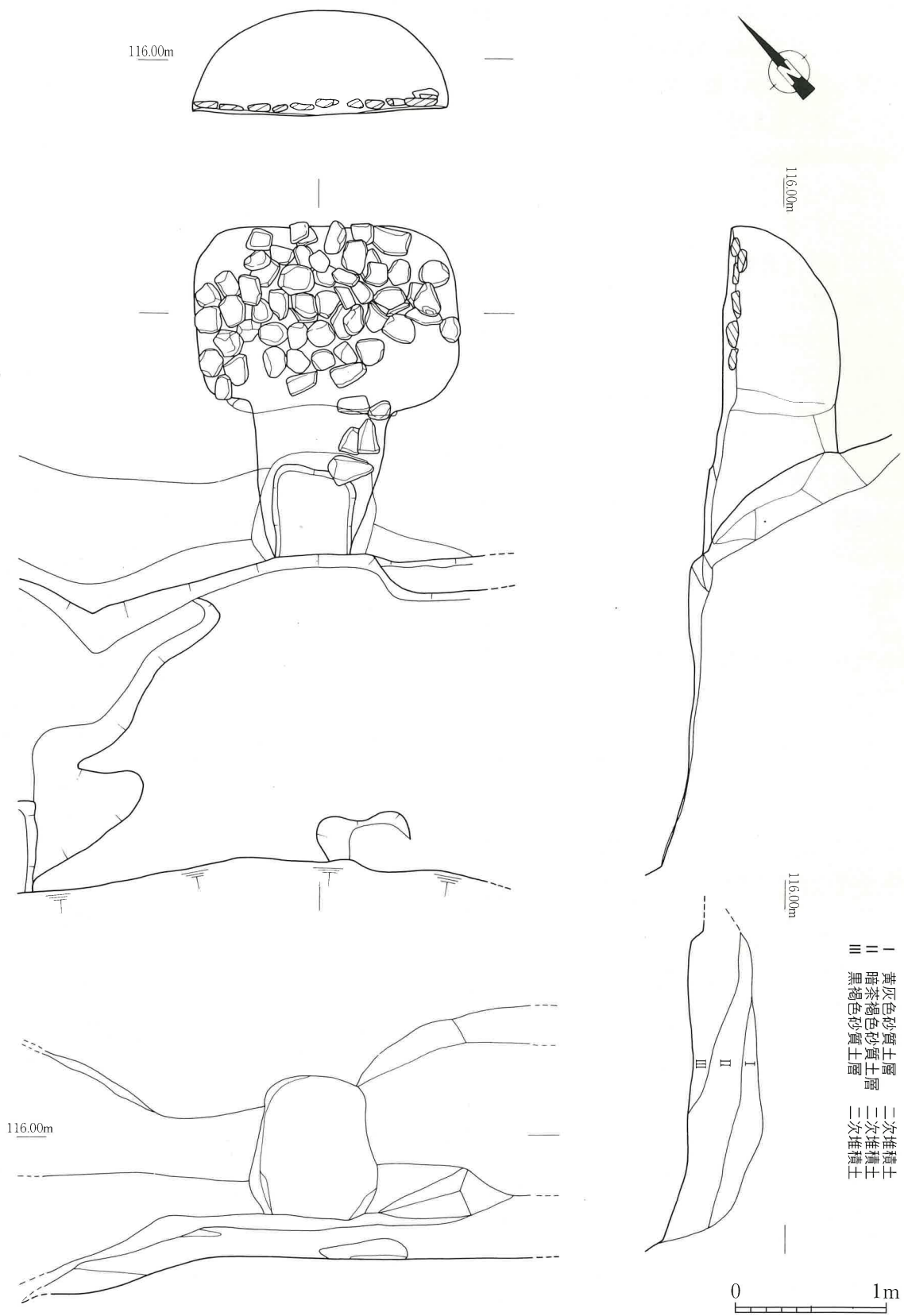
前庭部内の埋土は3層確認された。I～III層はすべて後世の二次堆積土で、埋葬に伴う埋土は認められず、土層観察からは追葬の有無は判断できなかった。

羨道・玄室

羨道は長さ0.99m、玄門幅0.99m、玄門高0.74mで、床面には羨道から続く長さ・幅0.55m、深さ5cm程度の方形の掘り込みがみられる。



第76図 第10支群1号墓出土遺物実測図 (実大)



第 77 图 第 10 支群 1 号墓实测图 (1/40)

玄室の平面形態は平入り隅丸長方形の様相を呈している。玄室床面には径20～30cm前後の扁平河原石を敷いている。長さ1.19m、幅は裾部1.52m・中央部1.75m・奥壁1.43m、高さ0.79mである。床面はほぼ平坦で奥壁に向かって約3°の傾斜で上昇する。天井形態はアーチ形を呈している。奥壁・両側壁は内湾しながら立ち上がる。

遺物の出土状況

玄室

敷石間の堆積土中から耳環1・管玉3・ガラス小玉35個が出土した。

表20 第10支群1号墓出土耳環計測表

(単位:mm・g)

番号	作り	外径	断面径	重量	備考
503	銅地金張	25.0×23.0	9.0×6.0	12.3	緑青

表21 第10支群1号墓出土玉類計測表

番号	種類	材質	色調	長径(mm)	短径(mm)	孔径(mm)	重量(g)	備考
604	管玉	碧玉	灰緑	10.0	3.1	2.0～0.7	0.1	
605	〃	〃	緑	7.5	3.8	2.0～1.8	0.1未満	
606	〃	〃	緑	6.8	3.2	1.8	〃	
607	小玉	ガラス	常磐色	6.0	5.0	1.5	0.4	気泡微量有・亀裂2箇所有
608	〃	〃	常磐色	5.5	4.3	1.0	0.3	気泡有
609	〃	〃	常磐色	5.0	3.7	1.0	0.2	劣化の為、一部白濁
610	〃	〃	濃黄緑色	5.2	2.7	1.1	0.1	気泡微量有
611	〃	〃	濃黄緑色	3.8	3.9～3.0	1.0	0.1未満	
612	〃	〃	濃黄緑色	4.0	2.5	1.1	〃	
613	〃	〃	濃黄緑色	3.9	2.7	1.1	〃	
614	〃	〃	濃黄緑色	3.7	2.0	1.0	〃	
615	〃	〃	濃黄緑色	3.5	2.2	0.8	〃	
616	〃	〃	黄緑色	4.0	2.2	1.0	〃	
617	〃	〃	若竹色	3.4	2.0	1.5	〃	
618	〃	〃	若竹色	3.0	1.8	1.5	〃	
619	〃	〃	若竹色	2.9	2.2	0.8	〃	
620	〃	〃	ラムネ色	3.5	2.8	0.8	〃	側面に穿孔?
621	〃	〃	ターコイズブルー	3.8	2.0	0.8	〃	
622	〃	〃	浅葱色	3.0	2.5	0.9	〃	
623	〃	〃	マリンプルー	4.8	2.9	1.4	〃	
624	〃	〃	マリンプルー	4.1	2.6	1.8	〃	ゆがみ有
625	〃	〃	マリンプルー	4.0	2.9	1.0	〃	
626	〃	〃	マリンプルー	3.9	3.0	1.4	〃	気泡多量
627	〃	〃	マリンプルー	3.2	2.0	1.1	〃	気泡有
628	〃	〃	マリンプルー	2.8	2.2	0.8	〃	気泡有
629	〃	〃	くすんだマリンプルー	4.3	2.2	1.5	〃	気泡有
630	〃	〃	くすんだマリンプルー	3.2	3.0	1.2	〃	
631	〃	〃	くすんだマリンプルー	2.8	2.0	1.0	〃	
632	〃	〃	暗いマリンプルー	4.0	2.0	1.2	〃	
633	〃	〃	暗いマリンプルー	4.0	2.0	1.2	〃	
634	〃	〃	暗いマリンプルー	3.9	2.1	1.0	〃	
635	〃	〃	暗いマリンプルー	3.1	2.2	1.0	〃	
636	〃	〃	暗いマリンプルー	3.0	3.0	1.8	〃	
637	〃	〃	藍色	3.0	4.0	1.2	〃	
638	〃	〃	藍色	3.8	3.0	1.2	〃	
639	〃	〃	藍色	3.3	3.5	1.2	〃	
640	〃	〃	藍色	3.8	1.8	1.2	〃	
641	〃	〃	藍色	3.2	2.0	1.4	〃	

第10支群2号墓

概要

2号墓は1号墓との間に20cm程度の段差は持つものの、ほぼ並行して構築されている。前庭部は堆積土で覆われていたが、いずれも二次堆積土であり、当横穴墓は後世の一時期攪乱を受けたと考える。標高は羨門付近で114.85m、玄室主軸方向はN-40°-Eをさし、西方向に開口する。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ2.05m、幅2.83mで不定形をしている。床面は平坦で、後方に向かって約5°の傾斜で緩やかに下降する。羨門部前面に長さ30cm、幅7～8cm、深さ5cm程度の掘り込みが認められる。

羨門部は側壁が一部剥離しているものの、天井は残っている。幅0.59m、高さ0.85mで、前庭部と羨門部の間には高低差3cm程度の段差をもち、前庭部との境としている。

閉塞施設は現存しない。

前庭部内の埋土は5層確認されたが、すべて後世の二次堆積土であり、埋葬に伴う埋土は認められず、土層観察からは追葬の有無は判断できなかった。

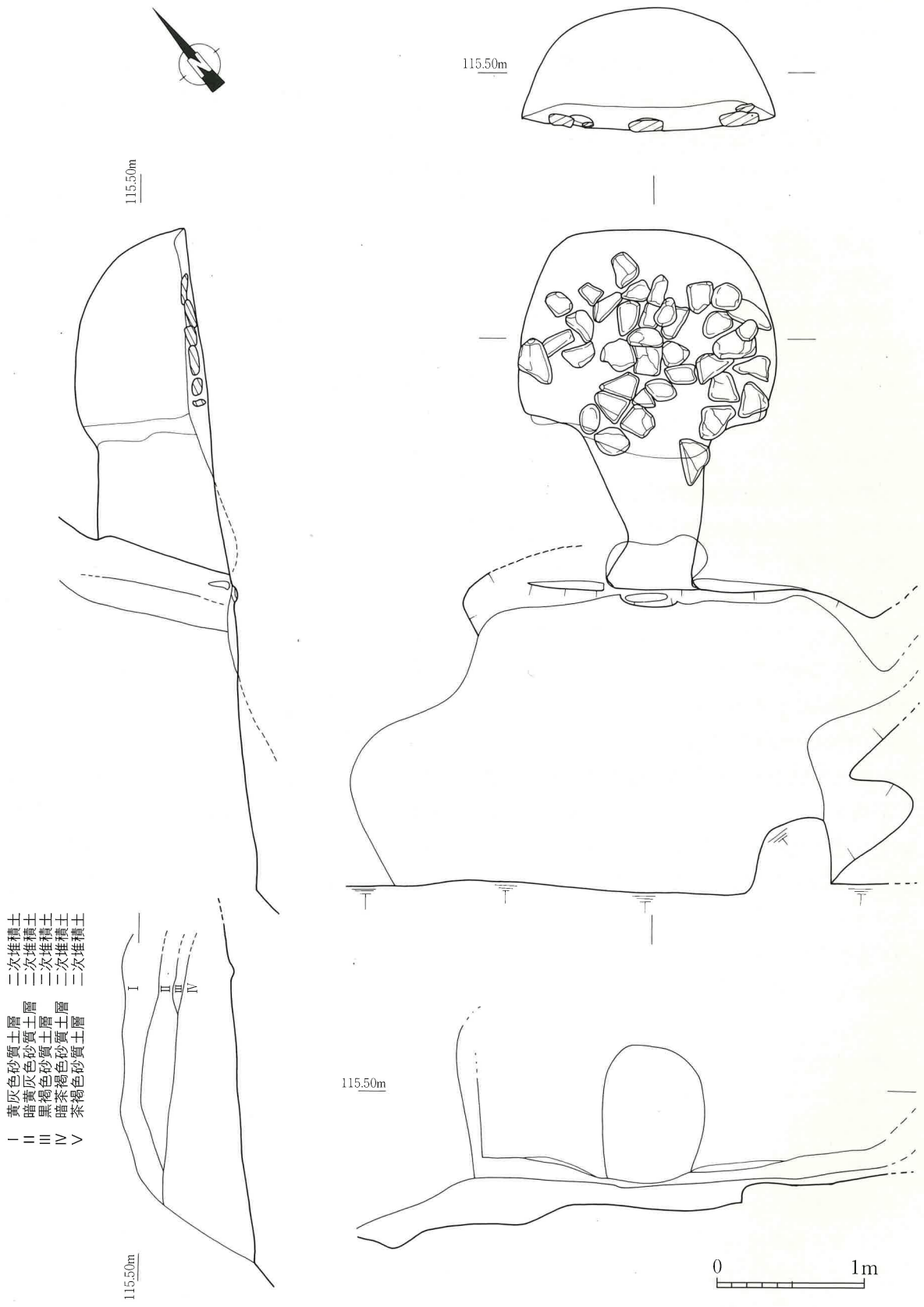
羨道・玄室

羨道は、長さ0.99m、中央幅0.48m、玄門幅0.87m、玄門の高さ0.77mで、中央やや羨門寄りで一端狭まり、玄門に向かって再び開く。床面はほぼ平坦で玄室に向かって約8°の傾斜で上昇する。排水構等の施設はもたない。

玄室の平面形態は平入り胴張り長方形の様相を呈している。床面には径20～30cm前後の扁平河原石・角礫を敷いているが、攪乱を受けたものと思われ玄室の一部分で確認された。標高は中央床面で115.1m、長さ1.45m、幅は裾部1.63m・中央部1.73m・奥壁1.14m、高さ0.87mで、床面は羨門部からそのまま奥壁に向かって約8°の傾斜で上昇する。天井形態はアーチ形で、奥壁・両側壁は内傾しながら天井へと立ち上がる。両袖コーナーからは稜線が天井に向ってのびる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。



第 78 图 第 10 支群 2 号墓实测图 (1/40)

第10支群3号墓

概要

3号墓は第10支群のほぼ中間に位置する。前庭部は二次堆積土で覆われていた。標高は羨門付近で114.35m、玄室主軸方向はN-74°-Eをさし、西方向に開口する。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去・玄室内埋土の構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ1.35m、幅3.48mで不定形である。床面はほぼ平坦で、後方に向かって約5°の傾斜で緩やかに下降する。

羨門部は側壁が一部剥離しているものの、比較的残りは良い。幅0.61m、高さ1.02mで、前庭部と羨門部の間には高低差8cm程度の段差をもち、前庭部との境を明瞭にしている。

閉塞施設は現存しない。

前庭部内の埋土は2層確認された。Ⅱ層は埋葬に伴う埋土で、初葬時或いは追葬時の埋土かの判断はつかない。Ⅰ層は後世の二次堆積土である。

羨道・玄室

羨道は、長さ0.82m、玄門幅1.11m、玄門の高さ0.96mで、玄門に向かって開く。床面はほぼ平坦で玄室に向かって約5°の傾斜で上昇する。

玄室の平面形態は胴張り隅丸方形である。床面中央付近一帯に径20～30cm前後の扁平河原石・角礫を敷いているが、壁周辺には礫はみられず、比較的雑な造りである。さらに、床面から約30cm上位、標高114.9mの位置に2回目の床面をもつ。この床面は最初の床面に埋土を行い、上部を整地して固めて屍床としている。また床面からは径15cm前後の扁平河原石10個程度が出土したが敷石を形成するほどではない。或いは後世の攪乱により、礫は玄室外へ破棄された可能性も持つ。この床面は追葬時に整地して使用した床面である。標高は中央床面で114.65m、長さ1.92m、幅は裾部1.73m・中央部2.23m・奥壁1.95m、高さ1.29mで、玄室と羨道の間には高低差5cm程度の段差をもち、玄室との境を明瞭にしている。床面は凹凸をもちながら、奥壁に向かって緩やかに上昇する。天井形態は切妻形であるが棟は存在しない。奥壁はほぼ直線状に立ち上がり、両側壁は内傾しながら天井へと立ち上がる。四隅コーナーからは稜線が天井に向ってのびる。

遺物の出土状況

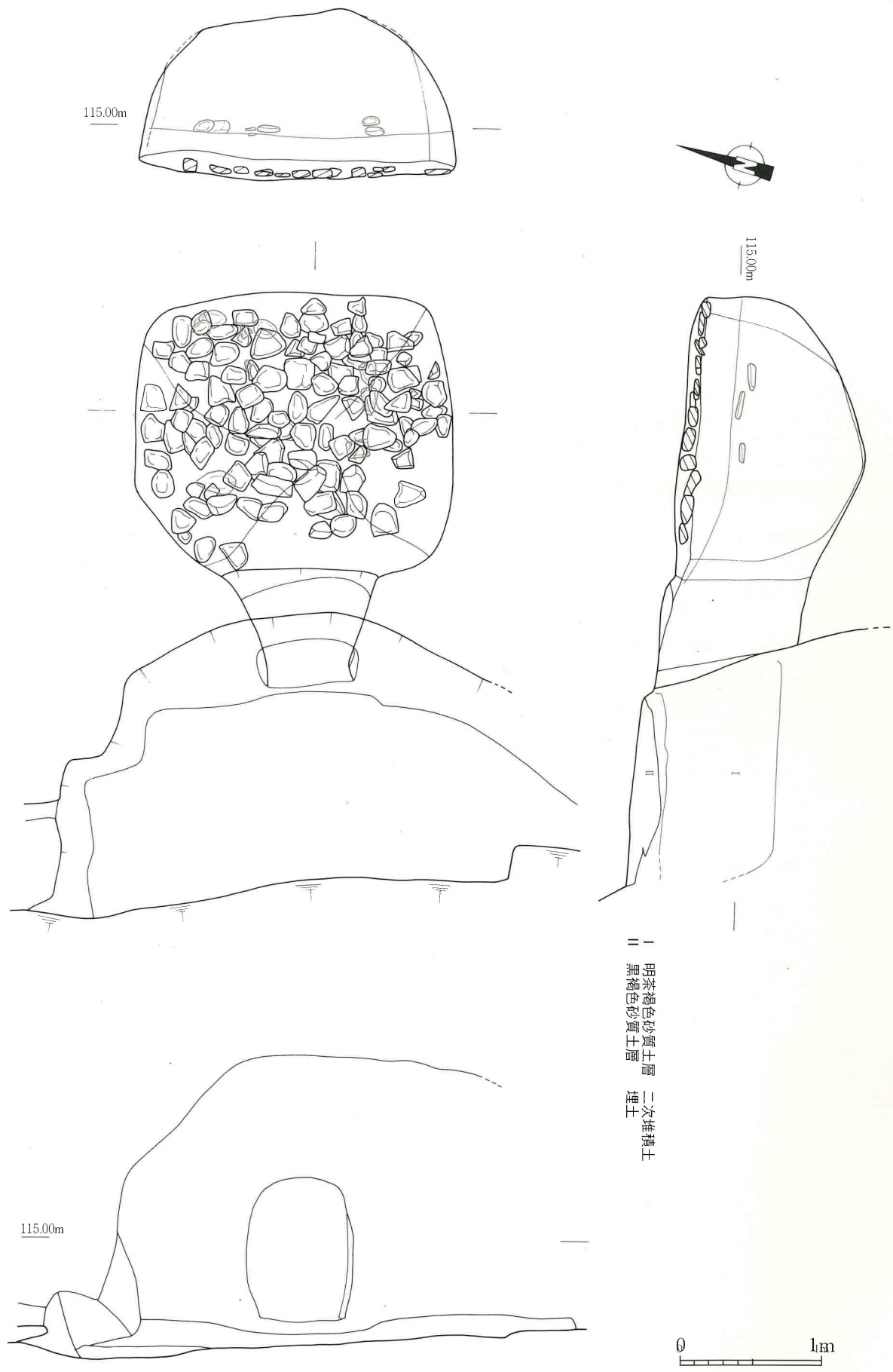
前庭部

遺物は出土していない。

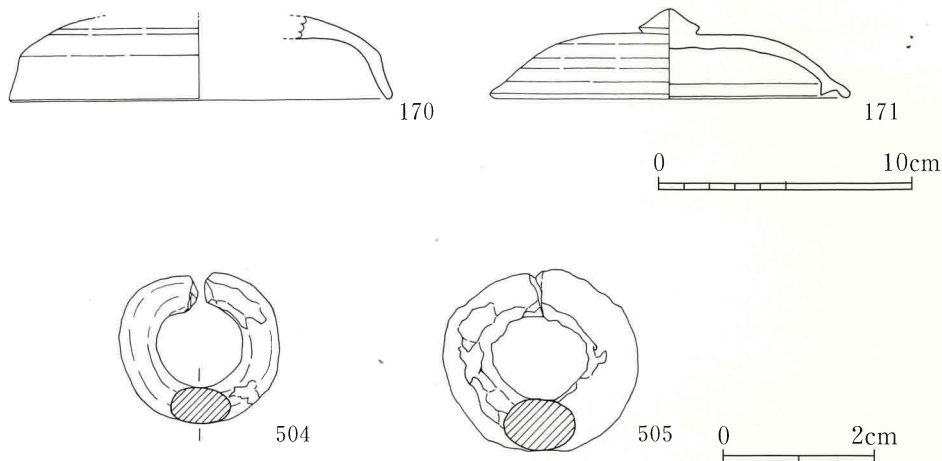
玄室

最初の床面からは中央右壁寄りで骨片・歯・耳環(504・505)が、追葬床面からは坏蓋(171)が出土した。坏蓋片(170)は一括遺物で出土地は不明である。

副葬品の製作年代は170の坏蓋が6世紀後半～末、171の坏蓋が7世紀後半代と考え、6世紀後半代から7世紀後半まで当横穴墓では埋葬が行われていたと考える。



第 79 图 第 10 支群 3 号墓实测图 (1/40)



第80図 第10支群3号墓出土遺物実測図 (1/3・実大)

表22 第10支群3号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部)径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
170	坏蓋	15.2 - -	天井部は丸い。口縁部との境に稜を持つ。口縁部は外反しながらのび、端部は尖り気味である。	回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削り	暗赤褐色	角閃石粒・ 白色細粒・ 石英粒(1~ 2mm)若干	良好		
171	坏蓋	11.9 14.2 3.5	天井部はわずかに丸みを持ち、中央に宝珠つまみを有する。口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向にのびながら端部は尖り気味である。	多方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ 回転ヘラ削り 後横ナデ	灰色	白色細粒有・ 石英粒(2~ 4mm)若干	良好		

表23 第10支群3号墓出土土耳環計測表

(単位:mm・g)

番号	作り	外径	断面径	重量	備考
504	銅地金張	21.0 × 20.0	8.0 × 5.0	9.6	緑青・金張一部欠損
505	銅地金張	26.0 × 24.0	9.5 × 7.0	13.1	緑青

第10支群4号墓

概要

4号墓は3号墓と同様、第10支群のほぼ中間に位置し、単独の前庭部をもつ。前庭部は二次堆積土で覆われていた。標高は羨門付近で114.2m、玄室主軸方向はN-77°-Eをさし、西方向に開口する。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ2.07m、幅2.48mで不定形である。さらに中央部分が幅1.2m、深さ10cm程度の溝状に掘り込まれている。前庭部は後方に向かって約7°の傾斜で下降する。

羨門部は側壁の剥離がみられるものの、比較的残りは良い。幅0.52m、高さ0.86mで、前庭部と羨門部の間には高低差8cm程度の段差をもち、前庭部との境を明瞭にしている。

閉塞施設は現存しない。

前庭部内の埋土は6層確認された。Ⅳ～Ⅵ層は初葬に伴う埋土と考える。Ⅳ層は風化土層で、Ⅲ層に切られている。Ⅱ～Ⅲ層は追葬に伴う埋土と考える。Ⅲ層は羨門部の半分を覆い、Ⅳ層を切り込んでいる。Ⅱ層は風化土層である。Ⅰ層は後世の二次堆積土である。

羨道・玄室

羨道は、長さ1.01m、玄門幅1.05m、玄門の高さ0.88mで、玄門に向かって大きく開く。玄門寄りには玄室から続く敷石を施している。玄室との間には段差をもち、床面はほぼ平坦で玄室に向かって約4°の傾斜で緩やかに上昇する。

玄室の平面形態は平入り胴張り隅丸長方形である。床面には径15～30cm前後の扁平河原石・角礫を敷きつめている。敷石は玄室全面と羨道の一部に隙間なく敷かれており、丁寧な造りである。標高は中央床面で114.35m、長さ1.06m、幅は裾部1.43m・中央部1.76m・奥壁1.47m、高さ0.97mである。右側壁に沿って幅20cm、深さ5cm前後の排水溝状の掘り込みがみられる。床面は比較的平坦で、奥壁に向かって緩やかに上昇する。天井形態はアーチ形である。奥壁・両側壁は約80°の傾斜角で一端直線状に立ち上がり、天井へとのびる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。

第10支群5号墓

概要

5号墓は4・6号墓構築後の壁面の僅かな空間を利用して構築された横穴墓で、南西方向に開口する。前庭部は二次堆積土で覆われていたため、比較的残りは良い。玄室主軸方向はN-53°-Eをさす。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、玄室内の構造確認等を順次行った。

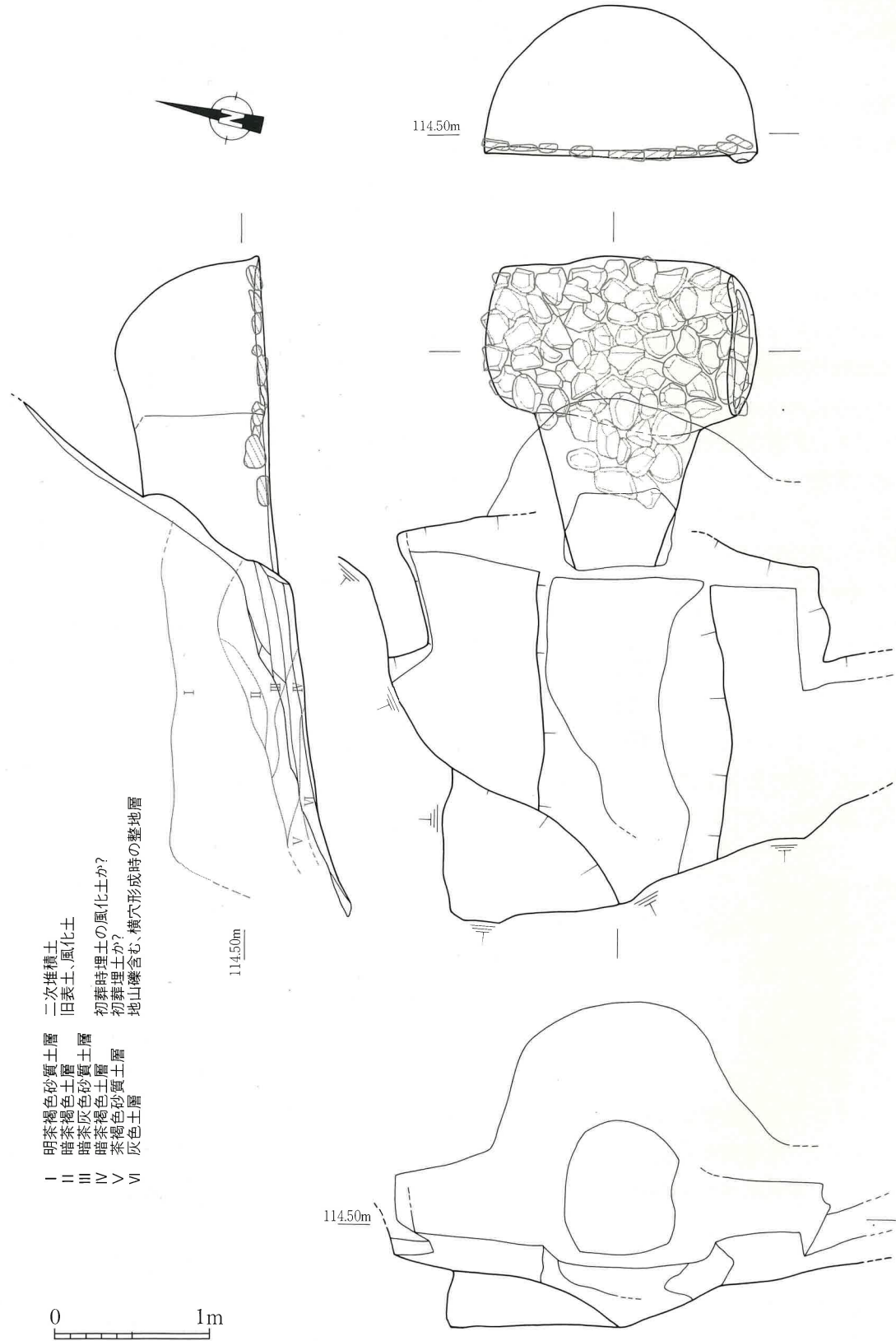
規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は4・6号墓間の斜面を平坦に整形している。幅2.0m、長さ2.32mで羨門部前面に幅約80cm、深さ2cm程度の掘り込みがみられる。

羨門部は幅0.37m、高さ0.61mで、前庭部と羨門部の境に5cm程度の段差をもち、前庭部との境を明瞭にしている

閉塞施設は閉塞石は存在しないが、径20cmと30cm前後の角礫2個が前庭部から出土した。前庭部内の埋土は6層確認され、Ⅵ層が埋葬に伴う埋土で、Ⅰ～Ⅴ層は二次堆積土である。



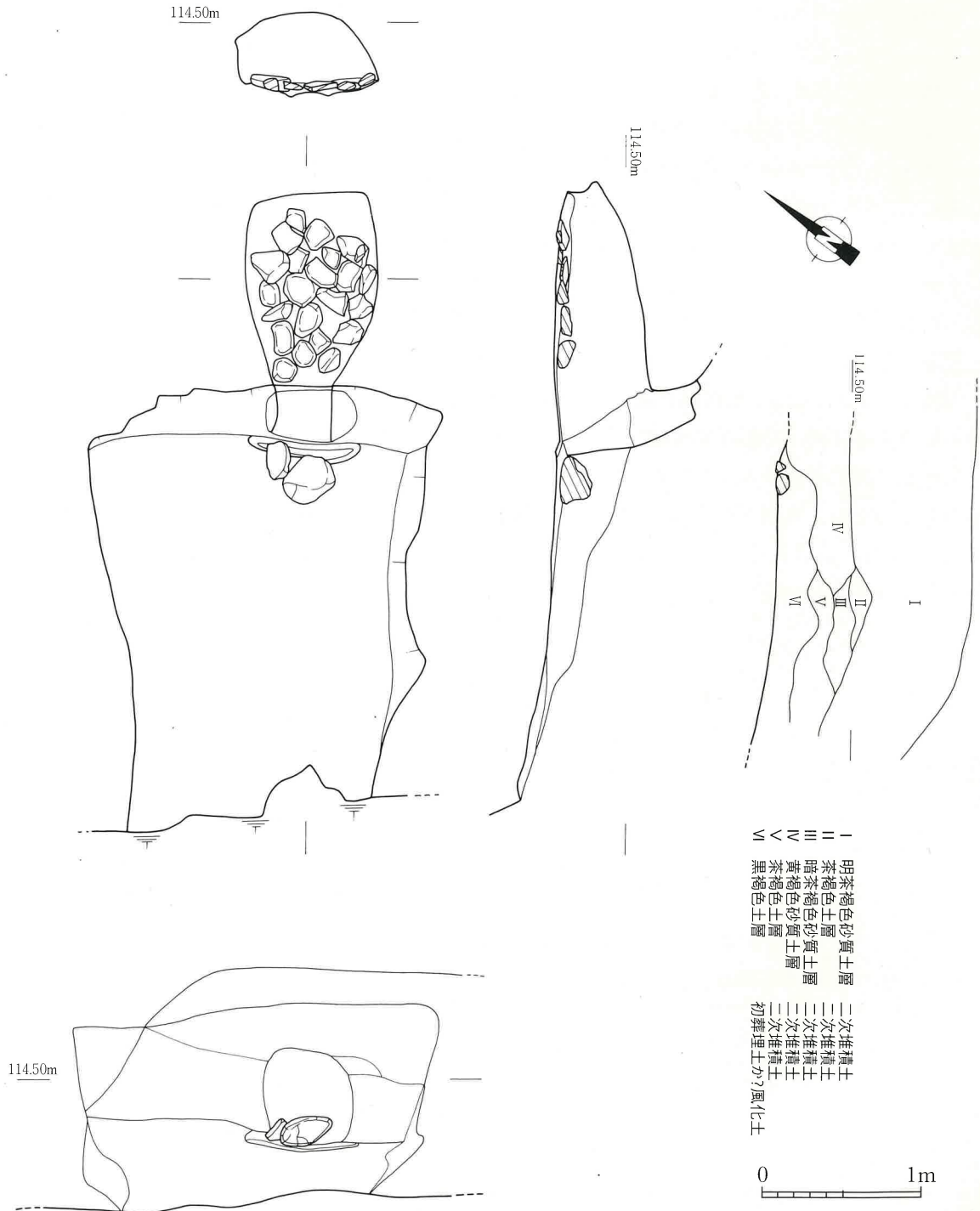
第 81 図 第 10 支群 4 号墓実測図 (1/40)

羨道・玄室

当横穴墓は羨道と玄門、玄門と玄室の明瞭な区画のない、不整長方形型の玄室形態をとっているが、他の横穴墓と少し違い、羨門部付近は比較的狭く、その後大きく広がる形態をとっている。玄室は標高 114.05m、長さ 1.53m、幅 0.58m、中央の高さ 0.56m である。玄室中央床面には径 20～30cm 前後の扁平河原石と角礫を敷きつめている。床面は側壁周辺が高く、中央が窪み、奥壁に向って、約 5°の傾斜で上昇する。床・壁面全面に粗い工具痕が残る。

遺物の出土状況

前庭部、玄室内とも遺物は出土していない。



第 82 図 第 10 支群 5 号墓実測図 (1/40)

第10支群6号墓

概要

6号墓は第10支群の北側に位置する。前庭部は二次堆積土で覆われていて、保存状態は比較的良好である。標高は羨門付近で113.8m、玄室主軸方向はN-51°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は前庭部プランの確認、同埋土の検討、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ3.01m、幅2.14mで長方形の形状をしている。中央には長さ2mにわたって排水溝が掘られている。また、前庭部左右コーナー付近には玄室から掻き出した敷石がみられる。

羨門部は幅0.51m、高さ0.8mで、前庭部と羨門部の間には高低差10cm程度の段差をもち、羨門部を一段高く構築して前庭部との境としている。

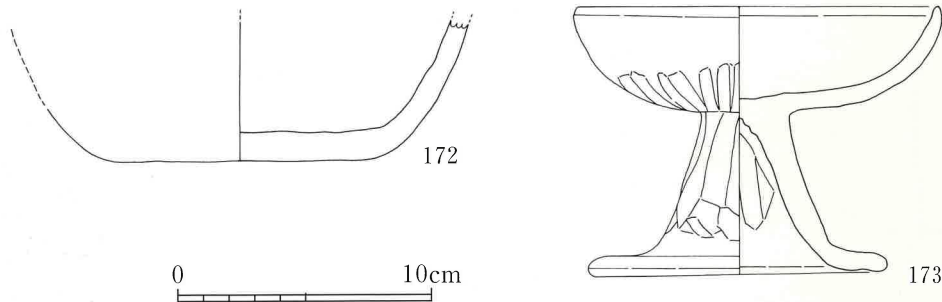
閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石を閉塞石として使用している。長さ1.14m、上端幅0.56m、下端幅0.66m、厚さ0.24mで、丁寧な整形を施している。閉塞石は前庭部方向へ倒れており、床面との間に埋土を2層挟む。

前庭部の埋土は8層確認された。Ⅶ～Ⅷ層は閉塞石の下で、初葬埋土と考える。Ⅳ～Ⅴ層は閉塞石・敷石を覆うことから、閉塞石を倒した後の追葬埋土と考える。Ⅰ～Ⅲ層は二次堆積土である。

羨道・玄室

羨道は、長さ0.41m、玄門幅0.8m、玄門の高さ0.71mで、玄門に向って緩やかに開く。床面はほぼ平坦で玄室に向って約5°の傾斜で上昇する。排水溝等の施設はもたない。

玄室の平面形態は平入り不整隅丸長方形の様相を呈している。床面には初葬時、径20～30cm前後の扁平河原石・角礫を敷きつめていたが、追葬時に前庭部に掻き出したと考える。長さ1.02m、中央幅1.86m、高さ0.72mで、床面は奥壁に向って緩やかに立ち上がる。天井形態はアーチ形で、奥・左右両壁とも内傾しながら立ち上がる。



第83図 第10支群6号墓出土遺物実測図 (1/3)

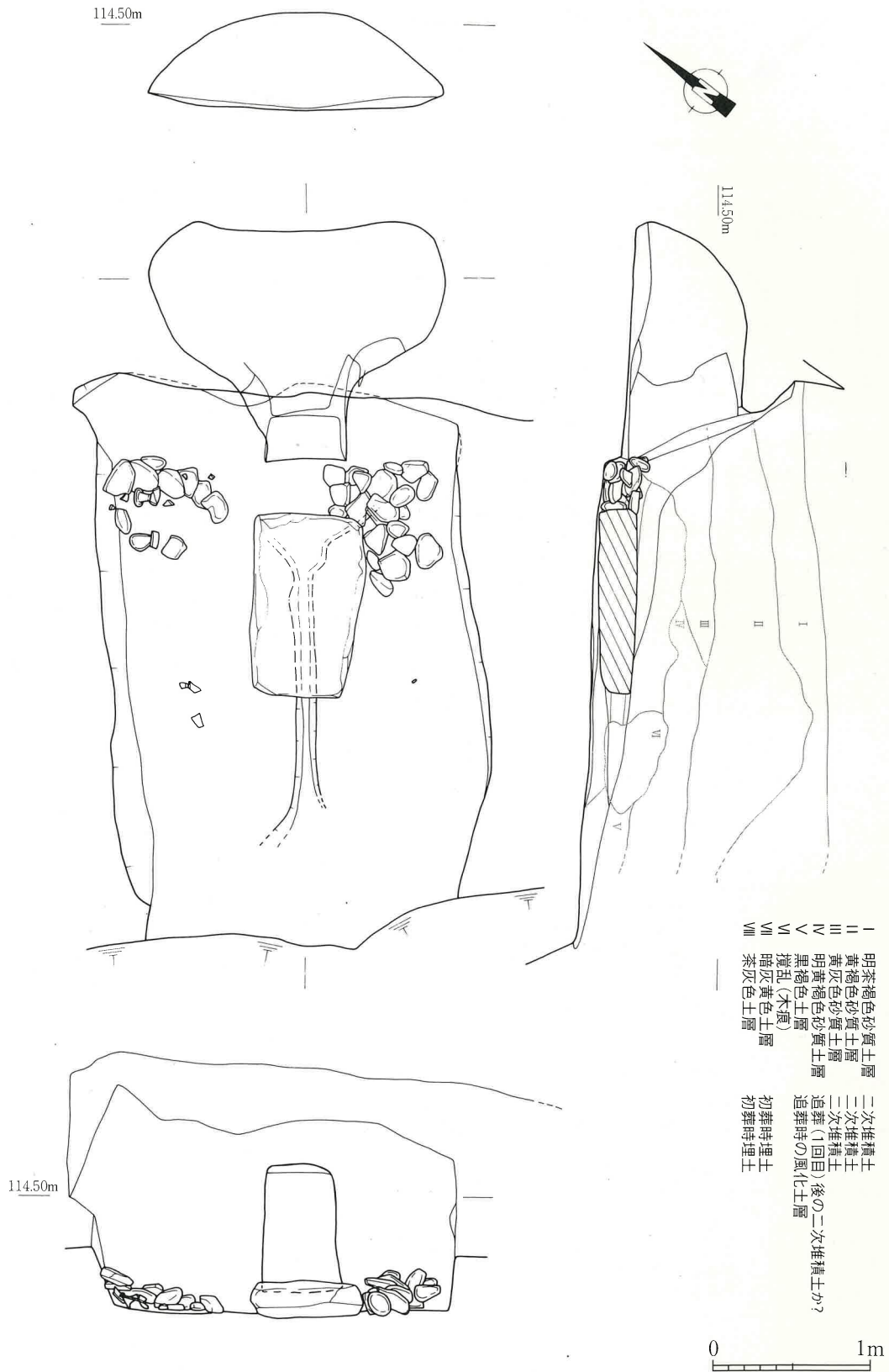
表24 第10支群6号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径(受部) 底径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
172	平瓶	10.2 (底径)	体部上位にカキ目を施す。底部は平らである。	ナデ・回転ナデ	カキ目・ヘラ削り後ナデ・ナデ	灰色 赤褐色	白色細粒多量・長石粒有・石英粒(1～2mm)微量	良好		
173	高坏	14.5 11.7 10.5	坏部口縁は内傾しながらのび、先端部はさらに内傾する。端部は丸い。脚部は下外方向にのび、さらに裾部はほぼ水平にのびる。端部は丸い。	丁寧なナデ 回転ナデ	回転ナデ・ヘラ削り・横ナデ・削り	淡橙色	角閃石粒多量・長石粒・赤褐色粒有 石英(2mm)若干	良好		土師器

遺物の出土状況

前庭部

左コーナーの敷石が集中している場所から、副葬品の平瓶の底部・土師器高杯が出土した。

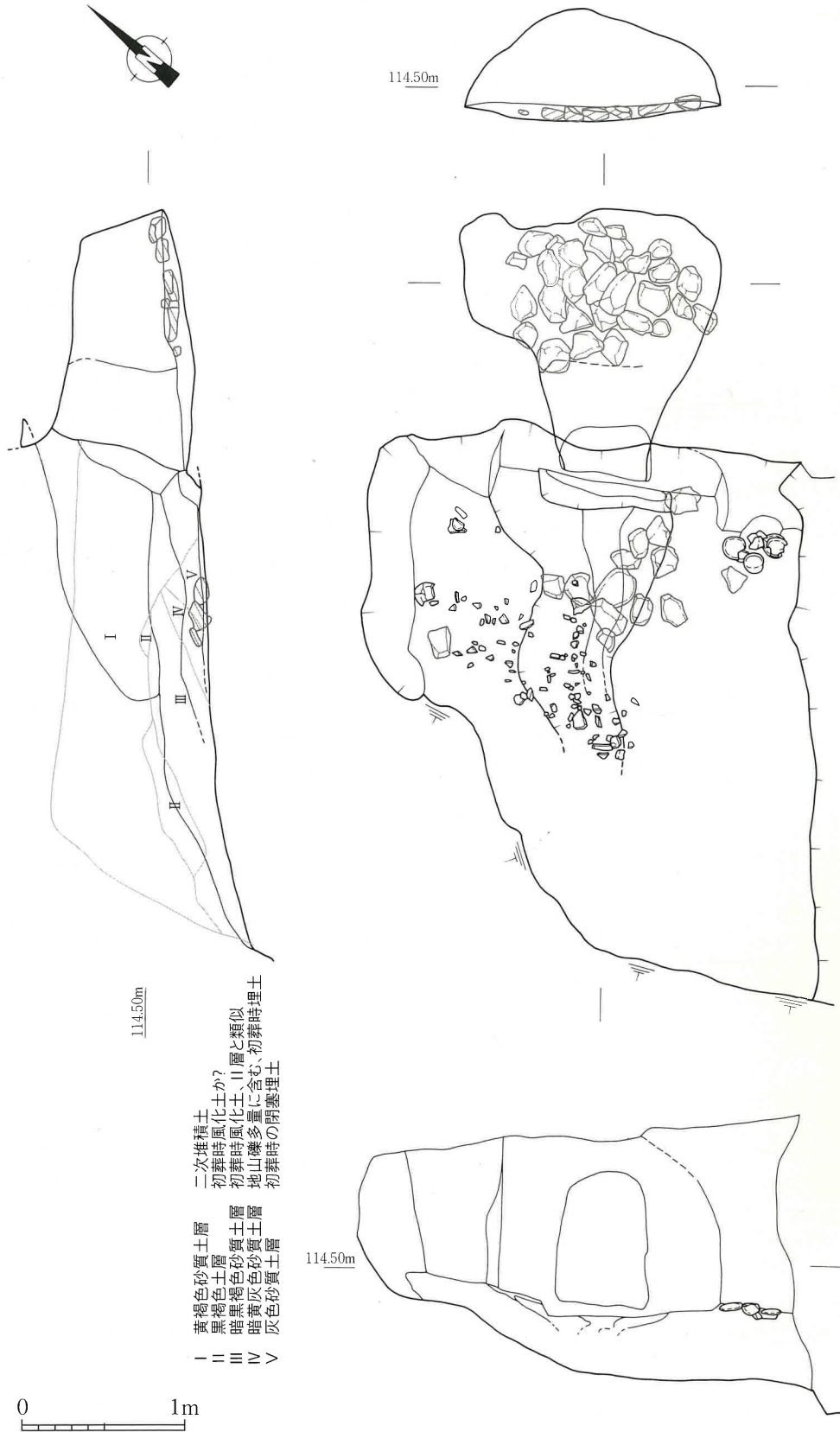


第 84 図 第 10 支群 6 号墓実測図 (1/40)

第10支群7号墓

概要

7号墓は第10支群の北端に位置し、南西方向に開口する。前庭部は二次堆積土で覆われていた。標高は羨門付近で114.2m、玄室主軸方向はN-50°-Eをさす。調査は前庭部プランの確認、同埋



第85図 第10支群7号墓実測図 (1/40)

土の検討、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ3.09m、幅2.39mでほぼ長方形をしており、中央部分に長さ1.8m前後の排水溝と羨門部前面に閉塞石を立てたと考える浅い掘り込みがみられる。また、敷石の一部とみられる河原石・角礫が前庭部中央付近で検出された。前庭部は後方に向かって緩やかに下降する。

羨門部は側壁の一部に剥離がみられるものの、比較的残りは良い。幅0.5m、高さ0.81mで、前庭部と羨門部の間には高低差8cm程度の段差をもち、前庭部との境を明瞭にしている。

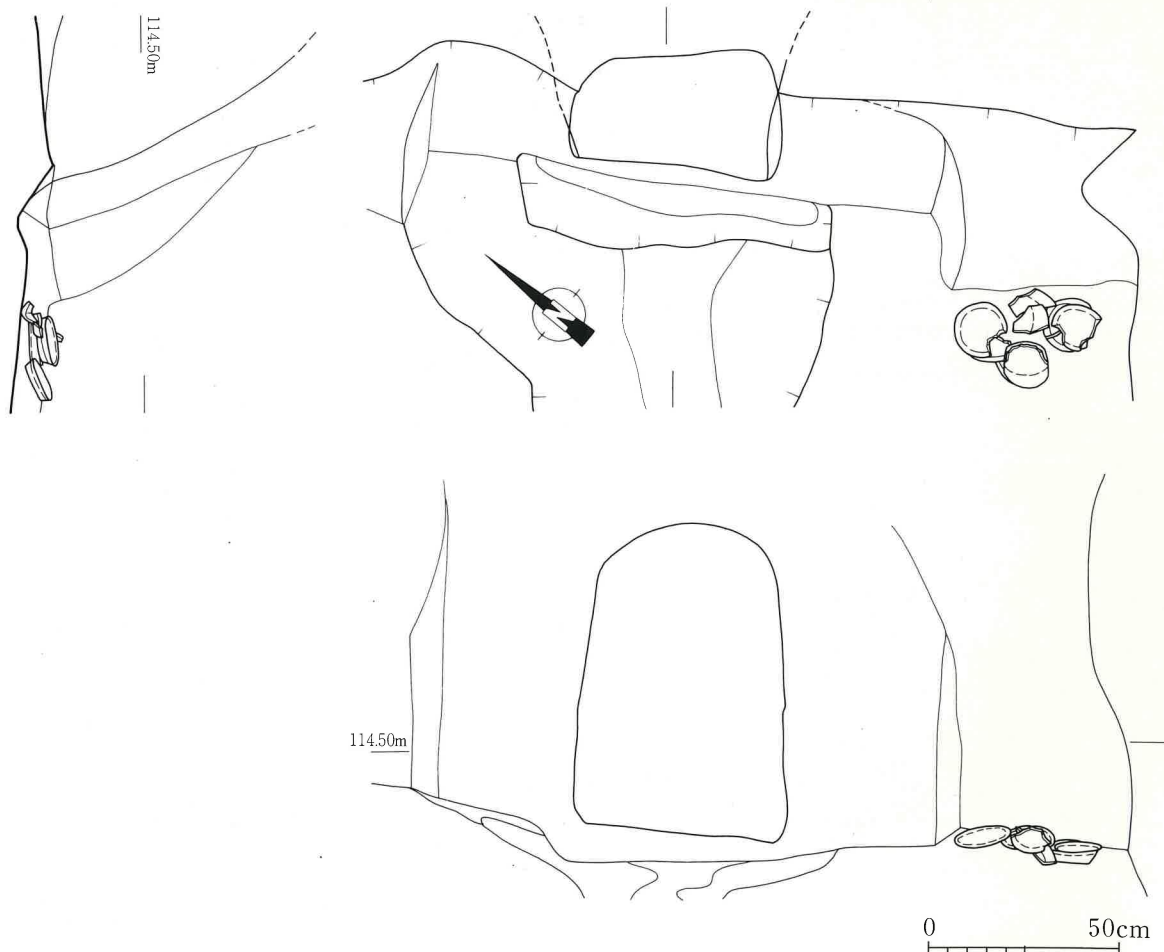
閉塞施設は現存しない。

前庭部内の埋土は5層確認された。Ⅲ～Ⅴ層は初葬に伴う埋土と考える。Ⅲ層は風化土層で、Ⅱ層も風化土層の可能性をもつ。いずれも切り込まれており、閉塞石も無いことから、追葬埋土は残っていないものの、追葬は行われたと考える。Ⅰ層は後世の二次堆積土である。



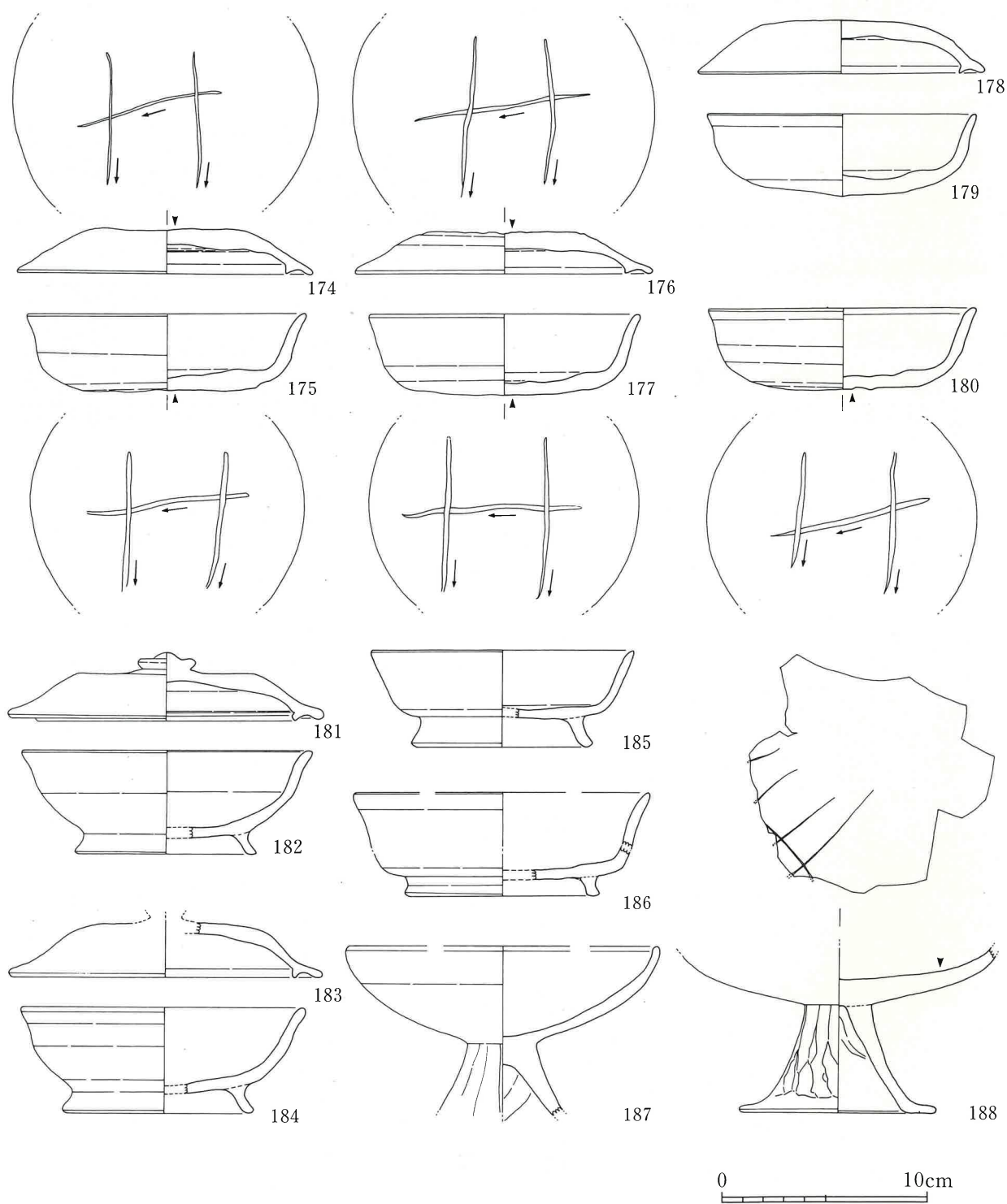
羨道・玄室

羨道は、長さ0.65m、玄門幅0.9m、玄門の高さ0.78mで、玄門に向かって大きく開く。床面はほぼ平坦である。



第86図 第10支群7号墓遺物出土状況実測図 (1/20)

玄室の平面形態は平入り不整隅丸長方形である。床面には径15～30cm前後の扁平河原石・角礫を敷きつめている。敷石は玄室中央部分に重なり合って敷かれ、敷き方としては雑である。標高は中央床面で114.25m、長さ0.95m、幅は裾部1.08m・中央部1.59m・奥壁1.38m、高さ0.73mである。排水溝等の施設はみられない。床面はほぼ平坦で、奥壁に向かって約10°の傾斜で上昇する。天井形態はアーチ形である。奥壁は約70°の傾斜で直線状に立ち上がり両側壁は内湾しながら立ち上がる。



第 87 図 第 10 支群 7 号墓出土遺物実測図 (1/3)

遺物の出土状況

前庭部

前庭部からは副葬品が2カ所で出土した。右コーナーから坏のセット3(174～179)と坏身(180)が一括して埋納された状態で出土した。左コーナーから中央付近にかけては破碎された状態で副葬品が出土した。実測可能な土器は須恵器坏のセット2(181～184)・坏身2(185・186)と土師器高坏2(187・188)の8点である。

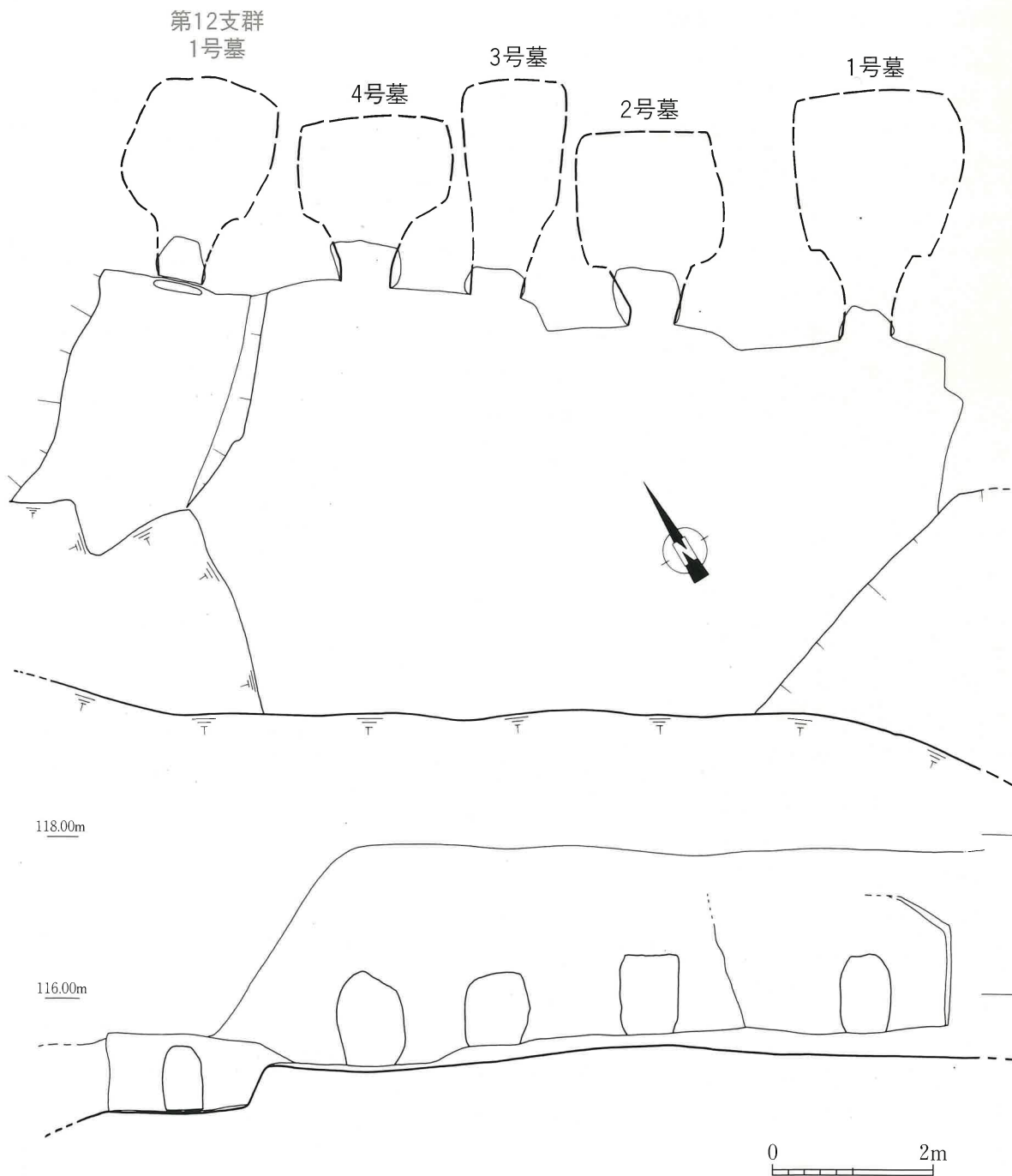
右コーナーから出土した土器の製作年代は7世紀中頃～後半にかけてであり、破碎されていた土器の製作年代は7世紀後半代と考える。このことから少なくとも2時期にわたって埋葬が行われたと考える。

表 25 第10支群7号墓出土土器観察表

番号	器種	法量 口径 底(受部) 径 器高	形態の特色	技法の特色					ヘラ記号	備考
				内面	外面	色調	胎土	焼成		
174	坏蓋	11.6 14.3 2.1	天井部は低く平らである。口縁部は下外方向へのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖る。	一定方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回 転ヘラ切り後 粗いナデ	灰黄色	角閃石粒有白色 細粒・石英 粒(2～3mm) 若干	良好	有	175とセット
175	坏身	13.6 - 3.7	口縁は外反しながらのび、端部は丸い。底部は平らである。	一定方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回 転ヘラ切り離 し	灰黄色	角閃石粒・白 色細粒有雲母 若干	良好	有	174とセット
176	坏蓋	11.8 14.5 2.0	天井部は低く平らである。口縁部は下外方向へのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖る。	一定方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回 転ヘラ切り後 粗いナデ	灰黄色	角閃石粒有・ 雲母・石英粒 (3mm)若干	良好	有	177とセット
177	坏身	13.2 - 3.9	口縁は外反しながらのび、端部は丸い。底部はやや丸みを帯びた平底である。	一定方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回 転ヘラ切り後 粗いナデ	灰黄色	角閃石粒有石 英粒・雲母若 干	良好	有	176とセット
178	坏蓋	11.5 13.9 2.6	天井部は低く、やや丸みを持ち平らである。口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	一定方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回 転ヘラ切り後 粗いナデ	灰黄色	石英粒(2～ 5mm)・雲母 白色細粒有・ 角閃石粒若干	良好		179とセット
179	坏身	13.0 - 4.0	口縁部は外反しながらのび、端部は尖り気味である。底部はわずかながら丸い。	一定方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回 転ヘラ切り後 粗いナデ	灰黄色 / 橙色	石英粒(2～ 4mm)・白色 細粒・雲母有 角閃石粒若干	良好		178とセット
180	坏身	13.0 - 3.9	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。底部は丸みを帯びた平底である。	一定方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・回 転ヘラ切り	橙色	赤色粒・長石 粒多量・角閃 石粒若干	良好	有	
181	坏蓋	12.6 15.4 3.3	天井部は低く平らであり、中央に宝珠つまみ有する。口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ・ 回転ナデ	回転ナデ・ナ デ	暗黄褐色 / 灰褐色	石英粒(2～ 3mm)・白色 粒・砂粒多量 赤色粒若干	やや不 良		182とセット
182	坏身	14.0 (8.8) (5.0)	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台を底部外方向に付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。坏部成形後の貼り付けである。	ナデ・回転ナ デ	回転ナデ・ナ デ	灰褐色	石英粒(2～ 3mm)・白色 細粒・砂粒多 量・赤色粒若 干	やや不 良		181とセット
183	坏蓋	12.6 15.2 -	天井部はやや丸みを帯びていて中央に宝珠つまみがあったと思われる。口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。かえりは下方向へのび、端部は尖り気味である。	多方向ナデ・ 回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐色 / にぶい赤褐 色	石英粒(2～ 3mm)多量・ 白色細粒有・ 赤色粒若干	良好		184とセット
184	坏身	13.8 9.3 5.1	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台を底部外方向に付し、下外方向へのびる。端部は丸みを帯びた面を成し、接地面は外端部である。坏部成形後の貼り付けである。	一定方向ナデ 回転ナデ	回転ナデ・ナ デ	灰黄褐色	石英粒(2～ 3mm)・白色 細粒多量・赤 色粒有	良好		183とセット
185	坏身	12.7 8.8 4.7	口縁部は外方向へのび、端部は尖り気味である。高台を底部外方向に付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、内端部が接地する。坏部成形後の貼り付けである。	ナデ・回転ナ デ	回転ナデ・ナ デ	灰色	白色細粒有角 閃石粒若干	良好		
186	坏身	- 9.4 -	口縁部は外反しながらのび、端部は丸い。高台を底部外方向に付し、下外方向へのびる。端部は面を成し、接地面は平らである。坏部成形後の貼り付けである。	ナデ・回転ナ デ	回転ナデ・ナ デ	橙色	白色細粒多量 長石粒・石英 粒(1～2mm) 有	良好		口縁部と底部の 接点なし
187	高坏	- - -	口縁部は内傾しながらのび、端部は丸い。脚部は外反しながらのびる。	丁寧なナデ	ナデ・削り・ シボリ痕	浅黄褐色	長石粒多量・ 石英粒(2～ 4mm)有・角 閃石粒若干	良好		
188	高坏	- 9.6 -	脚部は外反しながらのび、さらに裾部はほぼ水平にのびる。端部は丸い。	ナデ・回転ナ デ	ナデ・削り・ 横ナデ・回転 削り・シボリ 痕	橙色	白赤色粒多量 角閃石粒石英 粒(2～4mm) 有	良好	有	

第11支群

第11支群は、調査区の西方向に位置し、4基の横穴墓で構成されている。当支群は各支群と同様、南西向き斜面を東西9m、南北約5m前後の範囲に削り出し、テラス状の平地を造り出している。標高は前庭部床で115.5m前後である。当支群は調査以前から開口していて、玄室から前庭部には多量の二次堆積土がみられた。当支群の確認により、当地区での横穴墓群の存在や、構築形態などが調査以前に把握でき、調査を進めていくうえで非常に役に立った。



第88図 第11支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

第11支群1号墓

概要

1号墓は第11支群の東側に位置し、前庭部は二次堆積土で覆われていた。標高は羨門付近で115.5m、玄室主軸方向はN-29°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は二次堆積土の除去、前庭部の確認、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は共有しており、前庭部右にコーナーを設けるが独自の領域はもたない。落ち際までの長さは4.6m前後である。

羨門部は幅0.44m、高さは天井部の崩落のため不明である。

閉塞施設は地山を削り出した凝灰岩の1枚石が出土したが、二次堆積土の上面からの出土であり、上下逆となり、羨道内へ入り込んでいる。このことから、閉塞石は攪乱を受け、当横穴墓の閉塞は機能を果たしていないと考える。或いは上方に存在した別の横穴墓の閉塞石の可能性をもつ。

前庭部の埋土は2層確認された。I～III層はいずれも二次堆積土である。

羨道・玄室

羨道は、長さ1.13m、玄門幅1.08m、玄門の高さ1.07mで、玄門に向かって緩やかに開く。

玄室の平面形態は不整形で、床面には、径20cm前後の扁平河原石を敷きつめていたが、造りは雑である。左側壁から奥壁にかけては排水溝状の掘り込みがみられる。長さ1.95m、中央幅2.12m、高さ1.17mで、床面は凹凸が激しい。天井形態はアーチ形で、奥・左右両壁とも内傾しながら立ち上がる。奥壁両コーナーからは天井に向かって稜線がのびる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。

第11支群2号墓

概要

2号墓は1号墓の西側に位置し、前庭部は二次堆積土で覆われていた。標高は羨門付近で115.5m、玄室主軸方向はN-30°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は二次堆積土の除去、前庭部の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は共有しており、独自の領域はもたない。

羨門部は幅0.55m、高さは天井部の崩落のため不明である。

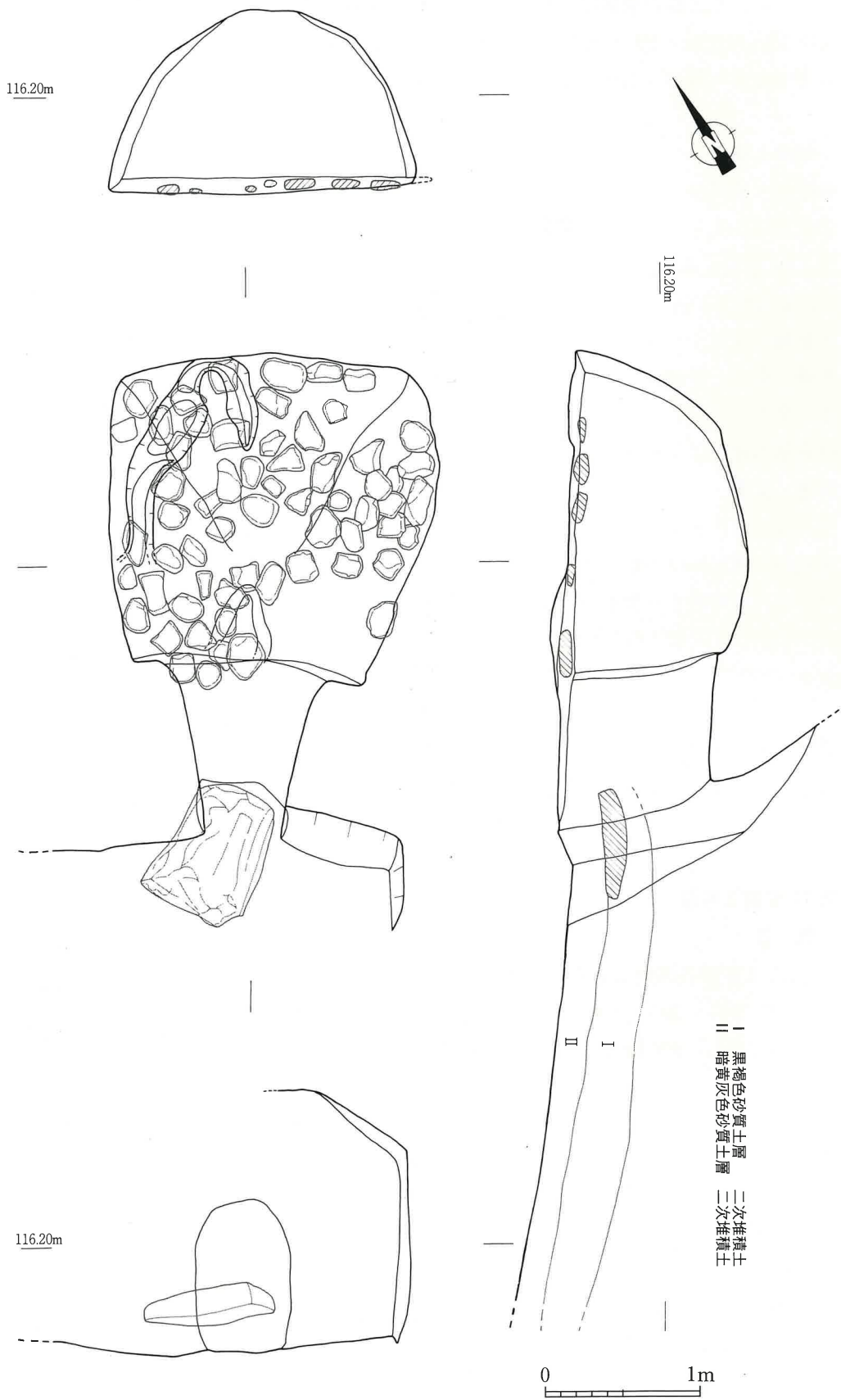
閉塞施設は存在しない。

前庭部埋土は3層確認された。III層は前庭部後方に薄く堆積しており、埋葬に伴う埋土の可能性をもつ。I～II層はいずれも二次堆積土である。

羨道・玄室

羨道は、長さ0.7m、玄門幅1.02m、玄門の高さ0.98mで、玄門に向かって開く。

玄室の平面形態は隅丸方形で、床面には径30cm前後の扁平河原石3個が中央奥壁寄り出土した。

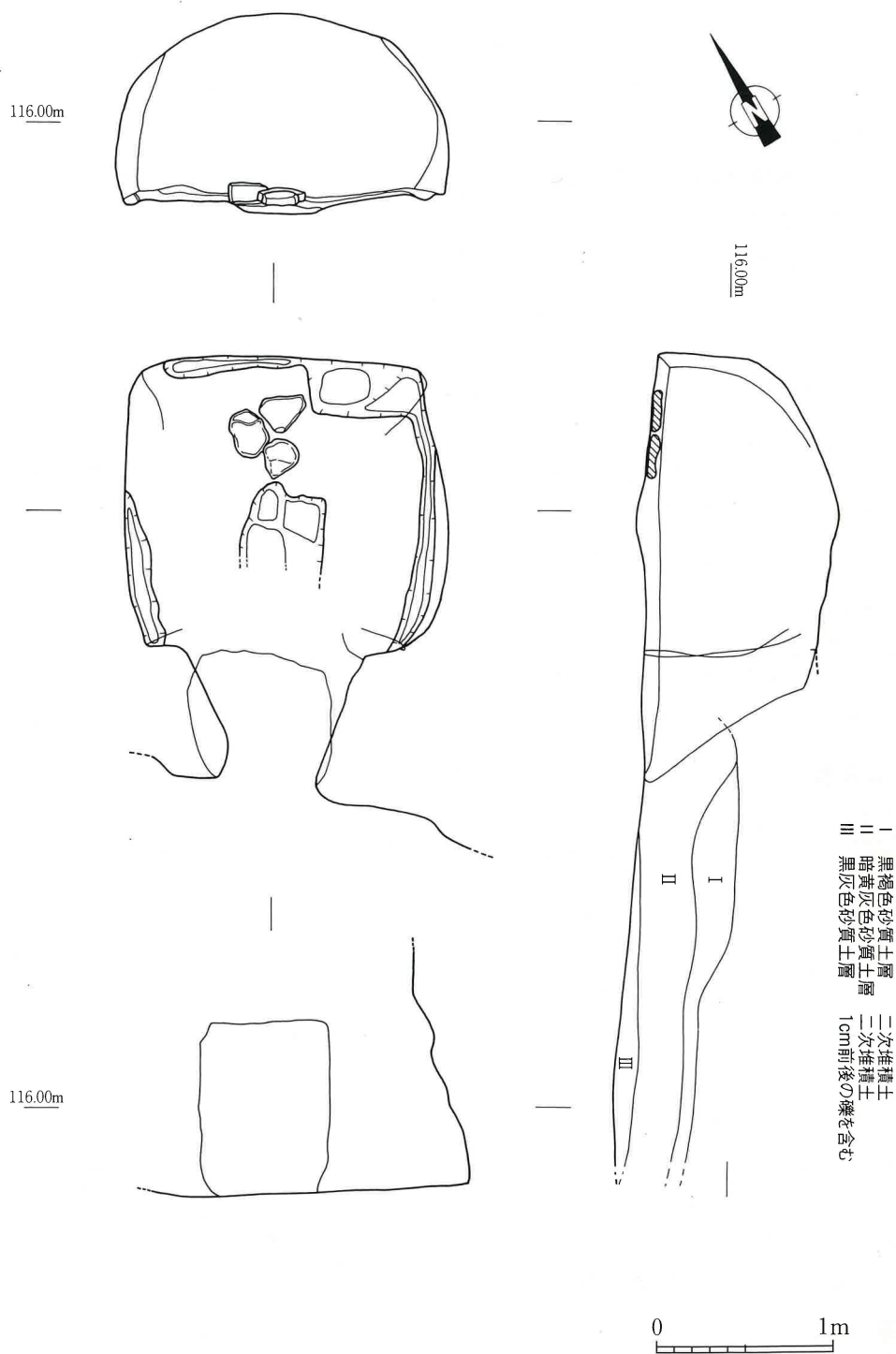


第 89 图 第 11 支群 1 号墓实测图 (1/40)

攪乱を受けたものと思われる。壁沿いには排水溝が巡っている。長さ1.64m、中央幅1.82m、高さ1.12mで、床面は凹凸が激しい。天井形態はアーチ形で、奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、両側壁は僅かに内湾しながらのびる。奥壁両コーナーからは天井に向って稜線がのびる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。



第90図 第11支群2号墓実測図 (1/40)

第11支群3号墓

概要

1号墓は第11支群のほぼ中央に位置し、2号墓と4号墓構築後の隙間を利用して構築された横穴墓である。前庭部は二次堆積土で覆われていた。標高は羨門付近で115.4m、玄室主軸方向はN-26°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は二次堆積土の除去、前庭部の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は共有しており、独自の領域はもたない。落ち際までの長さは5m前後である。

羨門部は幅0.6m、高さは0.87mである。

閉塞施設は存在しない。

前庭部の埋土は4層確認された。Ⅳ層は前庭部後方に薄く堆積しており、埋葬に伴う埋土の可能性をもつ。Ⅰ～Ⅲ層はいずれも二次堆積土である。

羨道・玄室

羨道は、長さ0.88m、玄門幅0.86m、玄門の高さ0.82mで、玄門に向かって緩やかに開く。床面はほぼ平坦で、玄室に向かってわずかに上昇する。

玄室の平面形態は不整形で、床面には径20cm前後の扁平河原石を用いて礫床を設けているが、造りは雑である。左側壁から奥壁にかけては排水溝状の掘り込みがみられる。長さ1.95m、中央幅2.12m、高さ1.17mで、床面は凹凸が激しい。天井形態はアーチ形で奥・左右両壁とも内傾しながら立ち上がる。奥壁両コーナーからは天井に向かって稜線がのびる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。

第11支群4号墓

概要

4号墓は第11支群の西端に位置し、前庭部は二次堆積土で覆われていた。標高は羨門付近で115.2m、玄室主軸方向はN-28°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は二次堆積土の除去、前庭部の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は共有しており、独自の領域はもたない。

羨門部は幅0.61m、高さは前門から羨道にかけての天井部の崩落のため不明である。

閉塞施設は存在しない。

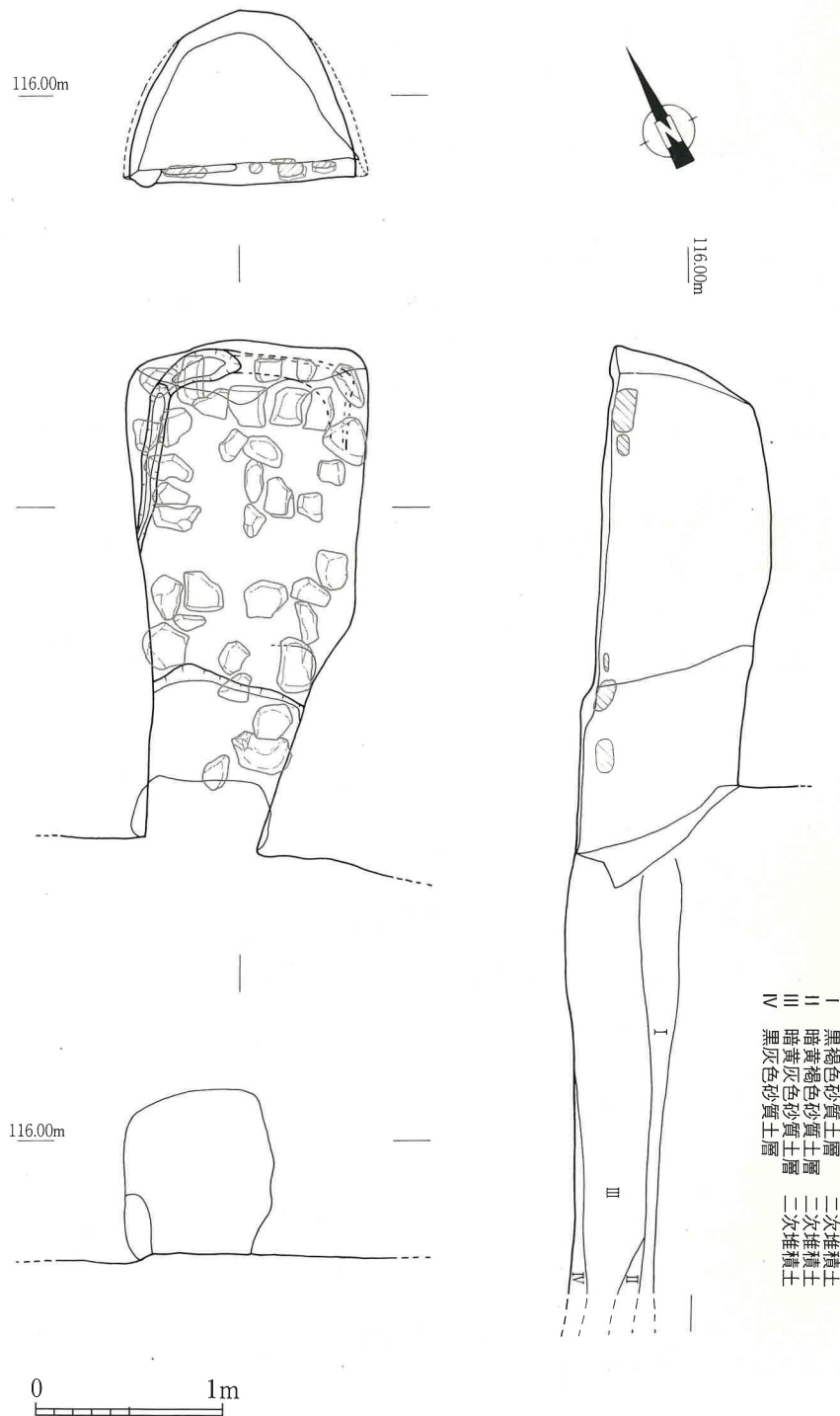
前庭部の埋土は4層確認された。Ⅳ層は前庭部後方に薄く堆積しており、埋葬に伴う埋土の可能性をもつ。Ⅰ～Ⅲ層はいずれも二次堆積土である。

羨道・玄室

羨道は、長さ0.65m、玄門幅1.11m、玄門の高さ0.99mで、玄門に向かって緩やかに開く。

玄室の平面形態は平入り胴張り隅丸方形で、床面には、径20～30cm前後の扁平河原石数十個が

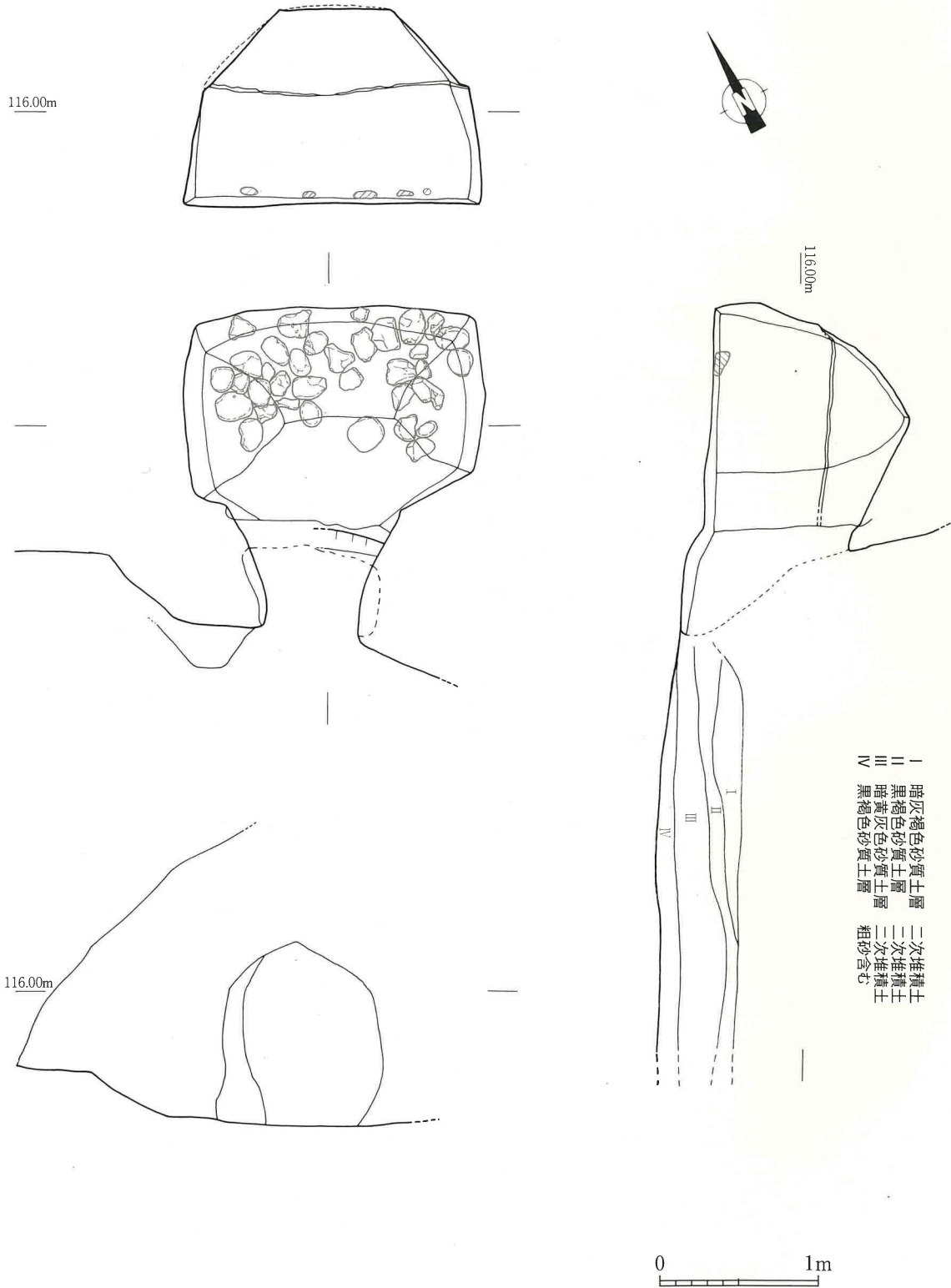
中央付近で出土しており、攪乱を受けたものと思われる。壁沿いには排水溝が巡っている。長さ1.64m、中央幅1.82m、高さ1.12mで、床面は凹凸が激しい。天井形態はアーチ形で、奥壁はほぼ直線状に立ち上がり、両側壁は僅かに内傾しながら立ち上がる。奥壁両コーナーからは天井に向って稜線がのびる。



第91図 第11支群3号墓実測図 (1/40)

遺物の出土状況

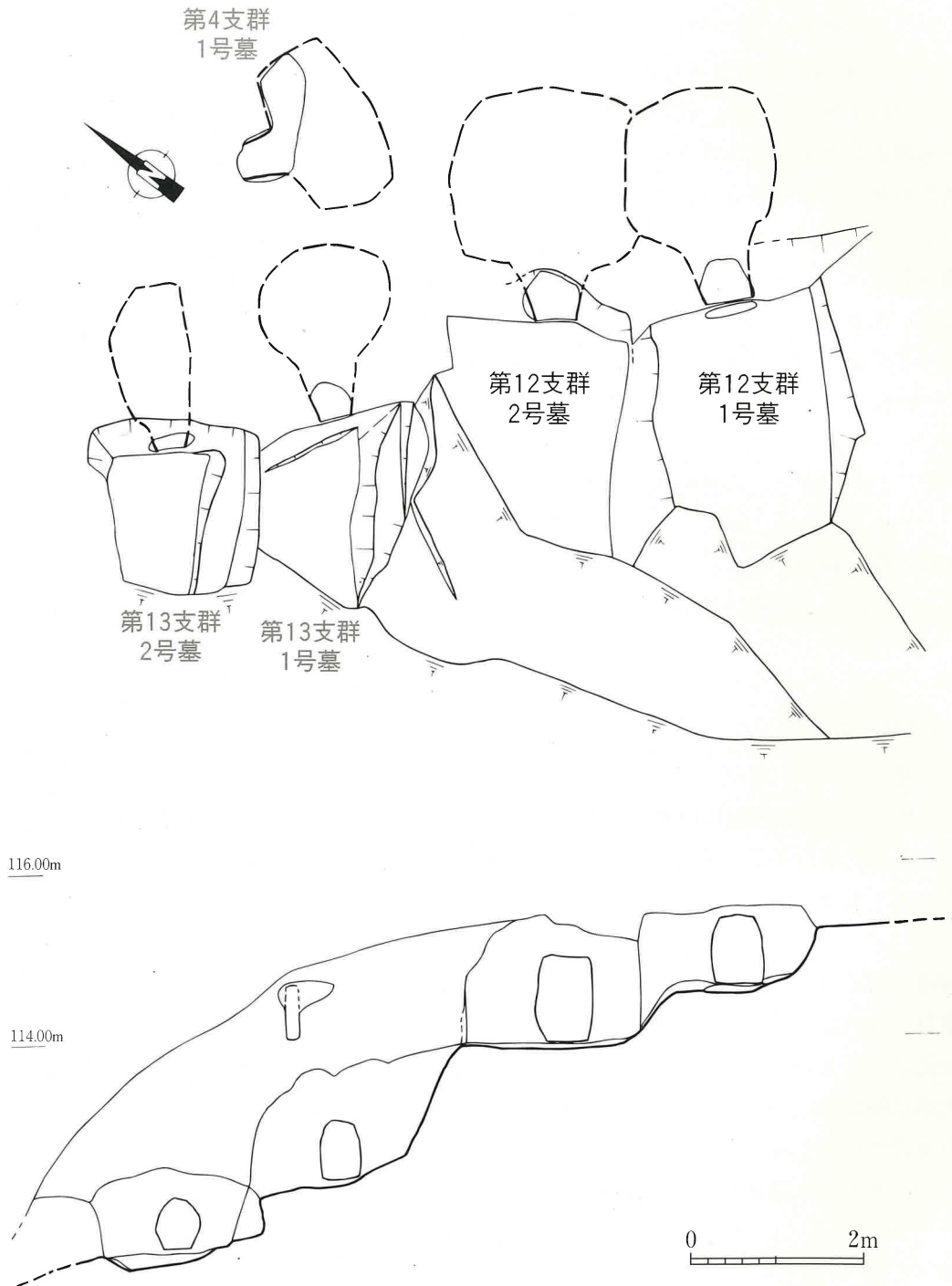
前庭部・玄室とも遺物は出土していない。



第92図 第11支群4号墓実測図 (1/40)

第12支群

第12支群は、調査区の西端に位置し、2基の横穴墓で構成されている。各々が独自の前庭部を持ち、南西向き斜面を削り出し、テラス状の平地を造り出している。当支群は調査以前は横穴の存在は確認できなかったが、第11支群4号墓の前庭部調査中に、西側に人工的な段落ちが確認されたことが、発見の契機となった。玄室から前庭部には多量の二次堆積土がみられた。この第12支群発見を契機に周辺急斜面上にも他の横穴墓の存在を考えなければなくなり、その後、第13・14支群の発見となった。



第93図 第12支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

第12支群1号墓

概要

1号墓は第11支群の南側に位置し、前庭部は二次堆積土で覆われていた。標高は羨門付近で114.6m、玄室主軸方向はN-42°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は二次堆積土の除去、前庭部の確認、閉塞施設の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ2.96m、幅2.15mでほぼ長方形の様相を呈し、床面は平坦である。

羨門部は幅0.54m、高さは天井部の崩落のため不明である。

閉塞施設は存在しないが、羨門前面に幅0.9m、長さ0.25m、深さ8cm程度の掘り込みがみられる。閉塞石を埋置した掘り込みであろう。

前庭部の埋土は3層確認された。Ⅲ層は埋土、Ⅱ層は風化土であるが、初葬か追葬の埋土の判断はつかない。Ⅰ層は二次堆積土である。

羨道・玄室

羨道は、長さ0.84m、玄門幅1.03m、玄門の高さ0.82mで、玄門に向かって緩やかに開く。

玄室の平面形態は不整隅丸方形で、床面には径30cm前後の扁平河原石を敷きつめているが、攪乱のためか中央には敷石がない。玄室と羨道の間には高低差8cm前後の段差を設け、境としている。玄室は長さ1.67m、中央幅1.77m、高さ0.95mである。天井形態はアーチ形で、奥・左右両壁とも内傾しながら立ち上がる。右側壁両コーナーからは天井に向かって僅かに稜線がのびる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも遺物は出土していない。

第12支群2号墓

概要

1号墓は2号墓の北西側に位置し、標高は羨門付近で114.0m、玄室主軸方向はN-53°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は二次堆積土の除去、前庭部の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ2.34m、幅2.07mで、玄室内から掻き出した敷石が前庭部で検出された。

羨門部は幅0.43m、高さは天井部の崩落のため不明である。

閉塞施設は存在しない。

前庭部の埋土は3層確認され、Ⅲ層は埋土、Ⅱ層は風化土である。Ⅰ層は二次堆積土である。

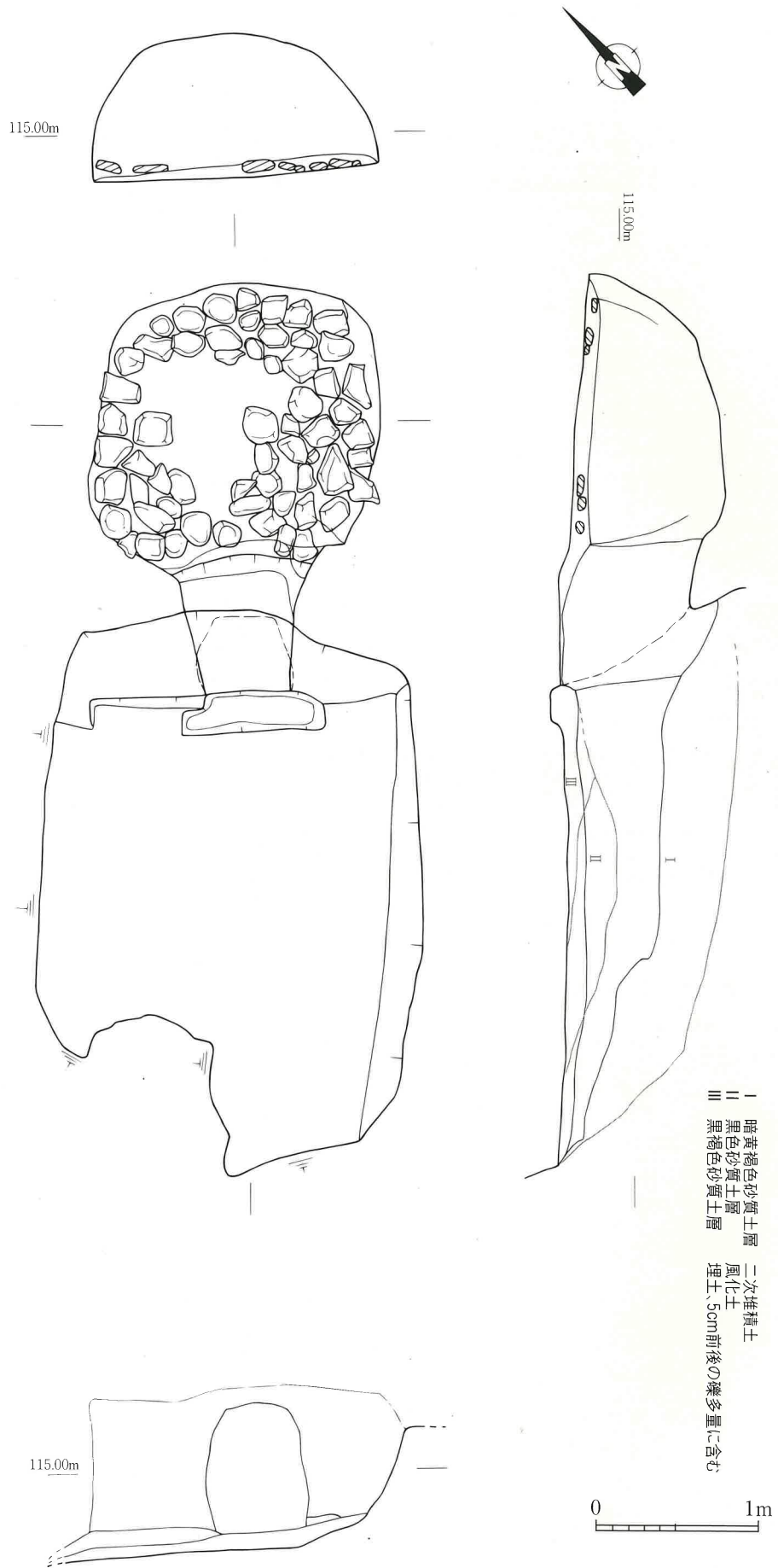
羨道・玄室

羨道は、長さ0.61m、玄門幅0.93m、玄門の高さ0.92mで、玄門に向かって開く。

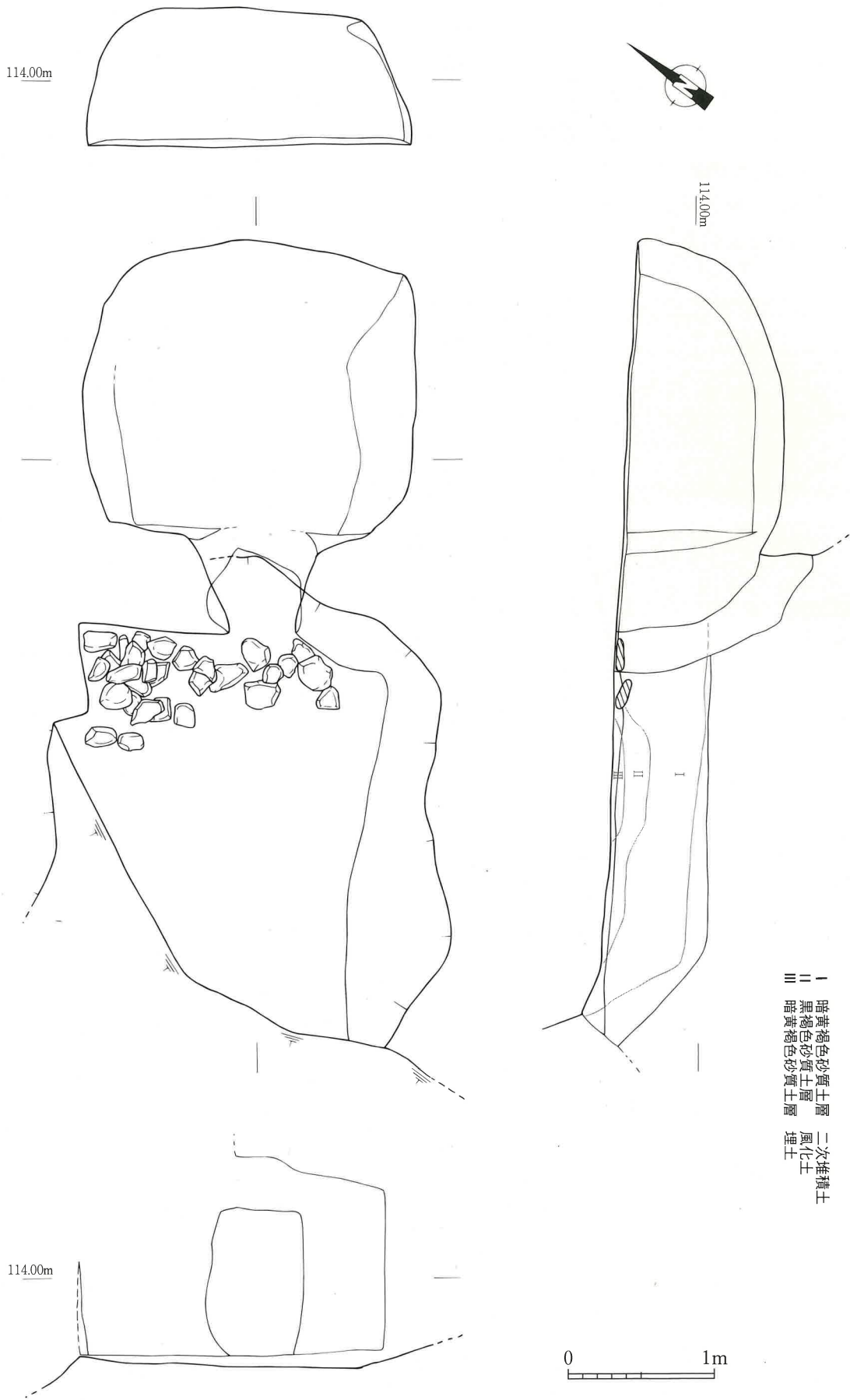
玄室の平面形態は不整隅丸方形で、長さ2.12m、中央幅2.28m、高さ1.05mである。天井形態はアーチ形で、奥壁・両側壁とも僅かに内傾しながら立ち上がる。奥壁左コーナーを除く3コーナー

からは天井に向って
稜がのび、両側壁に
は棟の稜線が認めら
れる。

遺物の出土状況
前庭部・玄室とも
遺物は出土していな
い。



第94図 第12支群1号墓実測図 (1/40)



第 95 図 第 12 支群 2 号墓実測図 (1/40)

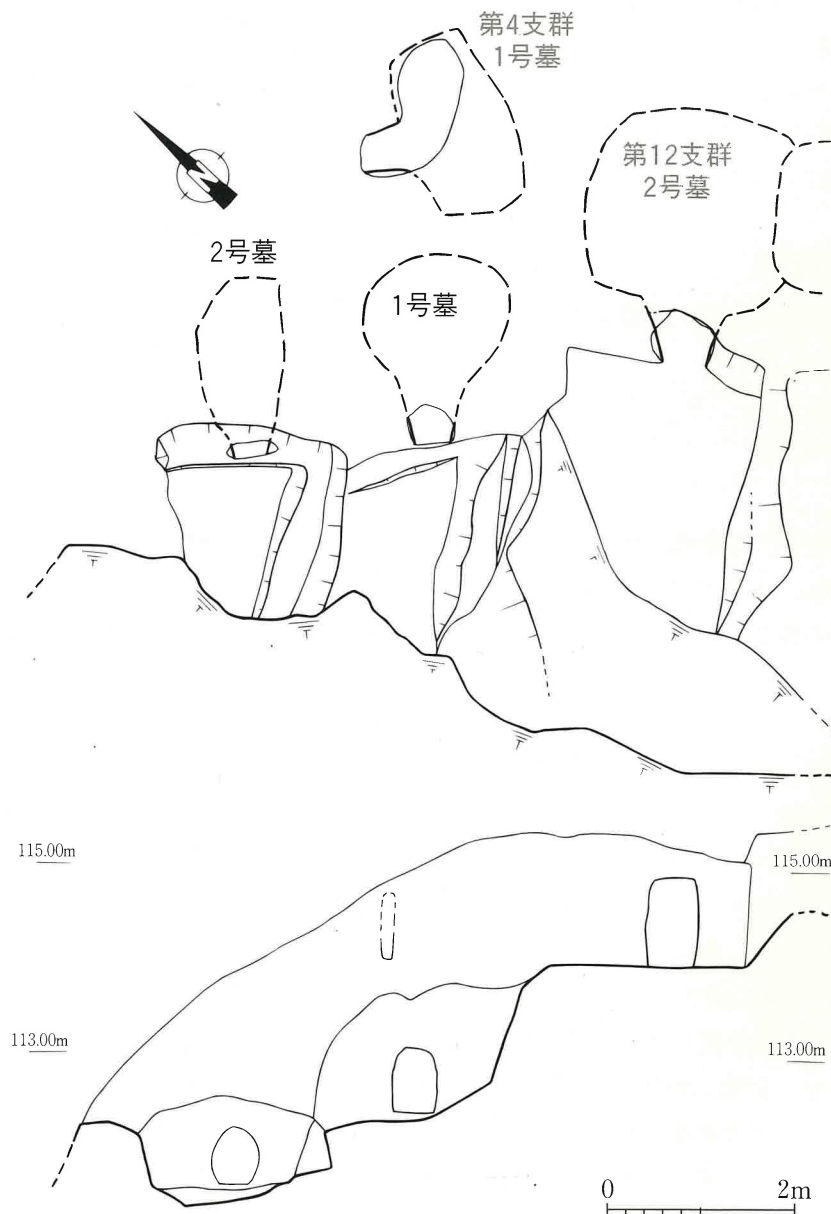
第13支群

第13支群は、調査区の西端、第12支群の西下方に位置し、2基の横穴墓で構成されている。各々が独自の前庭部をもち、南西向き斜面を削り出し、テラス状の平地を造り出している。当支群は調査以前は横穴の存在は確認できなかったが、第12支群前庭部端部の掘り下げを進めたところ、人工的な段落ちが確認されたことが発見の契機となった。その後、さらに西側から1基横穴墓が検出された。前庭部には多量の二次堆積土がみられた。

第13支群1号墓

概要

1号墓は第12支群1号墓の前庭部南側下方に位置し、前庭部は二次堆積土で覆われて斜面となっていた。標高は羨門付近で112.45m、玄室主軸方向はN-45°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は二次堆積土の除去、前庭部の確認、閉塞施設の確認・調査、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。



第96図 第13支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ1.97m、幅1.18mで、右側は2段に斜面を削り、壁としている。左側は段落ちし、2号墓の側壁となる。床面はほぼ平坦である。前庭部前面には閉塞石を安置したと考える深さ5cm前後の掘り込みが認められる。

羨門部は幅0.41m、高さは0.73mで側壁・天井部の剥落はあるものの、比較的残りは良い。前庭部の掘り込みのため、羨門部と前庭部には1段の段差を生じる。

閉塞施設は他の横穴墓と違い、薄手の安山岩板石を使用している。長さ0.79m、幅0.54m、厚み0.1m前後で、羨門に対して左方向へ傾き、羨門の1/2程度を覆っている。

前庭部の埋土は6層確認された。V～VI層は埋葬に伴う埋土で、V層は風化土層である。IV層は埋葬後の堆積土と考える。I～III層は二次堆積土である。土層で見るとかぎりでは当横穴墓では追葬の痕跡は認められない。

羨道・玄室

羨道は、長さ0.61m、玄門幅0.7m、玄門の高さ0.74mで、玄門に向かって緩やかに開く。床面はほぼ平坦である。

玄室の平面形態は平入り楕円形で、床面には径10～30cm前後の角礫を中心に一部扁平河原石を用いて、比較的しっかりした礫床を設けている。玄室は長さ1.35m、中央幅1.54m、高さ0.76mである。天井形態はアーチ形で、奥・左右両壁とも内傾しながら立ち上がる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも人骨・副葬品等の遺物は出土していない。

第13支群2号墓

概要

2号墓は1号墓の前庭部南側下方に位置し、二次堆積土で覆われて斜面となっていた。標高は羨門付近で111.6m、玄室主軸方向はN-48°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は二次堆積土の除去、前庭部の確認、閉塞施設の確認・調査、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ1.59m、幅1.36mで、右側は2段に斜面を削り壁としている。左側から後方にかけては斜面の段落ちとなり、壁面はもたない。床面はほぼ平坦で、後方に向かって緩やかに下降する。前庭部左コーナーには、敷石として使用する目的であったと思われる礫群が出土した。

羨門部は幅0.31m、高さは0.6mで側壁・天井部の残りは非常に良好である。

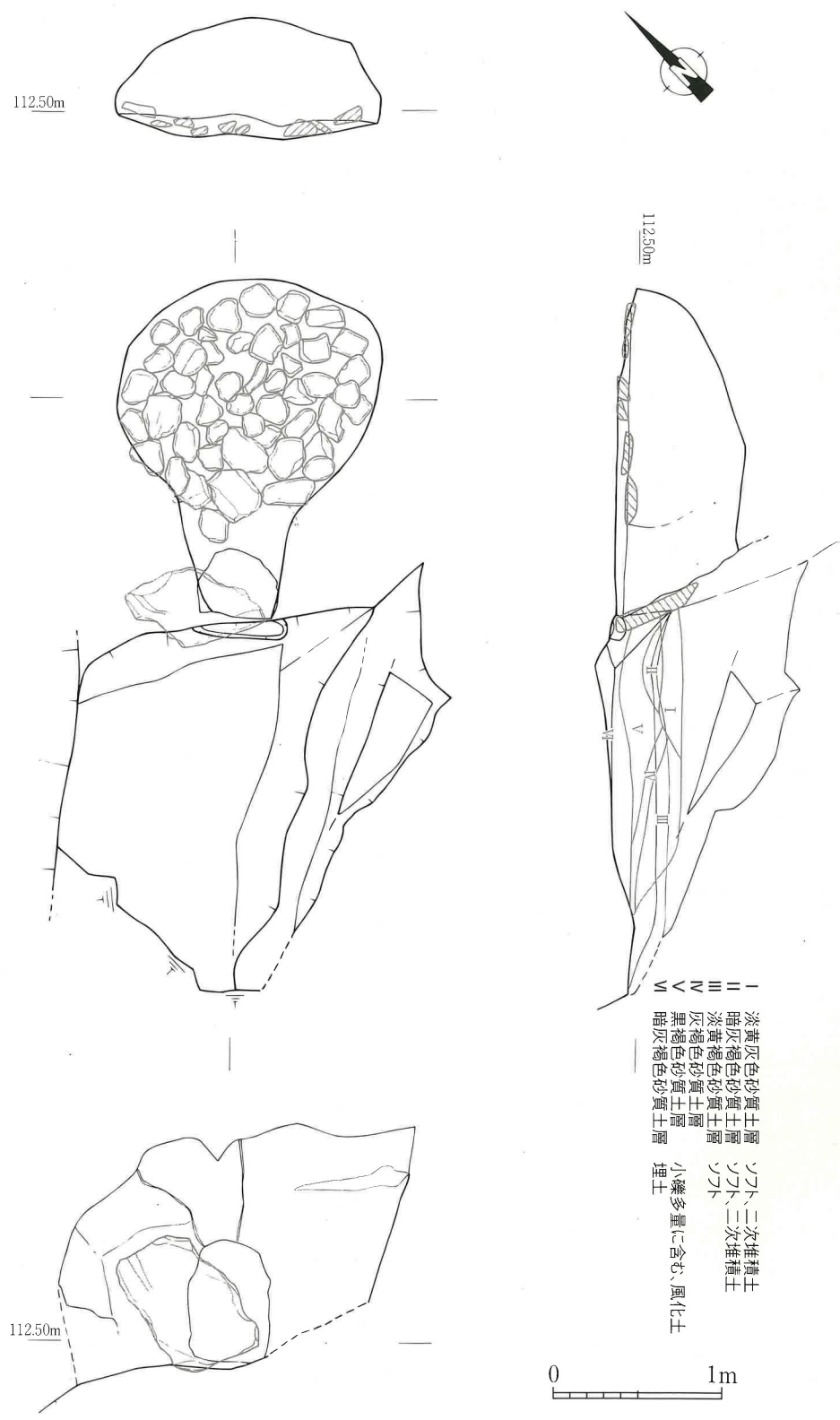
閉塞施設は、地山を削り出した凝灰岩の1枚石を使用している。長さ0.79m、幅0.65m、厚み0.09～0.18m前後で、上部は面取りを行い、丸く仕上げている。表面には工具痕が残る。

前庭部の埋土は3層確認された。II～III層は埋葬に伴う埋土で、II層は風化土層である。I層は二次堆積土である。土層で見るとかぎりでは当横穴墓では追葬の痕跡は認められない。

羨道・玄室

当横穴墓は羨道と玄門、玄門と玄室の明瞭な区画のない、いわゆる不整長方形型の玄室形態をとっ

ている。このため羨門から先は玄室としてとらえた。玄室は不整胴張り長方形の様相を呈し、長さ1.86m、中央幅0.92m、高さ0.56mである。玄室床面には径30cm前後の扁平河原石・角礫を乱雑に敷いている。床面はほぼ平坦で、羨門部で一端下降し、再び奥壁に向って緩やかに上昇する。天井



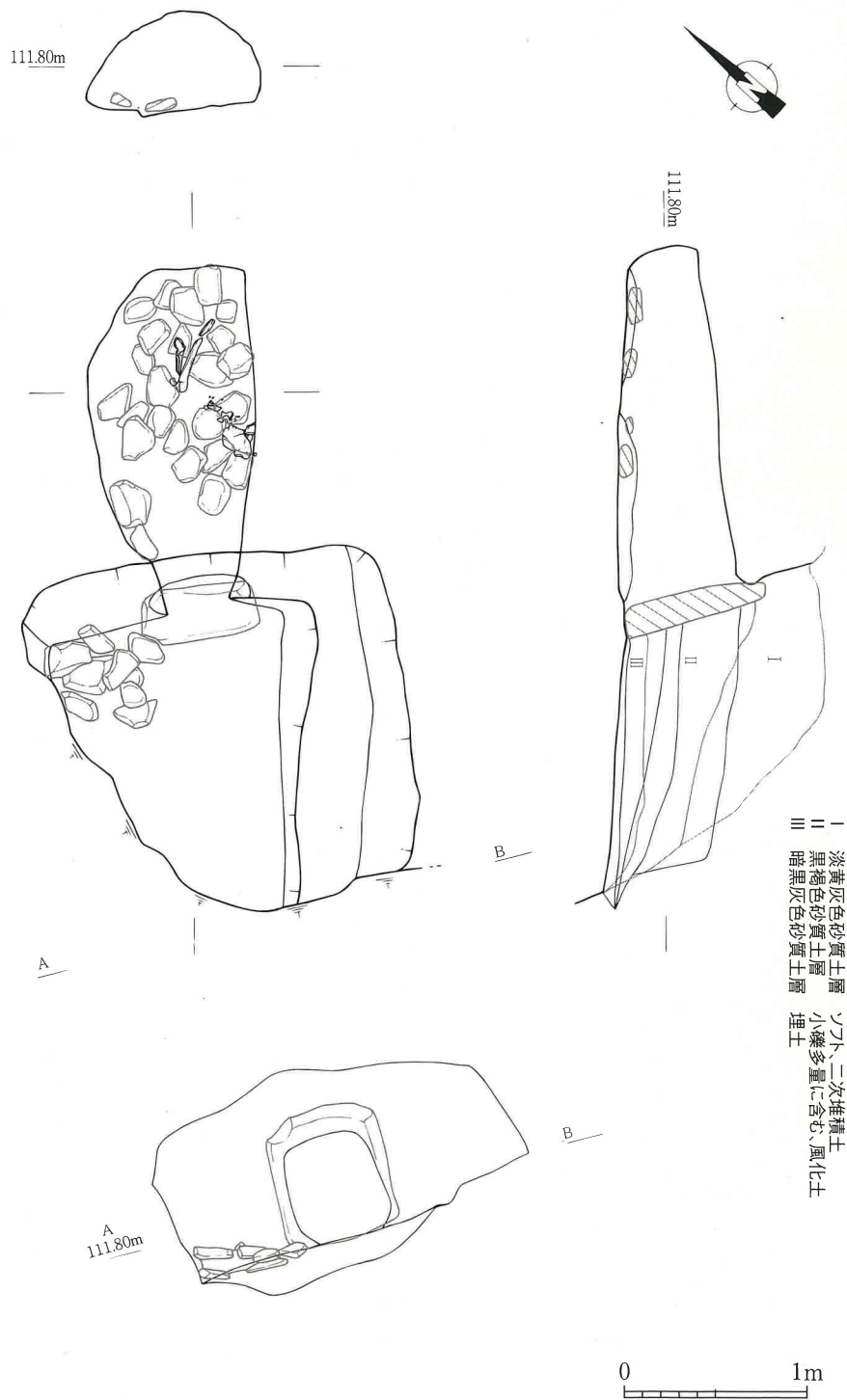
第97図 第13支群1号墓実測図 (1/40)

形態はアーチ形で、奥壁は外側へ直線的に立ち上がり、両側壁は内傾しながら立ち上がる。

遺物の出土状況

前庭部からは副葬品等の遺物は出土していない。

玄室内中央付近からはほぼ人骨1体分が出土した。



第 98 図 第 13 支群 2 号墓実測図 (1 / 40)

第14支群

第14支群は、調査区の西端、第12支群の南下方、南西向き斜面先端部に位置する。3基以上の横穴墓で構成されている。各々が独自の前庭部をもち、南西向き斜面を削り出し、テラス状の平地を造り出している。当支群は調査以前は横穴の存在は確認できなかったが、地山（凝灰岩）確認作業中に、地山の急激な落込みをみつけ、掘り進めたことが発見の契機となった。その後、さらに西側から2基の横穴墓が検出されたが、急峻な斜面のため危険が伴い、2基は前庭部の一部と支室の調査を行い、1基は調査不可能であった。

第14支群1号墓

概要

1号墓は第12支群1号墓の前庭部南側下方、斜面落ち際に位置する。前庭部は二次堆積土で覆われていた。標高は羨門付近で109.85m、玄室主軸方向はN-62°-Eをさし、西方向に開口する。調査は二次堆積土の除去、埋土の掘り下げ、前庭部の確認、羨道・玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ、幅とも未完掘のため、不明である。床面はほぼ平坦で後方へ向って僅かに下降している。前庭部前面には閉塞石を安置したと考える深さ5cm前後の掘り込みが認められる。

羨門部は幅0.52m、高さは0.74mで側壁・天井部の一部剥落はあるものの、比較的残りは良い。前庭部の掘り込みのため、羨門部と前庭部の境には1段の段差を生じる。

閉塞施設は存在しないが前庭部の掘り込みがあることから、閉塞石は存在した可能性が高い。

前庭部の埋土は7層確認された。Ⅵ～Ⅶ層は埋葬に伴う埋土で、初葬時の埋土と考える。Ⅴ層はその後の堆積土と思われる、僅かに風化している。Ⅱ～Ⅳ層は礫を含み、Ⅴ～Ⅶ層を切って堆積していることから追葬時の埋土と考える。Ⅰ層は二次堆積土である。土層で見るとかぎりでは当横穴墓では1回の追葬が認められる。

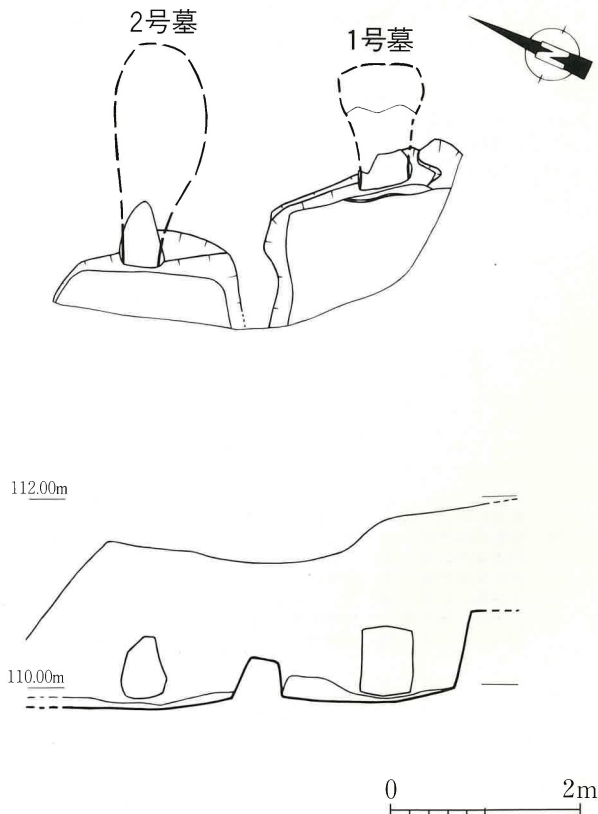
羨道・玄室

羨道は長さ0.77m、玄門幅0.7m、玄門高0.62mで、床面はほぼ平坦、玄室奥壁に向かって約5°の傾斜で上昇する。

玄室の平面形態は平入り隅丸長方形、長さ0.52m、中央幅0.88m、高さ0.61mで、天井形態はアーチ形である。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも人骨・副葬品等の遺物は出土していない。



第99図 第14支群遺構配置図及び立面図 (1/80)

第14支群2号墓

概要

2号墓は1号墓の北西に位置し、二次堆積土で覆われており、後方は斜面となっていた。標高は羨門付近で109.85m、玄室主軸方向はN-71°-Eをさし、西方向に開口する。調査は二次堆積土の除去、埋土の掘り下げ、前庭部の確認、玄室内流入土の除去・構造確認等を順次行った。

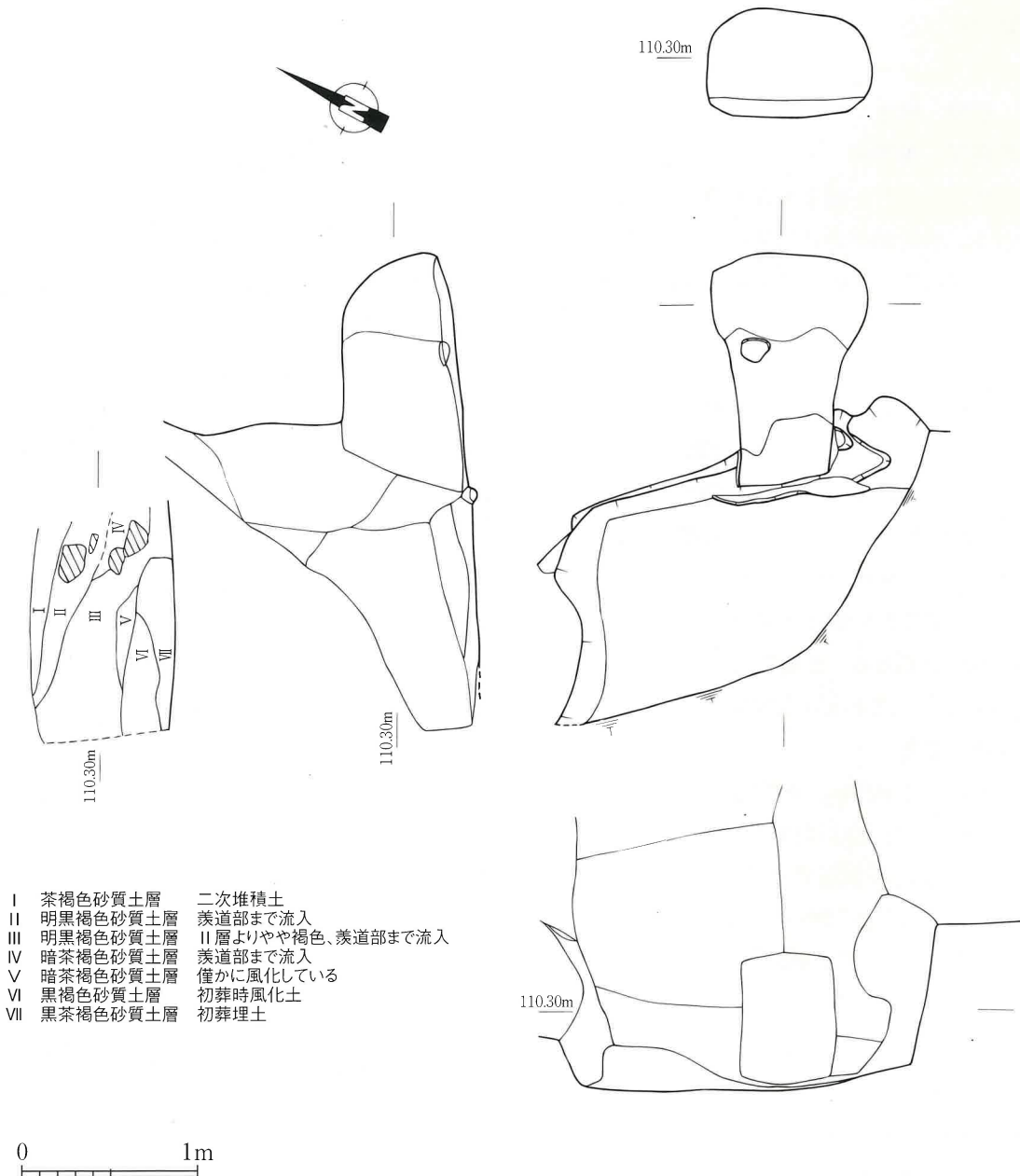
規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ、幅とも未完掘のため、不明である。床面は平坦で後方へ向って下降している。

羨門部は幅0.38m、高さ0.67mで側壁・天井部の一部剥落はあるものの比較的残りは良い。前庭部との境には約5cmの段差をもち、羨門部が1段高く構築されている。

閉塞施設は存在しない。



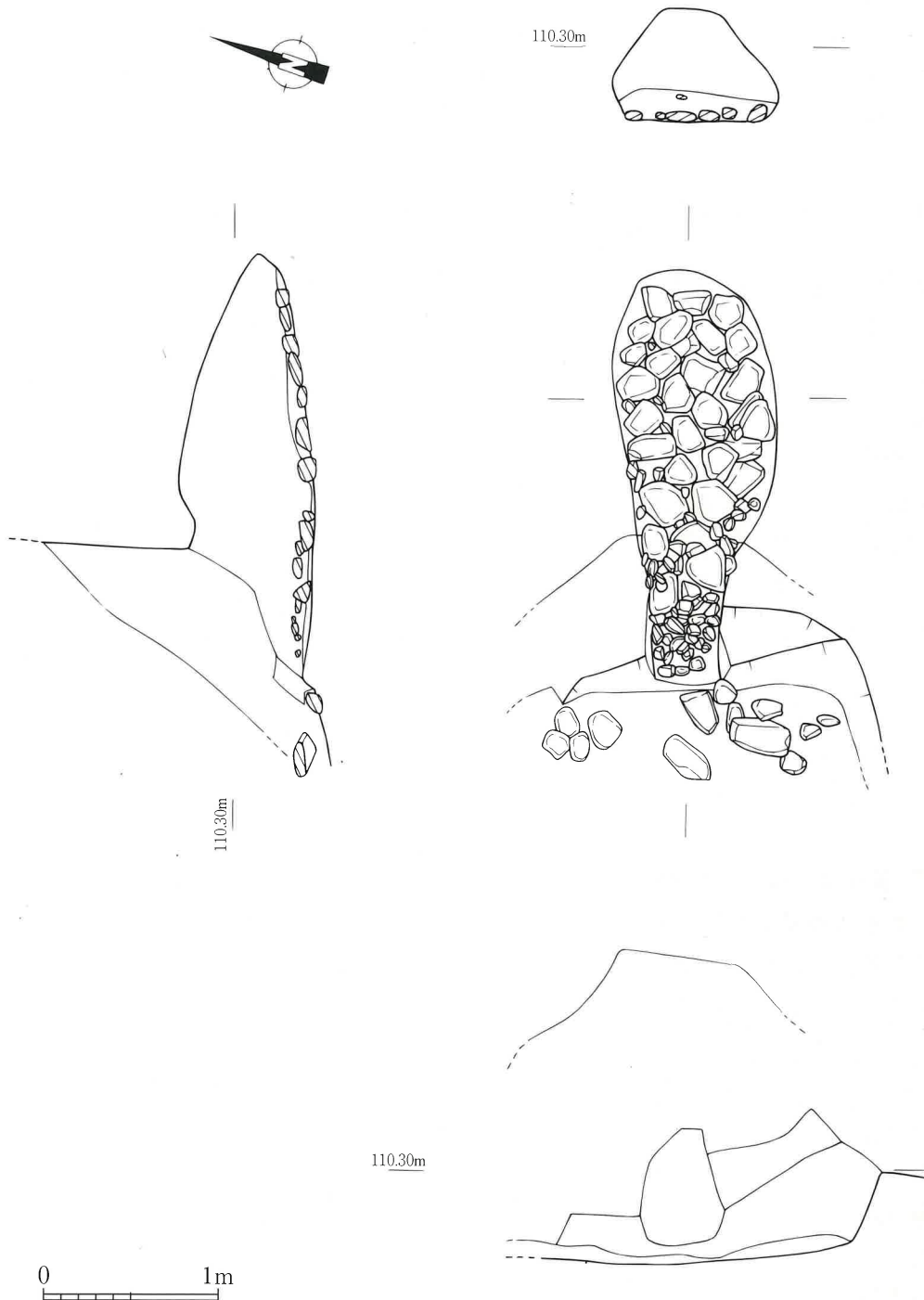
第100図 第14支群1号墓実測図 (1/40)

羨道・玄室

当横穴墓は羨道と玄門、玄門と玄室の明瞭な区画のない、いわゆる不整長方形型の玄室形態をとっている。このため羨門から先は玄室としてとらえた。玄室は不整胴張り隅丸長方形、長さ2.35m、中央幅0.92m、高さ0.77mである。玄室床面には径30cm前後の扁平河原石・角礫を、羨門付近は10cm前後の河原石を敷き丁寧な礫床を設けている。天井形態はアーチ形である。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも人骨・副葬品等の遺物は出土していない。



第101図 第14支群2号墓実測図 (1/40)

第15支群

第15支群は2基の横穴墓からなり、調査区の南西端、ほぼ垂直に立ち上がる斜面途中に位置する。前庭部は一部残すだけで斜面の崩落、及び砂防ダムによって削られていた。2基とも既に開口しており、後世の二次使用を受けていた。

第15支群1号墓

概要

1号墓は11支群前庭部端の斜面中腹に位置する。前庭部は崩落によりほとんど残っていない。標高は羨門付近で105.8m、玄室主軸方向はN-24°-Eをさし、南方向に開口する。調査は前庭部・羨道・玄室内の二次堆積土の除去、構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は幅1.35mで、長さ等は崩落のため不明である。床面はほぼ平坦で後方へ向って僅かに下降している。

羨門部は幅0.7m、高さは1.03mで側壁の一部剥落はあるものの、比較的残りは良い。羨門の周囲には3段の飾り縁をもち、天井や側面の一部が欠損しているものの残りは良い。今回の調査では唯一飾り縁を残す横穴墓である。

閉塞施設は存在しない。

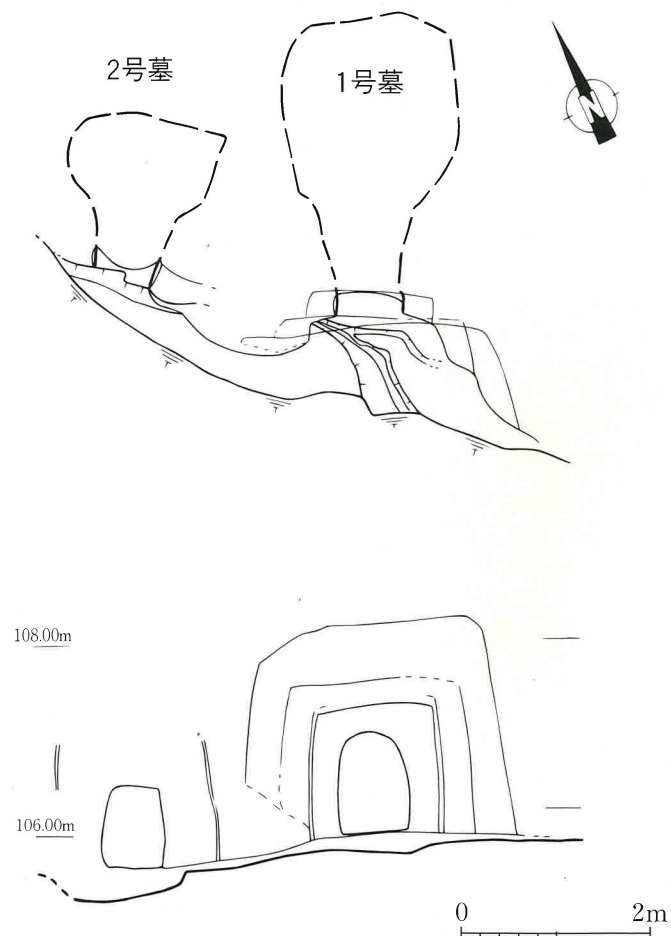
羨道・玄室

羨道は長さ1.17m、玄門幅1.2m、玄門高0.98mで、床面はほぼ平坦に整形しているが、羨道中央で高低差10cmと5cmの2段の段差をもつ。

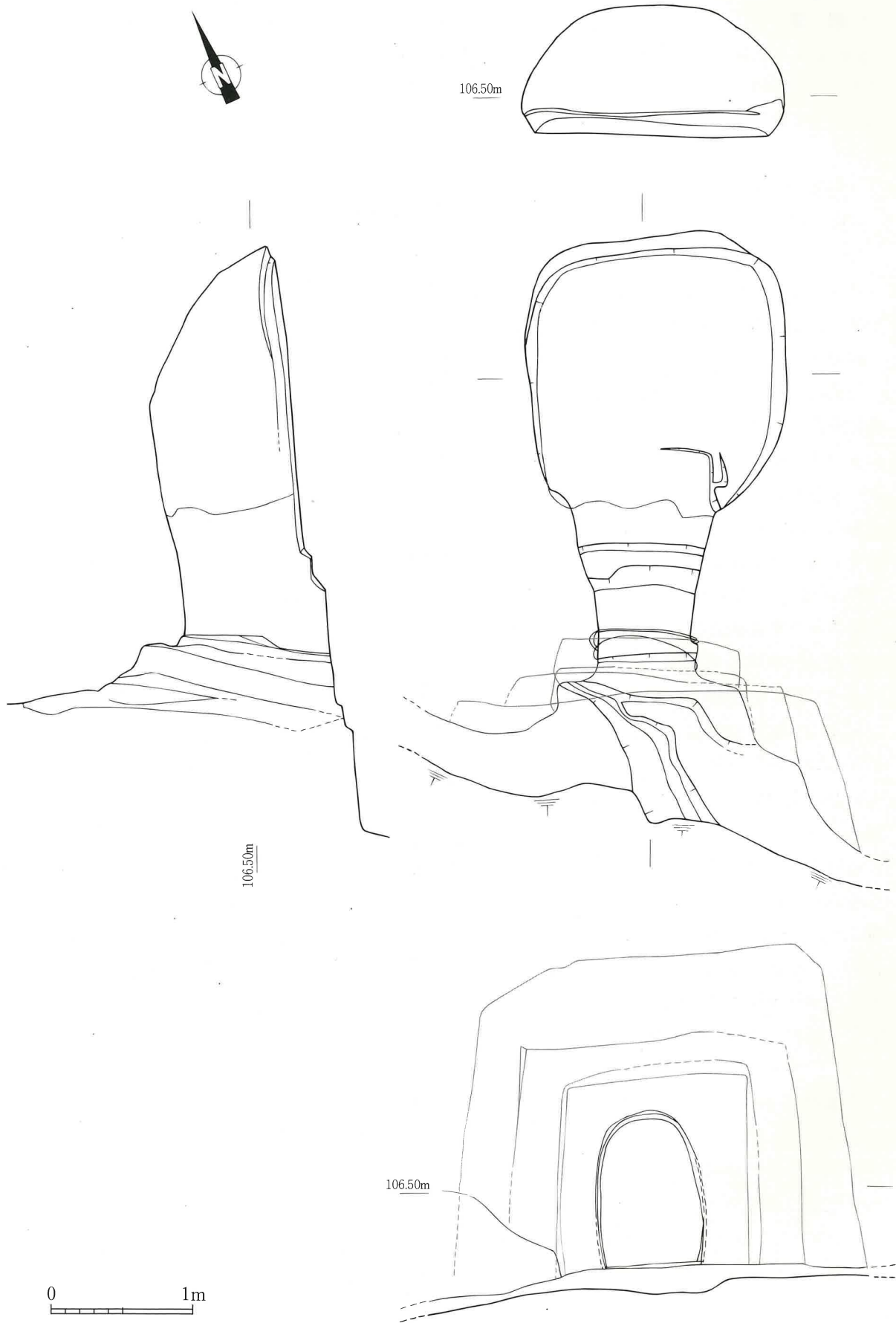
玄室の平面形態は妻入り胴張り隅丸長方形で長さ1.89m、幅は袖1.39m・中央1.68m・奥壁1.36m、高さ1.03mで、天井形態はドーム形である。床面はほぼ平坦で奥壁に向って約4°の傾斜で上昇する。奥壁・両側壁とも床面から一端外方向へ開き、その後、内傾しながら立ち上がる。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも人骨・副葬品等の遺物は出土していない。



第102図 第15支群遺構配置図及び立面図 (1/80)



第103图 第15支群1号墓实测图 (1/40)

第15支群2号墓

概要

2号墓は1号墓の西に位置する。前庭部は崩落等によって残りは悪い。特に西端は砂防ダム建設によって破壊されている。標高は羨門付近で105.7m、玄室主軸方向はN-39°-Eをさし、南西方向に開口する。調査は羨道・玄室内の二次堆積土の除去、構造確認等を順次行った。

規模、構造

前庭部・羨門部

前庭部は長さ・幅とも崩落のため不明である。

羨門部は幅0.62m、高さは0.9mで側壁の一部剥落はあるものの、比較的残りは良い。

閉塞施設は存在しない。

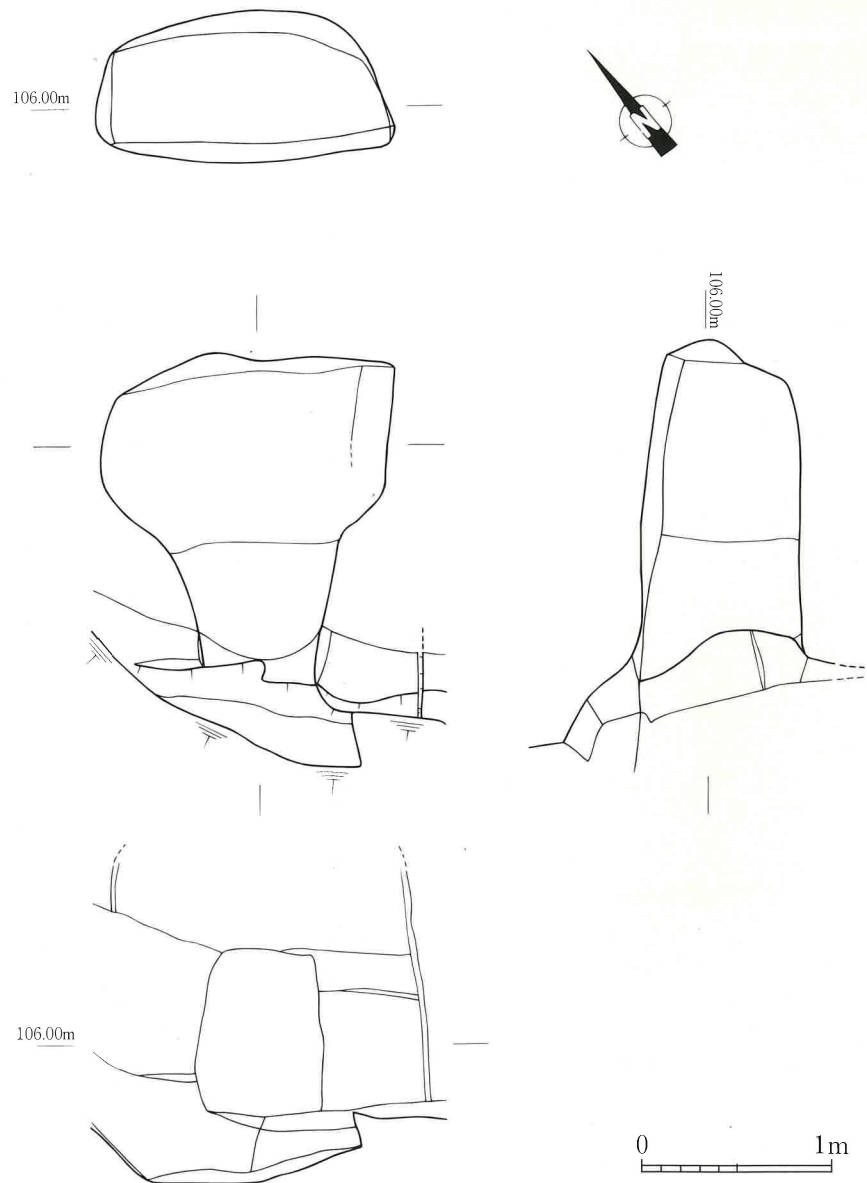
羨道・玄室

羨道は長さ0.73m、玄門幅0.98m、玄門高0.86mで、玄門に向かって緩やかに広がる。床面はほぼ平坦に整形している。

玄室の平面形態は平入り不整長方形で長さ0.98m、幅は袖1.05m・中央1.55m・奥壁1.25m、高さ0.82mで、天井形態はアーチ形である。床面はほぼ平坦で奥壁に向かって約8°の傾斜で上昇する。奥壁は床面から一端外方向へ開き、その後、内側方向へ直線的に立ち上がる。奥壁には「軒」を表現する稜線をもち、奥壁両コーナーからは「軒」に向かって稜線が立ち上がる。「軒」は右壁の一部にも残っている。

遺物の出土状況

前庭部・玄室とも人骨・副葬品等の遺物は出土していない。

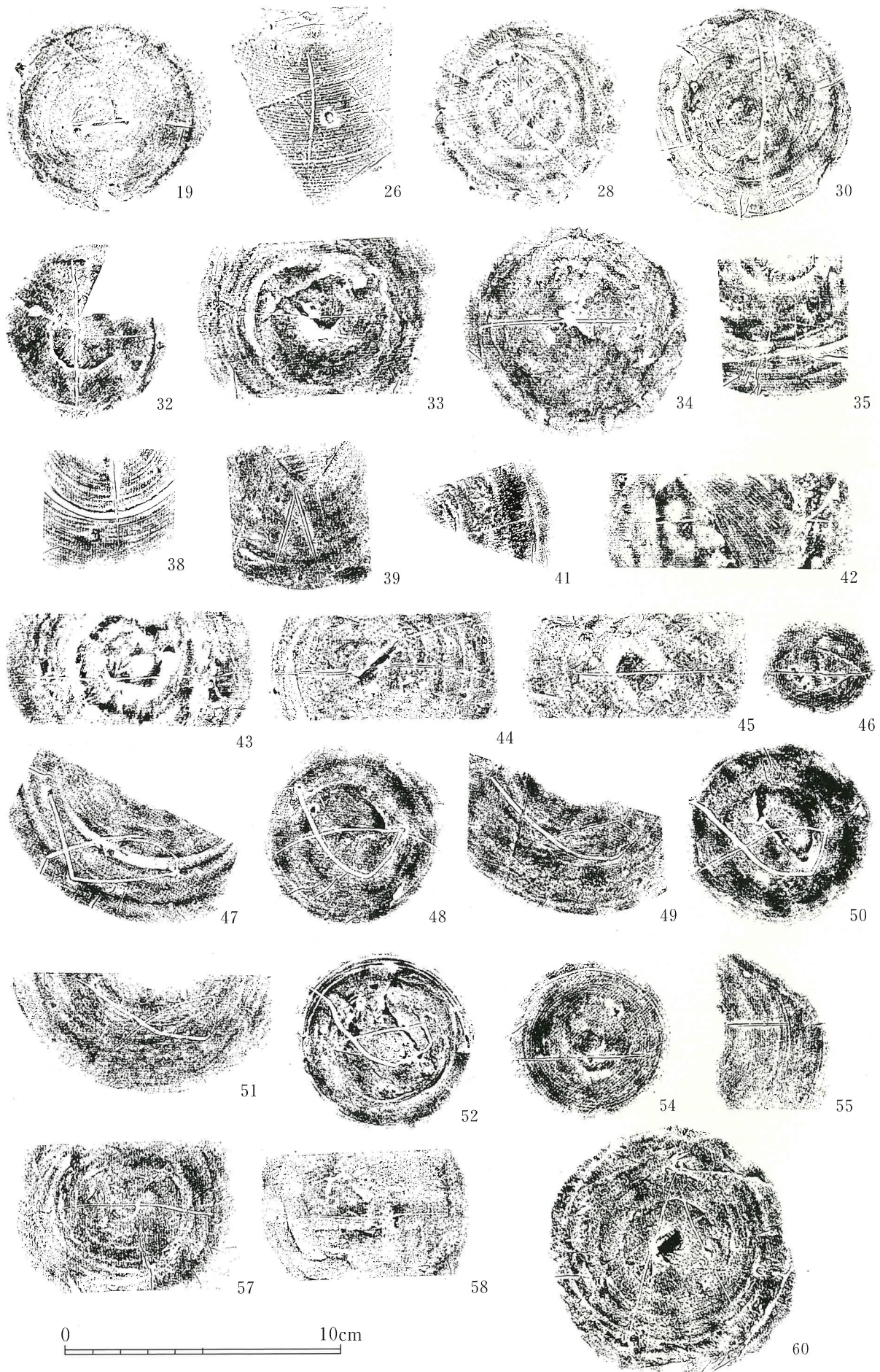


第104図 第15支群2号墓実測図 (1/40)

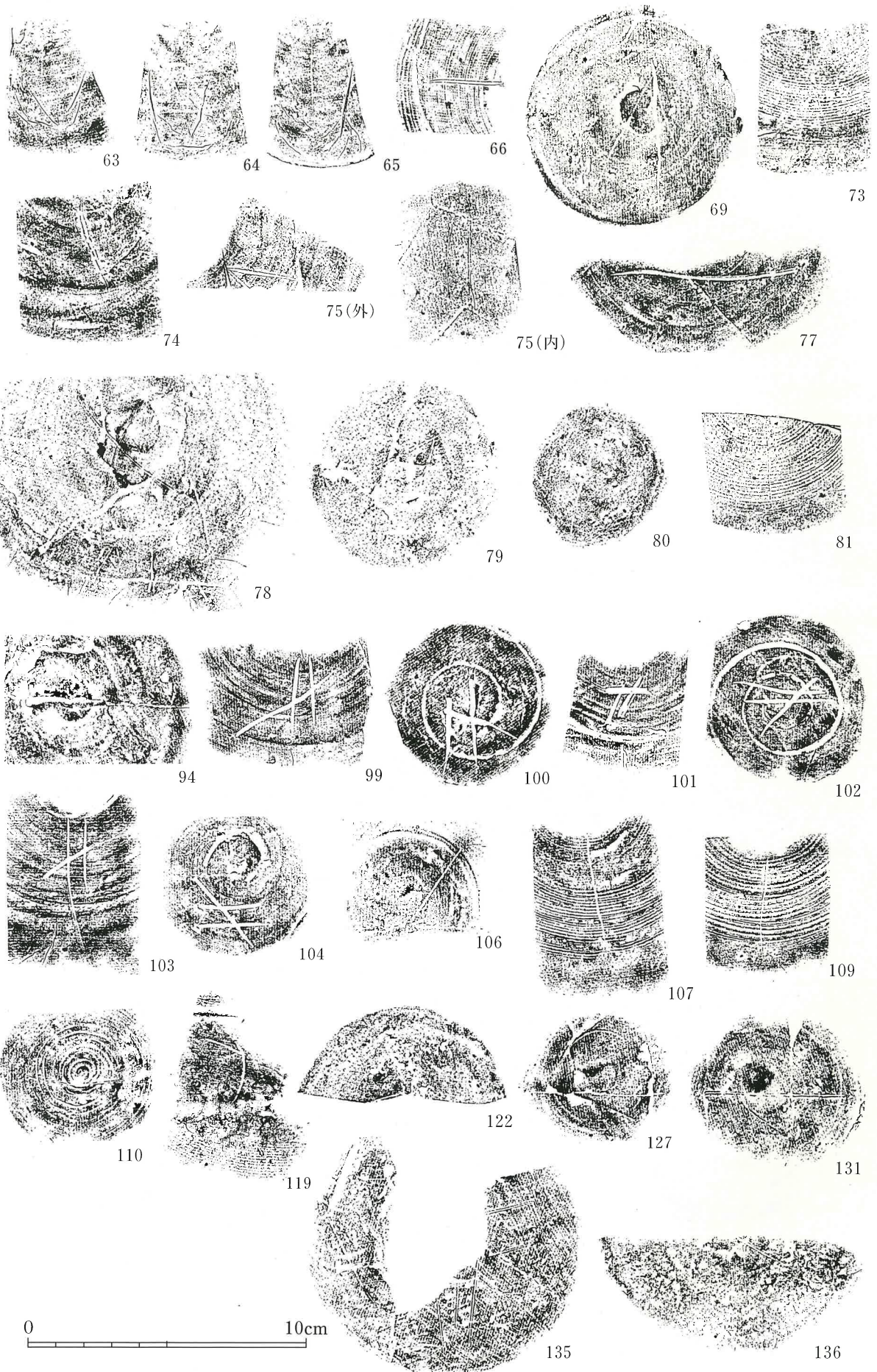
表 26 夕田横穴墓群遺構計測表

(単位:m)

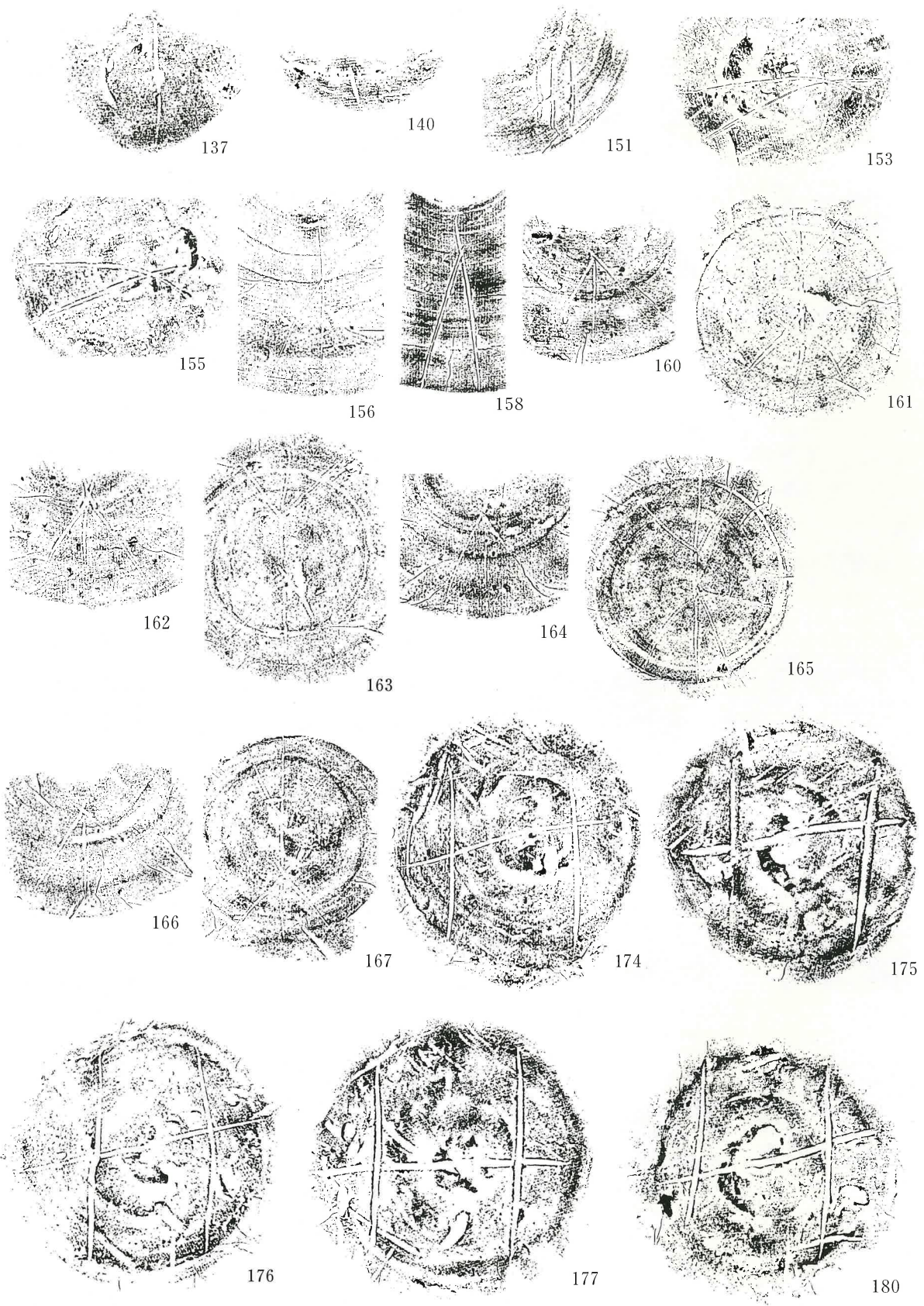
横穴墓番号	前庭部	羨門部	羨道部	玄 室 部					備 考
	幅・長さ	幅・高さ	長さ・高さ	玄門幅・高さ	奥行き・高さ	奥壁・中央・裾部幅	平 面 形	天 井 形	
第1支群1号墓	消滅	消滅	0.90 + a × -	0.70 × -	2.07 × -	1.81-2.31-2.35	不整形	—	玄室内面赤色顔料
第2支群1号墓	消滅	消滅	消滅	消滅	1.55 + a × -	1.65-1.92	胴張り方形?	—	玄室内面赤色顔料
第3支群1号墓	? × 1.49	0.34 × -	0.32 × -	0.49 × -	2.06 × -	2.06	不整形	—	玄室内面赤色顔料
第4支群1号墓	消滅	消滅	不明	0.89 × 0.82	1.14 × 0.83	1.95	平入り胴張り長方形	平天井(稜有)	玄室内面赤色顔料
第5支群1号墓	1.44 × 4.66	0.69 × 0.83	0.93 × 0.86	0.89 × 0.82	1.34 × 0.87	1.81	平入り隅丸長方形	アーチ(稜有)	
2号墓	1.51 × 3.96	0.56 × ?	0.81 × ?	0.95 × 0.90	1.73 × 1.03	1.47-1.67-1.67	胴張り方形	鴨居	
3号墓	1.96 × 3.35	0.47 × ?	1.08 × 0.91	1.09 × 0.95	0.99 × 1.10	1.55-1.80-1.60	平入り胴張り長方形	切妻	
4号墓	2.82 × 3.33	0.66 × -	0.92 × -	1.26 × -	2.59 × -	2.18-1.95-1.61	妻入り逆台形	—	
5号墓	2.90 × 2.63	0.90 × -	1.09 × -	1.08 × -	0.97 × -	1.38-1.63-1.61	平入り胴張り長方形	切妻(?)	
6号墓	2.08 × 3.12	0.58 × ?	1.08 × ?	1.08 × ?	1.52 × ?	1.78-1.90-1.63	略方形	—	
7号墓	4.23 × 3.19	0.60 × 0.81	0.78 × 0.90	0.83 × 0.91	1.85 × 1.21	1.71-1.92-1.55	胴張り隅丸方形	寄棟	
第6支群1号墓	第6-4号共有	0.55 × 0.61	—	—	2.20 × 0.52	0.51	長方形	—	
2号墓	第6-4号共有	0.47 × 0.56	—	—	1.98 × 0.57	0.50-0.68-0.45	隅丸長方形	—	
3号墓	2.23 × 3.36	0.66 × 0.87	0.95 × 0.90	0.88 × 0.95	1.78 × 1.05	2.10-2.00-1.83	略方形	アーチ	
4号墓	1.69 × 2.54	0.50 × 0.90	1.07 × 0.89	1.17 × 0.89	1.55 × 0.99	1.67-1.74-1.46	不整形	寄棟	
5号墓	2.48 × 2.34	0.94 × ?	1.08 × 0.85	0.92 × 0.85	1.28 × 0.82	1.10-1.85-1.40	平入り楕円形	アーチ(稜有)	
第7支群1号墓	2.61 × 2.88	0.60 × -	0.67 × -	0.65 × -	1.29 × 0.85	1.76	平入り隅丸長方形	アーチ	
第8支群1号墓	第8支群共有	0.52 × 0.70	0.71 × 0.69	0.92 × 0.68	0.97 × 0.82	1.70	平入り長方形	寄棟	
2号墓	第8支群共有	0.54 × 0.57	0.58 × 0.87	1.00 × 0.82	1.19 × 1.12	2.00-2.18-2.00	平入り胴張り長方形	寄棟	
3号墓	0.97 × 0.62	0.46 × 0.71	—	—	1.99 × 0.56	0.58	長方形	アーチ	
4号墓	第8支群共有	0.60 × 0.77	0.63 × 0.84	1.17 × 0.85	0.99 × 0.85	1.68	平入り不整形長方形	平天井	
5号墓	第8支群共有	0.55 × 0.80	0.70 × 0.82	0.78 × 0.84	1.58 × 0.81	2.17	平入り楕円形	アーチ	
6号墓	第8支群共有	0.56 × ?	0.67 × ?	0.79 × 0.91	1.64 × 1.27	1.97	胴張り方形	寄棟	棟木造出し
第9支群1号墓	2.14 × 1.15	0.51 × 0.79	0.67 × 0.76	0.99 × 0.74	1.53 × 1.13	1.18	平入り長方形	切妻	
第10支群1号墓	1.98 × 2.04	0.66 × ?	0.99 × 0.79	0.99 × 0.74	1.19 × 0.79	1.43-1.75-1.52	平入り隅丸長方形	アーチ	
2号墓	2.83 × 2.05	0.59 × 0.85	0.99 × 0.82	0.87 × 0.77	1.45 × 0.87	1.14-1.73-1.63	平入り胴張り長方形	アーチ	
3号墓	3.48 × 1.35	0.61 × 1.02	0.82 × 0.99	1.11 × 0.96	1.92 × 1.29	1.95-2.23-1.73	胴張り隅丸方形	切妻	
4号墓	2.48 × 2.07	0.52 × 0.86	1.01 × 0.85	1.05 × 0.88	1.06 × 0.97	1.47-1.76-1.43	平入り胴張り隅丸長方形	アーチ	
5号墓	2.00 × 2.32	0.37 × 0.61	—	—	1.53 × 0.56	0.78-0.60-0.35	妻入り羽子板	—	
6号墓	2.14 × 3.01	0.51 × 0.80	0.41 × 0.73	0.80 × 0.71	1.02 × 0.72	1.51-1.86-1.21	平入り不整形隅丸長方形	アーチ	
7号墓	2.39 × 3.09	0.50 × 0.81	0.65 × 0.85	0.90 × 0.78	0.95 × 0.73	1.38-1.59-1.08	平入り不整形隅丸長方形	アーチ	
第11支群1号墓	第11支群共有	0.44 × ?	1.13 × 0.98	1.08 × 1.07	1.95 × 1.17	1.98-2.12-1.50	不整形	アーチ	
2号墓	第11支群共有	0.55 × ?	0.70 × ?	1.02 × 0.98	1.64 × 1.12	1.82	隅丸方形	アーチ(稜有)	
3号墓	第11支群共有	0.60 × 0.87	0.88 × 0.85	0.86 × 0.82	1.83 × 0.93	1.23-1.17-0.94	妻入り不整形隅丸長方形	アーチ(稜有)	
4号墓	第11支群共有	0.61 × ?	0.65 × 1.02	1.11 × 0.99	1.40 × 1.24	1.92	平入り胴張り隅丸長方形	寄棟	
第12支群1号墓	2.15 × 2.96	0.54 × ?	0.84 × 0.83	1.03 × 0.82	1.67 × 0.95	1.47-1.77-1.50	不整形隅丸方形	アーチ(稜有)	
2号墓	2.07 × 2.34	0.43 × ?	0.61 × ?	0.93 × 0.92	2.12 × 1.05	1.81-2.28-1.79	不整形隅丸方形	アーチ(稜有)	
第13支群1号墓	1.18 × 1.97	0.41 × 0.73	0.61 × 0.65	0.70 × 0.74	1.35 × 0.76	1.54	平入り楕円形	アーチ	
2号墓	1.36 × 1.59	0.31 × 0.60	—	—	1.86 × 0.56	0.50-0.92-0.48	不整形胴張り長方形	ドーム	
第14支群1号墓	不明(未完掘)	0.52 × 0.74	0.77 × 0.65	0.70 × 0.62	0.52 × 0.61	0.88	平入り隅丸長方形	アーチ	
2号墓	不明(未完掘)	0.38 × 0.67	—	—	2.35 × 0.77	0.57-0.92-0.53	不整形胴張り隅丸長方形	アーチ	
第15支群1号墓	1.35 × ?(削平)	0.70 × 1.03	1.17 × 1.03	1.20 × 0.98	1.89 × 1.03	1.36-1.68-1.39	妻入り胴張り隅丸長方形	ドーム	飾縁
2号墓	?(削平)	0.62 × 0.90	0.73 × 0.86	0.98 × 0.86	0.98 × 0.82	1.25-1.55-1.05	平入り不整形長方形	アーチ(稜有)	



第105図 ヘラ記号集成1 (1/2)






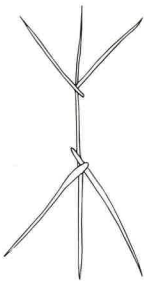
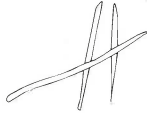
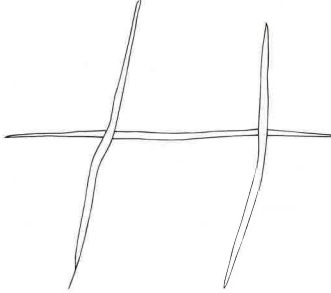
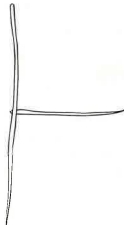

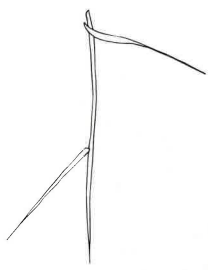
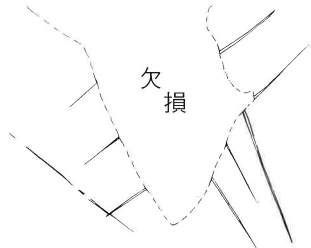



第 106 図 ヘラ記号集成 2 (1/2)

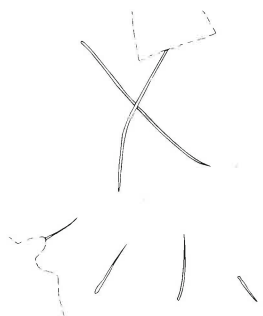



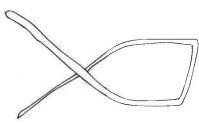



0 10cm

第 107 図 ヘラ記号集成 3 (1/2)

分類	ヘラ記号	遺物番号	分類	ヘラ記号	遺物番号
I-a		19 33 34 41 42 43 44 45 46 54 57 58 77 81 94 106 110 127 131 137 140	VI		39 60 79
I-b		26 38 55 63 64 65 66 73 74 107 109 136 (※63~65は内面)	VII		69 75 160 162 164 166
II		75 (内面)	VIII		161 163 165 167
III-a		35 99 100 101 102 103 104			
III-b		174 175 176 177 180	IX		32
IV		151	X		30
V		135			
			XI-a		80

第 108 図 ヘラ記号別出土土器一覽 1

分類	ヘラ記号	遺物番号	分類	ヘラ記号	遺物番号
XI-b		78	XIV		28
XII		153 155 156 158	XV		119
XIII		47 48 49 50 51 52	XVI		122

第 109 図 ヘラ記号別出土土器一覽 2

表 27 ヘラ記号分類表

分類	坏 蓋	坏 身	高 坏	他	計
I - a	7	14			21
I - b	6	1	4 (内面 3)	長頸壺 1	12
II	1 (内面)				1
III - a	4	3			7
III - b	2	3			5
IV	1				1
V		1			1
VI	2	1			3
VII	5	1			6
VIII		4			4
IX		1			1
X		1			1
XI - a		1			1
XI - b		1			1
XII	2	2			4
XIII	3	3			6
XIV		1			1
XV				平瓶 1	1
XVI	1				1
計	34	38	4	2	78

4) 小結

土器のヘラ記号について

夕田横穴墓群 43 基の横穴墓からは 200 余個体の須恵器・土師器（実測可能な土器は 188 個体）が出土した。そのなかで特に須恵器にはヘラ記号を施したものが多量にみられる。ヘラ記号をもつ器種は坏・高坏・長頸壺・平瓶である。このなかでも坏に最も多くその例がみられる。

夕田横穴墓群では実測可能個体 188 個のうち、77 個体でヘラ記号が確認されている。41%の割合である。実測不能の個体破片にもヘラ記号が多々みられ、実際の割合はもう少し高くなると思われる。ここでは夕田横穴墓群出土須恵器のヘラ記号の分析を試みるものである。

ヘラ記号の種類（第 108・109 図）

ヘラ記号は直線の配置と組み合わせ、円弧の配置、円弧と直線の組み合わせがある。

I 類は直線の配置であるが長さや深さに差がある（I-a・b）。II 類は直線 2 本の組み合わせである。III～XI 類は交差する直線の組み合わせで、XII 類は弧をおびた直線 2 本が交差する組み合わせ、XIII 類は円弧の配置である。XIV 類は円弧と直線の組み合わせで、XV 類は IX 類に近いと考えられるが、直線の一方が弧をおびている。XVI 類は I～XV 類のなかに含まれる可能性が高いが、破片のため分類不可能であった。

ヘラ記号の位置

ヘラ記号が刻まれる位置には内面と外面、器面上の位置に違いがある。

内面と外面の違いについては I-b 類 63～65 は内面にヘラ記号をもつが、3 個体とも高坏で、全て脚部内面である。また、66 も高坏であるが 66 は坏部外面にヘラ記号をもつ。II 類 75 は内面にヘラ記号をもつが、75 は宝珠つまみをもつ坏蓋で、外面にも VII 類のヘラ記号をもつ。この結果、高坏は内外面それぞれにヘラ記号をもつが、内面の場合は脚部に限定される。坏は内面にヘラ記号をもつものは 1 点だけで、それも内面だけではなく外面にもヘラ記号をもつ。坏の場合はヘラ記号をもつ個体は全て外面である。

ヘラ記号の器面上の位置についてみると坏蓋はつまみ等の関係で若干異なるが、ほとんどが縁辺近くに位置するか、中央部から始まり縁辺部で終るように施されている。坏身は中央部を中心に施されている。I-b 類の高坏は先述したように脚部内面に、同じく 26 の長頸壺は肩部にヘラ記号が施されている。XV 類 119 の平瓶は口頸部にヘラ記号が施されている。

蓋と身のヘラ記号

夕田横穴墓群では蓋と身がセットとなる好資料が多く出土した。III-a 類 99～104 はセット関係を成し、八女窯産の可能性をもつ。35 は線刻のため除く。III-b 類は蓋・身とも同じヘラ記号をもつ。VII 類は小型の宝珠つまみをもつ蓋で、身は小型の VIII 類とセットになる。この場合蓋のヘラ記号 VII 類は、本来ならば VIII 類のヘラ記号をもつはずであるが、中央に宝珠つまみをもつことから VIII 類の一部を削除したと考える。IX・X・XV 類は小型の坏身で、ヘラ記号をもたない小型の宝珠つまみをもつ蓋とセットとなる。XII 類は蓋・身とも同じヘラ記号をもつ。XIII 類も XII 類と同様である。

ヘラ記号と器形の関係を検討した結果、ヘラ記号の違う蓋と身のセットも数点あるが、これは当時の人々が意識せずに使用したものであろう。本来はセットをなす蓋と身は必ず同一のヘラ記号をもつか、一方がヘラ記号をもたない、或いは蓋・身とももたない組み合わせであったと考える。

3. 夕田古墳群

1) 遺跡の概要

夕田古墳群は日田市大字西有田字夕田に所在する。当古墳群は夕田横穴墓群の位置する斜面北西～南東のL字形に展開する尾根頂部一帯に立地する。標高は136～146mである。北東斜面には佐寺横穴墓群、南側斜面には夕田横穴墓群、南側丘陵上には佐寺原遺跡が、また、西は花月川に接し、日田盆地を一望できる位置に存在する。

夕田古墳群は当初、遺跡としては確認されていなかったが、平成2年の秋に路線内の立木伐開後の木材搬出中、重機による丘陵部の削平を受け、蓋石の一部が露出したことで石棺等の遺構の存在が認められた。このため急遽試掘調査を行った結果、2基の主体部を持つ古墳が確認された。このためこの古墳を夕田古墳とした。

同古墳群は標高146m前後に位置し、南北約100m・幅7m前後の細い尾根頂部に溝で区画した墳墓2基と、この頂部北端から西方向へほぼ直角に折れ、傾斜下降する東西約70m・幅7～15mの尾根中腹から古墳1基、また、先端部から墳丘が流失した方形墳1基をそれぞれ検出した。このため、当初は夕田古墳と呼称していたが、本報告書を製作するにあたり、夕田古墳群と改める。

本調査は平成5年4月から夕田横穴墓群と並行して行った。本調査では丘陵平坦部全体の確認調査を行い、前述したように、夕田古墳以外に石棺2基、土坑墓1基とそれに伴うと思われる周溝状の溝2条、周溝1条を検出・調査した。1・2号墓（石棺1・土坑墓1）は丘陵上の高位置にあり、後世の植林等による削平・攪乱が激しく残りは悪い。3号墓は丘陵斜面先端部に位置し、石蓋等は攪乱を受け、施設の残りは悪いが、周囲から3号墓を囲むように周溝が検出された。これらのことから1～3号墓は墳丘の削平された古墳で、石棺・土坑は主体部であった可能性をもつ。

また、調査区外の南東側丘陵では墳丘と思われる高まりが数カ所で確認できた。このことから、墓域はさらに南側へ展開する可能性をもつ。

また調査当初、調査区北東部分で古墳の墳丘と思われる高まりを確認した。トレンチを設定し、土層観察（第110図 A-Bライン）を行ったが、古墳等の遺構は確認されなかった。

2) 調査の成果

1号墓（第112図）

1号墓は南北にのびる丘陵のほぼ中央、標高146m付近で確認された。調査開始時には墳丘等の施設は確認されなかったが、表土除去後に主体部の埋土が検出された。主体部は大きく削平を受け残りは悪かった。

主体部

主体部は土坑墓である。主軸方位はN-16°-Eを指し、外法は長さ2.86m、最大幅0.82m、内法は長さ2.74m、幅0.5mで深さは0.21mである。床面の一部で赤色顔料を検出したことから、当初は全面に赤色顔料を塗布していたと考える。棺のつくりからみて頭位は南の可能性が高い。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

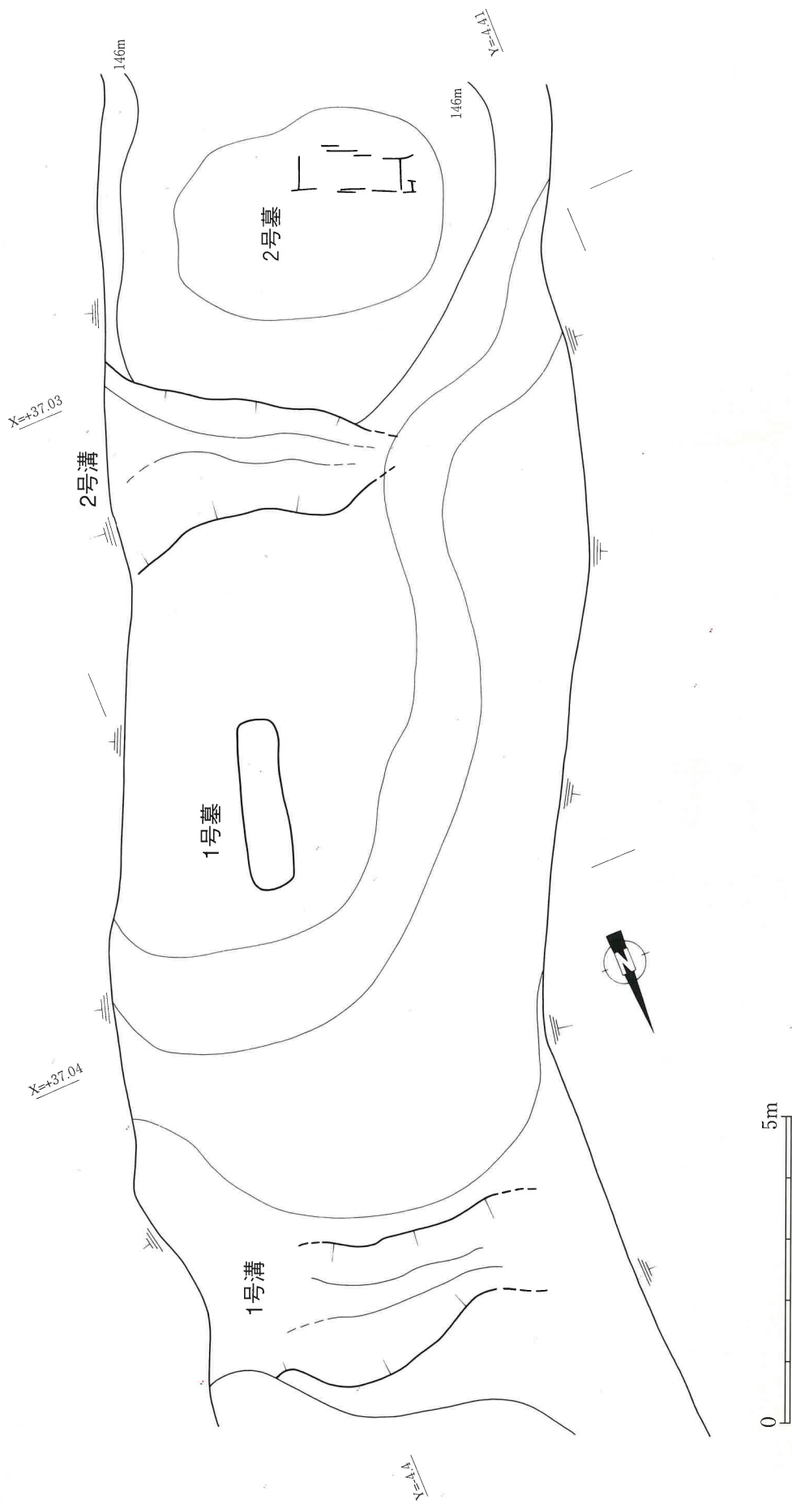
1号溝（第114図）

1号溝は1号墓の北側6mの位置から検出した。標高は146m前後で、南北尾根に直交するように東西方向に掘られているが、両端部は流失している。長さ約2.4m、幅0.8～1.1m、深さは最大で約20cmである。遺構は1号墓を囲むように湾曲している。

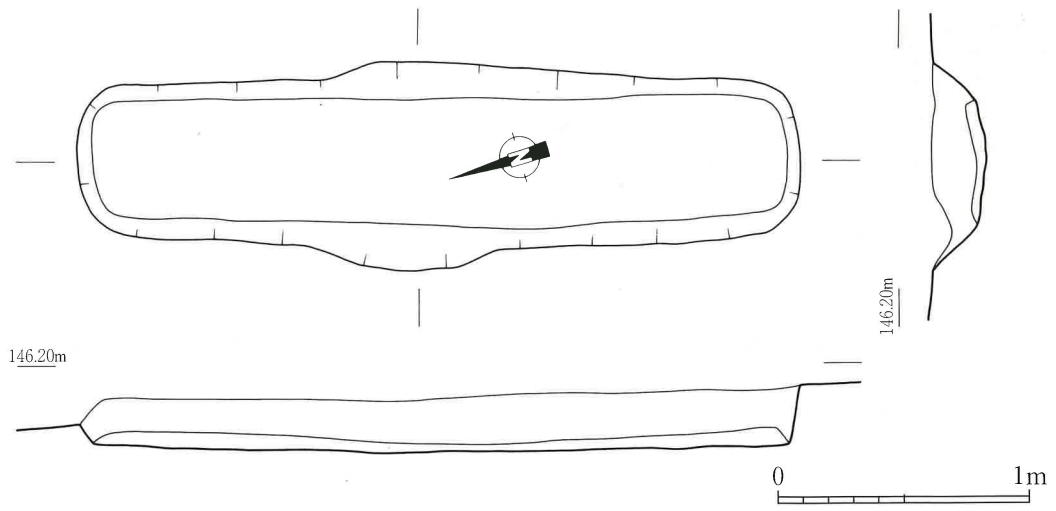
1号墓と同様、溝内からは遺物等の出土はなかった。



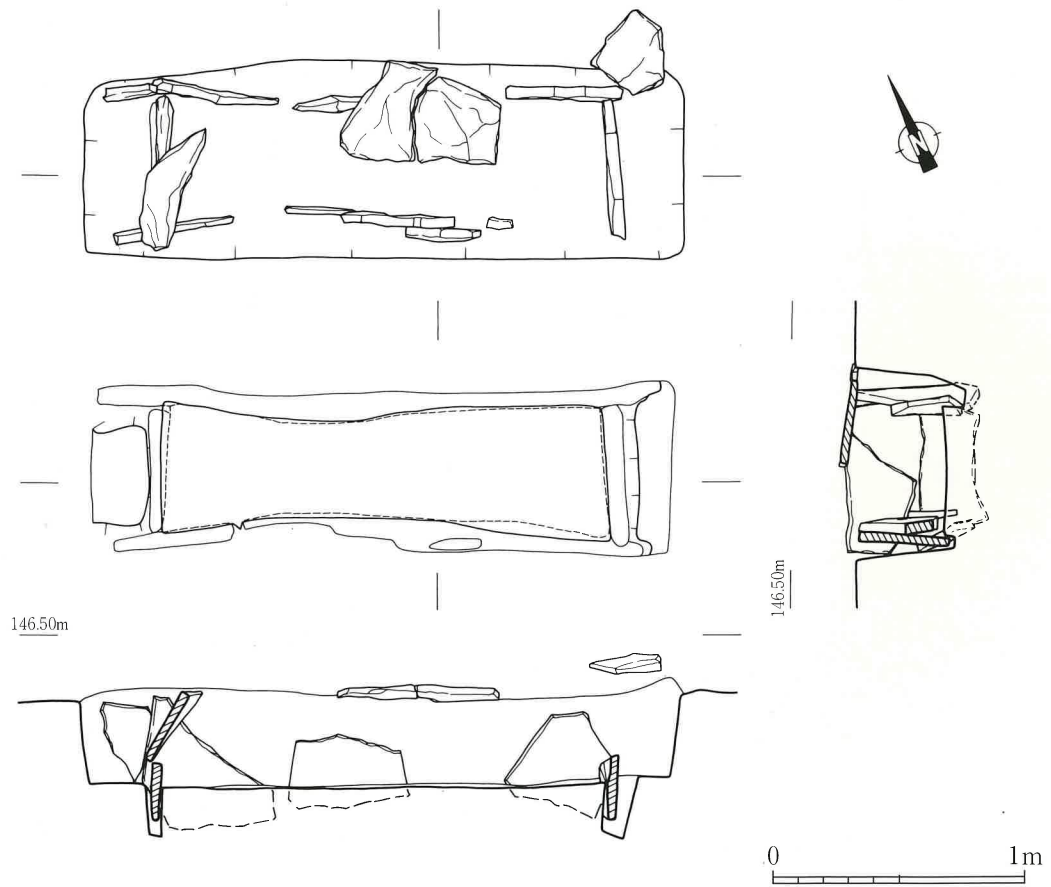
第110図 夕田古墳群遺構配置図 (1/300)



第111図 1・2号墓及び1・2号溝位置図 (1/100)



第 112 图 1 号墓实测图 (1/30)



第 113 图 2 号墓实测图 (1/30)

2号墓 (第113図)

2号墓は1号墓の約10m南で確認された。1号墓とは東西にのびる2号溝で区画されている。調査開始時には墳丘等の施設は確認されなかったが、表土除去後に主体部の埋土が検出された。主体部は大きく削平を受け残りは悪かった。

主体部

主体部は主軸方向N-66°-Eを指す箱式石棺である。この石棺は後世の攪乱を受け、蓋石・側壁石が抜き取られている。また、棺内からは側壁石の一部が破片で検出された。石棺は東西に長い墓壙内に位置する。墓壙は主軸を東西に向けた隅丸長方形を呈し、上縁で東西長2.38m、南北長0.77m、深さ0.38mである。墓壙上面での標高は146.25m、掘り込み角度はほぼ垂直である。

石棺の板石はほとんど抜き取られており、現状で南側壁3枚、北側壁4枚、東西の小口に1枚ずつ確認された。棺内法は、長軸1.76m、最大幅0.52mで、中央付近は土圧によって狭まっている。床面は平坦に仕上げているが、玉砂利、粘土、赤色顔料等の施設は確認されなかった。

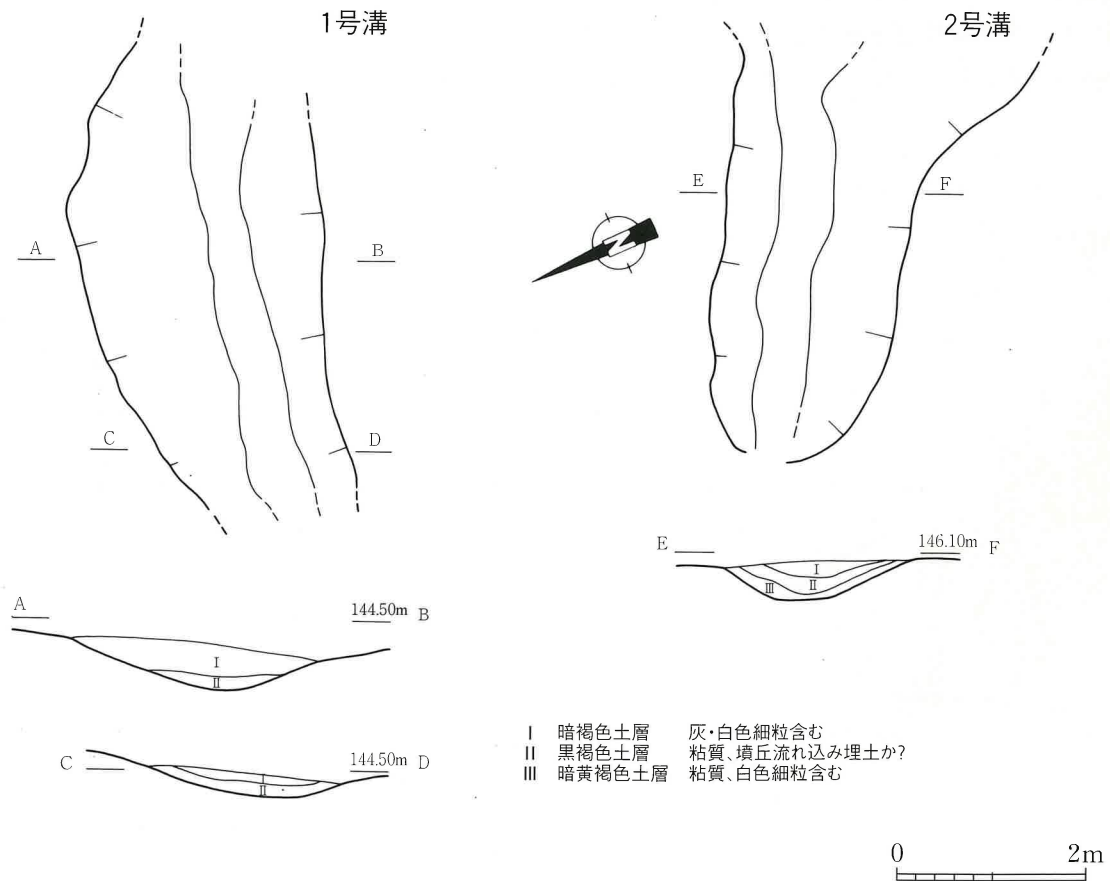
出土遺物

人骨・副葬品等の遺物は出土しなかった。

2号溝 (第114図)

2号溝は1号溝に並行するように東西方向に掘られている。東端は尾根で途切れていて、西端は尾根の途中で消滅する。長さ2.2m、幅0.6~1.6m、深さは中央付近で約20cmである。

溝内からは遺物等は出土しなかった。



第114図 1・2号溝実測図 (1/80)

3号墓 (第116図)

3号墓は東西にのびる丘陵の先端部で検出された。標高は134.5m前後である。発掘調査開始時には墳丘等の高まりは観察されなかったが、表土除去後に主体部とそれを取り囲む周溝が検出された。周溝・主体部ともに後世の著しい削平を受けていて、残りは良くない。

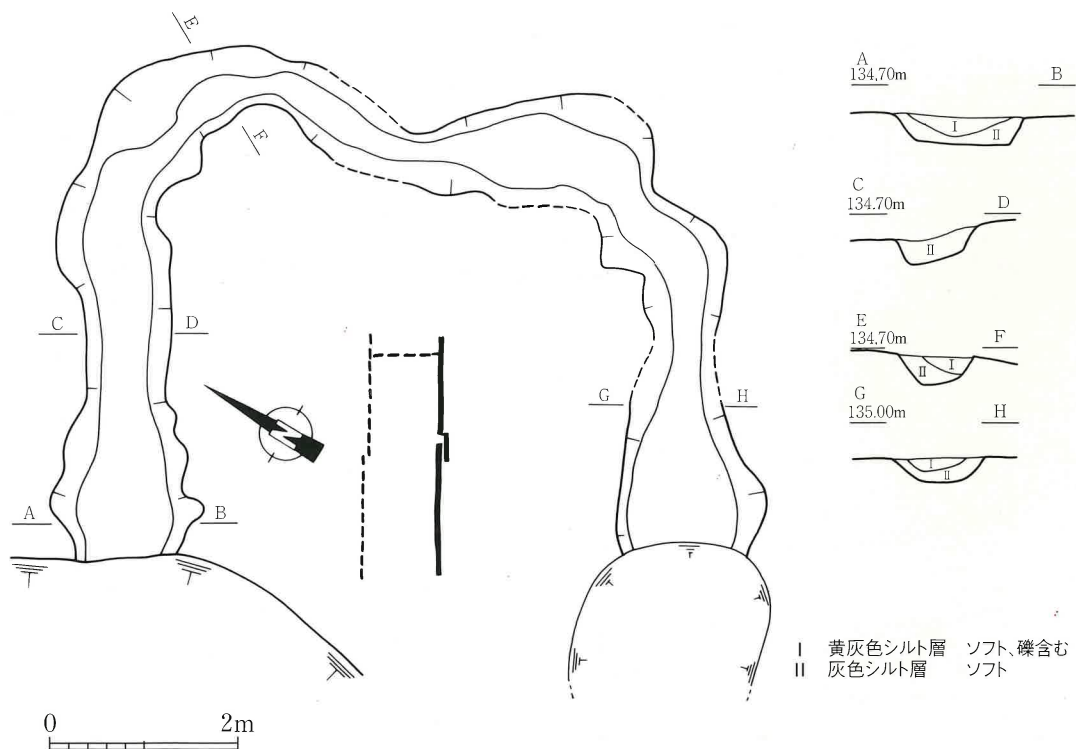
周溝

周溝は平坦部に隅丸形状に掘られているが、上面はかなり削平を受けていると考えられる。周溝西側部分は流失しており現存しない。現存する周溝は東辺6.8m・南辺4.5m・北辺5.2m、深さ20～30cmで、標高は134.4～133.7mである。周溝内堆積土は2層確認できた。下層は灰色シルト層でやや粘質、上層は小礫を含んだやや粘質の黄灰色シルト層が堆積している。層内からは遺物等の出土はない。

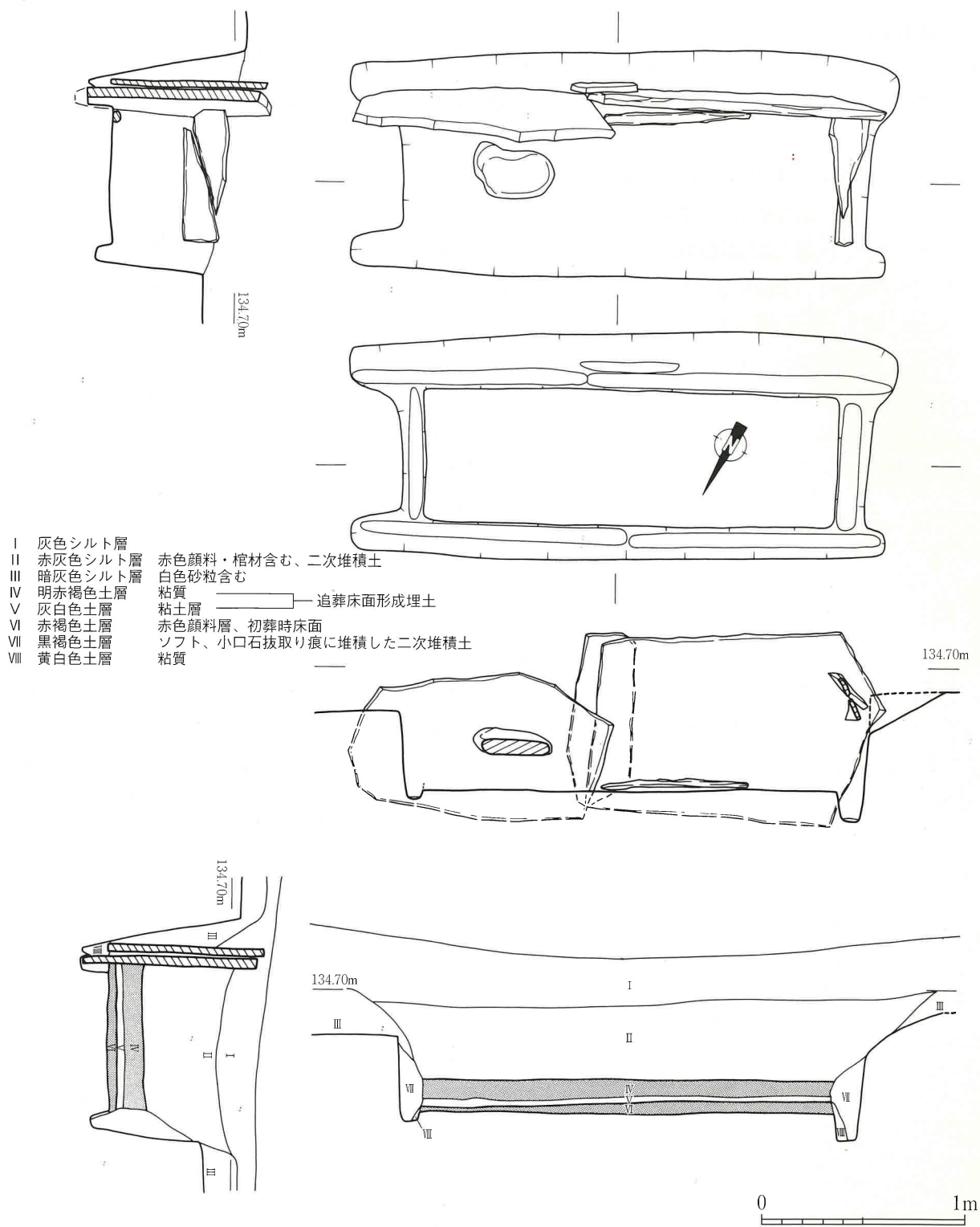
主体部

主体部は主軸方位をN-61°-Eにとる箱式石棺である。この石棺は後世の攪乱を受け、南側壁だけが残っている。石棺は東西に長い墓壙内に位置する。墓壙は主軸を東西に向けた隅丸長方形を呈し、コーナーの四隅が突出している。上縁で東西長2.73m(中央で2.3m)、南北幅1.1m、深さは0.55mである。墓壙上面での標高は134.6mで、掘り込み角度はほぼ直角である。

棺の板石はほとんど抜き取られており、現状で南側壁で3枚、西小口上半で2枚確認された。棺材はすべて安山岩の板石である。墓壙掘り方から推定して、両小口の石は側壁の内側に組み込まれていたと考えられる。棺内法は長軸2.03m、最大幅0.67mである。床面からは赤色顔料の層が2層(Ⅳ・Ⅵ層)確認されたことから追葬が行われたと推定される。鉄刀(6)は初葬時の床面(Ⅵ層)から、切先を東に向けた状態で出土したことからみて、初葬時の頭位は西側と推定される。その後床面に厚さ2～3cmで灰色の粘土層(Ⅴ層)を張り、その上面に赤色顔料で厚さ10cm前後の層(Ⅳ層)を造り追葬時の床面としている。この床面からは東側で河原石が認められることから、この石が枕石と考えられ、頭位は東側であることがわかる。



第115図 3号墓位置図及び周溝土層図 (1/80)



第116図 3号墓実測図 (1/30)

表28 夕田古墳群3号墓出土鉄器計測表

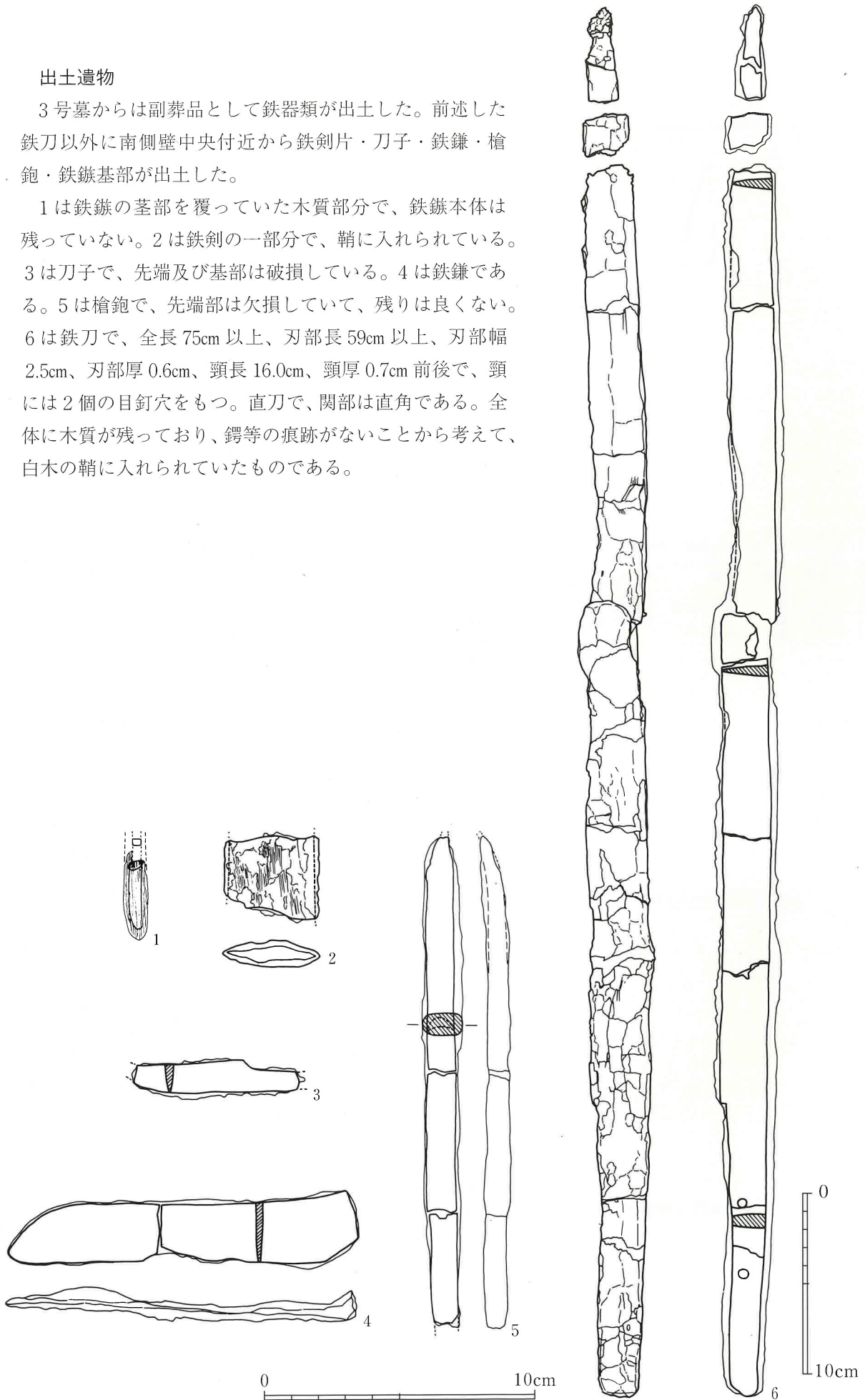
(単位:cm)

番号	器種	全長	頭部長	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
1	鉄鎌	3.3以上	—	—	—	—	0.3	木質のみ残存
2	剣	3.2以上	—	3.2	—	0.3	—	鞘残存
3	刀子	6.1以上	3.9以上	1.1	0.8	0.3	0.3	
4	鎌	12.9	—	2.2	—	0.25	—	
5	槍鉋	18.1以上	14.6	1.0	1.0	0.4	—	
6	直刀	75.2以上	59.0以上	2.5	1.9	0.6	0.8	鞘残存

出土遺物

3号墓からは副葬品として鉄器類が出土した。前述した鉄刀以外に南側壁中央付近から鉄剣片・刀子・鉄鎌・槍鉋・鉄鏃基部が出土した。

1は鉄鏃の茎部を覆っていた木質部分で、鉄鏃本体は残っていない。2は鉄剣の一部分で、鞘に入れている。3は刀子で、先端及び基部は破損している。4は鉄鎌である。5は槍鉋で、先端部は欠損している、残りは良くない。6は鉄刀で、全長75cm以上、刃部長59cm以上、刃部幅2.5cm、刃部厚0.6cm、頸長16.0cm、頸厚0.7cm前後で、頸には2個の目釘穴をもつ。直刀で、関部は直角である。全体に木質が残っており、鏝等の痕跡がないことから考えて、白木の鞘に入れられていたものである。



第117図 3号墓出土鉄器実測図 (1/2・1/3)

夕田古墳

夕田古墳は東西にのびる舌状丘陵の西側先端寄りに位置する。この丘陵は東から西へと下降している斜面平坦部で、西側先端部に3号墓が位置し、古墳とは約10mの間隔をもつ。南約5mには夕田横穴墓第1支群1号墓が位置する。

発掘調査開始時には前述したように既に主体部の一部が露出しており、墳丘頂部はほぼ平坦であった。ただ南から西側部分にかけては地山成形を行っているため、墳丘の高まりが観察された。表土層の除去後には、主体部の全容と周溝が検出された。周溝・主体部とも削平を受けている。古墳は東西径約9m、南北径約13mの不整形な円墳と考えられ、丘陵高位（東側）は周溝で、低位（西側）は地山成形後、盛土等を行って墳丘を築いているのが特徴である。主体部上面からは赤褐色の墳丘埋土が確認された。

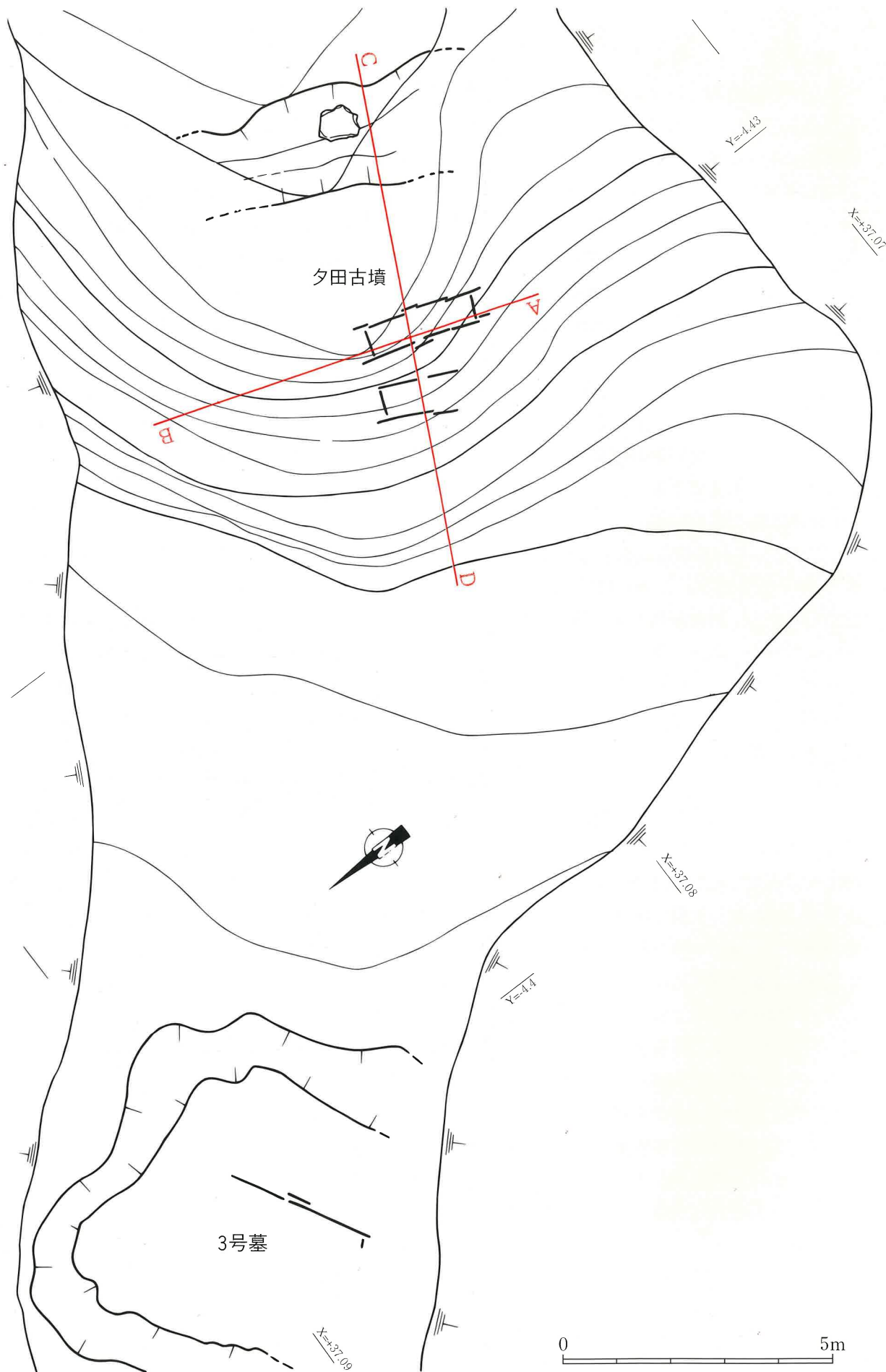
主体部は古墳のほぼ中央に位置し、並行して2基検出された。1号主体部は地山に掘り込まれ、2号主体部は墳丘に掘り込まれていることから、1号主体部→2号主体部の順に構築されたことがわかる。このことは土層観察の結果でも、2号主体部の墓壇が1号主体部の墓壇を切り込んで構築している様子から確認できる。

1号主体部（第119図）

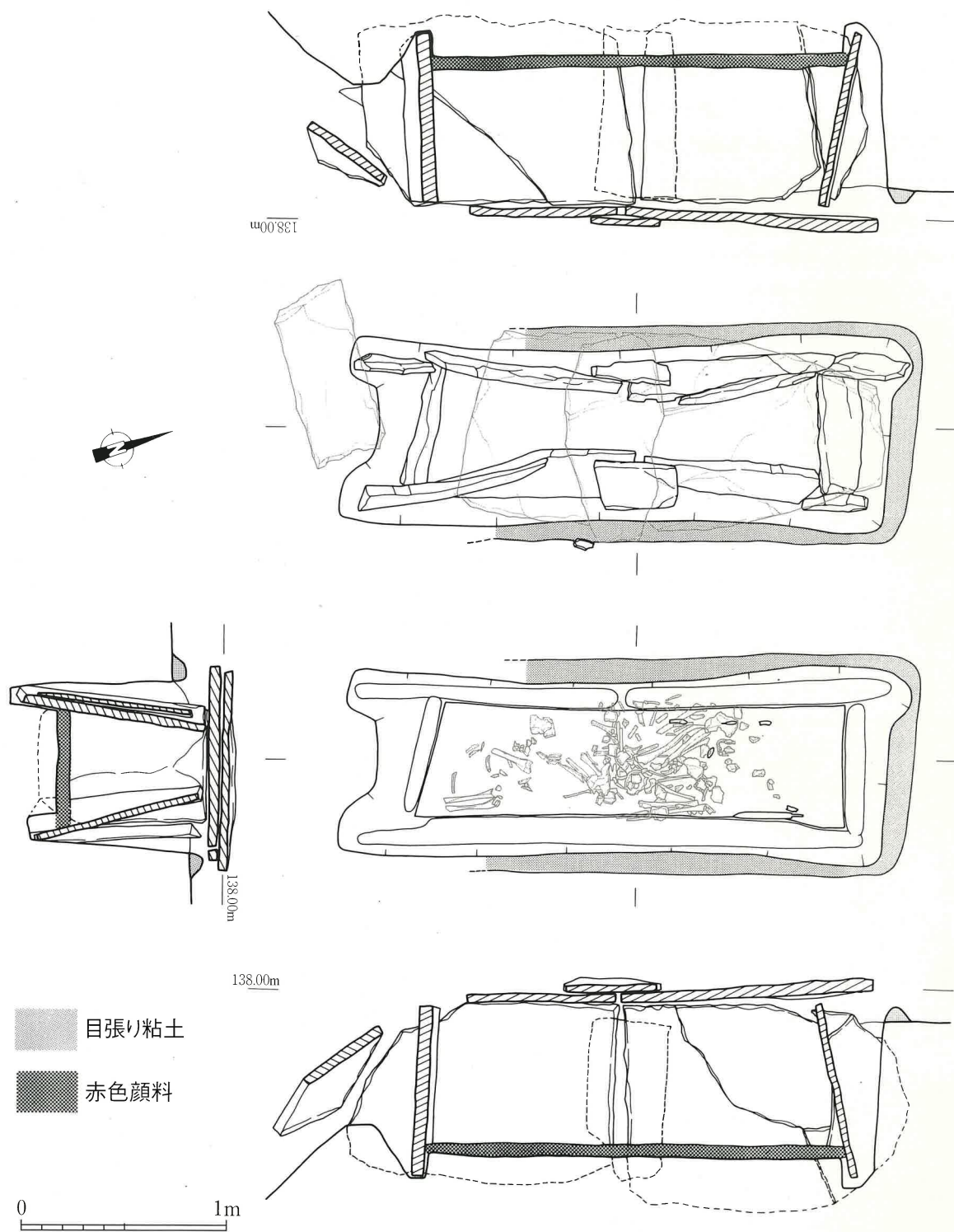
1号主体部の内部構造は組み合わせ式箱式石棺で、墳丘中央からやや西側に位置し、主軸方位はN-17°-Eを示す。この石棺は、南北に長い墓壇内に位置する。墓壇は主軸を南北に向けた隅丸長方形を呈し、南側両隅と北西隅の3カ所が突出している。上縁で東西幅0.82m、南北長は中央で2.47m、西壁で2.72m、深さ0.64m、蓋石頂部での標高は138.0mである。墓壇の掘り込み角度はほぼ直角であるが、側壁は土圧を受け内側へせり出している。墓壇南側は削平を受けており、石棺小口が露出している。また、地山成形を行ったことで旧表土の堆積は認められない。墓壇内には黄褐色の粘質埋土が充填されていた。

石棺は現状では、蓋石に大型の安山岩割石を南北に2枚置き、その空間を埋めるように中央に小型の割石を1枚置く。さらに南で小型の割石を1枚斜面に張り付いた状態で検出した。これらの蓋石は本来1枚のものであったが、追葬時に3枚に割り、南小口方向から遺体を入れた可能性が高く、最終的には南側で約15cm程度の隙間が認められた。棺の側壁には6枚の肉厚な板石を使用している。両側壁に2枚ずつ大型で肉厚な板石を立て並べ、北小口壁に小型の肉厚な板石を立て並べている。両側壁の大型板石の接合部にはやや小型の板石をあてている。板石上面及び内面は丁寧に調整剥離している。棺の周辺には厚さ5cm前後の粘土目張りが認められたが、やはり南側は消失している。この石棺は両側壁の2枚の板石の接合部に、やや小型の板石1枚を裏から組み合せていることと、北小口部分に小型の板石をあてているのが特徴的である。棺材は全体に土圧を受け、内傾している。両小口の石は側石の内側に組み込まれ、北小口が内傾している。棺床は粘土目張りで、赤色顔料を5cm前後敷きつめ、その上に径1cm前後の玉砂利を敷いている。枕等の特別な施設は認められない。石棺内側には全面に赤色顔料を塗布していた。棺内内法は長軸1.94～2.05m、最大幅0.55mである。

棺内からは埋葬人骨が出土したため、九州大学文学部九州文化史研究施設比較考古学部門（当時）の田中良之助教授（当時）の参加指導を得て棺内の調査を行った。



第118図 夕田古墳位置図 (1/100)



第119図 夕田古墳1号主体部実測図 (1/30)

表29 夕田古墳1号主体部出土鉄器計測表

(単位:cm)

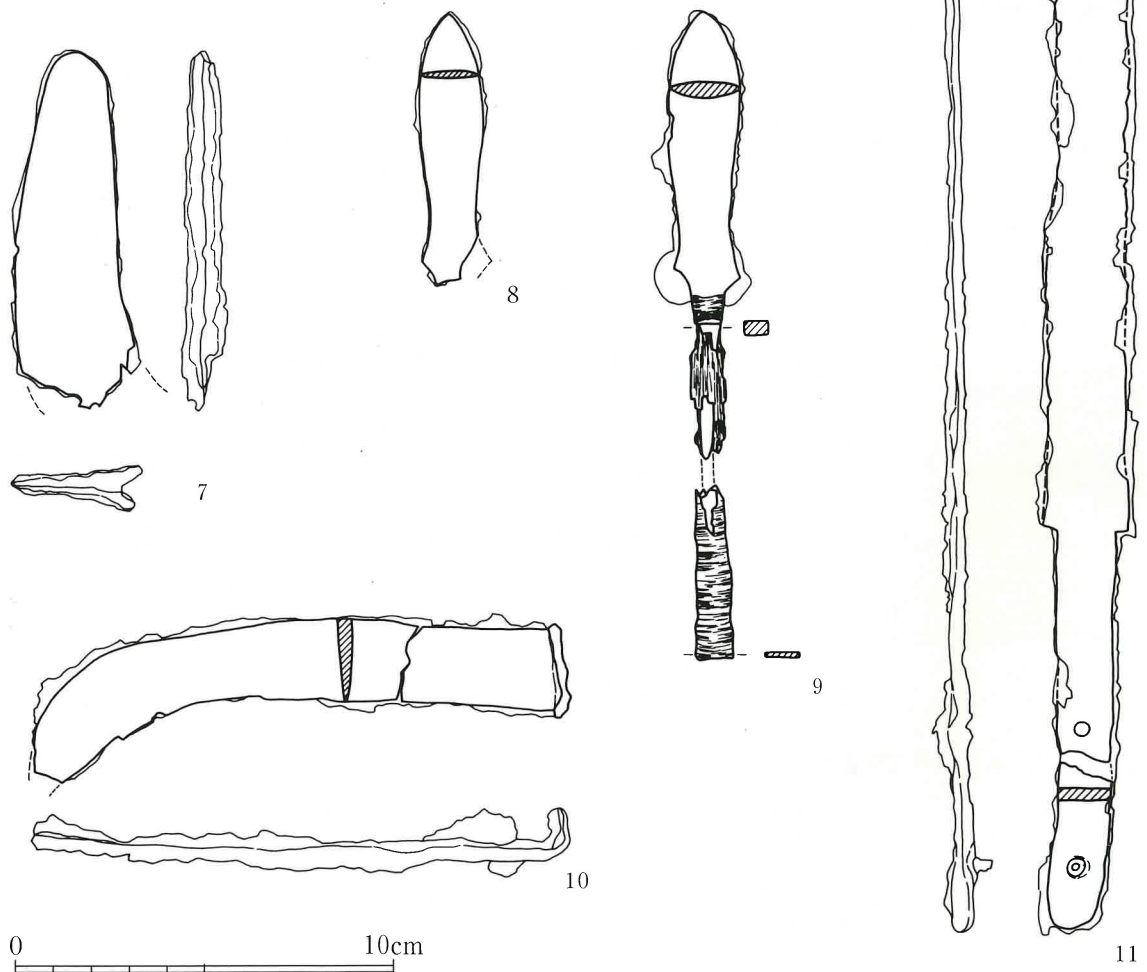
番号	器種	全長	頭部長	刃幅	頸幅	刃部厚	頸厚	備考
7	U字型鋤先	9.4以上	—	2.9	—	0.6	—	
8	鉄鏃	7.1	—	1.7	—	0.2	—	
9	鉄鏃	16.4以上	7.4	1.9	0.5	0.4	0.4	木質・桜樹皮巻残存
10	鎌	14.1以上	—	2.2	—	0.35	—	
11	剣	42.0	31.3	1.8	1.4	0.3	0.3	木質残存

出土遺物（第120図）

石棺内からは5体分の人骨と、副葬品として鉄剣1本、鉄鏃2本、U字鋤先片1本、鉄鎌1本が出土した。

人骨は石棺中央から南側方向に集中している。当初は3個体の人骨と考えていたが、鑑定の結果、5個体の人骨が出土した。

副葬品は棺内床面の北東隅付近から鉄剣（11）が剣先を南に向けて出土した。西壁側の中央よりやや北寄り、北からU字鋤先（7）、先端を北に向けた鉄鏃（9）、鉄鎌（10）の順で出土した。床面中央やや北から先端を南に向けた鉄鏃片（8）が出土した。鉄剣は全長42cm、頸長10.5cmで、頸には2個の目釘穴をもつ。関部は一方が直角で、他方が鈍角に開いている。一部木質が残存している。



第120図 夕田古墳1号主体部出土鉄器実測図（1/2）

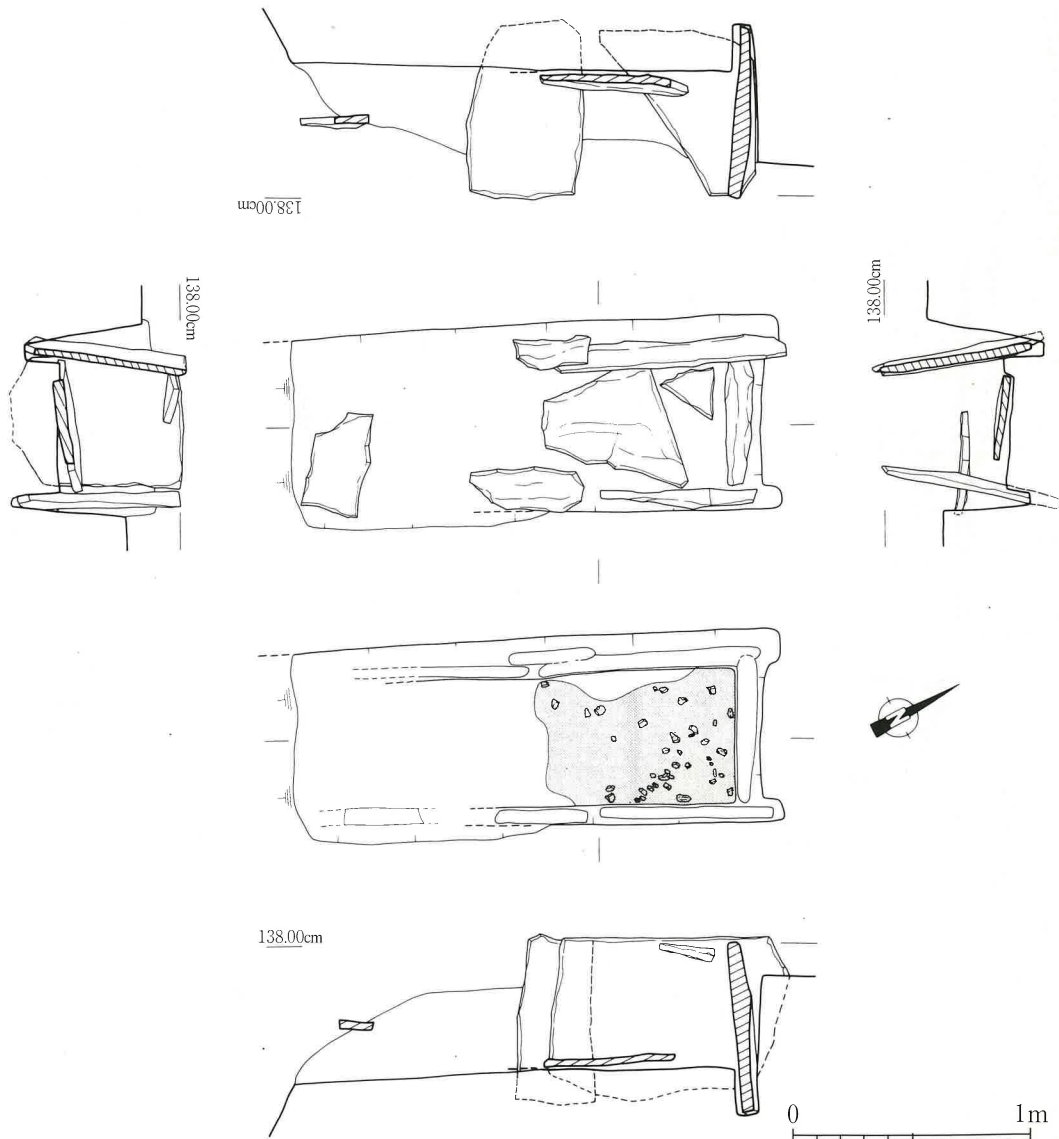
2号主体部 (第 121 図)

2号主体部は、1号主体部の西0.5mの墳丘に、1号主体部と並行して構築されている。主軸をN-28°-E方向に向けた箱式石棺である。この石棺は後世の攪乱を受け、中央より北側のみが残っていた。石棺は南北に長い墓壇内に位置する。墓壇は南側が削平されているが、主軸を南北に向けた隅丸長方形を示すと思われる、北側両隅が約10cm程度突出している。墓壇上面での標高は137.85m、上縁で南北長2.1m以上、東西幅0.8m、現存する深さ0.35mである。墓壇の掘り込み角度はほぼ直角である。

棺の石材はほとんど抜き取られており、現状では西側壁に2枚、東側壁に2枚、北小口に1枚認められた。棺材はすべて安山岩の板石である。北小口の石は側壁の内側に組み込まれている。棺内法は長軸長1.5m以上、最大幅0.57mである。床面は北側部分が残存しており、赤色顔料の床面の上に玉砂利が散乱していた。

出土遺物

2号主体部からは、人骨・副葬品等は出土していない。



第 121 図 夕田古墳 2号主体部実測図 (1 / 30)

周溝 (第 124 図)

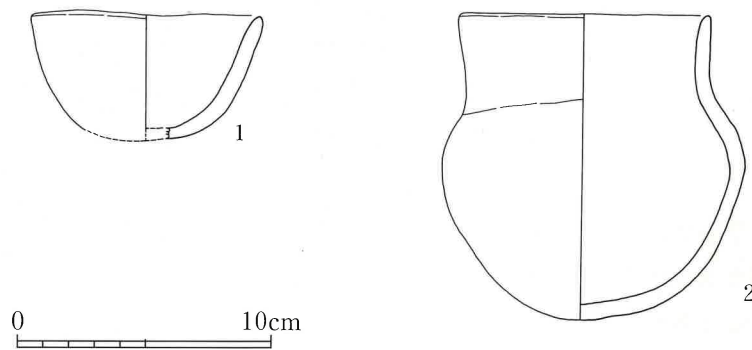
周溝は、尾根を断ち切る形で1号主体部の約2.5m東に、南北方向に構築されている。中央部分が残っているだけで、南北端とも現状では消滅している。標高は1番高い位置で188.4m、現存長は3.5m、最大幅1.9m、深さ約0.4mである。

周溝のほぼ中央付近の東壁際で、一辺約45cm、深さ約10cmの隅丸方形の掘り方の土坑中に、土師器の 1 と 2 が正置され、その上を1枚の板石で蓋がされていた。この土坑と対峙する西壁際には小型の板石8枚が集積されていた。この下面からは土坑等は確認されずその性格は不明であるが、石棺に不要になった棺材を集めたものであろうか。

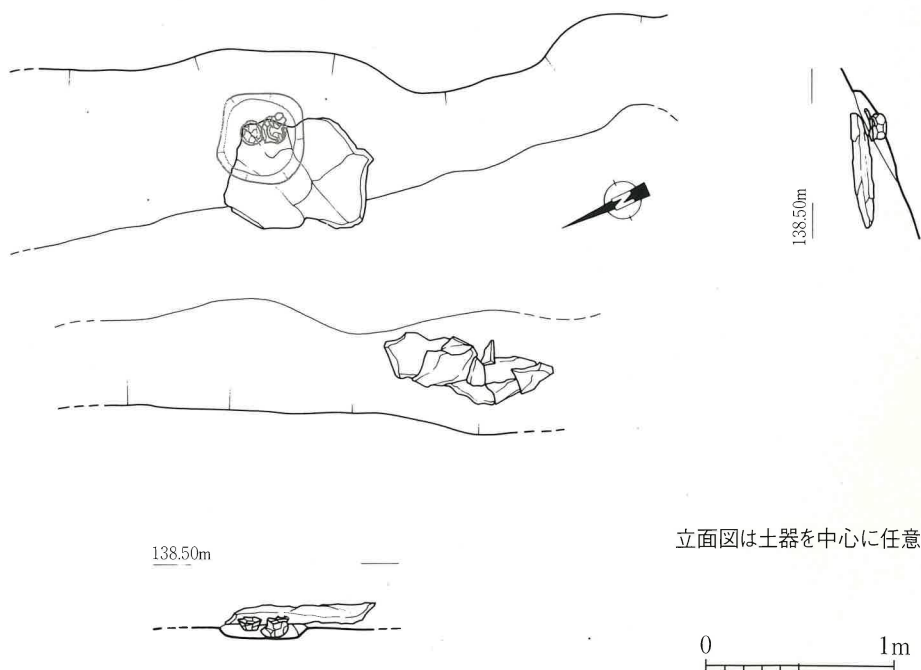
出土遺物 (第 123 図)

周溝内の土坑から土師器の 1 と 2 が出土した。1 は碗で、底部の一部が欠損しているがほぼ完形である。口径9.2cm、器高5.0cmで、調整は器面が荒れているため不明である。胎土に角閃石・石英を含み、色調は赤褐色、焼成はあまり良くない。2 は埴で全体の2/3が残存している。口径は推定で10.1cm、器高12.1cmで、調整は器面が荒れているため不明であるが、一部ハケ目と思われる痕跡がみられる。胎土に角閃石・白色砂粒を含み、色調は橙色、焼成は普通である。

土師器の時期は、5世紀中頃前後のものであり、夕田古墳の築造時期も同時期前後であろう。



第 123 図 夕田古墳周溝内出土遺物実測図 (1/3)



第 124 図 夕田古墳周溝実測図 (1/40)

3) 小結

夕田古墳群は、地形と空間から次の2グループに分けられる。夕田古墳+3号墓(第1グループ)、1号墓+2号墓(第2グループ)となる。このグルーピングがどのような時間軸で構成されたかは不明な部分が多い。時期は夕田古墳東側周溝より出土した土器が5世紀中頃とわかる以外は不明であるが、墳墓の主体部の様式や副葬品の形態からほぼ同時期に築造された可能性が高い。とするならば、この2つのグループでは、第1グループが副葬品の有無からみても優位であることは明らかである。特に夕田古墳は2基の主体部(箱式石棺)をもち、中心主体部には5個体を埋葬するとともに、多様な鉄製品を副葬しており、本古墳群の中心的な存在と考えられる。さらに3号墓でも鉄刀等の副葬が認められ、主体部床面土層から2個体以上の埋葬が考えられる。このように本古墳群の中心となる被葬者は追葬を行っており、第V章での田中等の報告によると、夕田古墳1号主体の被葬者は血族で構成されている可能性が高いとの指摘もあることから、本古墳群の中心被葬者は「イエ」の成立とその社会的認定が行われた一族であることが想定されよう。

最後に問題となるのは、北東尾根基部にある方形墳状の高まりである。これは調査時に南北辺約15m前後の古墳と考え、主体部が存在すると推定される場所にトレンチを設定(第110図 A-Bライン)し、確認を行ったが、主体部・墳丘・周溝等は全く確認できなかった。しかしながら南北端は確実に整形しており、特に南端は明確である。とすると本古墳状遺構は本来墳墓として使用する目的で一定の区画を整形していたが、埋葬は行われなかったある種の「寿墓」と言えようか。この古墳状遺構は立地も良く、規模も大きいことから、本来、夕田古墳群はこの古墳状遺構を中心に展開していった可能性が高いが、ある種の事情(地域の政治的事情等)で埋葬が行われなかったと思われる。

以上のように本墳墓群は5世紀中頃前後にほぼ同時期に営まれた「寿墓」を含む墳墓群であり、この「寿墓」も第1グループに含まれると考える。このことから第1グループが優位であり、追葬等も認められることから「イエ」の確立を認めることができよう。

V. 夕田古墳出土の人骨について

舟橋京子・金宰賢・田中良之

九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座

1. はじめに

夕田古墳の第1主体部である箱式石棺から人骨が出土し、大分県教育委員会から九州大学文学部九州文化史研究施設比較考古学部門（当時）へと人骨調査の依頼があり、田中は金宰賢・宮田剛（同大学院文学研究科院生。当時）を同行し、発掘調査の段階から現場における人骨の観察・調査を行った。人骨はその後九州大学へと搬入し、九州文化史研究施設比較考古学部門が大学院比較社会文化研究科基層構造講座へと改組されてからは、同講座へと資料を移管して整理・調査を行った。

以下に、分析の結果を記載する。なお、人骨は現在九州大学大学院比較社会文化研究科考古人類資料室に保管されている。

2. 出土状態

石棺内からは5体分の人骨が出土した。人骨の分布をみると、石棺北半分に多い。いずれも埋葬された本来の位置関係を保っておらず、これらの人骨は全て埋葬後二次的に移動されたものと考えられる。これらを個体識別したところ、以下のような結果となった。

まず、北小口から1.5m付近の東側壁沿いに1体分の上肢骨が認められる。これらは、左上腕骨・橈骨・尺骨であり、相互に関節状態を示す位置関係である。手前の石棺側壁の鉄剣上に、腕を伸ばし、回内した姿勢である。また、同一個体と考えられる右脛骨・左上腕骨がいずれも近位を左側にし、左上肢と逆向きにはほぼ長軸をそろえた状態で出土している。同一個体と考えられる頭蓋骨・下顎骨は上腕骨の近位側から出土しており、遊離歯2本も西側壁付近で出土している。さらに、左上肢の南側の若干離れた付近から長軸をそろえた状態で出土した左右大腿骨・左脛骨も同一個体のものと考えられる。これを1号人骨とする。

その他の個体の四肢骨は、石棺南側の東側壁付近で同一個体の左右脛が長軸に沿ってそろえた状態で出土している。その北口にある大腿骨・寛骨、さらに右に位置する寛骨上腕骨・前腕骨も同一個体と考えられる（2号人骨）。また、北小口よりで1体分の左尺骨・左右大腿骨・右脛骨（3号人骨）、および小児の左大腿骨が長軸をそろえた状態で出土している（4号人骨）。石棺中央部を中心に破片が散在する頭蓋骨および上肢骨は3号人骨のものと考えられる。また、4号人骨の頭は石棺北側に位置する。さらに、これらとは別の幼児の四肢骨が散乱した状態で出土している（5号人骨）。なお、遊離歯がそれぞれの頭蓋骨片及び下顎骨付近から出土した。

これらの人骨は、1号人骨のみが関節状態にあり、他は本来の位置関係を保っていない。また、1号人骨が最も下に位置し、その上に他の4体分の人骨が散乱しているという状態であった。したがって、いずれも二次的に動かされた状態であり、最終埋葬の個体を特定しえない。このような状態をみれば、全ての埋葬を終えてから数年後に再び開口して人骨の配置を乱したか、全ての被葬者がこの石棺に改葬されたかのようにもみえる。これらのうち、前者の事例は6～7世紀代に認められ、その背景となる葬送習俗も考察されている（田中・村上1994）。しかし、本石棺は古墳時代前半期に属しており、後半期に出現すると考えられている上記の習俗にしては時期的に早すぎると思われる。後者の場合は、福岡市野多目台、和田B遺跡から、古墳時代前半期の箱式石棺に、複数個体の人骨を改葬したとしか考えられない例が報告されており（金他,1995）、その可能性はある。しかし、本石棺は、通常箱式石棺の形態をとるばかりか隣に石棺を伴っており、副葬品として太刀があり、しかもそれが片付けられていることなどからみると、本来の埋葬に使用されたと考える方が無理がないように思える。ただ、先行する被葬者を片付けた後に埋葬されたはずの「最終埋葬」

の人物が見当たらない点は、通常の埋葬と大きく異なるわけである。これについては、当初埋葬を予定して片付けないしは先行する被葬者の遺体を押しやりながら、結局埋葬しなかった例もあり（例えば、大分県天瀬町中尾原遺跡。未報告。）、そういった類の例と考えることもできるだろう。

そこで、5体の被葬者の状態をみると、1号人骨のみが関節状態を保つ部位があることに注目される。すなわち、1号人骨が本来の被葬者であり、左肘の関節の靭帯が残存している段階で本来の埋葬位置から壁側へと片付けられ、その際に他の墓で軟部組織の腐朽が進行していた2号～5号人骨がこの石棺へと改葬された可能性があるのである。1号人骨を除く4体は、頭蓋骨、四肢骨とも全く本来の位置関係を保っていないうえに関節していないことは上記のとおりだが、頭蓋骨片が縫合で分離した状態で散乱しているにもかかわらず、上顎骨・下顎骨付近以外では遊離歯が認められない点も、これらの人骨がこの石棺内で片付けられたものではなく、他の墓から改葬された可能性を支持する。2カ所で認められた長軸をそろえた四肢骨のまとまりも、改葬の際の人骨の搬入単位を示すと考えることができよう。

ただ、1号人骨が本石棺に本来埋葬された人物であったとしても、他の個体の全てが改葬されたのではなく、1号の前に葬られていて、その後片付けられていた可能性もあるが、その判別は困難である。したがって、埋葬順位の推定も困難である。

3. 所見

3-1. 保存状態

人骨の保存状態はやや不良である。人骨は複数個体分が狭い範囲に散乱しているため、調査時に個体を識別することは困難であったが、研究室における整理・調査の過程で性判定・年齢推定を行い、次にそれに基づいて個体識別を行った。その結果は、既に述べているように、本石棺内の人骨は5体というものであった。以下、個体別に記載する。

【1号人骨】

頭蓋骨は、ほとんどが失われており、右頭頂骨と歯牙が植立した上顎骨の破片に下顎骨が認められる。また、下顎骨付近から遊離歯2点が出土している。上・下顎歯牙の歯式は以下の通りである。

●	●		●	●	●	●	
/	/		/	/	/	/	
3M	2M		1P	C	O	1I	
●	●		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂
			P ₂	M ₁	M ₂	/	

○歯槽開放 ×歯槽閉鎖
/欠損 △歯根のみ ●遊離歯
()未萌出

歯牙の咬耗度は柘原（1957）の2bである。

四肢骨は右肩甲骨・左右上腕骨・左右橈骨・左右尺骨・左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨が遺存していた。これらは総じて華奢であり、大腿骨粗線およびそれぞれの骨の筋付着部の発達はやや弱い。

【2号人骨】

四肢骨のみが確認される。右上腕骨・左右寛骨・左大腿骨・左右脛骨・右腓骨があり、華奢な印象を受けるが、大腿骨粗線をはじめとする筋付着部は比較的発達する。

【3号人骨】

頭蓋は、上顎骨を除く顔面頭蓋、および後頭骨以外の脳頭蓋と下顎骨が残存する。頭蓋主縫合はいずれも開離し、乳様突起の発達は弱く、前頭結節も発達している。遊離歯を含めた残存歯式は以下の通りである。

● ● ●		●
(² M) ² M ¹ M △ ○ ○ ○ ○		I ¹ I ² C P ¹ ○ M ¹ M ² /
(₃ M) ₂ M ₁ M ₂ P ₁ P ○ ₂ I ₁ I		I ₁ ○ C P ₁ ○ M ₁ ○ (M ₃)
● ● ●		●

歯牙咬耗度は栃原の 1a に該当する。また、下顎第 2 大臼歯は歯根の形成が不完全であり、第 3 大臼歯 3 本も未萌出で歯根形成も不完全である。

四肢骨は、左右橈骨・左尺骨・仙骨片・左右寛骨・左右大腿骨・左右脛骨・左腓骨が遺存していた。四肢骨は、確認しうるものはいずれも骨端が遊離しており、大座骨切痕角は大きい。

【4号人骨】

頭蓋骨は、上顎骨・前頭骨・頭頂骨・左側頭骨が遺存する。骨壁は薄く、サイズが小さい。付近から出土した遊離歯を含めた残存歯牙の歯式は以下の通りである。

¹ M ² m ¹ m c ○ /		● ●
₁ M ₂ m ₁ m c ○ I ₁		(C) (P ¹) / /
		○ ○ c m ₁ m ₂ M ₁

アルファベットの小文字は乳歯を表す

歯牙は乳歯と永久歯の混合歯列であり、永久歯は上顎及び下顎の第 1 大臼歯と下顎中切歯が既に萌出している。

体部骨は、肋骨・脊椎骨・右橈骨・左尺骨・左寛骨片・左右大腿骨・左右脛骨・右腓骨が遺存する。いずれもサイズが小さく華奢で、骨端が遊離する。

【5号人骨】

頭蓋は左頭頂骨片と下顎骨が確認されている。四肢骨は、4号人骨よりややサイズの小さい左橈骨・左右尺骨・左大腿骨・右脛骨が認められる。遊離歯を含めた残存歯式は以下の通りである。

/ / / / / / /		●
(₁ M) ₂ m ₁ m ○ ○ ○		m ² /
		○ ○ ○ m ₁ m ₂ (M ₁)
		●

乳歯が完全に植立している歯列であり、永久歯の萌出は認められない。

3 - 2. 年齢・性別

1号人骨：年齢は歯牙咬耗度からみて成年の後半期と推定される。性別は、四肢骨が華奢であり、筋付着面も発達しないことから、女性と推定される。

2号人骨：年齢は、大腿骨遠位端および腸骨翼が完全に癒合しているため、成人に達していることは明らかであるが、歯牙をはじめそれ以上の年齢推定が可能な部位を欠くため、詳細は不明である。性別は、四肢骨が男性としてはやや華奢であるものの、大腿骨粗線の発達と寛骨大坐骨切痕角が小さいことなどからみると、男性の可能性が高いと考えられる。

3号人骨：年齢は、第2大臼歯が歯根形成が不完全ではあるものの萌出していることから、若年の前半と推定される。性別は、寛骨大坐骨切痕角が大きく、前頭結節も発達していることから、女性の可能性もあるが、若年前半という年齢を考えると性判定は困難であろう。

4号人骨：第1大臼歯と下顎中切歯が萌出するという歯牙の状態からみて、7～8才の小児と推定される。性別については、小児であるため判定困難である。

5号人骨：乳臼歯が全て萌出し、第1大臼歯が未萌出で歯根の形成も不十分であるということからみて、3～4才の幼児と推定される。性別は幼児であるため判定不能である。

3-3. 形質的特徴

人骨の保存状態がやや不良であったため計測に耐えるものは少ないが、計測可能な1号人骨（成年女性）および2号人骨（成人男性）の四肢骨について可能な限り計測を行った。その結果は表1～5に示すとおりである。これらのうち2号人骨の四肢骨は、男性にしては細く華奢であり、古墳時代の成人男性（城 1938）と比較してもサイズは小さい。頭骨小変異の観察が可能であった個体はほとんどなかったが、3号人骨に前頭縫合が認められた。

3-4. 歯冠計測

人骨の保存状態はやや不良であったものの、歯牙はある程度保存されており、歯冠計測値を用いた血縁者推定法（土肥他 1986）の適用がある程度可能であった。分析に使用可能な永久歯列を有する1号人骨・3号人骨の歯牙を計測し、分析を行った。計測値は表6のとおりである。血縁者推定に有効な歯の組み合わせは下顎の第1小臼歯、第2小臼歯、第1大臼歯、第2大臼歯の1組しか得られなかった。分析の結果、0.442というQモード相関係数の値が得られた。

4. 考察

4-1. 埋葬習俗

本石棺からは、成人男性・成年女性・若年（女性?）・小児・幼児が各1体ずつ、計5体が出土した。これらのうち、成人男性（2号人骨）は、計測値をみる限りでは、あるいは女性ではないかとも思えるが、大腿骨粗線の発達と寛骨大坐骨切痕角から男性と推定している。

これら5体の埋葬状態は、いずれも現位置を保つものではなく、古墳時代前半期の埋葬としては異例ともいえるべきものであった。最終埋葬の被葬者が特定できないことから、5体全てが他所から改葬された可能性をまず考慮した。しかし、既述のように、夕田古墳は、埋葬主体として2棺が併設されたものであり、副葬品ももち、しかもそれが片づけられていた。その意味では夕田古墳は、人骨の状態を除けば通常古墳となら変わるところがなく、したがって、初葬者の埋葬の数年後に蓋を開け、初葬者を片付けた後に他の個体を棺内に入れた可能性を優先したい。また、最終埋葬の個体が特定できない点は、追葬を予定して先行する被葬者を片付けながらも、棺内の狭隘さなどによって埋葬を中止し、他所に葬ったと考えられる。これについては、実際に人骨が石棺の片側に寄せられていながらも、追葬が行われていない例が大分県天瀬町中尾原遺跡でも知られていることから支持されよう。しかし、いずれにしても特異な埋葬例であることにはわかりがなく、その意味するところの考察は今後の類例の増加を待つて行うことにしたい。

4 - 2. 被葬者の関係

上記のように、歯冠計測値による分析結果は、下顎小臼歯・大臼歯の組み合わせで0.442 というものであった。これはこの方法で血縁者の目安としている0.500をやや下回る値であり、血縁者であろうという推定をしようほど高い相関関係を示してはいない。よって、この石棺の本来の被葬者である成年女性と後から改葬された若年女性が、確実に血縁者であったということはできない。しかしこの値は、この2体が血縁者であった可能性を全く否定するものではなく、逆に歯の保存が良好であるならば他の組み合わせで高い値が得られた可能性を示唆するものといえよう。

5. おわりに

夕田古墳の箱式石棺から出土した人骨から、5個体が埋葬されていたことが確認された。また、これらの人骨は埋葬時の状態を維持していないことから追葬が行われたと推定された。そして人骨の同定からは1号人骨が成年の女性であること、2号3号人骨は年齢不明であるが成人男性の可能性が推定された。これについては、実際に人骨が石棺の片側に寄せられていながらも、追葬が行われていない例が大分県天瀬町中尾原遺跡でも知られていることから支持されよう。しかし、いずれにしても特異な埋葬例であることにはかわりがなく、その意味するところの考察は今後の類例の増加を待つて行うことにしたい。

参考文献

- 土肥直美・田中良之・船越公威,1986:歯冠計測による血縁者推定法と古人骨への応用.人類学雑誌,94(2):147-162.
- 福岡市教育委員会,1995:和田B遺跡A地区調査.野多目台23-102
- 金宰賢・石井博司・田中良之,1995:和田B遺跡出土の人骨について.野多目台,福岡市教育委員会:111-118.
- 城一郎,1938:古墳時代人骨の人類学的研究.人類学輯報,1:1-172.
- 小林行雄,1976:阿豆那比考.古墳文化論考,245-262
- Tim D.White,1991:Human Osteology
- 栃原博,1957:日本人歯牙咬耗に関する研究.熊本医学会雑誌,31,補冊4

表1-1 上腕骨計測値 (男性) (mm)

マルチン No.	項目	成人男性		古墳人*	
		右	左	右	左
5	中央最大径	20.9		22.6	
6	中央最小径	13.5		17.6	
7	骨体最小周	55		59.3	
7a	中央周	58		—	
6/5	骨体断面示数	64.6		77.5	

*城 (1938) より引用

表1-2 上腕骨計測値 (女性) (mm)

マルチン No.	項目	成人女性		古墳人*	
		右	左	右	左
5	中央最大径	19.0	17.5	21.5	18.3
6	中央最小径	14.5	15.3	14.8	13.5
7	骨体最小周	49	51	56.0	51.2
7a	中央周	55	54		
6/5	骨体断面示数	76.3	87.4	68.5	75.0

表2 橈骨計測値 (女性) (mm)

マルチン No.	項目	成人女性		古墳人*	
		左	右	左	右
3	最小周	36.0		34.0	
4	骨体横径	14.5		15.0	
4a	骨体中央横径	12.0		—	
5	骨体矢状径	11.0		10.2	
5a	骨体中央矢状径	10.0		—	
5/4	骨体断面示数	75.9		66.6	
5a/4a	中央断面示数	83.3		—	

表3 大腿骨計測値 (男性) (mm)

マルチン No.	項目	成人女性		古墳人*	
		左	右	左	右
6	骨体中央部矢状径	26.0		27.0	
7	骨体中央部横径	25.0		26.8	
8	骨体中央周	80.0		85.9	
6/7	骨体中央断面示数	104.0		101.8	

表 4 - 1 脛骨計測値 (mm)

マルチン No.	項 目	成人男性		古墳人*	
		左	左	左	左
8	中央最大径	26.0		28.9	
8a	栄養孔位最大径	33.0		33.3	
9	中央横径	20.5		21.4	
9a	栄養孔位横径	23.0		23.4	
10	骨体周	75.0		80.9	
10a	栄養孔位周	86.0		90.7	
10b	最小周	67.0		72.6	
9 / 8	中央断面示数	78.8		74.3	
9a / 8a	栄養孔位断面示数	69.7		70.4	

表 4 - 2 脛骨計測値

マルチン No.	項 目	成年女性		古墳人*	
		右	左	右	左
8	中央最大径	25.0	24.0	25.5	26.9
8a	栄養孔位最大径	27.8	27.5	29.9	29.5
9	中央横径	19.0	18.0	19.0	19.0
9a	栄養孔位横径	20.0	19.8	21.7	21.1
10	骨体周	68.0	66.0	71.3	73.1
10a	栄養孔位周	76.0	75.0	82.8	81.2
10b	最小周	62.0	61.0	65.5	67.0
9 / 8	中央断面示数	76.0	75.0	74.3	70.8
9a / 8a	栄養孔位断面示数	80.0	72.0	72.3	71.9

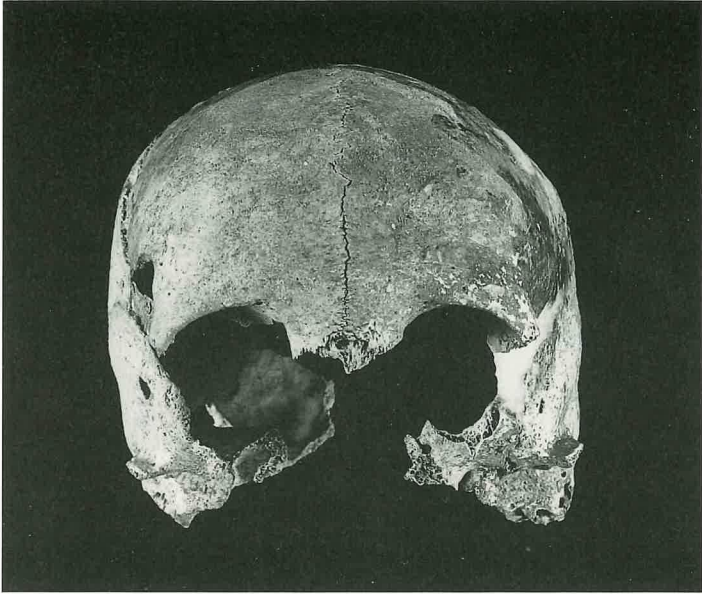
表 5 腓骨計測値 (mm)

マルチン No.	項 目	成人男性		古墳人*	
		左	左	左	左
2	中央最大径	12.5		15.7	
3	中央最小径	11.0		11.1	
4	中央周	37.0		44.1	
4a	最小周	35.0		—	
3 / 2	骨体中央断面示数	88.0		71.20	

表6 齒冠計測值

(mm)

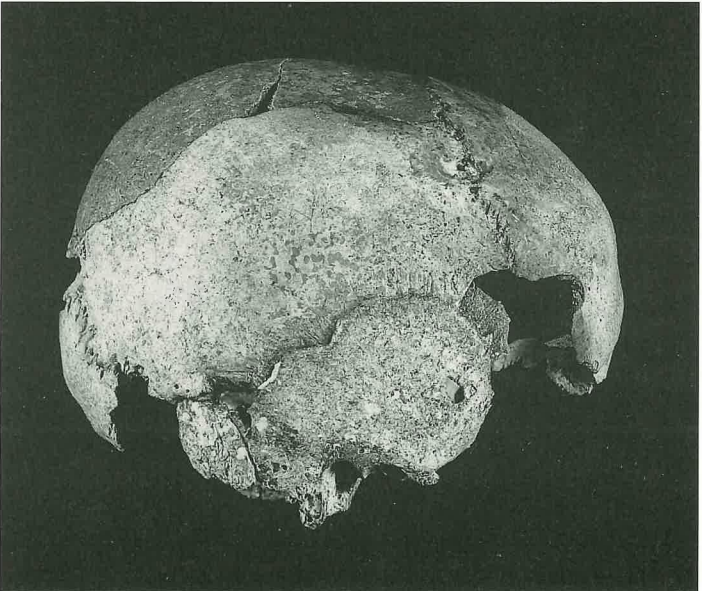
		成年女性		若年女性			
		r	l	r	l		
上	近 遠 心 徑	I 1	8.7	8.5	—	8.0	
		I 2	—	—	—	7.3	
		C	8.0	—	—	8.2	
		P 1	7.2	—	—	8.0	
		P 2	—	7.0	—	—	
		M 1	—	—	11.2	11.3	
	顎	頰 舌 徑	M 2	—	—	10.0	10.5
			P 1	9.5	—	—	—
			P 2	—	9.4	—	—
			M 1	—	—	12.4	11.3
下	近 遠 心 徑	M 2	—	—	10.1	10.5	
		I 1	5.7	6.1	5.6	5.6	
		I 2	6.0	6.1	6.2	—	
		C	6.8	6.9	—	—	
		P 1	7.2	7.1	7.6	7.6	
		P 2	7.6	7.5	7.9	—	
	顎	頰 舌 徑	M 1	11.4	11.4	12.5	12.5
			M 2	—	11.3	12.3	—
			P 1	7.6	7.6	8.5	8.4
			P 2	8.2	8.3	8.5	—
		M 1	11.2	11.0	11.1	11.1	
		M 2	—	10.7	10.9	—	



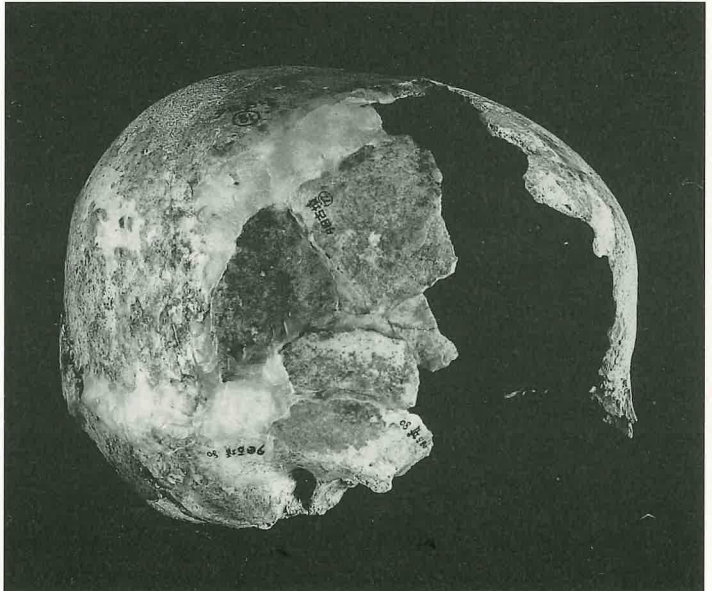
出土人骨 1-3 号頭蓋骨正面觀



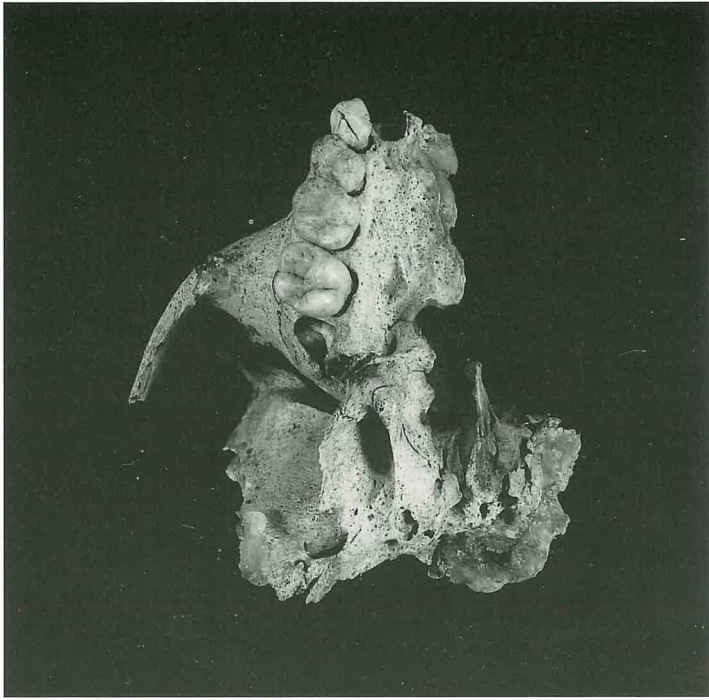
出土人骨 1-4 号頭蓋骨正面觀



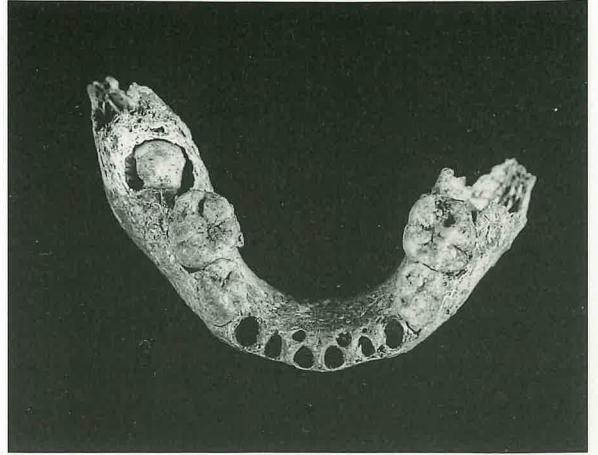
出土人骨 1-3 号頭蓋骨側面觀



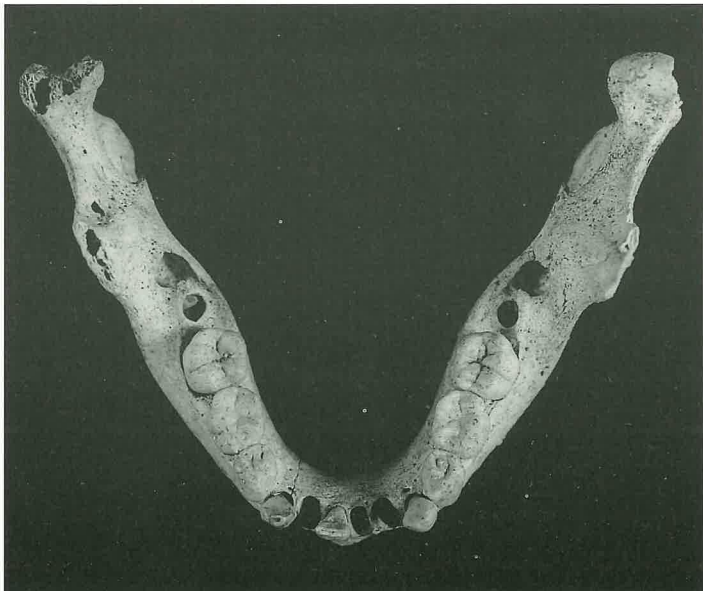
出土人骨 1-4 号頭蓋骨側面觀



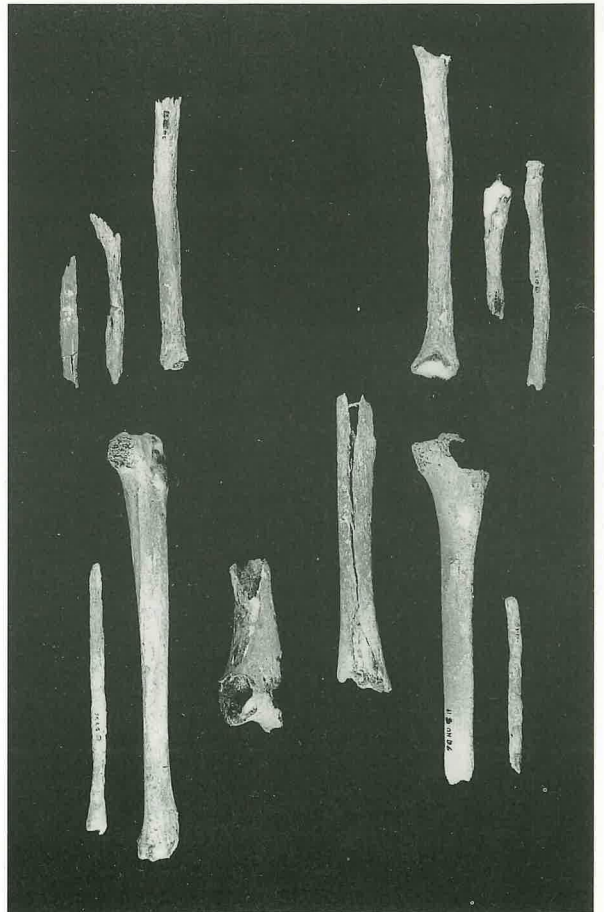
出土人骨 2-4 号上顎骨



出土人骨 2-5 号下顎骨



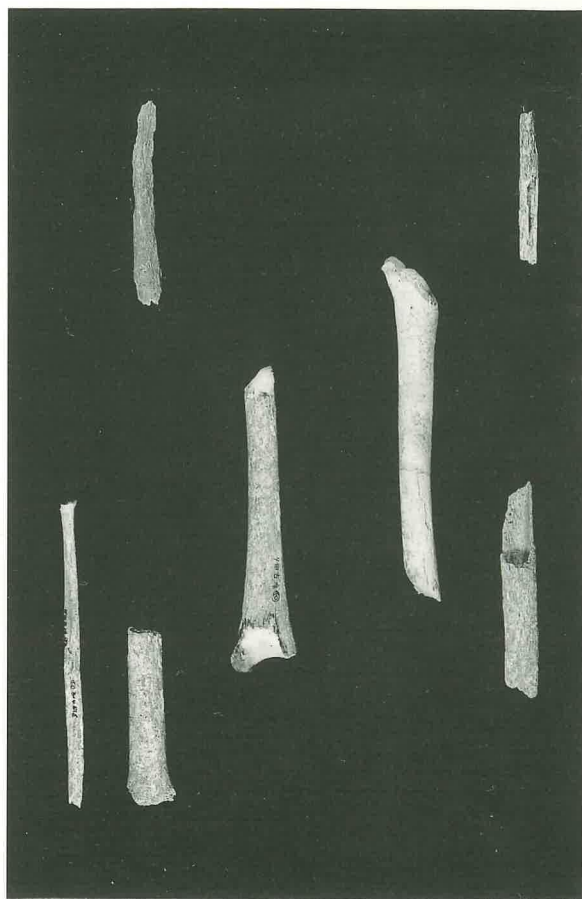
出土人骨 2-4 号下顎骨



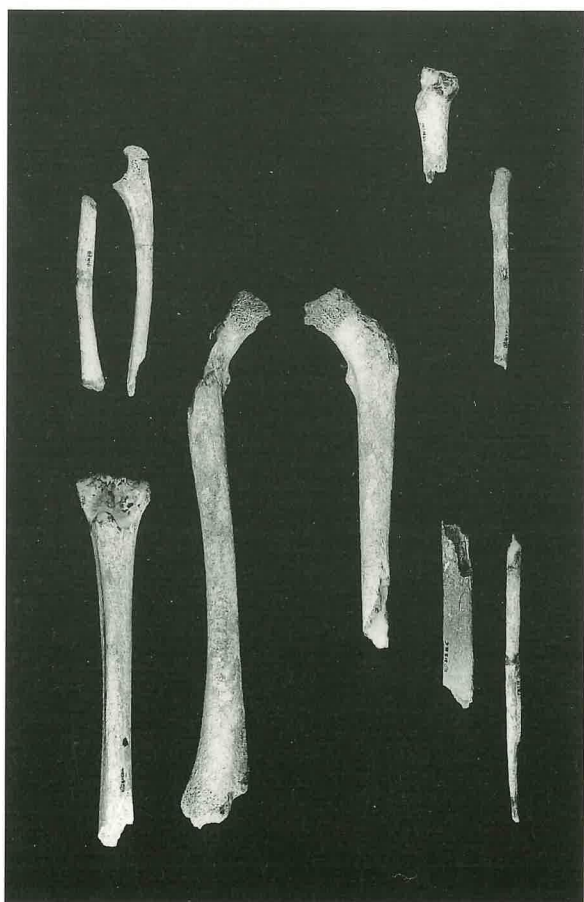
出土人骨 2-1 号四肢骨



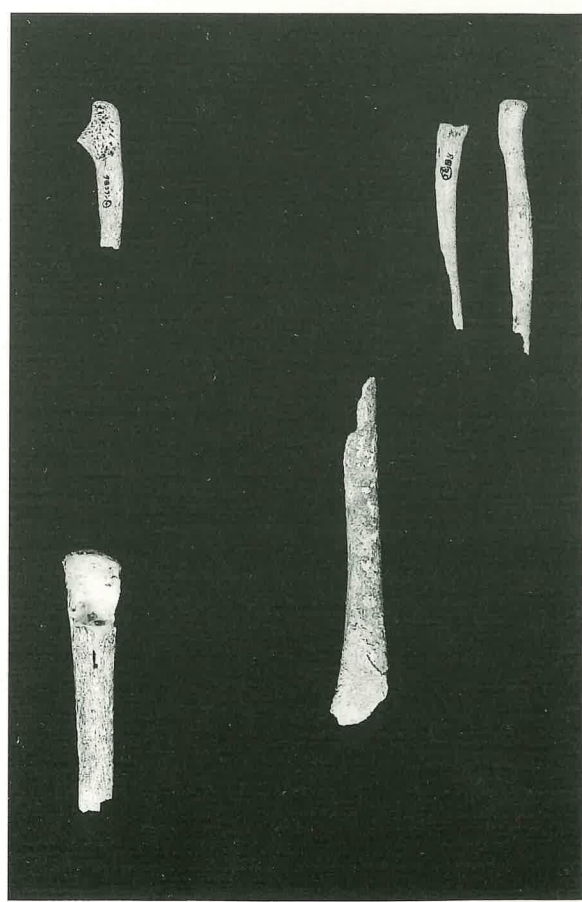
出土人骨 3-2 号四肢骨



出土人骨 3-4 号四肢骨



出土人骨 3-3 号四肢骨



出土人骨 3-5 号四肢骨

VI. まとめ

夕田墳墓群の諸特徴と今後の課題

以上のように、今回報告した夕田遺跡群（夕田遺跡・夕田横穴墓群・夕田古墳群）は、九州横断自動車道建設に伴う事前発掘調査で明らかになったものである。このなかでも夕田横穴墓群・夕田古墳群は大分県日田市に所在する古墳時代の墳墓群である。その内容について、位置と現状、群集形態、規模と構造、墳丘、主体部、出土遺物という項目に分けて説明し、各章毎にいくつかの特徴的な事項を抽出してきた。ここではそれらを順にまとめながら、特に注目される項目について、別途検討してみたい。

a) 分布・立地

今回の調査では、花月川と有田川が形成した河岸段丘上に弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落が、佐寺原台地西方向に派生する尾根丘陵平坦地には5世紀中頃前後に築造された夕田墳墓群、その斜面部には5世紀後半～6世紀初頭まで連続すると思われる横穴墓と、6世紀末～8世紀前半に構築された夕田横穴墓群が形成されている。丘陵上の古墳群と横穴墓群は有機的な関係が認められるが、河岸段丘上に形成された集落とは無関係である。しかしながら墳墓群と横穴墓群の集落を考えた場合、夕田遺跡の位置する段丘は南に広く展開しており、夕田墳墓群の集落が展開するとみてほぼまちがいないであろう。なお、花月川対岸の段丘上は氾濫原の影響もあり、現在までの所、当時期の集落は確認されていないが、夕田横穴墓群の規模からみて当然大集落の存在が考えられるため、当地区にも集落が形成されていた可能性は大きい。集落と墳墓群の組み合わせの一例としては近年、夕田墳墓群とは谷を挟んだ有田地区で平島横穴墓群が調査された。この横穴墓群に伴う集落は北側に展開する微高地上に位置する平島遺跡があげられる。

b) 群集形態

夕田古墳群は小結で記したように、5世紀中頃前後に成立した2つのグループに分けられる。それに継続するように、5世紀後半には斜面部に夕田横穴墓群が、大きく分けて3グループ形成される。しかしながら少なくとも5世紀末～6世紀初頭以降には当地区では横穴墓群は一時消滅し、再び6世紀末～8世紀前半まで横穴墓群が形成される。これらの横穴墓群は、大きくは11の支群に分けられ、それぞれが順次変遷すると考えられる。なお、この大支群は横穴墓の主軸方向や標高差などによって小分類される。第5支群は1～4号と5～7号に分けられる。第7支群1号墓は第8支群1～3号墓へ、第9支群1号墓は第8支群4～6号墓へと展開すると考える。第10支群は1～3号墓の小支群と、4～7号墓の小支群に分けられる。第12・13支群は第12支群1号墓→2号墓→第13支群1号墓→2号墓へと展開する小支群と考える。

c) 横穴墓の形態変化

横穴墓研究の必須テーマは形態・時期・分布・被葬者・祭祀儀礼の問題である。本項では当横穴墓の形態及びその時期的変化をまとめ、次項以降に副葬品からみた祭祀儀礼・墳墓群の存続危機感・墓域変遷過程について述べることにする。横穴墓の形態研究は東北地方を主たる対象とした氏家典氏、関東地方を中心とした赤星直忠・金井塚良一・明石新氏、北陸地方を中心とした田島明人氏、近畿地方を中心とした花田勝弘氏、山陰地方を中心とした山本清・門脇俊彦・西尾克己氏、九州地方を中心とした小田富士雄・佐田茂・高木正文氏、大分県を中心とした真野和夫・渋谷忠章・村上久和氏の一連の研究、及びこれら研究を全国的視点から総括した池上悟・杉山博久氏の研究があるのみである。これは横穴墓の分布とその形態が全国一律ではなく、地域差が大いに認められることの影響である。しかしながら、近年本県の三光村上ノ原横穴墓群・日田市小迫横穴墓群では、保存状態の良好な横穴墓群が相次いで調査され、前述したような諸問題に対し一定程度のテーゼが与え

られている。

さて、九州地方の横穴墓形態に対し最初に論究したものに佐田茂氏の研究がある。ここでは6世紀中頃以降の九州地方の横穴墓を単室構造と複室構造に分け、それに玄室の平面形・立面形等を加え、出土土器を参考にしながら4期に分類している。その後、行橋市竹並横穴墓群の報告の中で佐田等は、5世紀後半から8世紀初頭までの横穴墓を供伴土器に準拠して8期に分類し、形態変遷を追及している。本県においては村上等が三光村上ノ原横穴墓群において、5世紀後半から7世紀初頭までの横穴を3タイプに分類している。

これらの形態分類を参考にしながら当横穴墓の形態分類を行ってみると次の8類に分類される。Ⅰ類は平面方形で断面ドーム形を呈すると思われるもので、1-1・2-1・3-1号墓がそれにあたる。Ⅱ類は平面小型で平入り長方形のもので、縦断面がアーチ型を呈している4-1号墓がそれにあたる。Ⅰ・Ⅱ類は壁に赤色顔料を塗布しているのが特徴である。時期は5世紀後半～6世紀初頭である。Ⅲ類は平面羽子板状を呈する大型のもので、妻入り長方形（a）類と略方形（b）類に分けられる。Ⅲa類は5-4・5-7・11-1・15-1号墓で、Ⅲb類は6-3・8-6・10-3・12-2号墓がそれぞれ該当する。時期的には6世紀後半～7世紀後半までのものである。Ⅳ類は平面形はⅢb類と比較してやや小型で、略方形の形態をとるものである。5-2・5-6・6-4・9-1・11-2・12-1号墓がそれぞれ該当する。時期は7世紀後半前後のものである。Ⅴ類は平面形態が最も小型になるもので、両袖のもの（a）、片袖のもの（b）に分かれ、さらにa類は平面形が丸いもの（a1）、長方形のもの（a2）に分けられる。Ⅴa1類は5-3・6-5・8-5・10-2・10-6・13-1号墓が、Ⅴa2類は5-5・7-1・8-2・9-1・10-2・10-4・11-4・15-2号墓がこれにあたる。Ⅴb類は5-1・8-1・8-4号墓である。時期は7世紀前半～末まで認められるが、その中心は7世紀中頃前後と考えられる。本横穴墓群ではこの形態のものが最も多い。Ⅵ類は平面形態が羨道部を持たず、無袖の縦長不定長方形を呈する。6-1・6-2・8-3・10-5・11-3・13-2・14-1・14-2号墓がこれにあたる。時期は出土土器がなく、明確ではないが、その立地から推定して7世紀後半～8世紀前半にかけてのものであろう。

表 30 夕田横穴墓群形態一覧表

タイプ	平面形態	時期	横穴墓番号	備考
Ⅰ類	方形	5c後半～6c前半	1-1・2-1・3-1	赤色顔料塗布
Ⅱ類	小型 平入り長方形	5c後半～6c前半	4-1	赤色顔料塗布
Ⅲa類	大型・羽子板状 妻入り長方形	6c後半～7c後半	5-4・5-7・11-1 15-1	
Ⅲb類	大型羽子板状 略方形	6c後半～7c後半	6-3・8-6・10-3 12-2	
Ⅳ類	やや小型・略方形 羽子板状	6c後半～7c後半	5-2・5-6・6-4 9-1・11-2・12-1	
Ⅴa1類	最も小型 両袖・楕円形	7c後半前後	5-3・6-5・8-5 10-2・10-6・13-1	
Ⅴa2類	最も小型 両袖・長方形	7c後半前後	5-5・7-1・8-2・9-1 10-2・10-4・11-4・15-2	
Ⅴb類	最も小型 片袖・長方形	7c後半前後	5-1・8-1・8-4	
Ⅵ類	羨道持たない 縦長不定長方形	7c後半～8c前半	6-1・6-2・8-3・10-5 11-3・13-2・14-1・14-2	

d) 夕田横穴墓群に於ける副葬品と葬送儀礼の諸相について

本横穴墓群は若干の盗掘等の二次的变化を受けていたが、玄室・羨道部・前庭部に於いては、基本的に土器を使用する祭祀儀礼行為が認められた。

古墳時代後期の古墳祭祀儀礼については小林行雄・白石太一郎氏の卓見がある。小林氏は記紀に表されたイザナミ神の黄泉国における「ヨモツヘグイ」という行為と、横穴式石室における土器の出土状態などが一致することを指摘し、土器が古墳における葬送儀礼の道具であることを実証した。白石氏はイザナギ神の黄泉国からの逃走物語にみる「コトドワタシ」に注目し、これが石室の封鎖時における死者の現世との訣別を意味する祭祀儀礼であると指摘した。さらに土生田純之氏がこのような祭祀儀礼の導入過程について汎西日本的に類例を集め、特に北部九州においてこの種の儀礼が渡来人との関係で導入されたと考えている。これらとは別に村上・田中氏は人骨の二次的移動から「コトドワタシ」についての新たな見解を示している。また、村上・吉留氏は三光村上ノ原横穴墓群に於いて、土器を使用した祭祀儀礼を玄室内祭祀・前庭部墓道部祭祀・墳丘祭祀に類別し、詳細な検討を行っている。以上の古墳時代後期における葬送儀礼の研究を基に、本横穴墓の儀礼を復元してみる。

1) 玄室内祭祀

玄室内祭祀は5世紀後半の1-1・3-1号墓で認められる。この段階では須恵器高坏・坏身・把手付碗・土師器埴・埴など飲食物供献儀礼に使用したものが認められている。これを証明するように坏身のなかにハマグリが入れられていた。逆に6世紀後半～8世紀前半に築造された横穴墓に於いては、玄室内祭祀儀礼は極めて少ない。唯一8-4号墓で蓋付き碗が4セット、蓋が4セット認められている。出土状況から考えると碗蓋は皿として使用された可能性が高く、碗は食物用具として、蓋は飲食物用具として使用された可能性が高い。

2) 前庭部祭祀

本横穴墓に於いては、前庭部で土器を使用した祭祀儀礼行為が全体の28%を占めている。これらの祭祀行為は以下の3パターンに分類される。第1パターンは土器を前庭部の中央、もしくは左右に一括埋置した状態で検出される。土器の器種は須恵器坏身蓋・碗身蓋・高坏・平瓶などがあり、墓前においてこの墓に関わる人々が飲食行為をした後に一括埋置したものと推定される。第2パターンは前庭部全面において一括埋置した土器群と、破碎散布した土器群が認められる。器種は須恵器坏身蓋・碗身蓋・須恵器高坏・土師器高坏などが認められ、ここでは平瓶や甕などの飲食行為をした土器が認められないのが特徴である。供食した行為の後に一括埋置を行い、その周辺に土器の破碎散布をしたものと推定される。この行為は死者との現世での別離を明確に認めたものと考えられる。第3パターンは前庭部の周辺で土器の破碎散布を行ったもので、行為としてはさほど大きな祭祀行為ではない。これも第2パターン同様、死者との現世での別離を明確に認めたものと考えられる。本横穴墓の祭祀儀礼を全体を通してしてみると、甕・平瓶・甕などの飲食行為をした土器がほとんど認められないのが特徴であり、これは日田盆地の特殊性なのか、時期的に新しくなると葬送行為のなかで飲物行為が無くなるのかは今後の課題としたい。

e) 墳墓群の存続期間

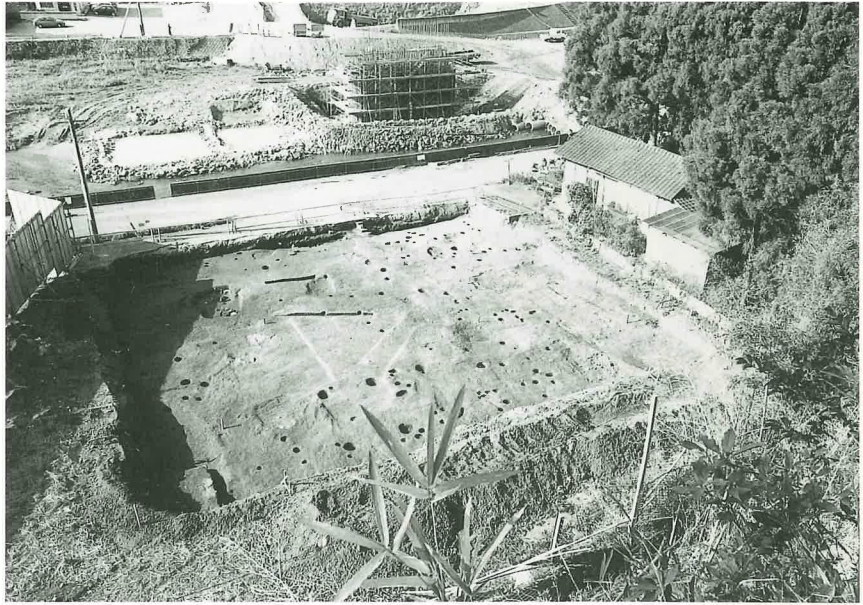
夕田古墳群および横穴墓群は、5世紀中頃前後より構築され、6世紀初頭まで継続される。その後一端構築を停止した後、6世紀後半～8世紀後半前後まで再び構築されている。このことは次のようなことを意味するものと考えられる。第1に、副葬品から見た場合、夕田古墳群中の夕田古墳は鉄剣・鍬鏃・U字鋤先・鉄鎌をもち、世帯共同体（家族集団）を基礎単位とするなかのリーダーの墓と見なされ、これが横穴墓群中の1-1号墓→2-1号墓に変遷するものと考えられる。特に1-1号墓では5世紀後半の須恵器有蓋高坏・把手付碗・坏身・土師器埴・鏡などが出土し、この横穴墓の中

心被葬者は女性の可能性もあるが、世帯共同体（家族集団）リーダーの継続が6世紀初頭の2-1号墓まで認められることから、明確な答えはでない。しかしながら、6世紀中頃以降は調査区の墓域中にはリーダーの存在を示す横穴墓は認められない事が当墳墓群の大きな特徴である。これは6世紀前半前後の政治的動向により、家系の断絶が起こったのか、或いは周辺部に墓域を移動したのか、今後の夕田横穴墓群の調査を待ちたい。

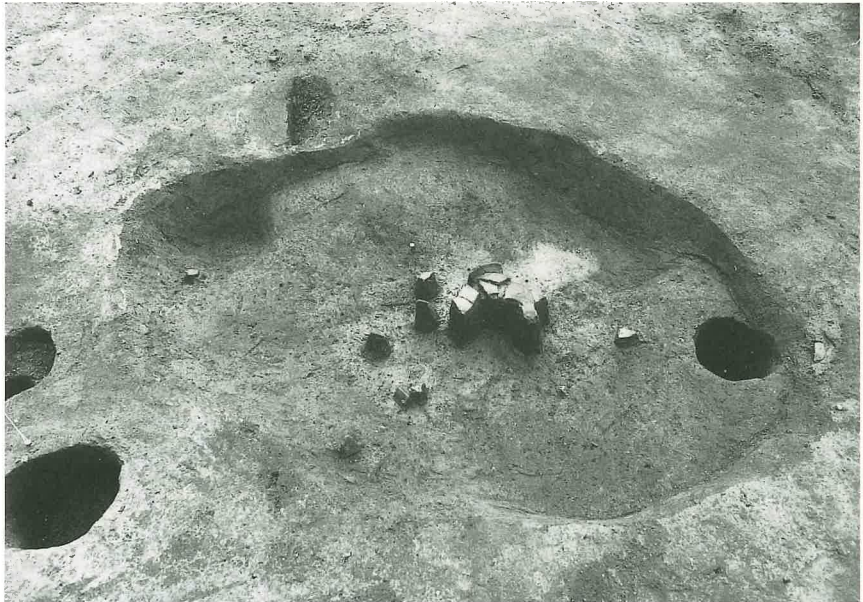
6世紀後半からは再び横穴墓の構築が開始されるが、当時代においては首長の墓域としての感はなく、家族墓としての集団墓域の確保を目的に横穴墓の構築が開始される。このことは副葬品のありかたからも証明できる。これらの横穴墓では直刀・馬具・鉄鏃等の武器類、U字鋤先・鉄斧・鉄鎌等の鉄工具類は全く出土していないことからみても、家族墓的な横穴墓であることが確認でき、前述のことを証明することができよう。

写 真 图 版

夕田遺跡全景

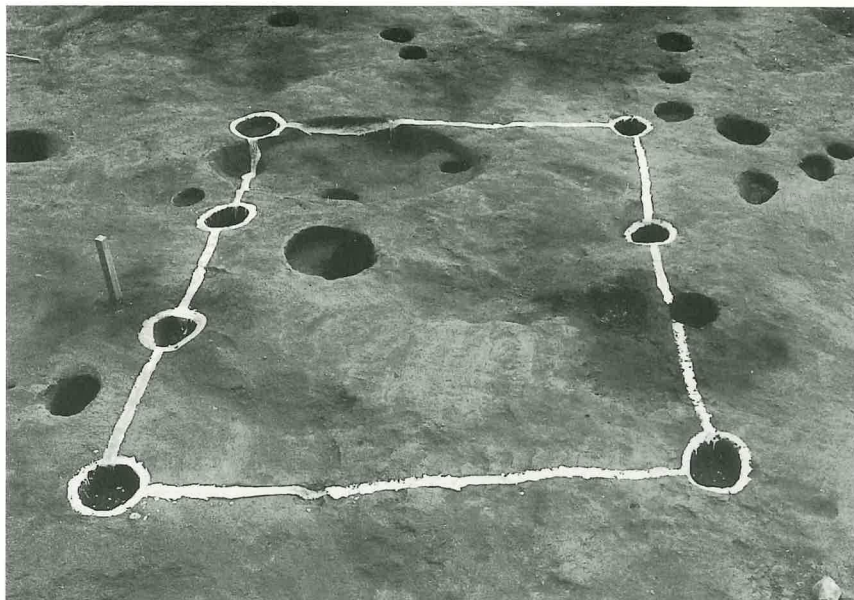


夕田遺跡 土坑 1

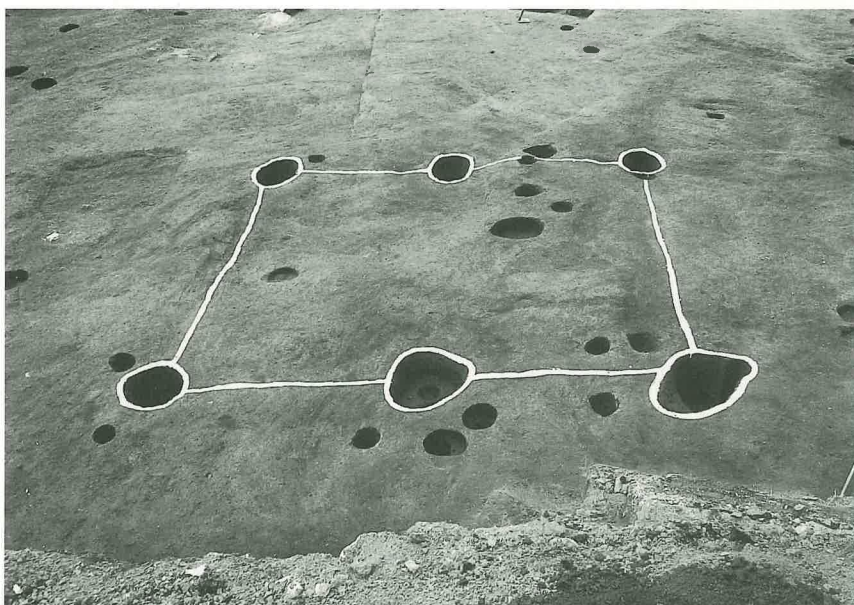


夕田遺跡 土坑 2





夕田遺跡 建物1



夕田遺跡 建物2



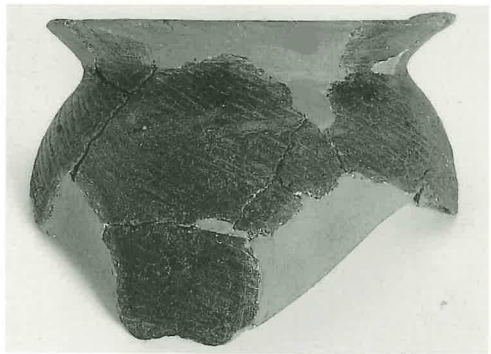
夕田遺跡 遺物出土状況



1



2



3



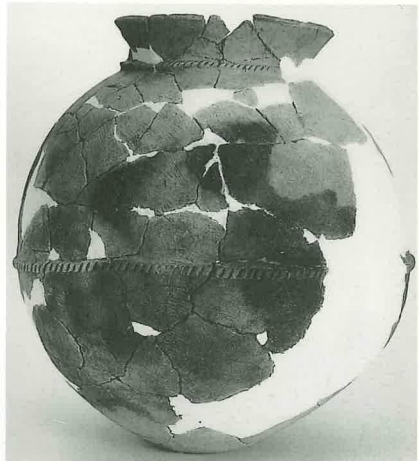
5



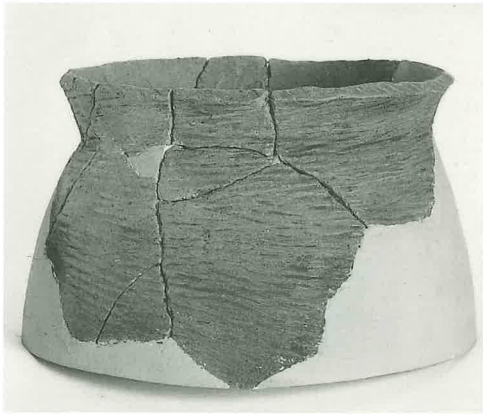
7



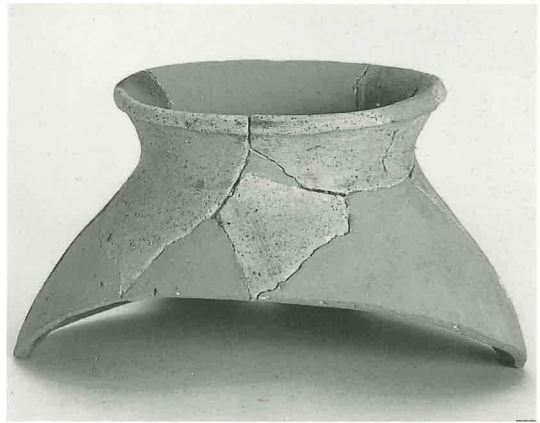
13



14



17



20



21



23



26



24



27



33



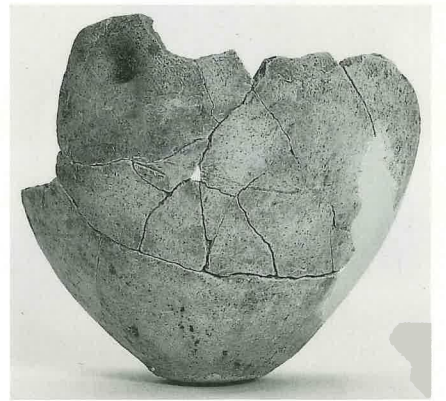
34



39



40



41



42



43



44



45

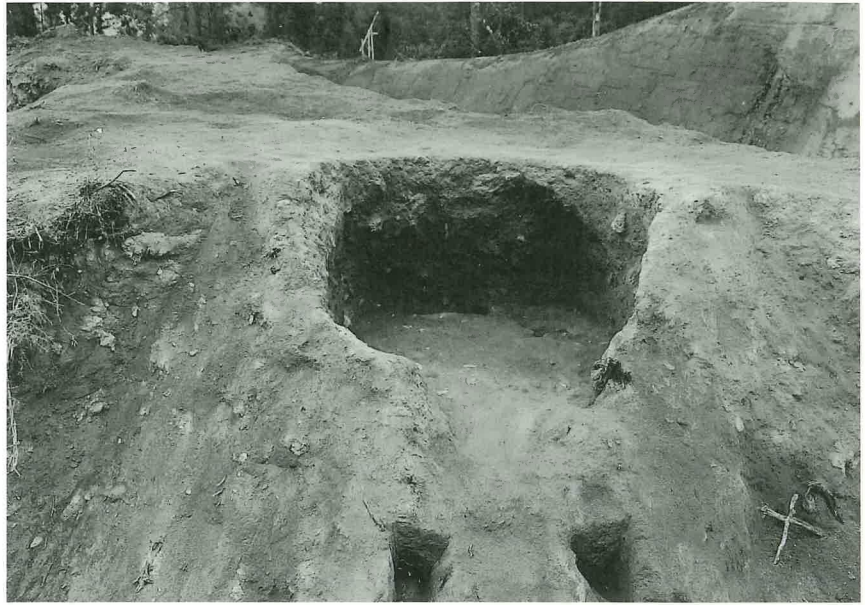


47



50

第1支群1号墓 遠景



第1支群1号墓 玄室

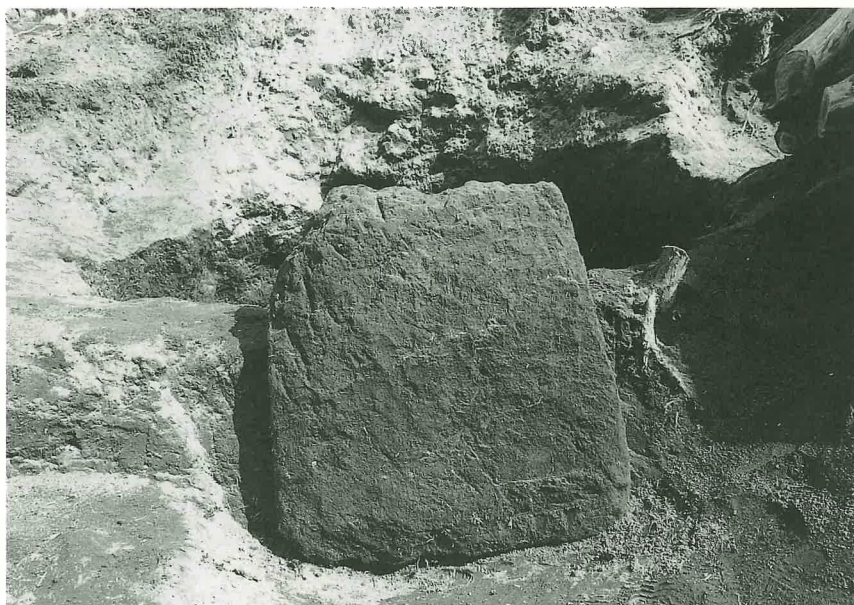


第1支群1号墓 遺物出土状況

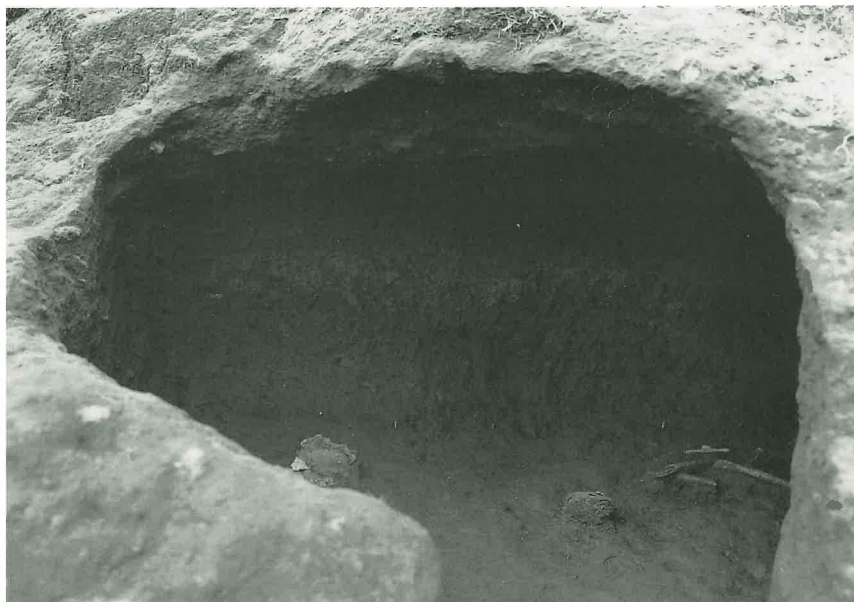




第2支群1号墓 全景



第3支群1号墓 正面



第4支群1号墓 全景

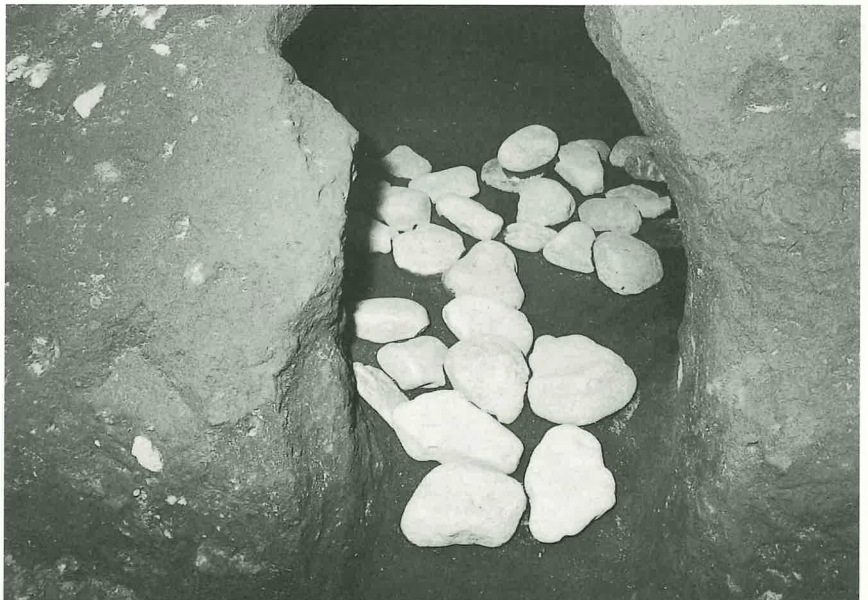
第5支群 全景

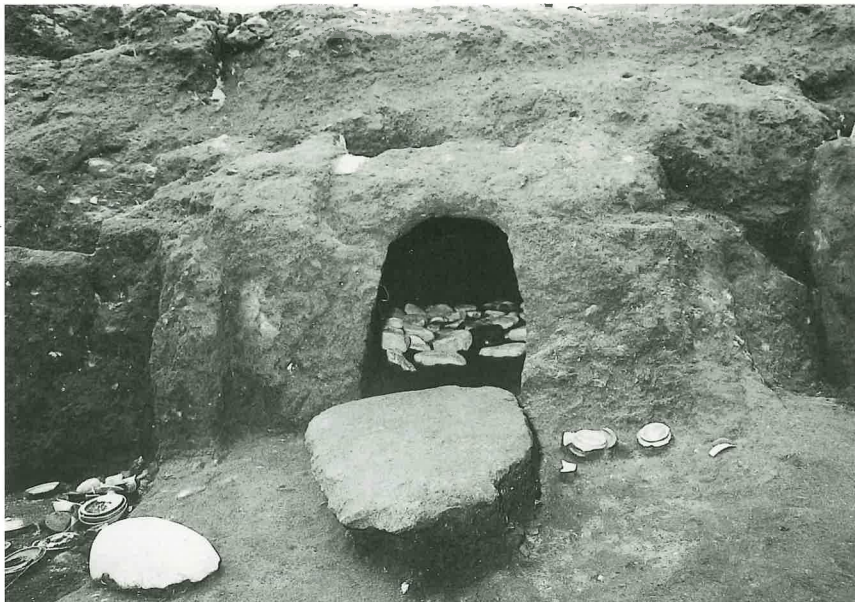


第5支群1号墓 正面

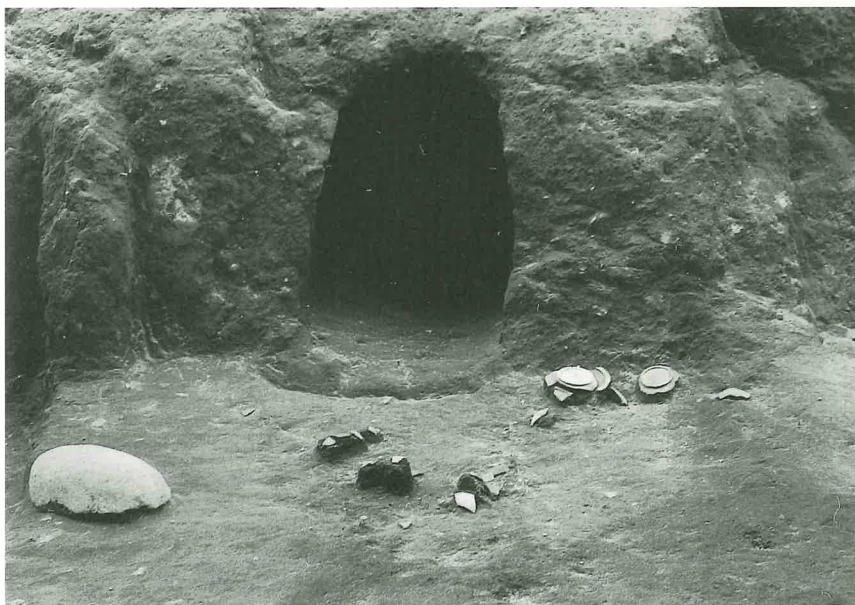


第5支群1号墓 羨門から





第5支群2号墓 正面

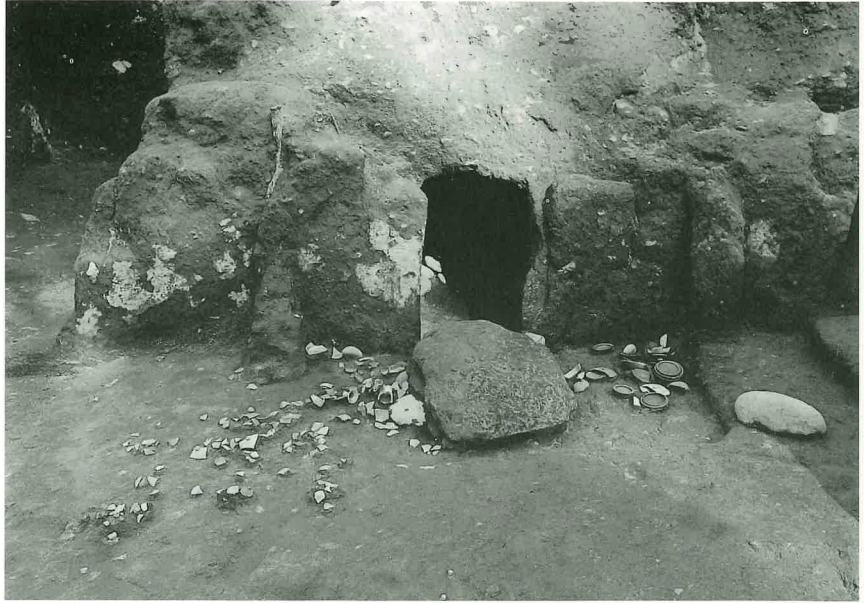


第5支群2号墓 閉塞石除去後

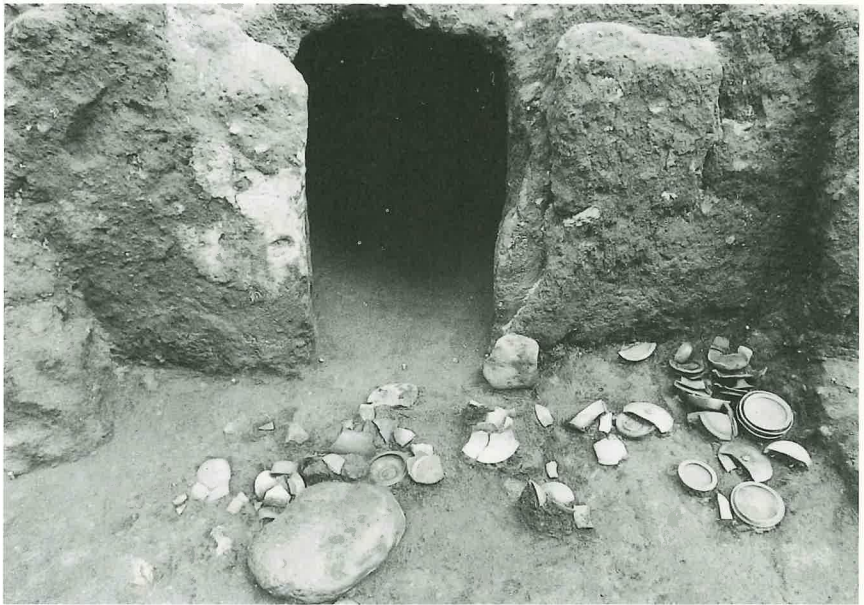


第5支群2号墓 遺物出土状況

第5支群3号墓 正面



第5支群3号墓 遺物出土状況

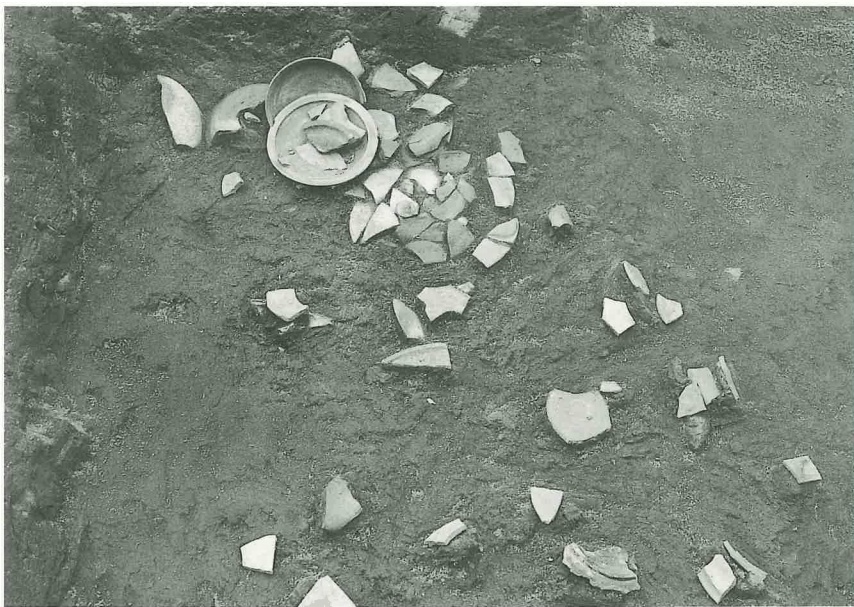


第5支群3号墓 完掘

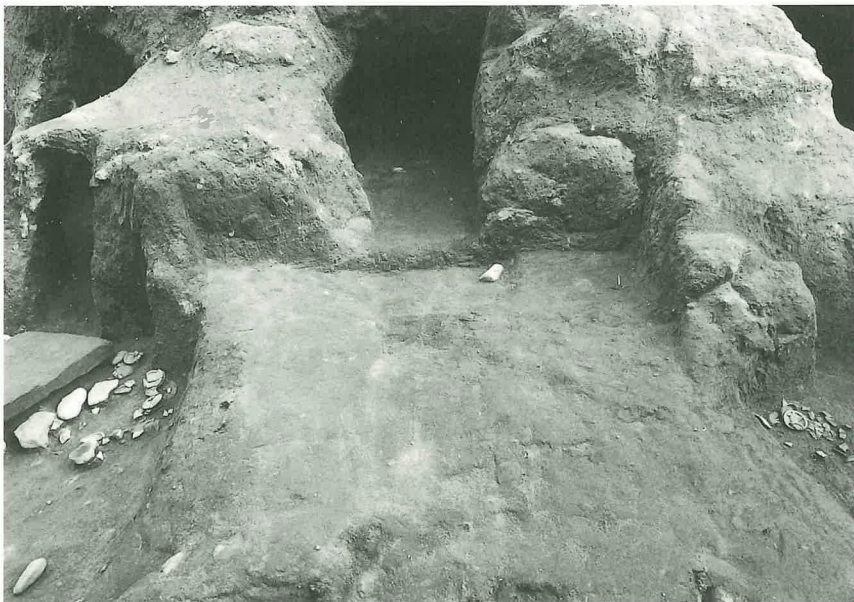




第5支群4号墓 正面



第5支群4号墓 遺物出土状況



第5支群5号墓 正面

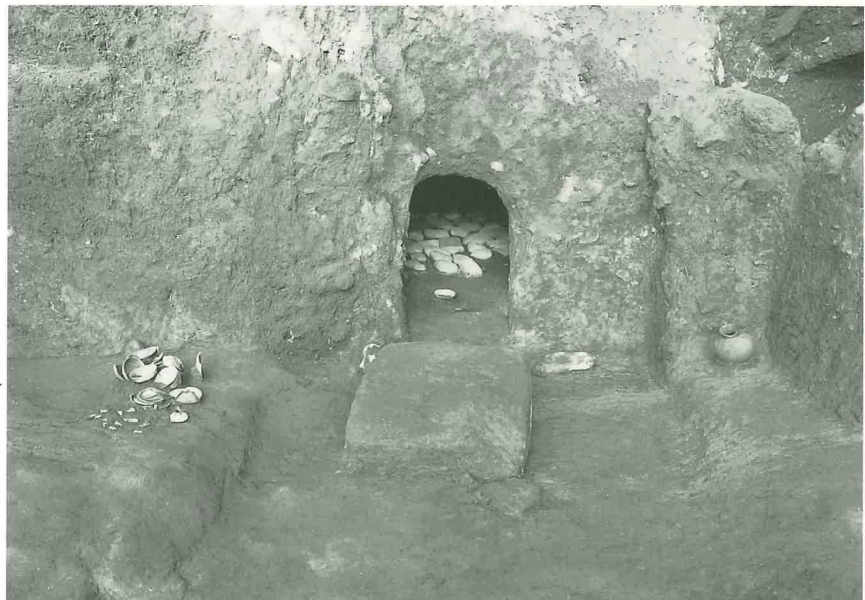
第5支群6号墓 正面

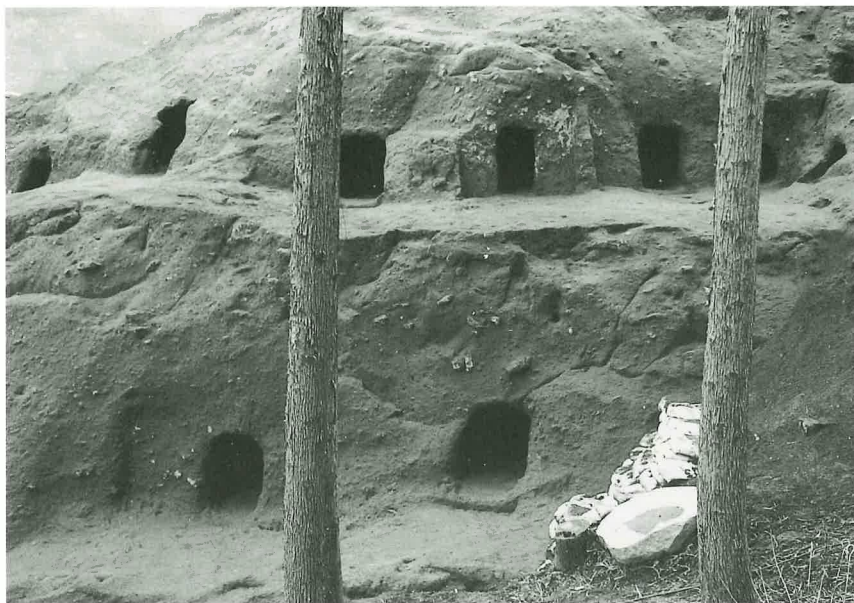


第5支群6号墓
閉塞石・敷石除去後



第5支群7号墓 正面

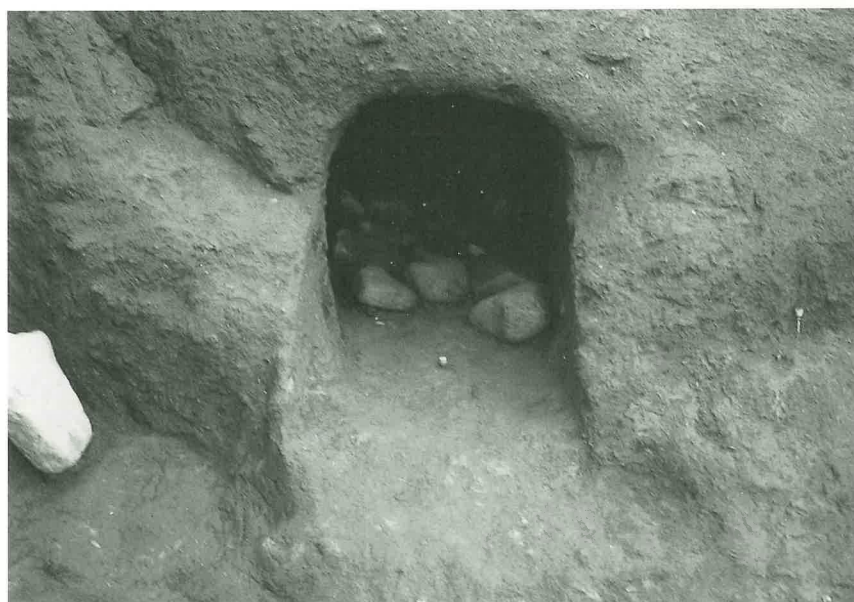




第6支群 全景

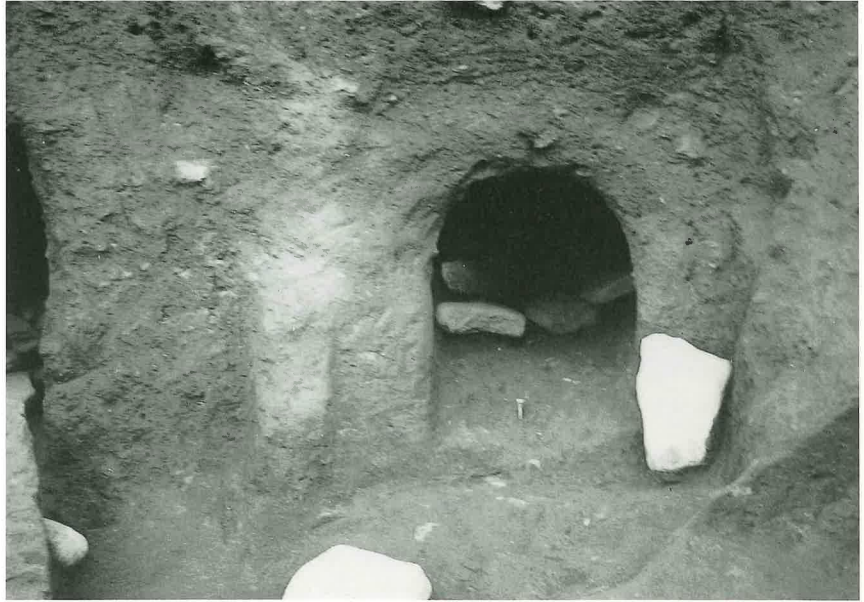


第6支群1・2・3号墓 全景

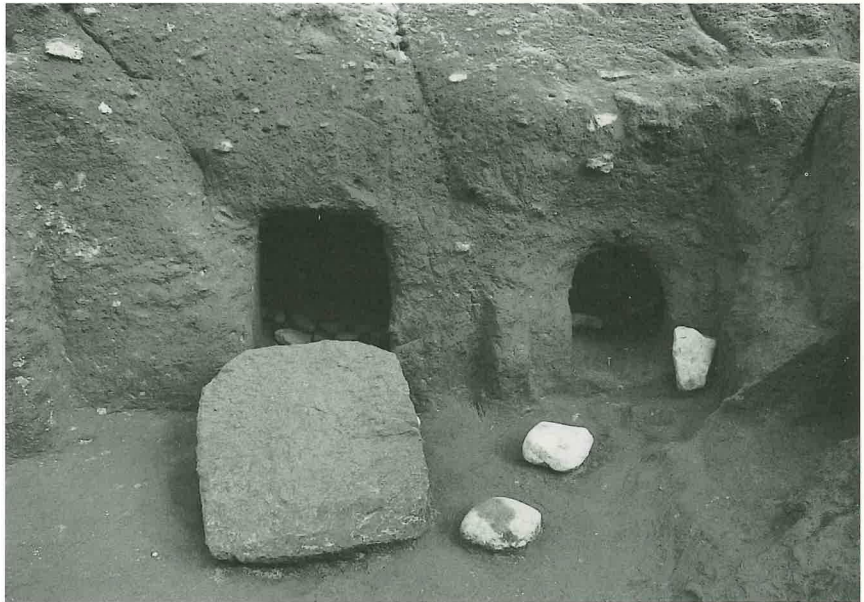


第6支群1号墓 正面

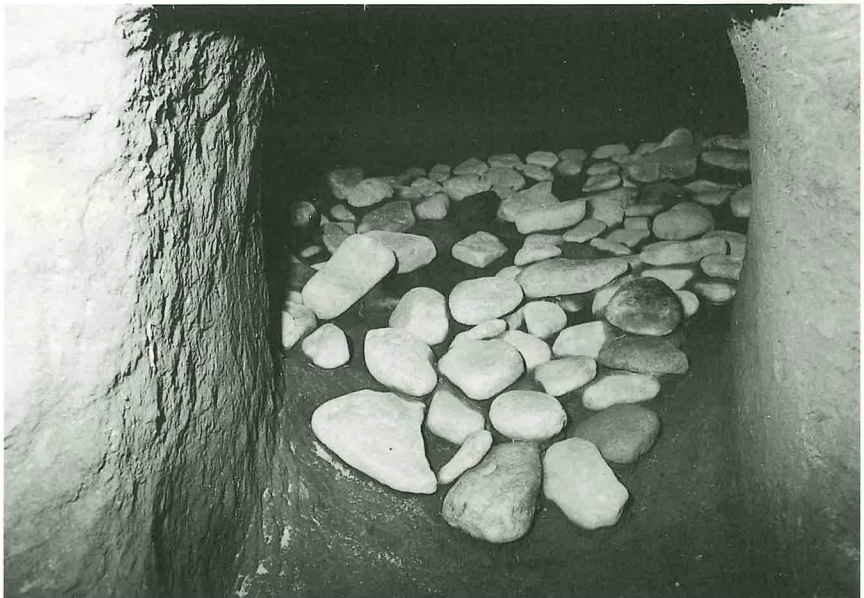
第6支群2号墓 正面

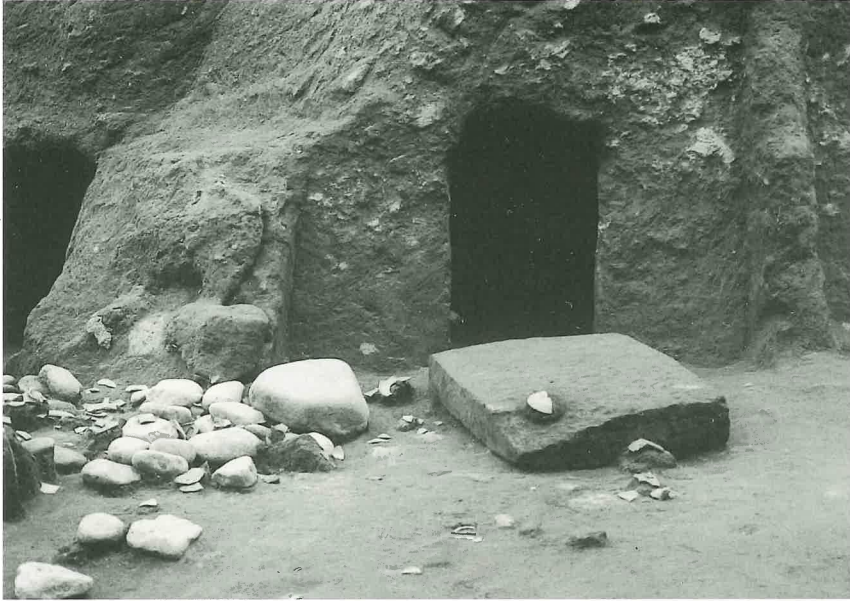


第6支群3号墓 正面

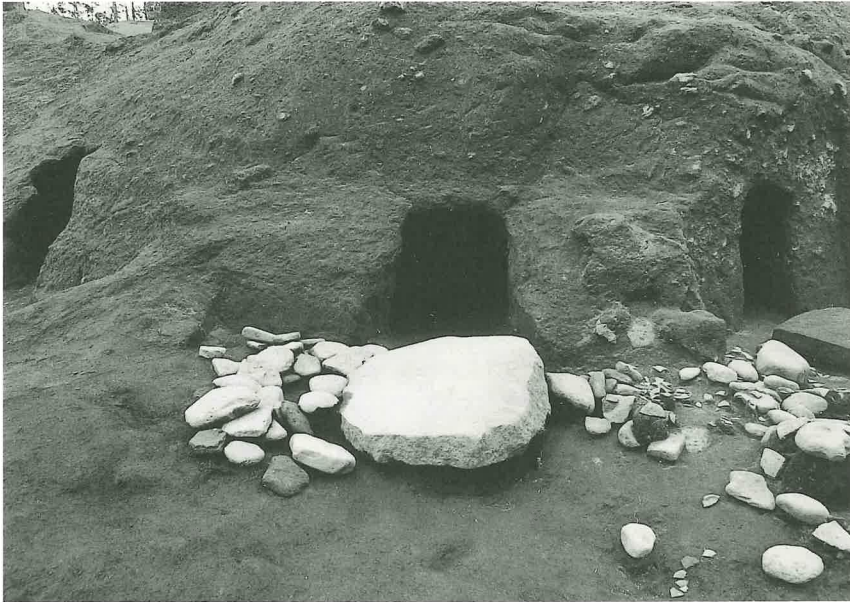


第6支群3号墓 羨門から

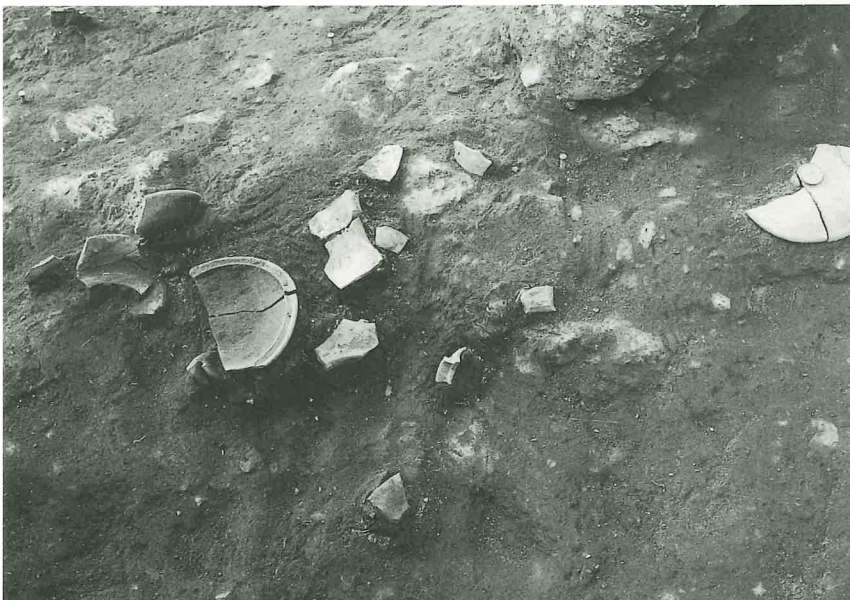




第6支群4号墓 正面

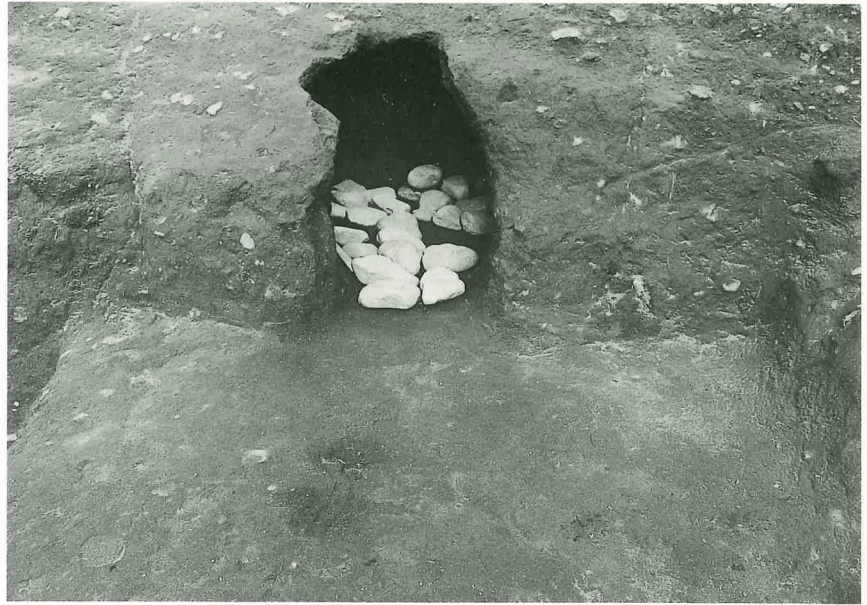


第6支群5号墓 正面

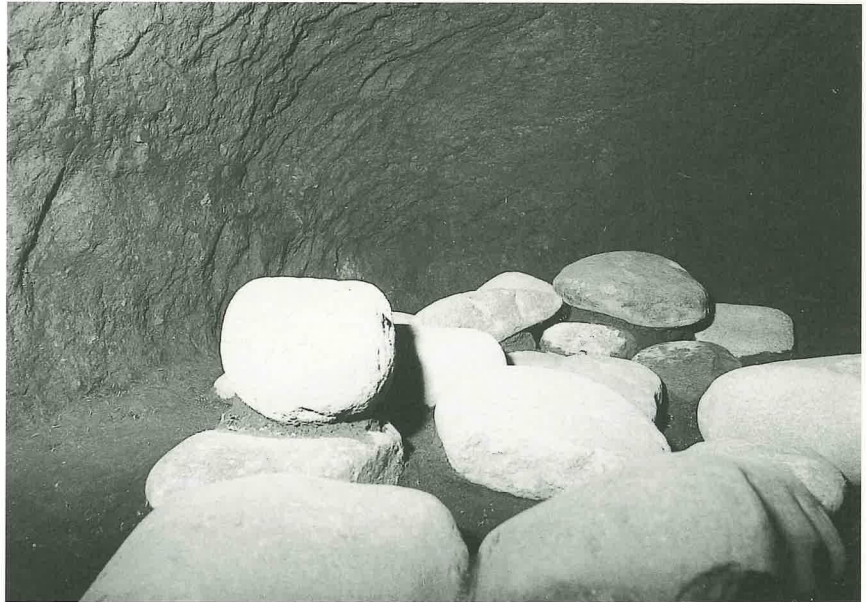


第6支群4・5号墓
遺物出土状況

第7支群1号墓 正面

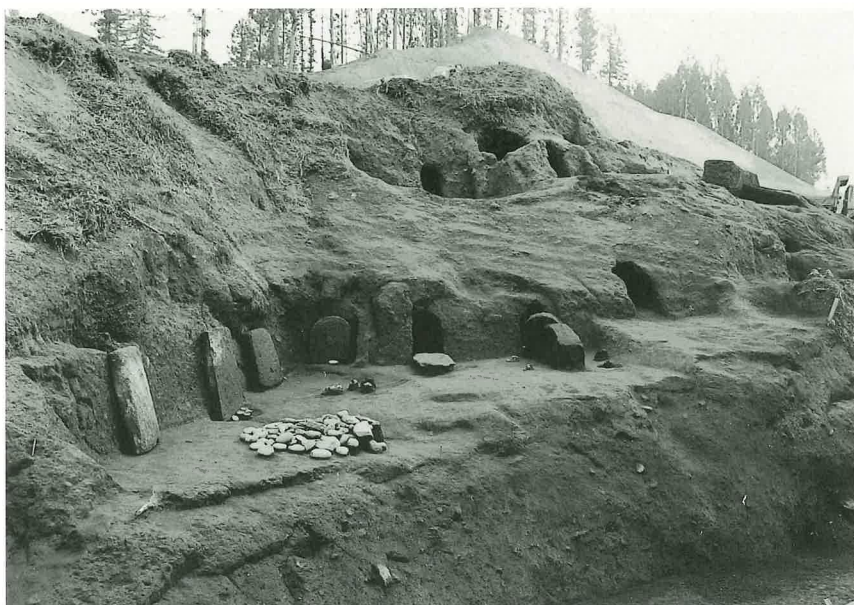


第7支群1号墓 敷石

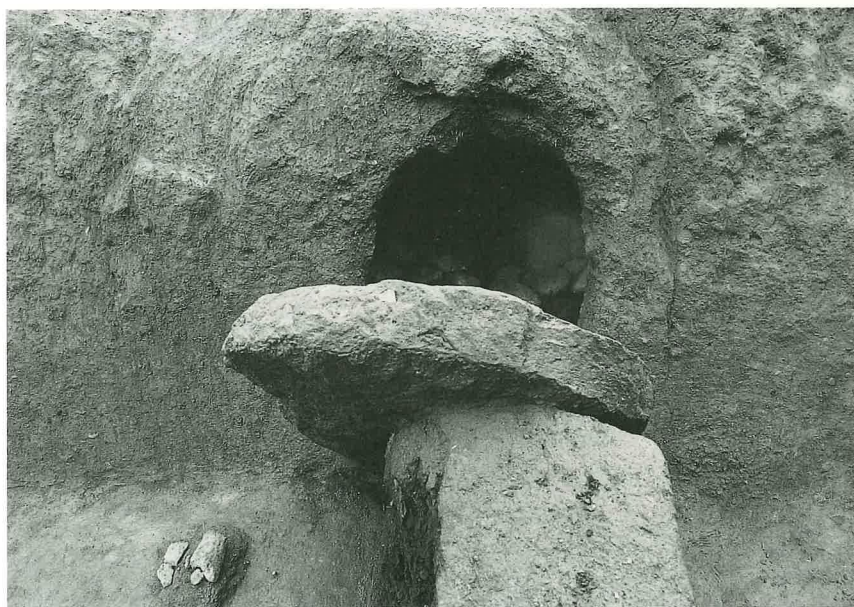


第7支群1号墓 玄関から羨門





第8支群 全景

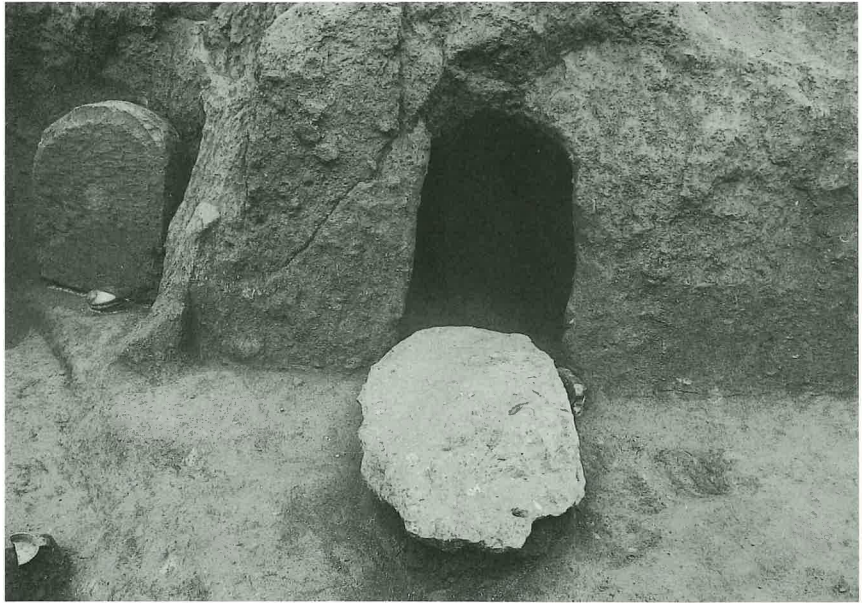


第8支群1号墓 正面



第8支群1号墓 敷石

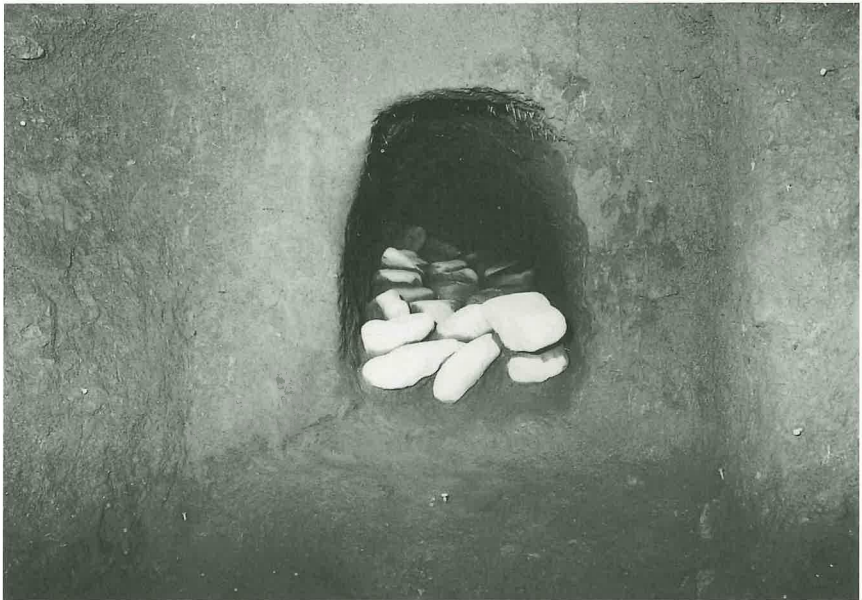
第8支群2号墓 正面

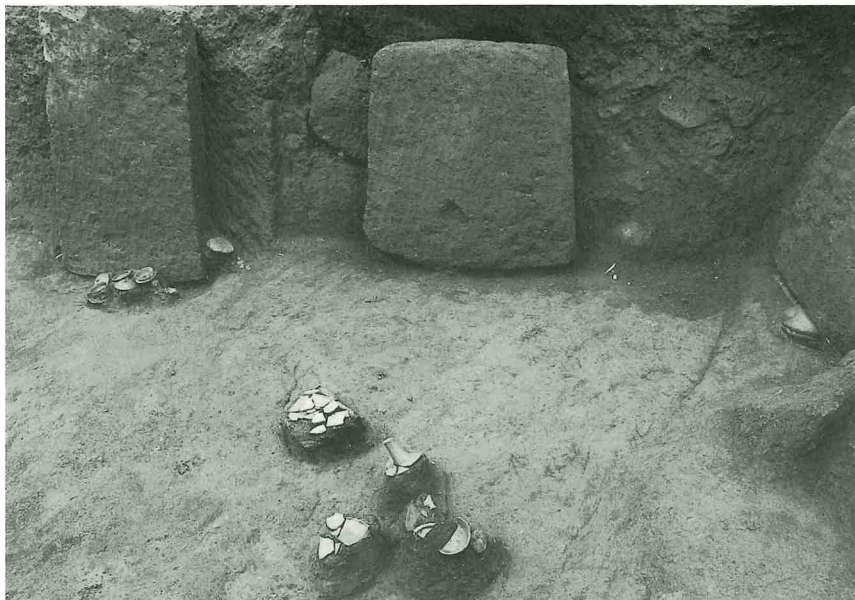


第8支群3号墓 正面

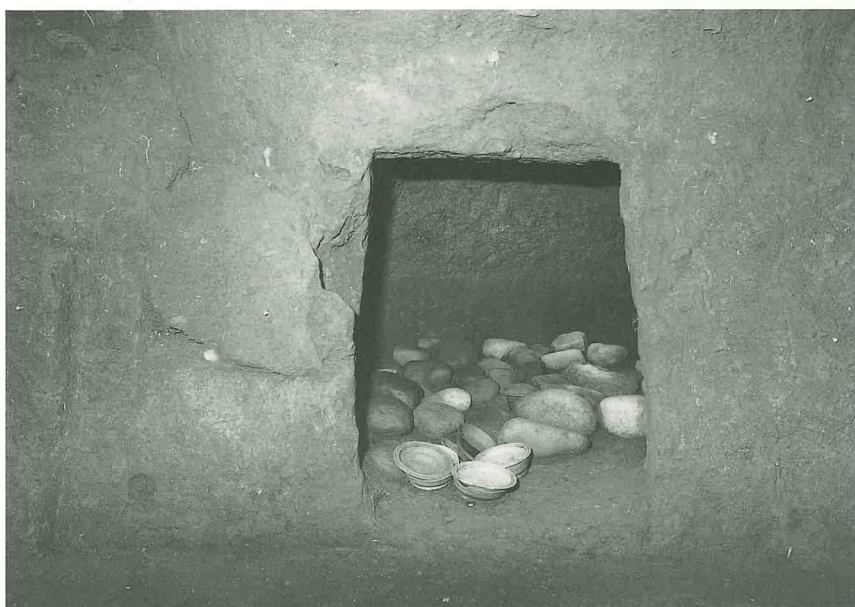


第8支群3号墓 閉塞石除去後

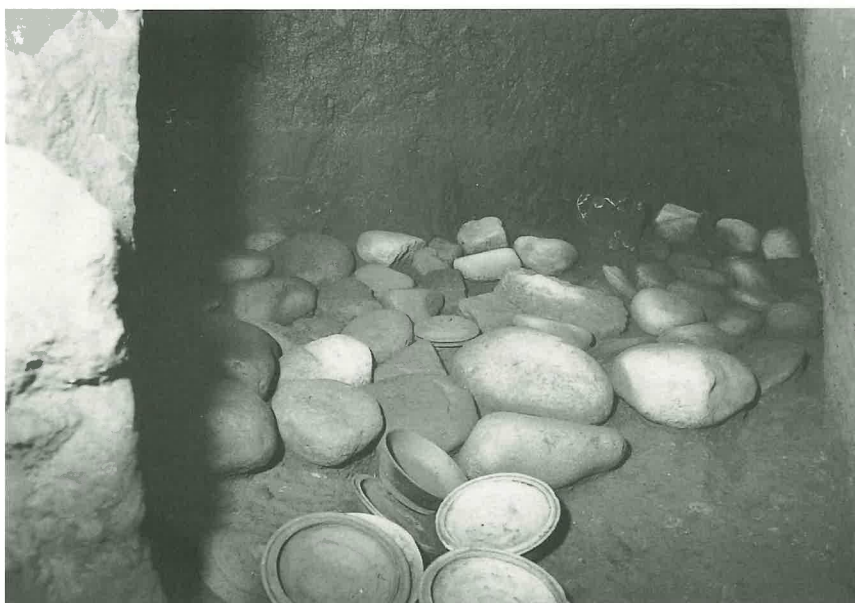




第8支群4号墓 正面



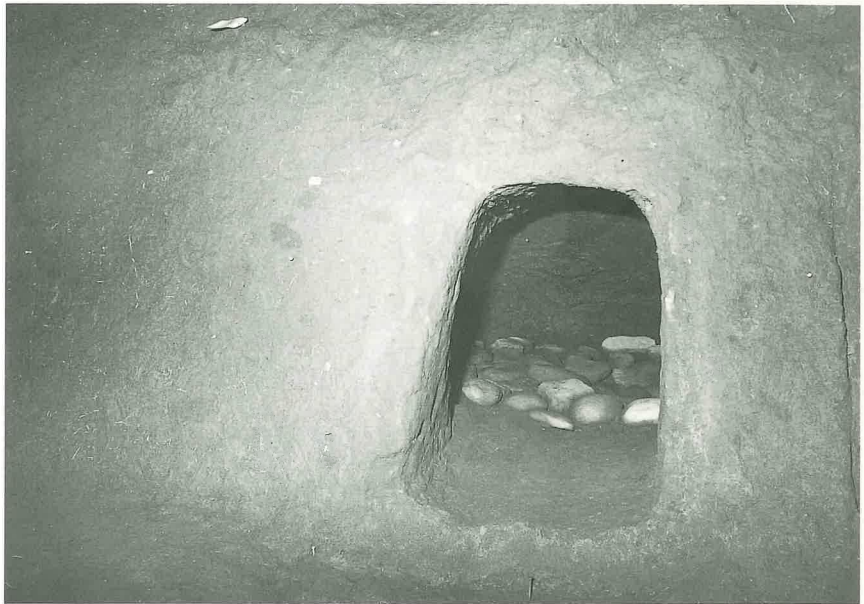
第8支群4号墓 閉塞石除去後



第8支群4号墓 遺物出土状況



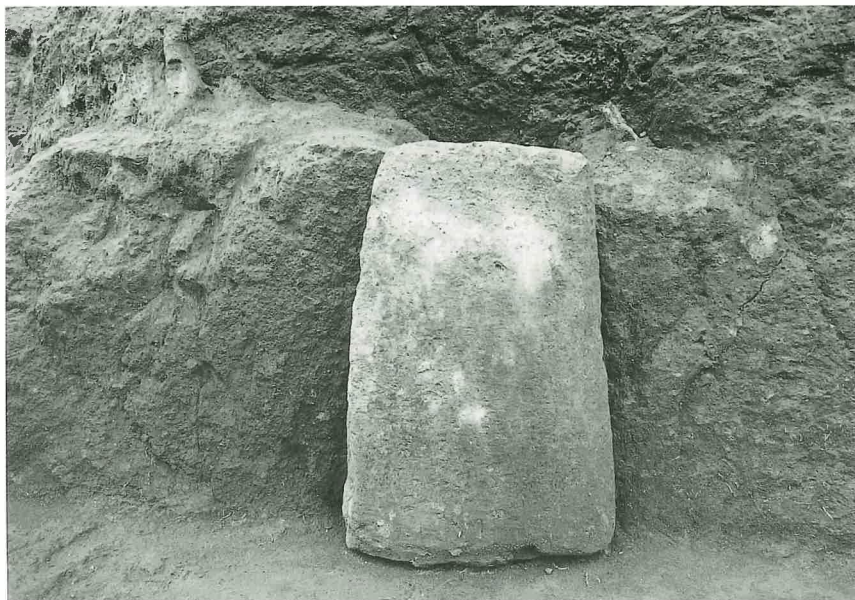
第8支群5号墓 正面



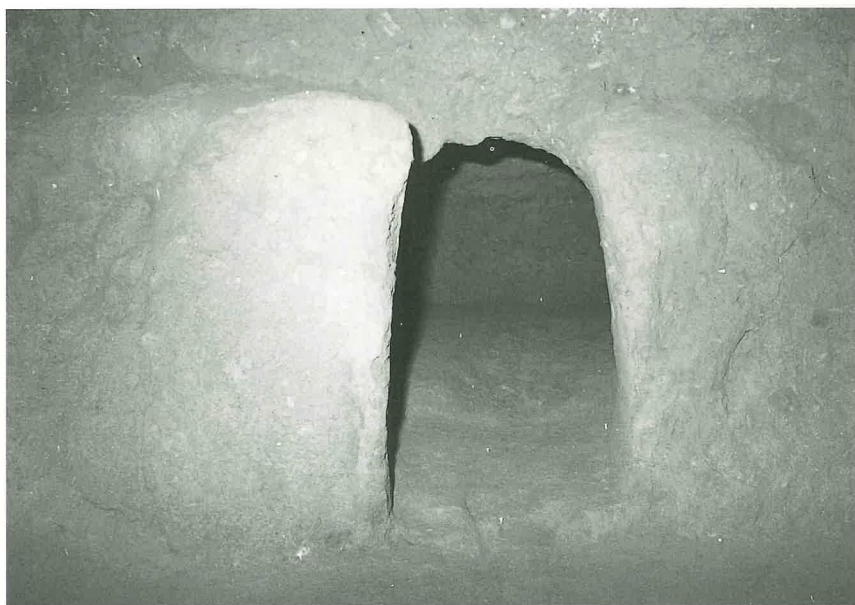
第8支群5号墓 閉塞石除去後



第8支群5号墓 遺物出土状況



第8支群6号墓 正面



第8支群6号墓 閉塞石除去後



第8支群6号墓 敷石

第8支群6号墓 左壁

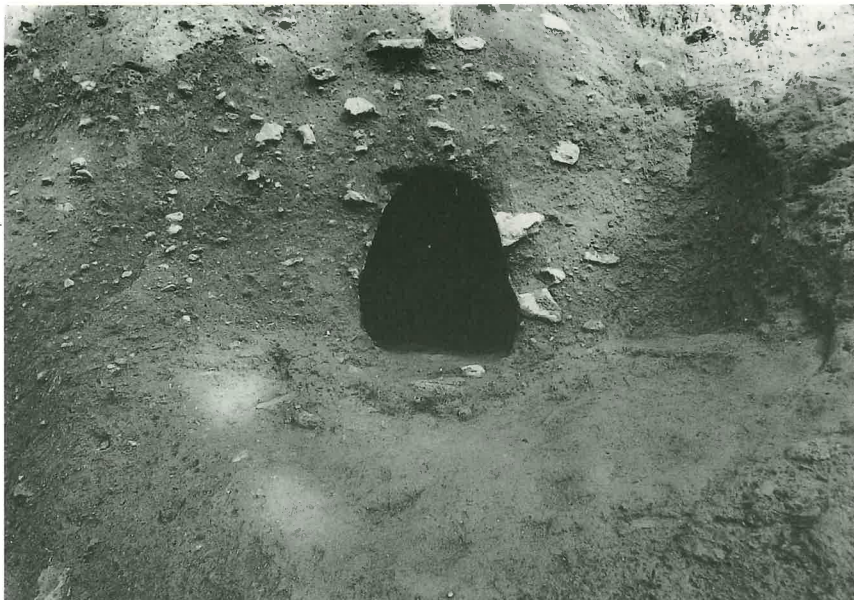


第8支群6号墓 奥壁

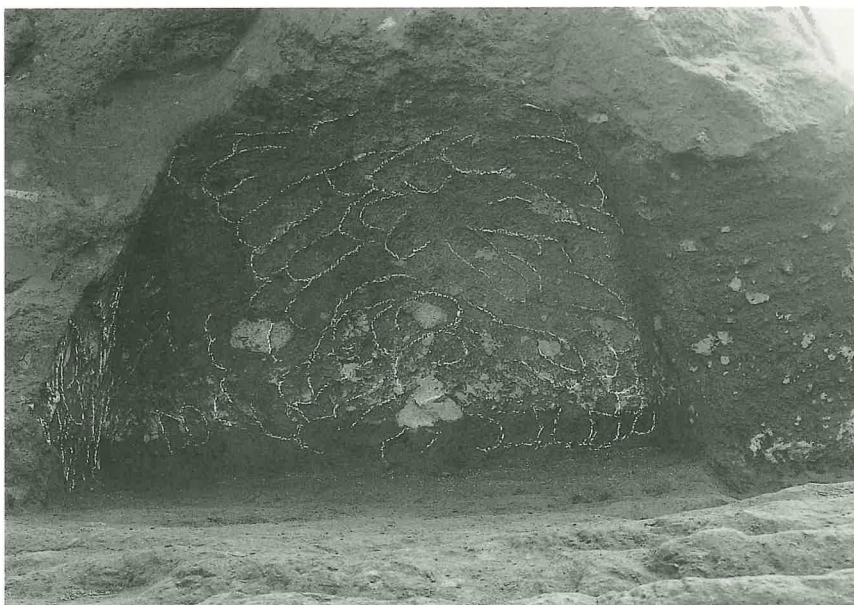


第8支群6号墓 天井





第9支群1号墓 正面

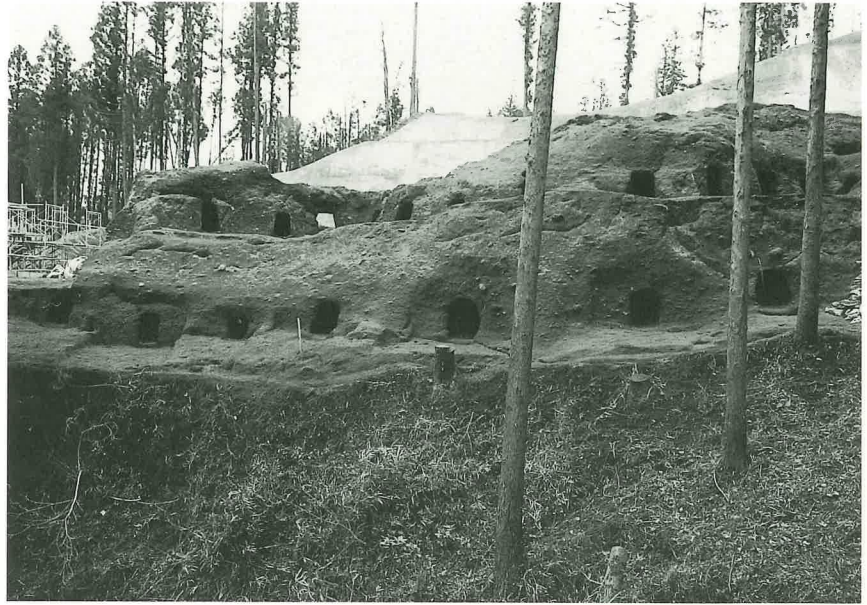


第9支群1号墓右壁 工具痕

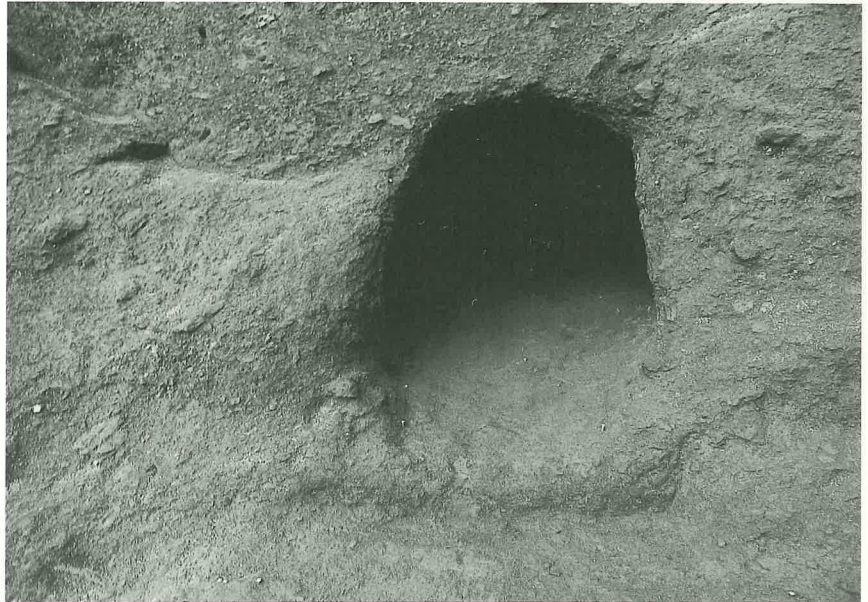


第9支群1号墓奥壁 工具痕

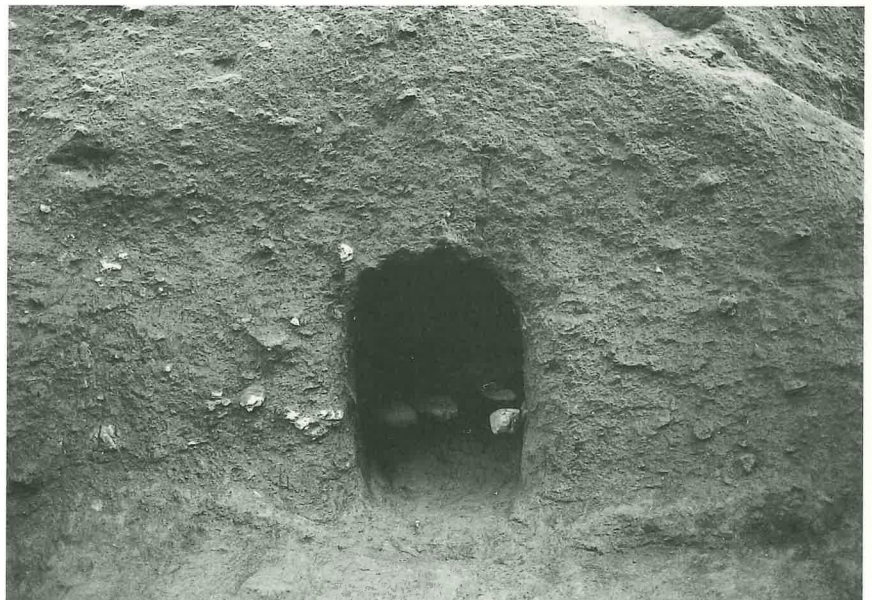
第10支群 全景

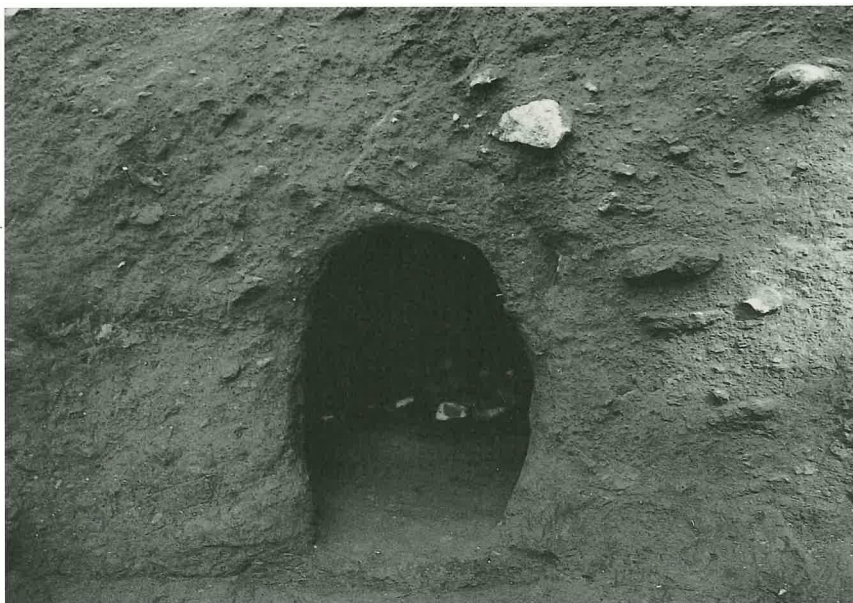


第10支群1号墓 正面

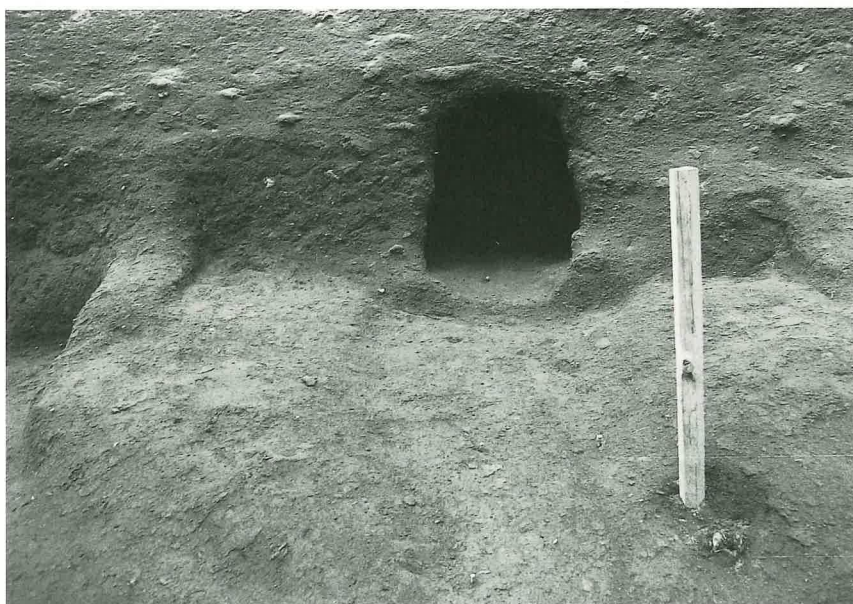


第10支群2号墓 正面

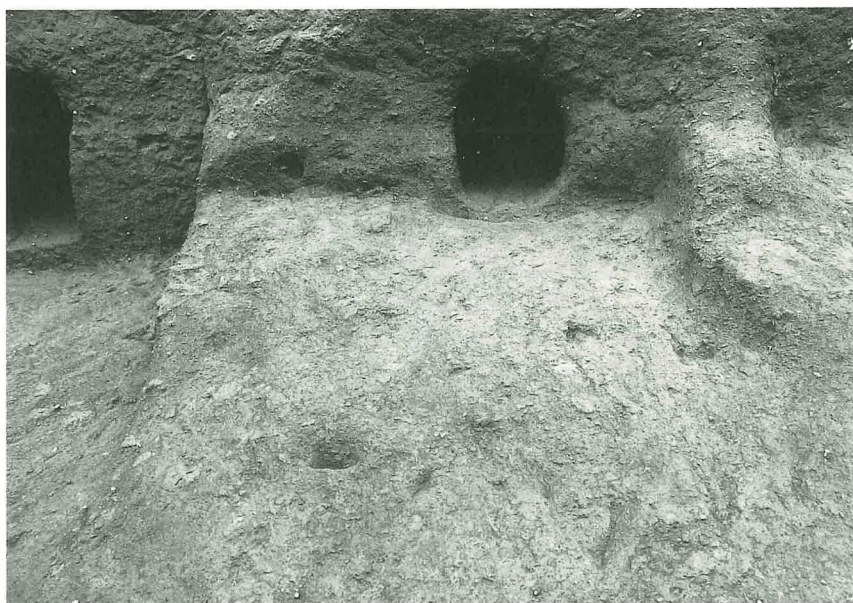




第10支群3号墓 正面



第10支群4号墓 正面

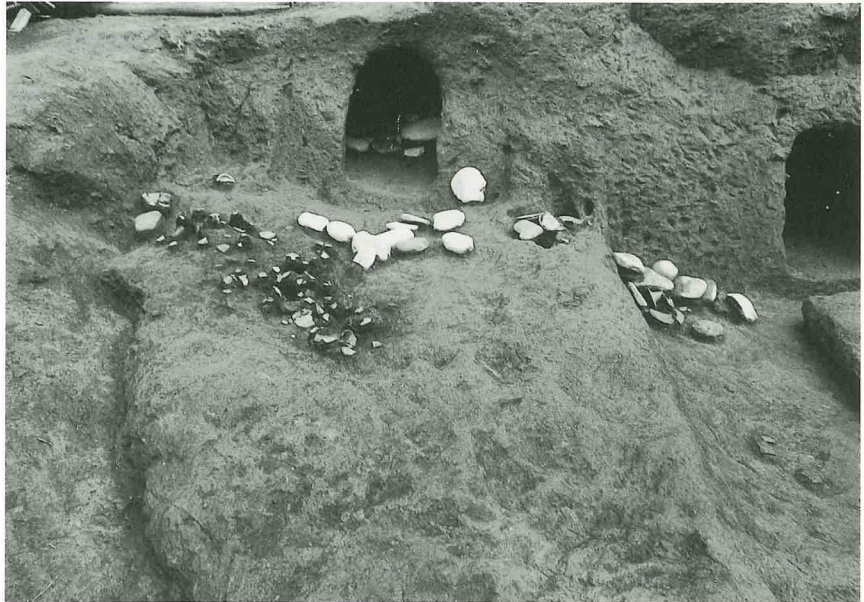


第10支群5号墓 正面

第10支群6号墓 正面



第10支群7号墓 正面

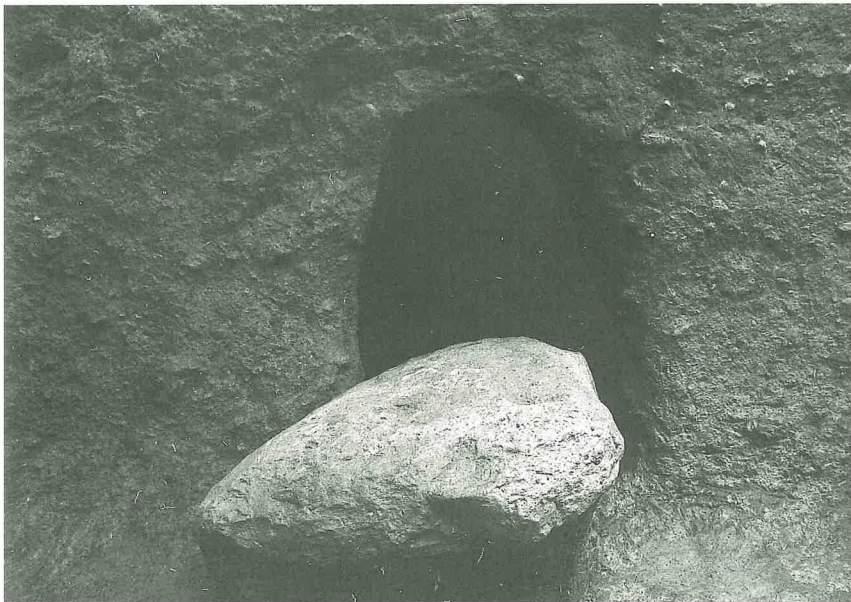


第10支群7号墓 遺物出土状況

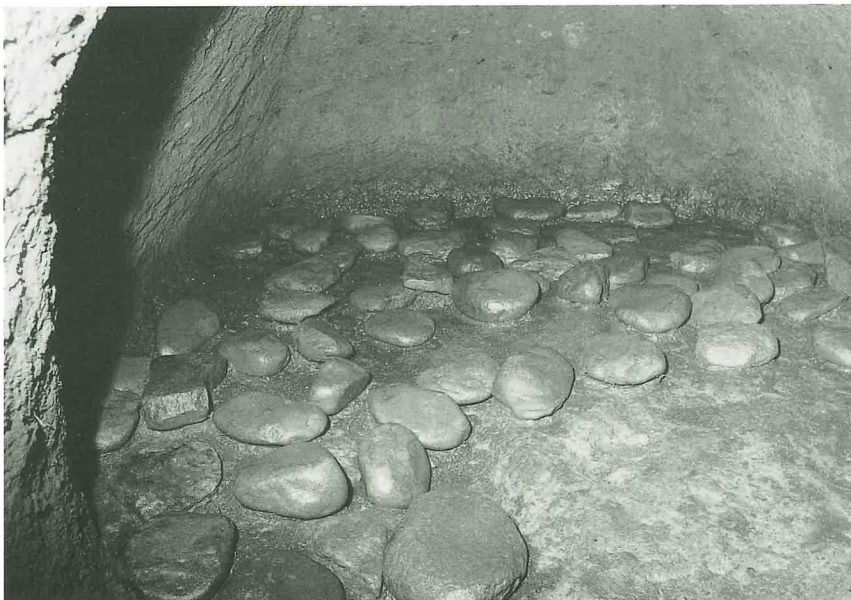




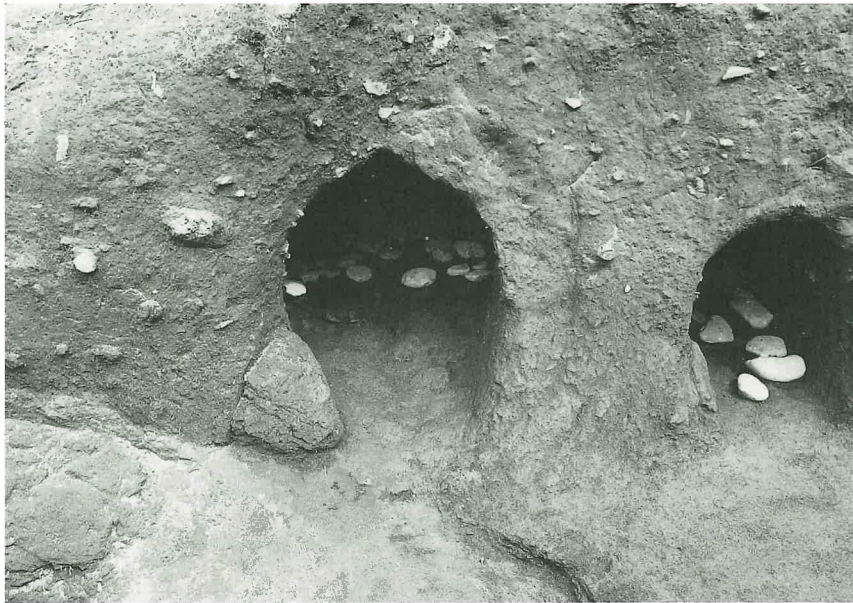
第11支群 全景



第11支群1号墓 正面



第11支群1号墓 玄室



第11支群4号墓 正面



第11支群4号墓 玄室

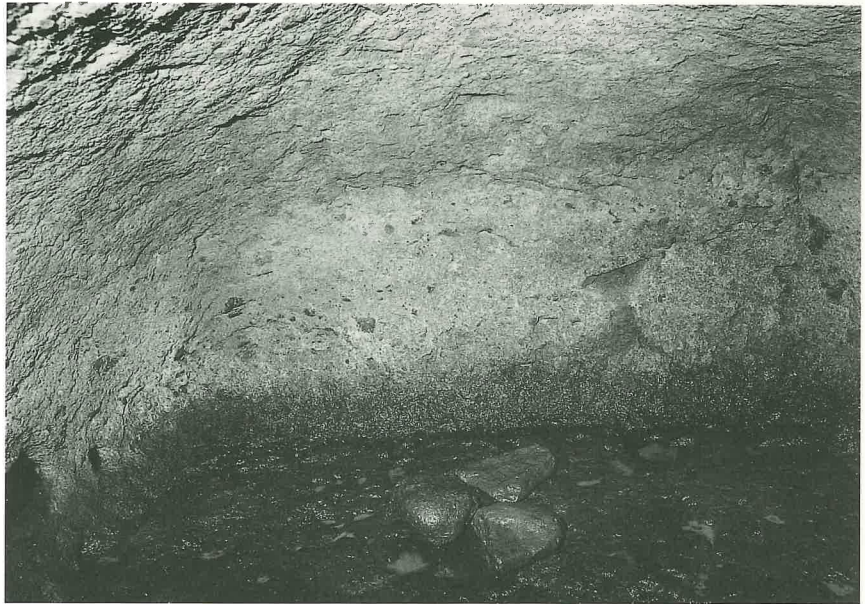


第11支群4号墓 奥壁

第11支群2・3号墓 正面



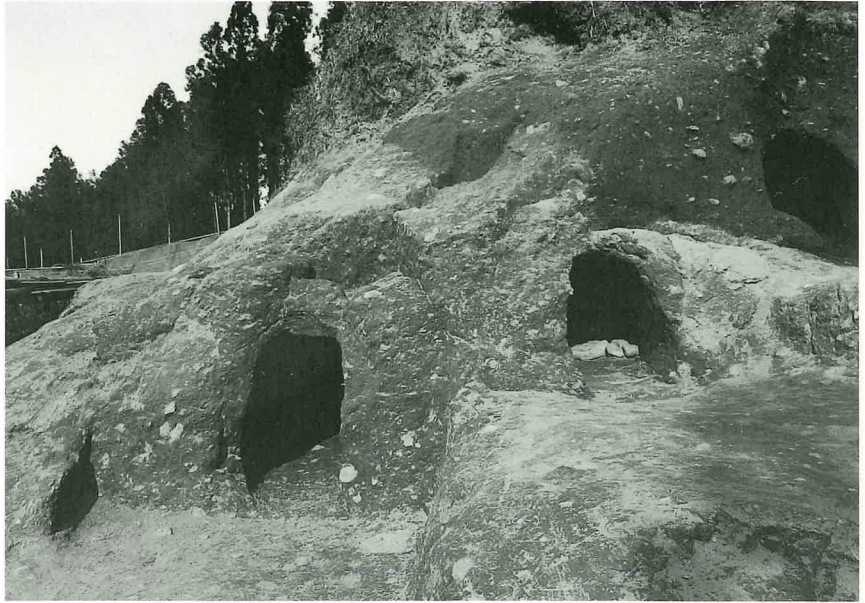
第11支群2号墓 玄室



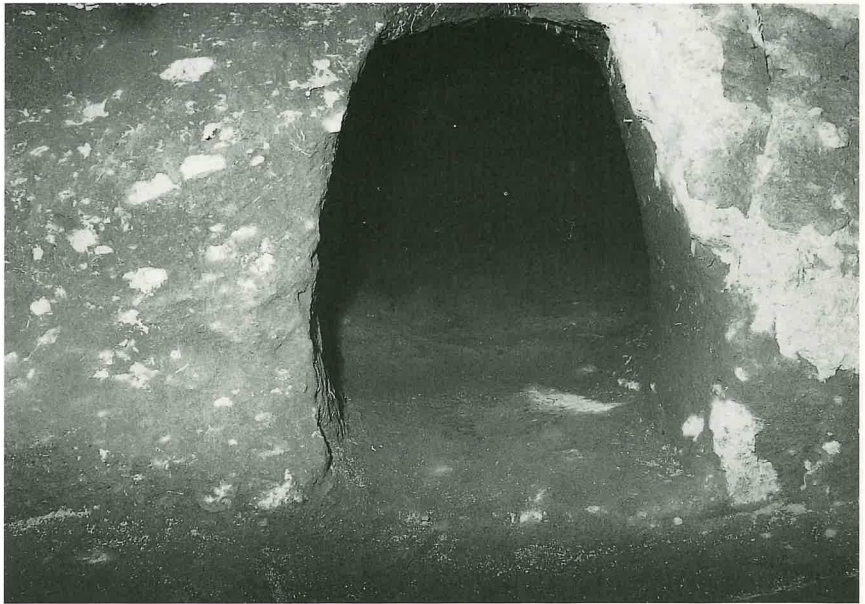
第11支群3号墓 玄室



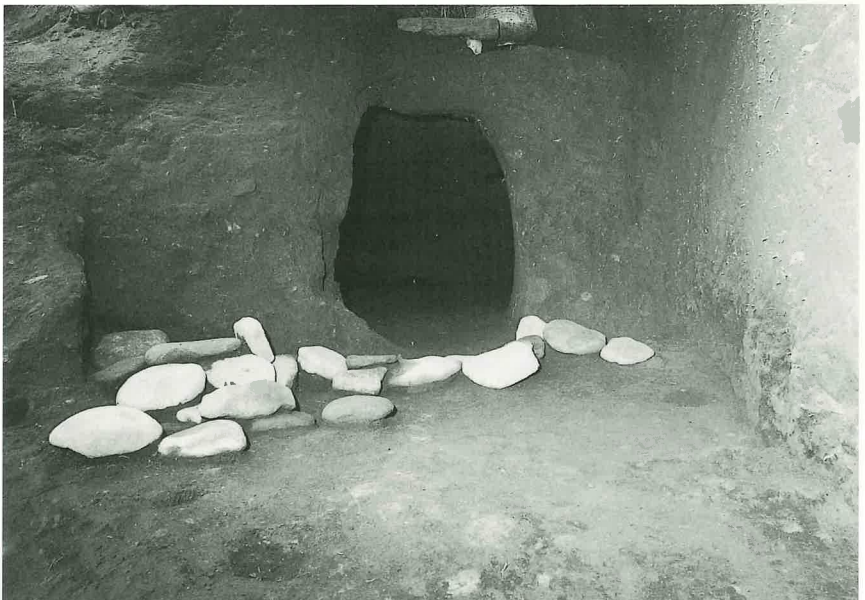
第12支群 全景



第12支群1号墓 正面

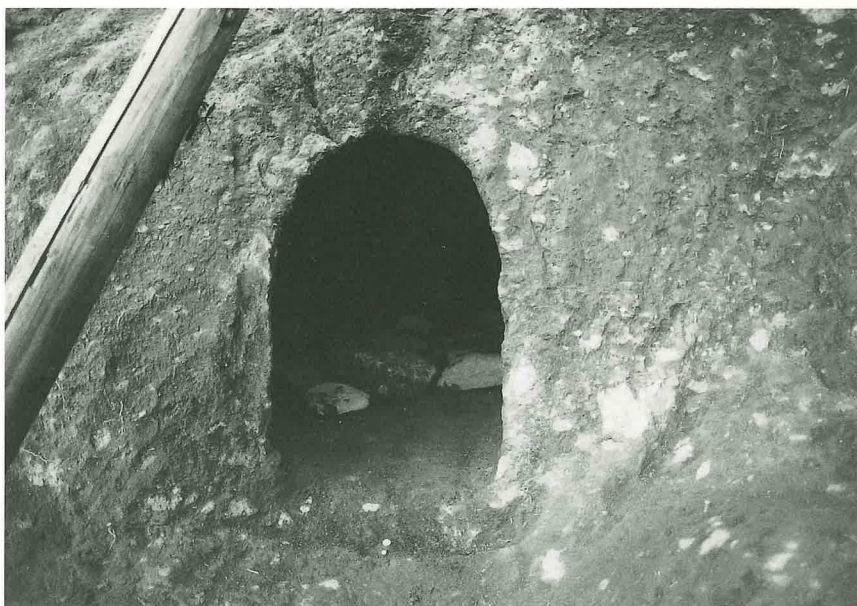


第12支群2号墓 正面

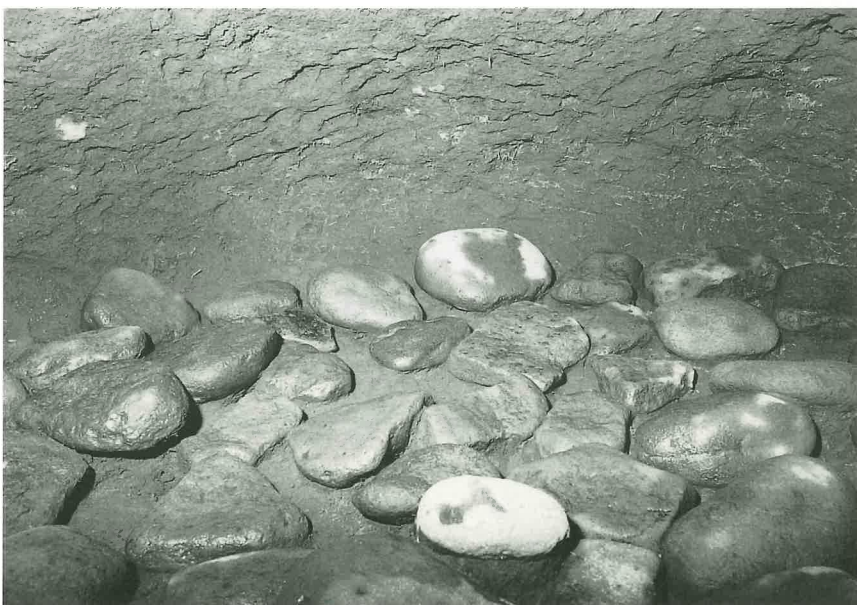




第13支群 全景



第13支群1号墓 正面

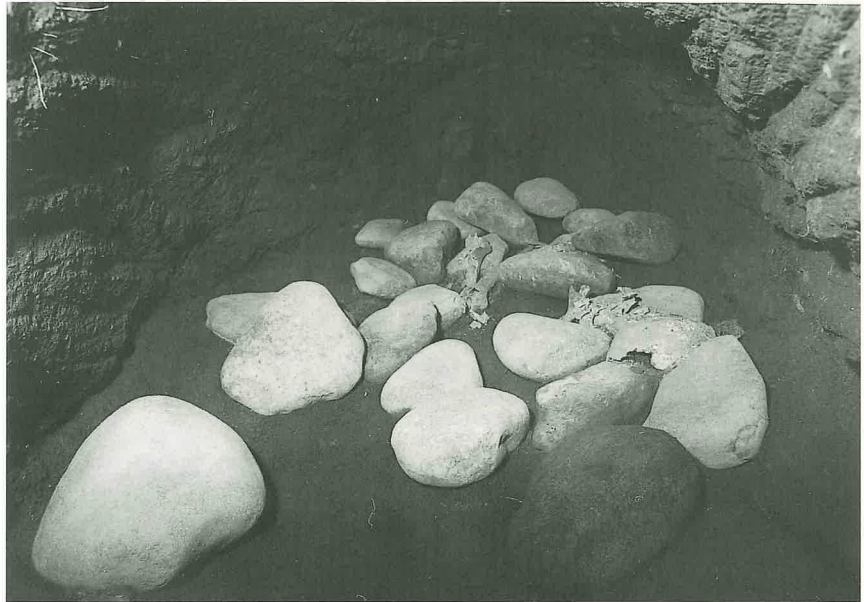


第13支群1号墓 玄室

第13支群2号墓 正面



第13支群2号墓 玄室

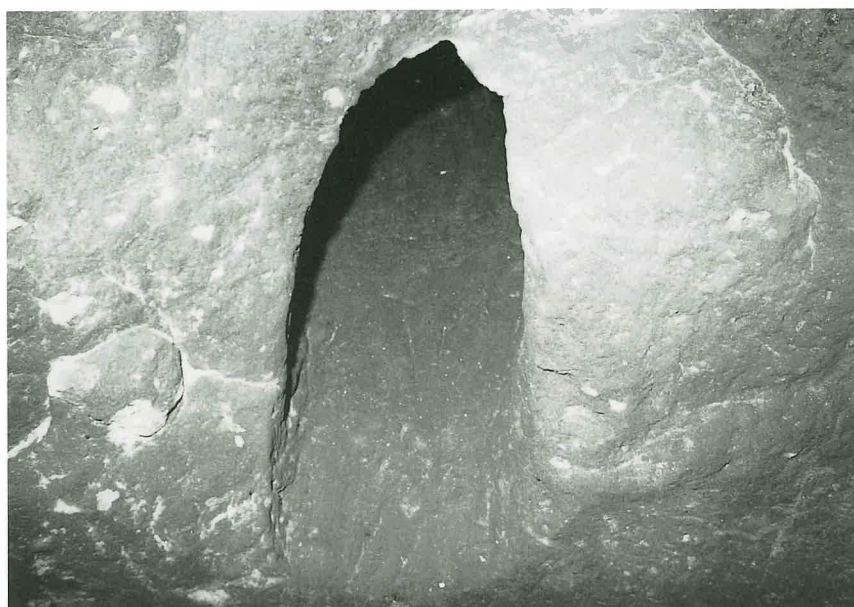


第13支群2号墓 出土人骨

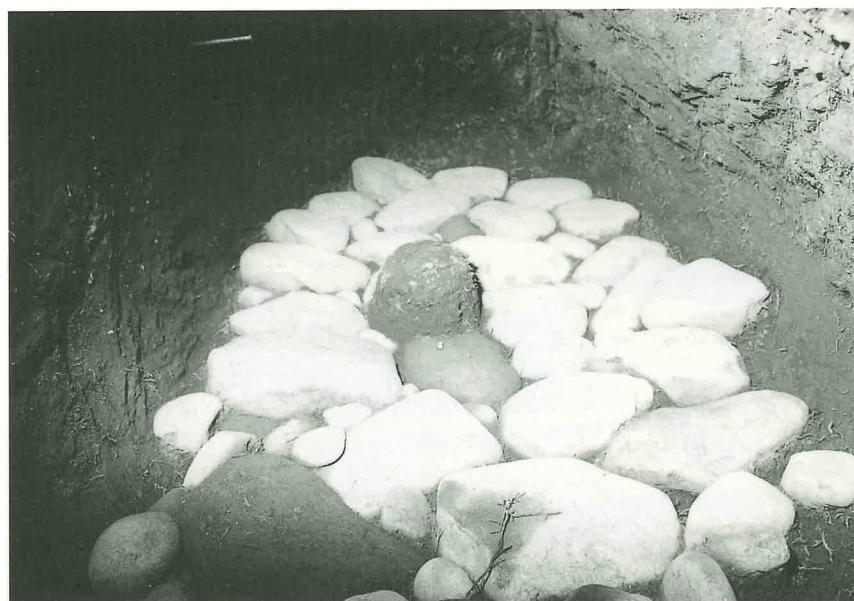




第14支群1号墓 正面

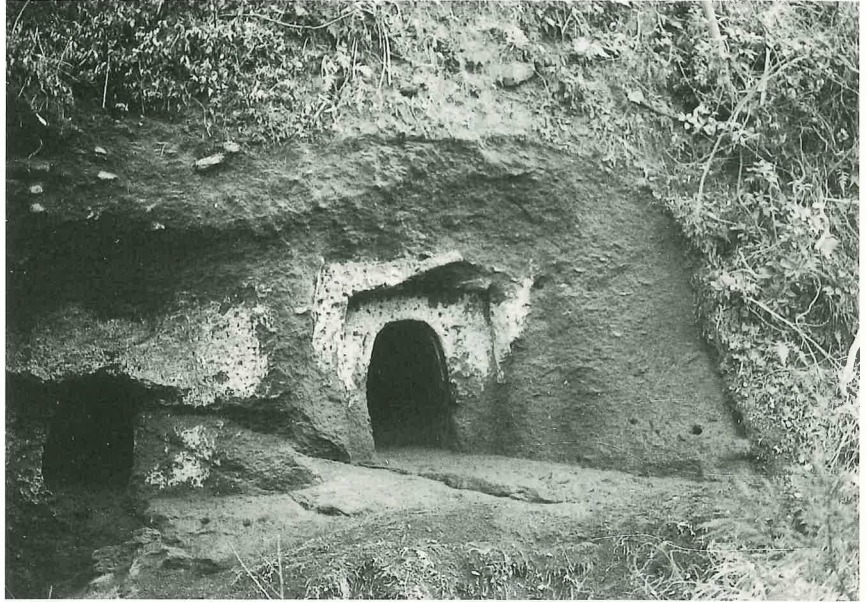


第14支群2号墓 正面



第14支群2号墓 玄室

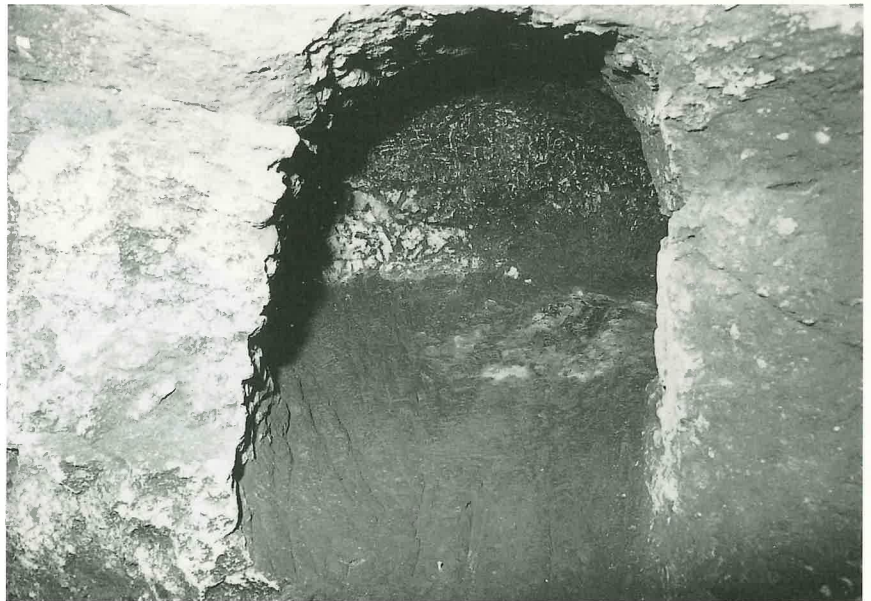
第15支群 全景

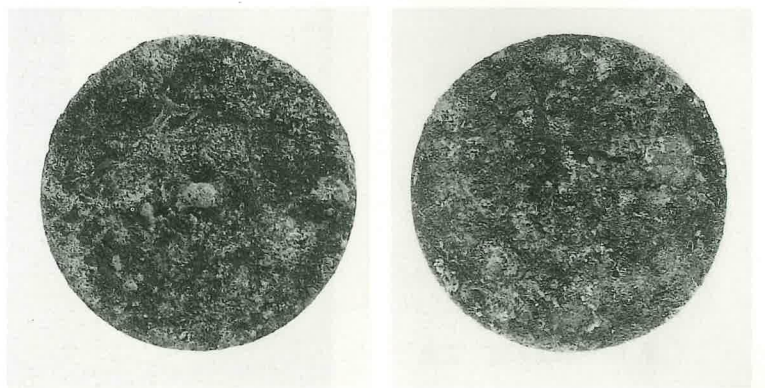
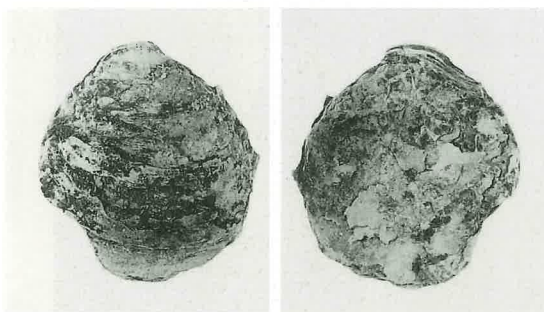


第15支群1号墓 正面



第15支群2号墓 正面

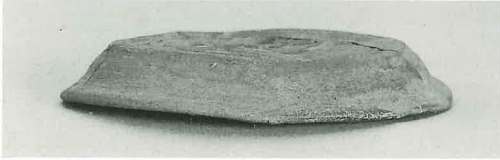




204



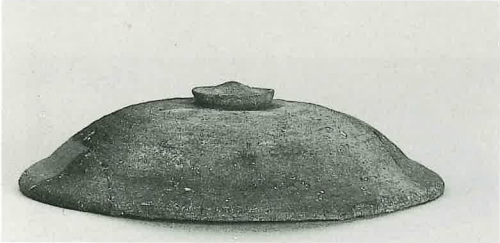
9



10



11



12



13



15



19



21



20



22



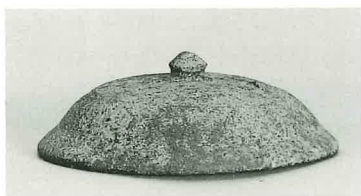
24



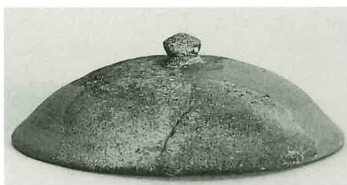
25



26



27



29



31



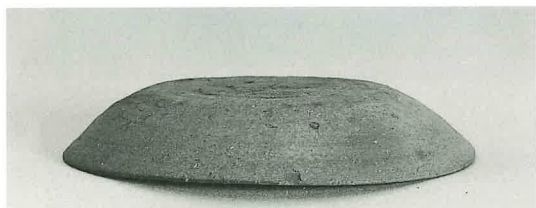
28



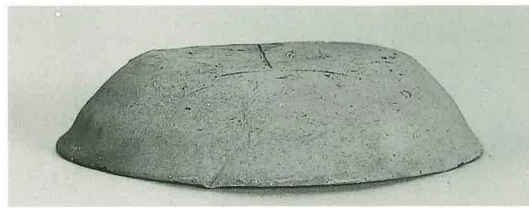
30



32



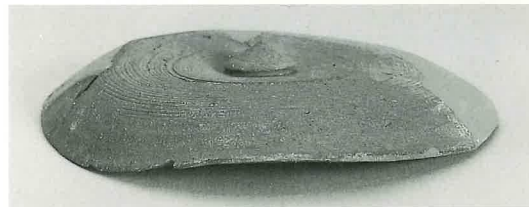
33



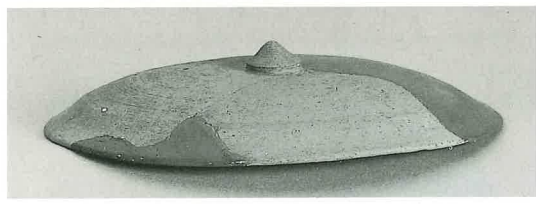
34



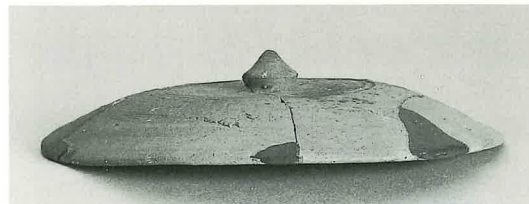
35



36



37



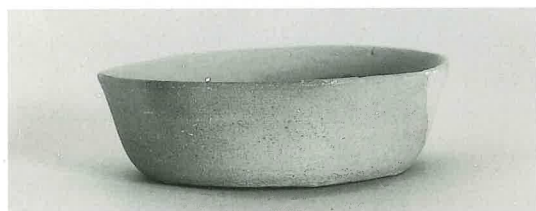
38



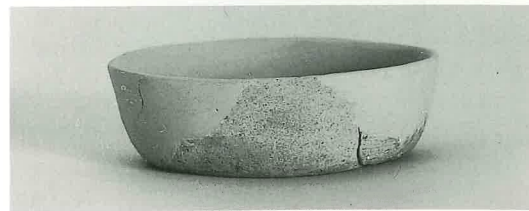
39



40



41



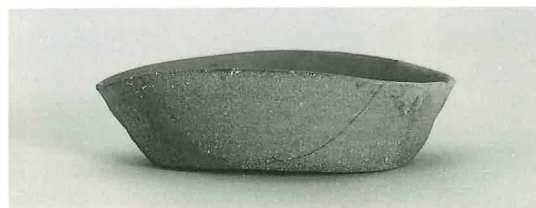
42



43



44



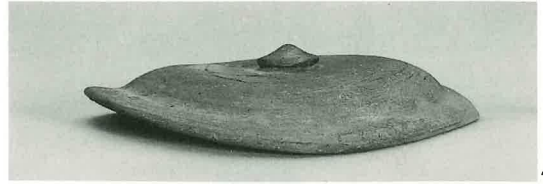
45



46



47



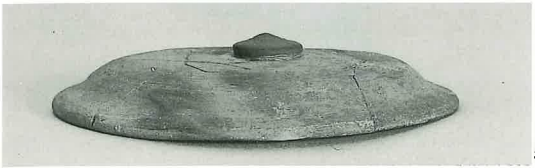
49



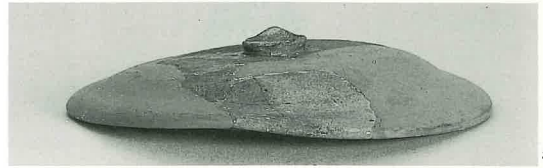
48



50



51



53



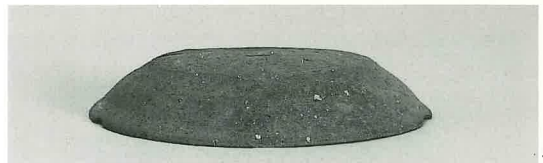
52



54



55



57



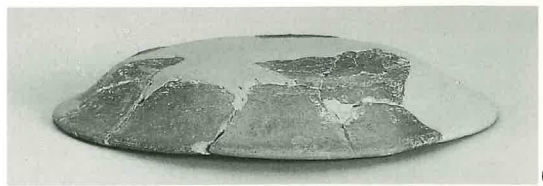
56



58



59



61



60



62



63



64



65



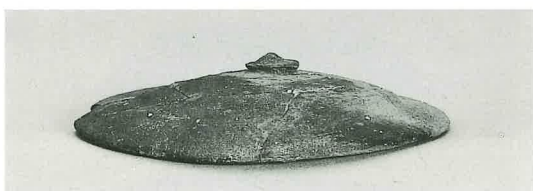
66



69



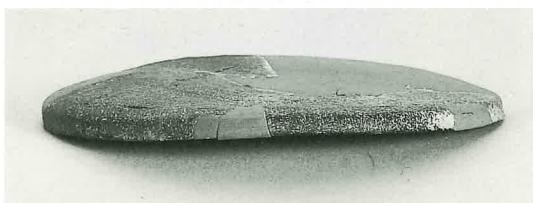
73



74



75



77



78



79



83



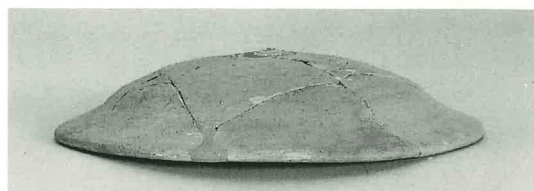
80



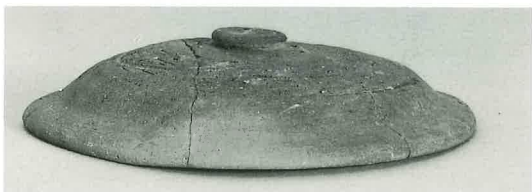
84



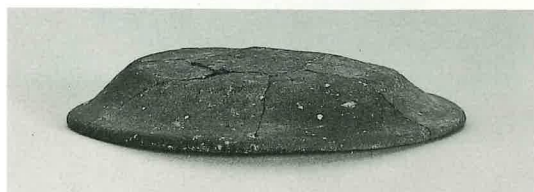
85



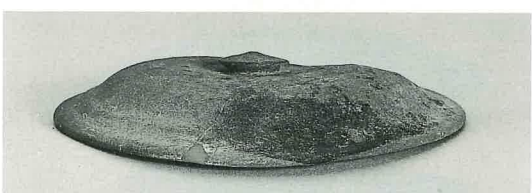
86



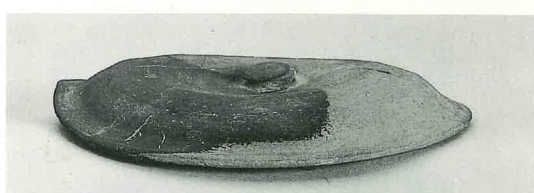
87



88



89



90



91



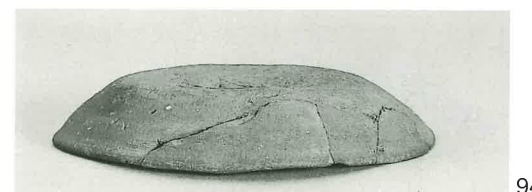
92



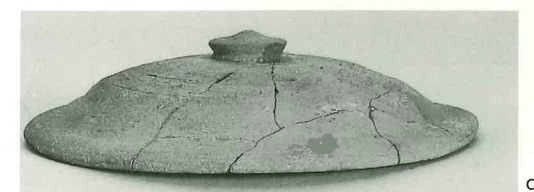
93



98



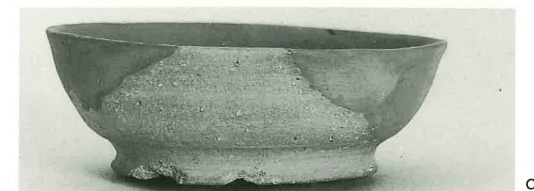
94



96



95



97



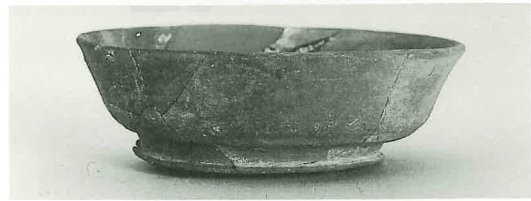
99



101



100



102



103



105



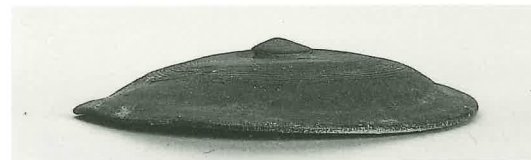
104



106



107



109



108



110



111



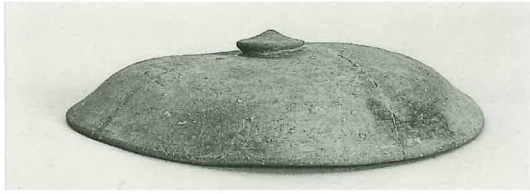
113



112



114



115



117



116



118



119



121



122



123



125



126



127



128



129



130



131



132



133



134



135



136



137



138



139



141



140



142



143



145



146



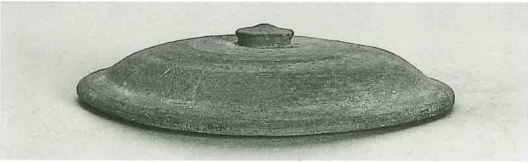
147



148



149



150



151



152



154



153



155



156



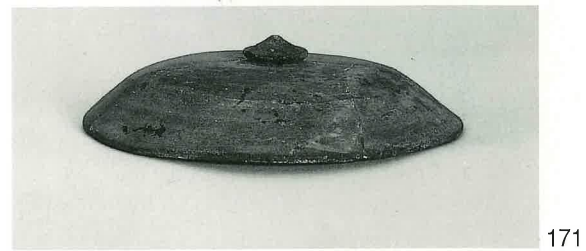
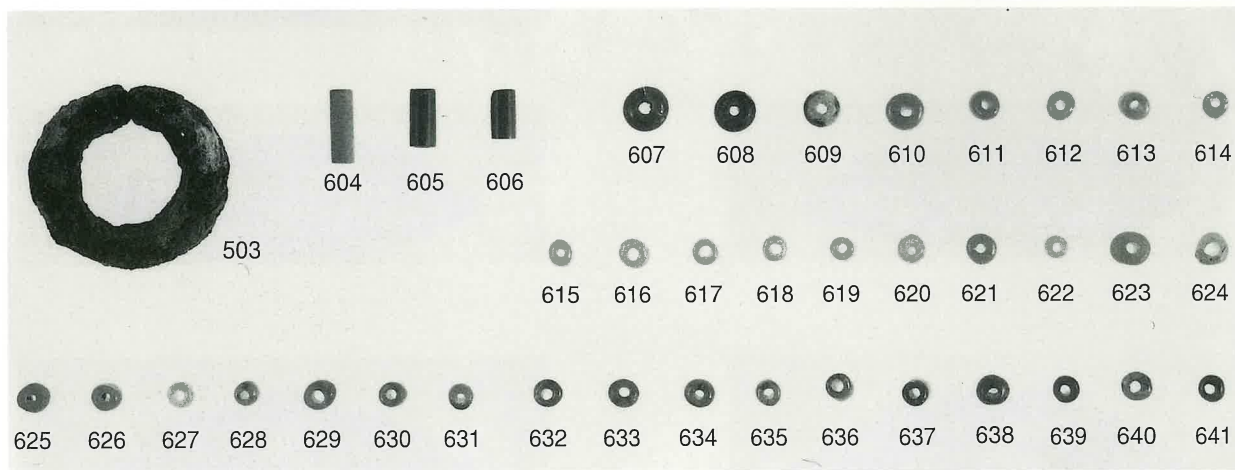
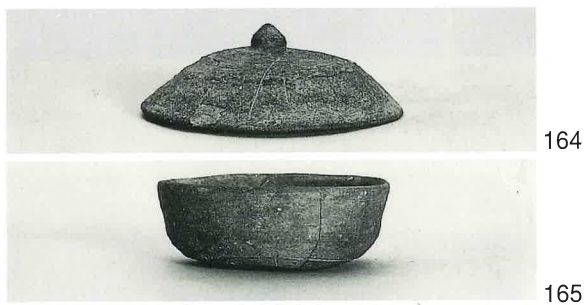
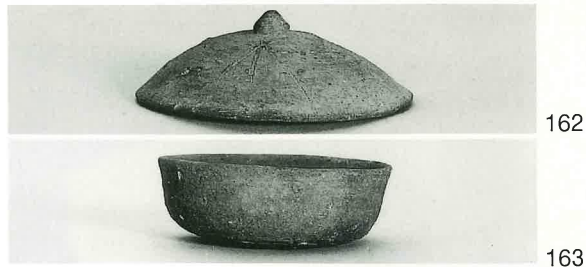
158

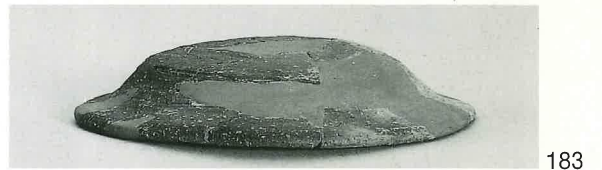
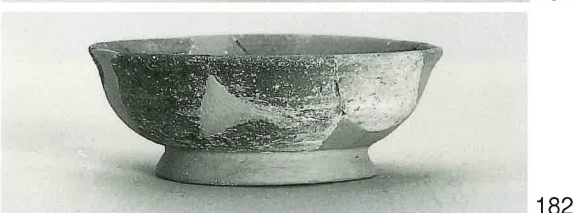


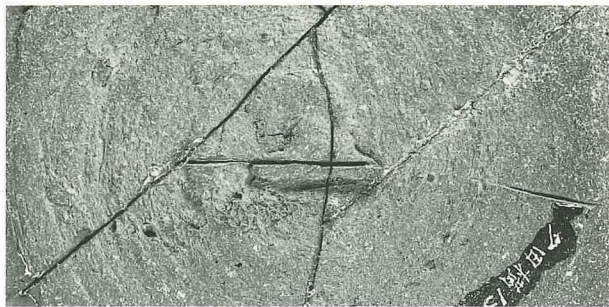
157



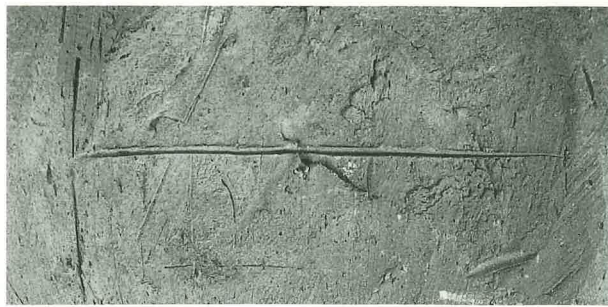
159



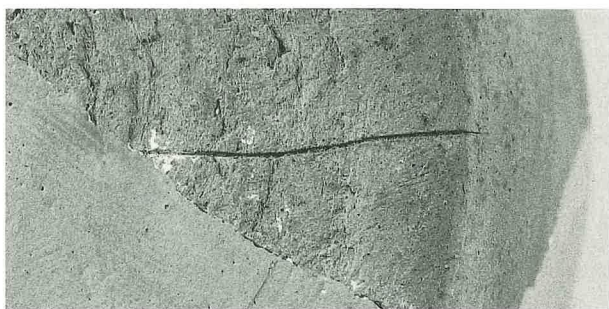




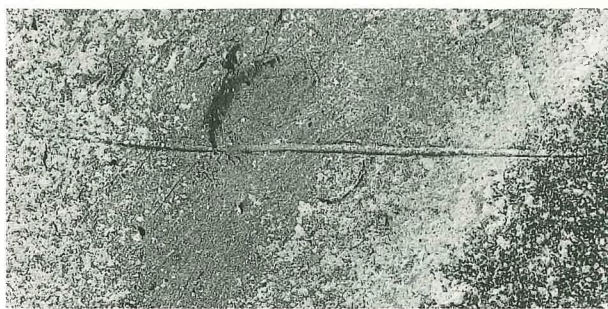
19



34



41



45



46



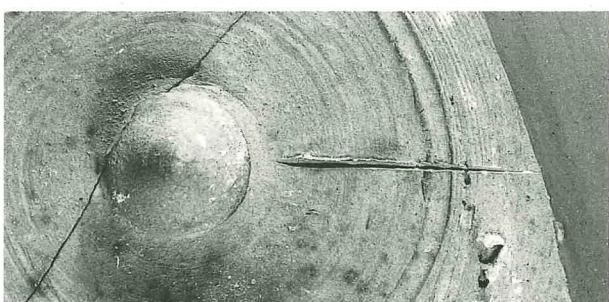
106



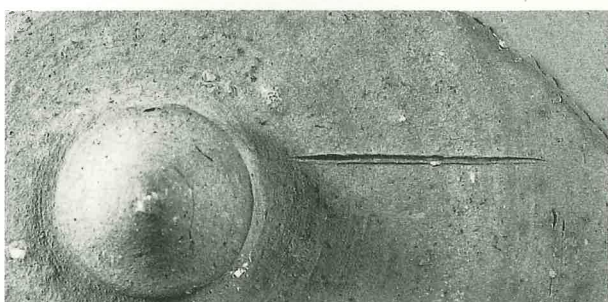
127



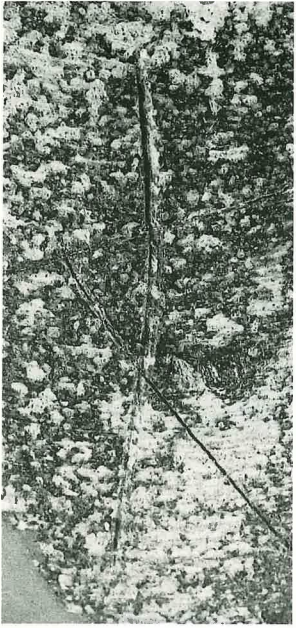
58



38



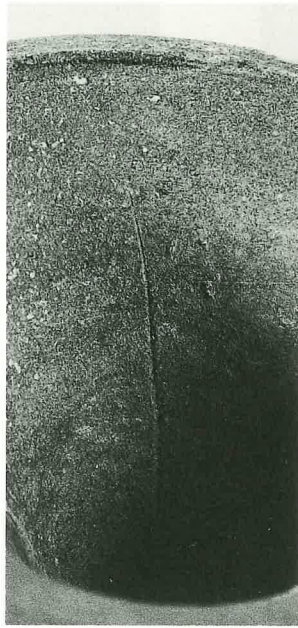
55



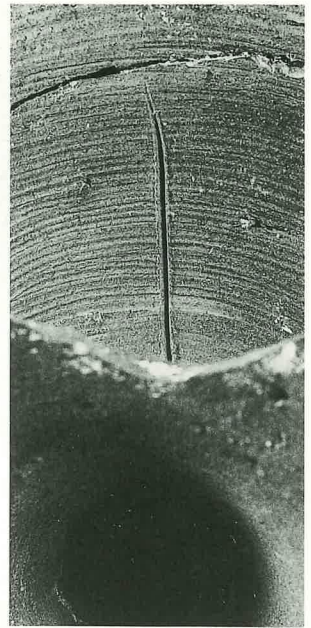
26



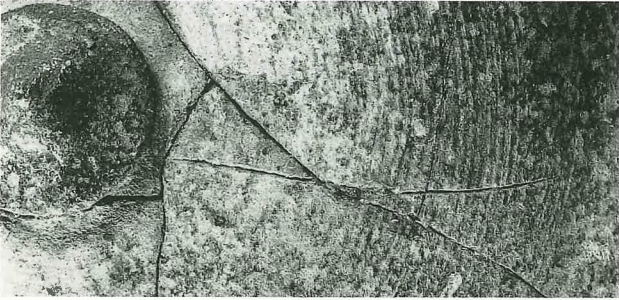
64



65



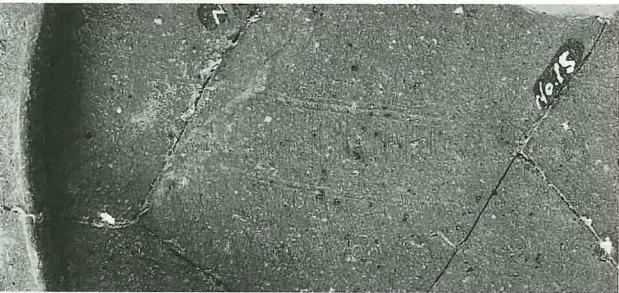
66



73



74



75(裏)



35



99



100



101



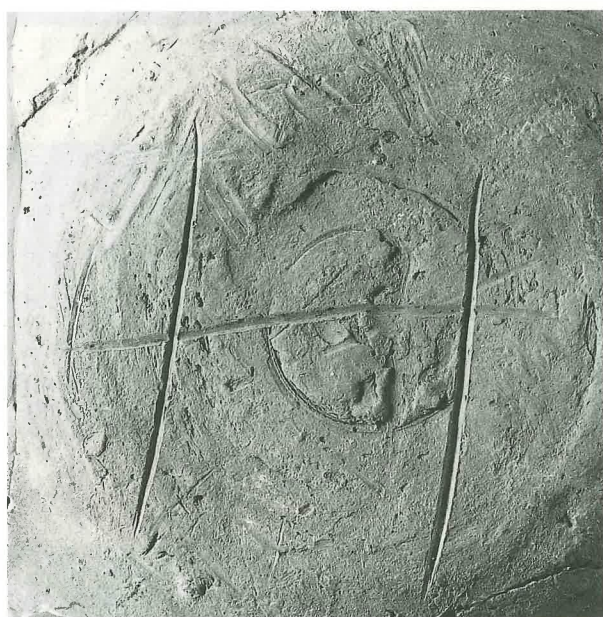
102



103



104



174



175



176



177



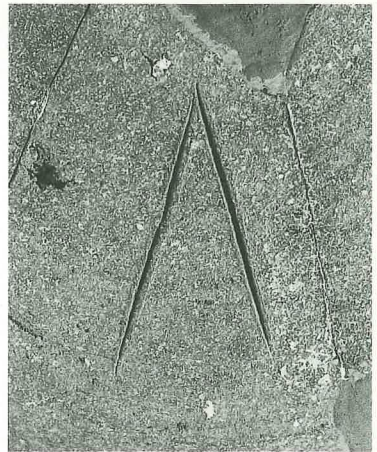
180



151



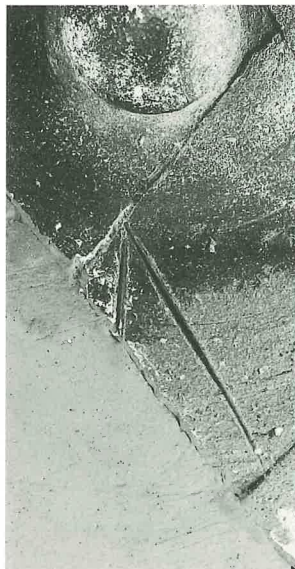
135



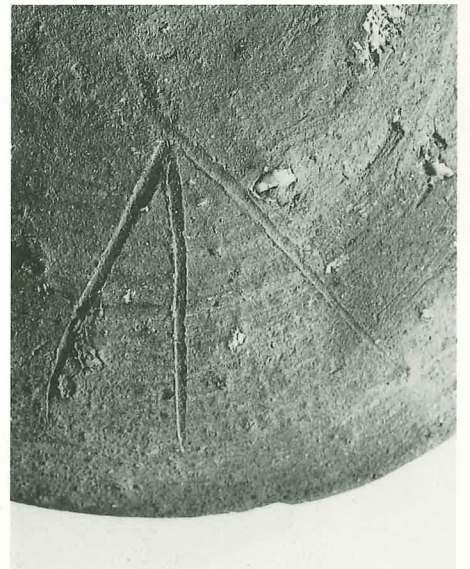
39



69



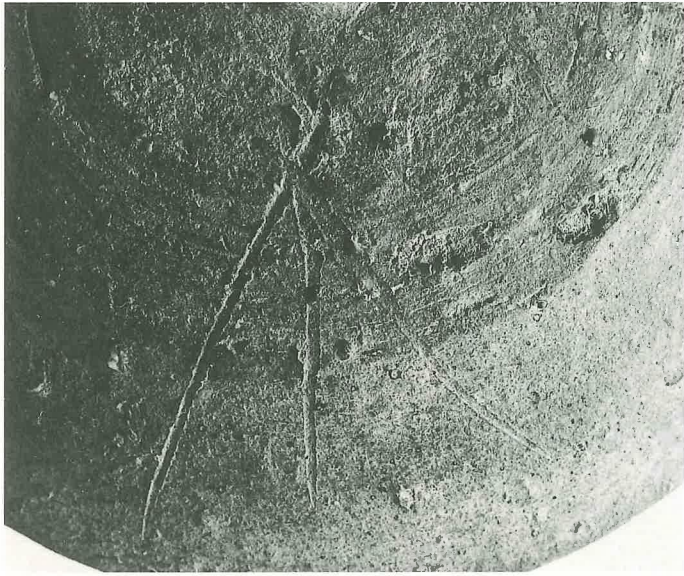
75(表)



160



162



164



166



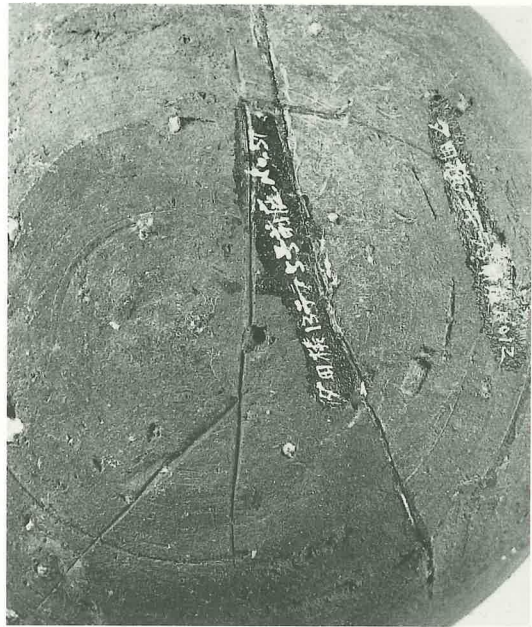
161



163



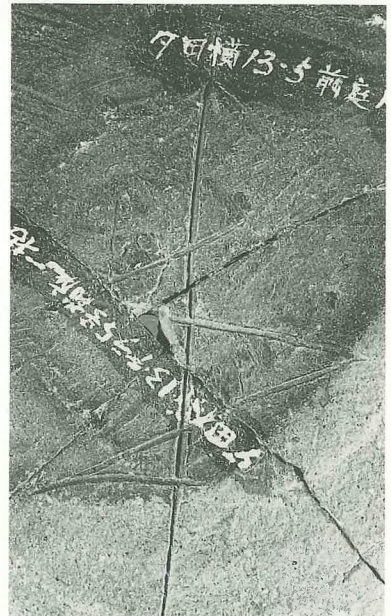
165



30



32



28



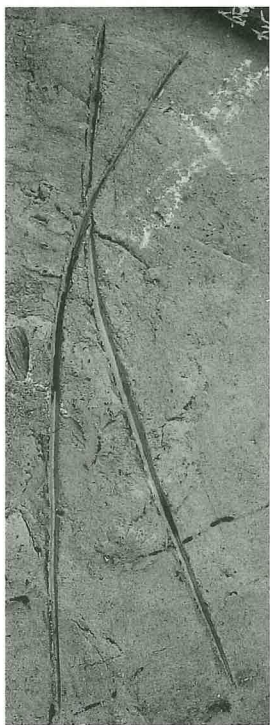
167



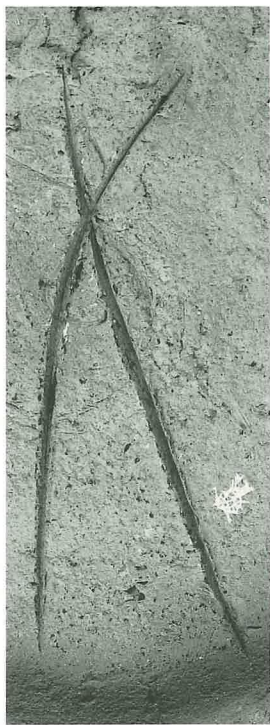
80



78



153



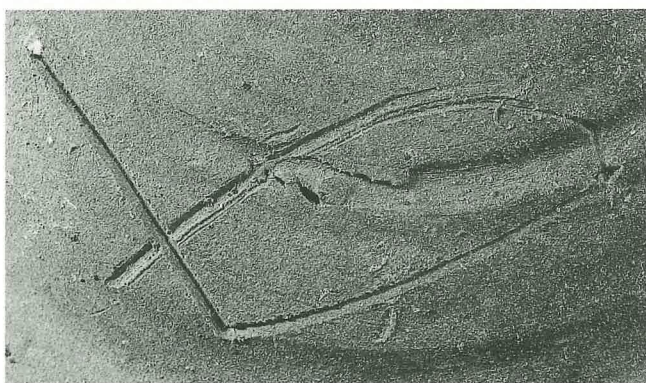
155



156



158



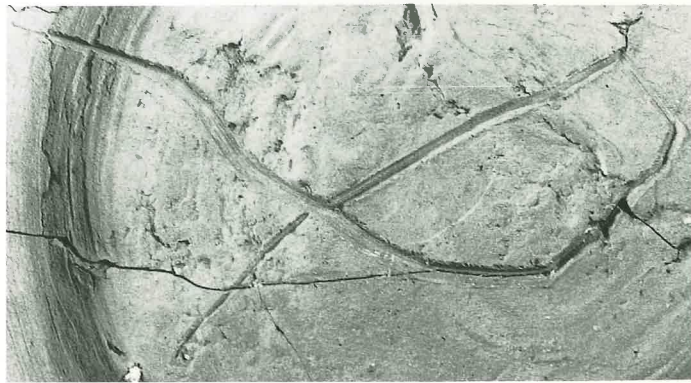
47



48



51



52

夕田古墳群全景（東より）

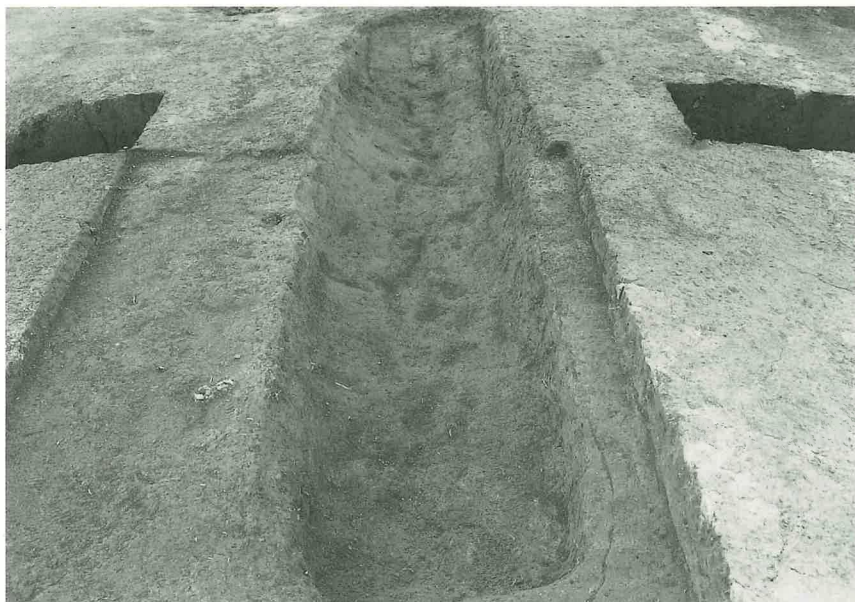


夕田古墳群全景（真上より）



夕田古墳群全景（北より）





夕田古墳群1号墓 完掘



夕田古墳群2号墓 検出状況



夕田古墳群2号墓 蓋石除去



夕田古墳群 3号墓 検出状況



夕田古墳群 3号墓 追葬床面



夕田古墳群 3号墓 初葬床面



夕田古墳主体部 全景



夕田古墳主体部 蓋石除去後



夕田古墳 1号主体部

夕田古墳 2号主体部



夕田古墳 周溝検出状況



夕田古墳 周溝内遺物出土状況





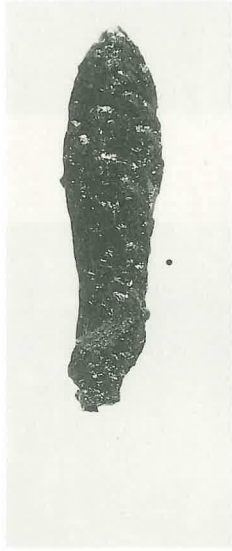
1



2



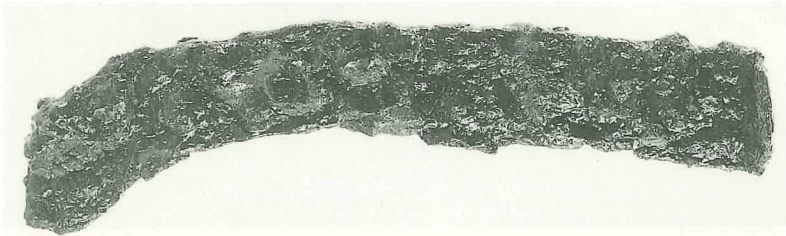
6



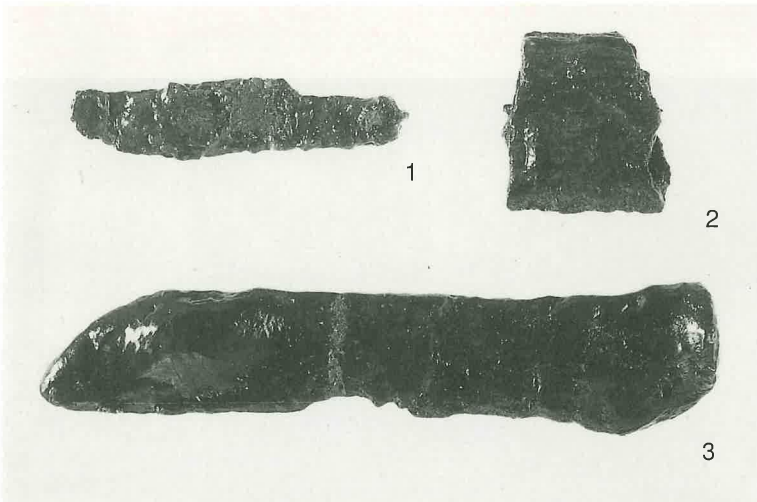
7



8



9

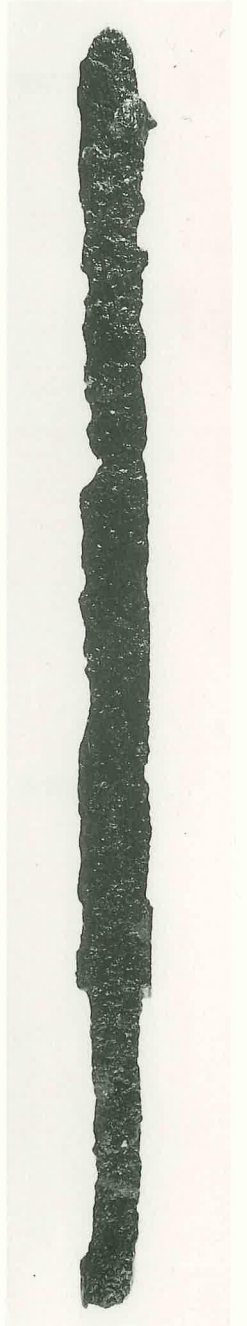


1

2



4



10

報 告 書 抄 録

フリガナ	ユウタイセキゲン
書名	夕田遺跡群
副書名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (14)
巻次	—
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	14
編著者	村上久和、田中良之、友岡信彦
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒 870-0021 大分県大分市府内町 3-10-1
発行年月日	1999年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ユウタイセキ 夕田遺跡	オオイタケン ヒタシ 大分県日田市 オオアザ ニシアリタ アザ 大字西有田字 ユウタ 夕田	442046	133	33° 20' 7"	130° 57' 5"	19921110 19921204	500m ²	九州横断自動車道建設
ユウタヨコアナボゲン 夕田横穴墓群	オオイタケン ヒタシ 大分県日田市 オオアザ ニシアリタ アザ 大字西有田字 ユウタ 夕田	442046	070	33° 20' 7"	130° 57' 6"	19930426 19940216	1050m ²	九州横断自動車道建設
ユウタコファンダン 夕田古墳群	オオイタケン ヒタシ 大分県日田市 オオアザ ニシアリタ アザ 大字西有田字 ユウタ 夕田	442046	069	33° 20' 7"	130° 57' 7"	19930426 19931001	2400m ²	九州横断自動車道建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
夕田遺跡	集落?	弥生時代 古墳時代	掘立柱建物跡 土坑、包含層	土器	
夕田横穴墓群	墳墓	古墳時代	横穴墓	土器、玉類	
夕田古墳群	墳墓	古墳時代	古墳、石棺墓	土器、鉄器	

夕田遺跡群

—九州横断自動車道関係埋蔵
文化財発掘調査報告書(14)—

平成11年3月31日

編集 大分県教育庁文化課
発行 大分県教育委員会
〒870-0021
大分市府内町3丁目10番1号
TEL097(536)1111
印刷 第一印刷株式会社
